

JOURNAL OF THE JAPANESE ASSOCIATION FOR DENTAL SCIENCE

日本歯科医学会誌

43

MARCH
2024

特別企画・座談会

「歯科イノベーションによる新時代の創生」
について語る



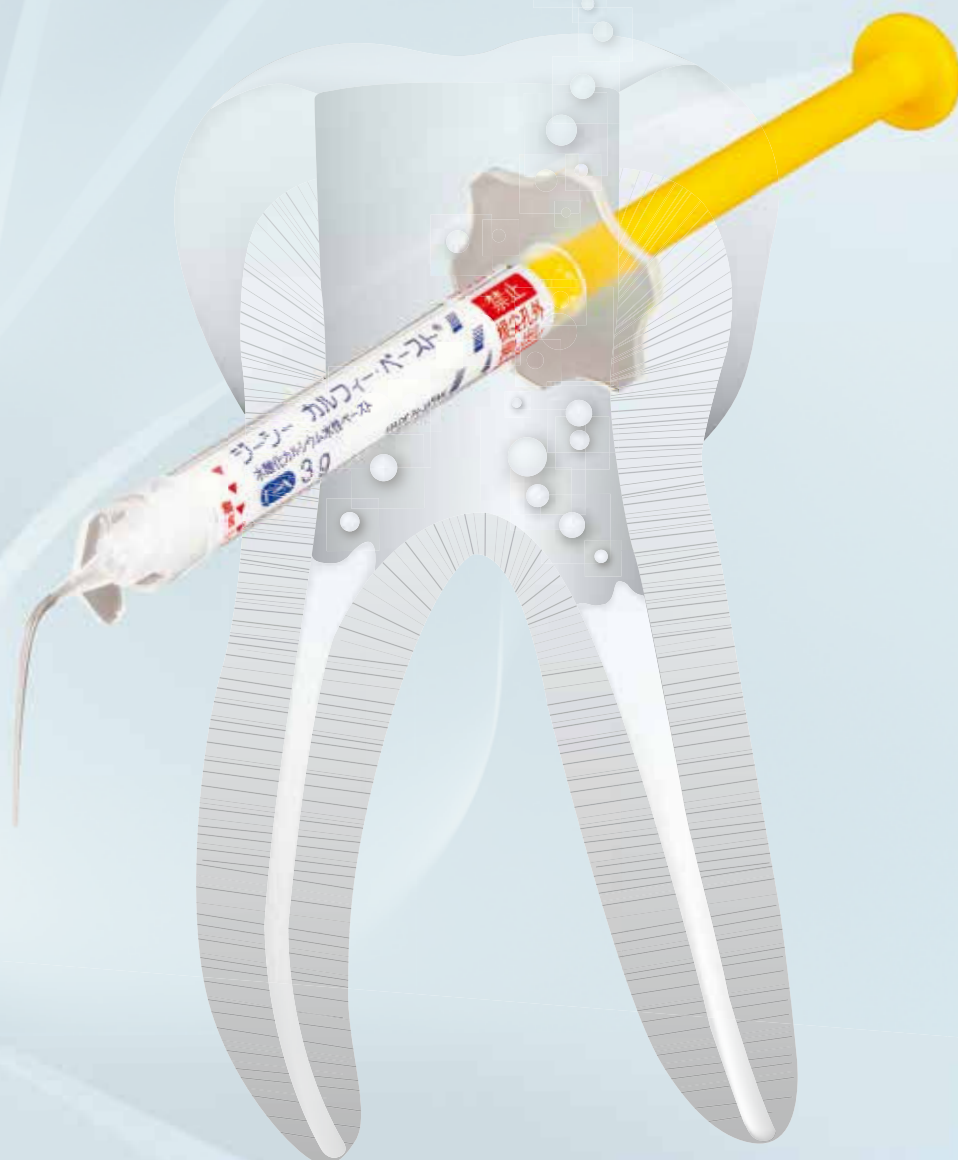
日本歯科医学会
<https://www.jads.jp>



JJADS
日歯医学会誌
ISSN 0286-164X

除去性に優れた 根管貼薬材

GC



GC

× ジーシー 昭和薬品

水酸化カルシウム水性ペースト

カルフィー・ペースト

水酸化カルシウム濃度

36%

Tooth Pad

製品動画はコチラ



水酸化カルシウム系歯科根管充填材料 ジーシー カルフィー・ペースト
高度管理医療機器 21500BZZ00134000

※掲載情報は2024年2月現在のものです。 ※色調は印刷のため現品と若干異なることがあります。

発売元 株式会社 ジーシー /
東京都文京区本郷3丁目2番14号

製造販売元 株式会社 ジーシー 昭和薬品
東京都板橋区蓮沼町76番1号

読者アンケート票 (第43巻)

本誌（第43巻）をお読みにになり、ご意見ご感想をお寄せください。表紙デザインのご感想、臨床に役立った論文、記事等について□の中に✓印を付けてください。皆様の声を今後の会誌の企画・編集に反映させたいと思いますので、ご協力をお願いします。ご回答は日本歯科医学会事務局（FAX：03-3262-9885）へ令和6年10月31日までにご返信ください。



webアンケートは
こちらから

日本歯科医師会のEシステムまたは日本歯科医学会ホームページ (<https://www.jads.jp/>) では、本誌をフルカラー版で公開中です。ぜひご覧ください。

ご所属の 歯科医師会・ 分科会名	アンケートの集計のため、ご所属は必ずご記入ください。			氏 名	
送付先	〒 都道 府県			電話番号	
職種	開業歯科医師	勤務歯科医師	大学及び研究者	その他〔	〕

1. 第44巻の冊子送付をご希望の場合は下記に✓印をお付けください。なお、発送物は所属先の歯科医師会・分科会に登録された住所に送付いたします。

☐ 第44巻の冊子送付を希望する（令和6年10月31日締切）

※冊子数には限りがありますので、回答はお早めにご返信ください。

- ## 2. 会誌の表紙デザイン

☐ 良い ☐ 悪い ☐ どちらともいえない ☐ その他〔 〕

- ### 3. 論文, 記事等

■卷頭言

□ 6 期目の検証

■特別企画

□座談会「『歯科イノベーションによる新時代の創生』について語る」

■ 學術研究

【令和3年度採択プロジェクト研究】

- ## A. 歯科界のニューノーマル（各種感染症対策、高齢者の歯科治療体制の確立）

□微量唾液を検体とした SARS-CoV-2 迅速スクリーニング検査法の確立と mobile 型 qPCR 装置 (PCR1100) の有用性の検討

- ## B. これからの歯科医療の DX (AI・デジタルテクノロジーの応用)

□ デジタルフェノタイピングデータと

生体データの組み合わせを活用した歯科治療恐怖症の新しい診断法の開発

□ Extended Reality 技術を応用しsustainableな歯科教育を確立する

- C. New for Old. 疾病構造の変化を見据えた歯科ストックの確保を目指して

□高齢者の医療・地域連携に貢献する高齢者対応型病院歯科の普及に向けた調査・研究

■その他

□ 学際交流

□ 会務報告／専門・認定分科会会務報告／関連団体報告

- #### 4. 会誌の構成

☐今のままでよい ☐わからない ☐変えたほうがよい〔〕

5. 読みたい学会誌に育てるためにアイディア、テーマなどのご意見をお書きください。

ご協力ありがとうございました。

日本歯科医学会誌編集委員会

日本歯科医学会から “日本歯科医師会入会”のご案内

国民の歯科保健の普及向上に寄与することを目的に設立された日本歯科医師会は、歯科医師を代表する公益社団法人で、政府と協議しながら国民の健康に大きく寄与しています。専門分科会および認定分科会から構成される日本歯科医学会は、この日本歯科医師会と連携し、歯科医学・医術ならびに歯科医療の向上に努め活動を行っています。

ご存知のとおり、日本歯科医学会の年間事業をはじめ、4年に1回開催の日本歯科医学会学術大会等は、日本歯科医師会の予算で運営されています。

そのため、日本歯科医学会に所属し活動する専門分科会および認定分科会の会員は、日本歯科医師会の会員であることが望まれます。会員には、正会員と準会員があります。

正 会 員

- 専門分科会および認定分科会の会員で、歯科診療所を開設若しくは歯科診療所に勤務されている歯科医師が対象です。
- 歯科診療所の所在地の市区町村歯科医師会ならびに都道府県歯科医師会に入会の上、日本歯科医師会に入会することができます。

準 会 員

- 医育機関に勤務する歯科医師、または公務員である歯科医師が対象です。また、平成25年4月より準会員の対象は、病院や介護老人保健施設等に勤務し開業していない歯科医師、および研究機関に勤務し診療に従事しない歯科医師まで拡大されています。
- 準会員は日歯直轄として入会することができるほか、都道府県歯科医師会に所属しながら入会することもできます。また、正会員と比較した場合、日本歯科医師会役員等の選挙権・被選挙権はありませんが、正会員と同等に刊行物の頒布を受けられ、また同会主催の学術集会への出席もできます。さらに、加入年齢制限等はありませんが、日歯福祉共済保険や日歯年金保険に加入することができます。
- 平成25年度より臨床研修歯科医を対象とした第6種会員ができました。第6種会員の入会機会は歯科医師法に基づく臨床研修期間中のみが対象となり、翌々年度まで会員籍を継続することができます。

この正会員、準会員の入会のご案内は、歯科界の将来のために、組織基盤の確立・強化が急務であるとの日本歯科医師会からの協力要請に応えるものです。

《問い合わせ先》

公益社団法人日本歯科医師会総務部会計・厚生会員課（厚生会員部門）

〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-1-20

TEL：03-3262-9323 / FAX：03-3262-9885

<https://www.jda.or.jp>

会員区分		入会金	年会費
正会員*		10,000 円	38,000 円
準会員	第3種会員*	10,000 円	12,500 円
	第6種会員**	5,000 円	—

※一診療所に所属する正会員のうち、その責任者（管理者を含む）のほかは、会費を減額することができます。詳しくは日本歯科医師会若しくは診療所所在地の都道府県歯科医師会にお問い合わせください。

*第3種会員は、公務員である歯科医師、医育機関・病院・介護老人保健施設等に勤務し開業していない歯科医師、研究機関に勤務し診療に従事しない歯科医師が対象です。

**第6種会員は、歯科医師法に基づく臨床研修歯科医が対象で年会費は不要です。

目次

読者アンケート票（第43巻）

巻頭言

6期目の検証 住友雅人 3

インフォメーション 4

特別企画

〔座談会〕「歯科イノベーションによる新時代の創生」について語る
..... 川口陽子，大川周治，西郷 巖，高橋英登，住友雅人，
松野智宣，大久保力廣 5

令和5年度プロジェクト研究 解説・末瀬一彦 24

学術研究

令和3年度採択プロジェクト研究

A. 歯科界のニューノーマル（各種感染症対策，高齢者の歯科治療体制の確立）
微量唾液を検体とした SARS-CoV-2 迅速スクリーニング検査法の確立と
mobile 型 qPCR 装置（PCR1100）の有用性の検討
..... 里村一人ほか 26

B. これからの歯科医療の DX（AI・デジタルテクノロジーの応用）
デジタルフェノタイピングデータと
生体データの組み合わせを活用した歯科治療恐怖症の新しい診断法の開発
..... 鮎瀬卓郎ほか 33

Extended Reality 技術を応用し sustainable な歯科教育を確立する
..... 片倉 朗ほか 40

C. New for Old，疾病構造の変化を見据えた歯科ストックの確保を目指して
高齢者の医療・地域連携に貢献する高齢者対応型病院歯科の普及に向けた調査・研究
..... 大野友久ほか 46

学際交流

第39回歯科医学を中心とした総合的な研究を推進する集い 解説・末瀬一彦 52

会務報告

日本歯科医学会，専門分科会，認定分科会 60

関連団体報告

日本学術会議・歯学委員会，国際歯科研究学会日本部会（JADR）
スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム（SCRIP） 111

編集後記

..... 松野智宣 114

CONTENTS

Questionnaire to Readers

Compass	Confirmation of My 6th Term as Chairperson Masahito SUMITOMO	3
	Information.....	4
Trend	Symposium Creating a New Era through Dental Innovation Yoko KAWAGUCHI, Shuji OHKAWA, Iwao SAIGO, Hideto TAKAHASHI, Masahito SUMITOMO Tomonori MATSUNO, Chikahiro OHKUBO	5
Research	Project Research for 2023 Introduction / Kazuhiko SUESE	24
	Research and Study Project for 2021 A. The New Normal in Dentistry (Establishment of Various Infection Control Measures and Dental Treatment Systems for the Elderly) Feasibility of Rapid Diagnostic Technology for SARS-CoV-2 Virus Using a Trace Amount of Saliva Kazuhito SATOMURA et al.	26
	B. DX in Future Dentistry (Application of AI & Digital Technology) Development of a New Diagnostic Method for Dental Phobia Utilizing a Combination of Digital Phenotyping Data and Biological Data Takao AYUSE et al.	33
	Applying Extended Reality Technology to Establish Sustainable Dental Education Akira KATAKURA et al.	40
	C. Embracing “New for Old” to Secure Dental Stock in Anticipation of Changes in Disease Structure Survey for Promoting Hospital Dentistry Contributing to Medical and Community Cooperation for Older Adults Tomohisa OHNO et al.	46
Forum	Group Promotion Overall Research on Dentistry Introduction / Kazuhiko SUESE	52
Activity Report	JADS, Specialized Subcommittee, Official Subcommittee	60
Related Group Report	SCJ, JADR, SCRP	111
Editor's Column	 Tomonori MATSUNO	114

巻頭言

6 期目の検証

日本歯科医学会 会長
住友 雅人



日本歯科医学会誌の巻頭言も 11 回目を迎える。このところ 6 期目の重みという観点から、目指してきたものがどのような状況になっているかの検証をする機会を作っている。この 11 年間にとりわけ大学関係者は退職をされた方も多く、学会活動から離れた方々には 11 年目の検証は難しいかと思う。したがって 6 期目を担う自分がこれまでに巻頭言でお伝えした状況を検証してみよう。主観的な評価になることはお許し願いたい。ちなみに事務局に調査をお願いしたところ私の日本歯科医学会とのかかわりは、1982 年 4 月 1 日就任の英文雑誌編集委員会から始まっているようだ。この委員会の記憶は全くない。これ以降、日本歯科医師会の委員会委員などを含めて今日まで 40 年余続いているかかわりは、多少の客観性の担保となるだろう。

さて 2014 年 3 月発行の日本歯科医学会誌の巻頭言のタイトルは「日本歯科医学会の変革期に求められる帰属意識と存在意義」であった。前年の 7 月に日本歯科医学会会長に就任し、当時の日本歯科医学会に不足しているものとして「帰属意識」と「存在意義」とを挙げタイトルにした。まず「帰属意識」である。日本歯科医学会に専門分科会としての加入や認定分科会として登録しているにもかかわらず学会組織に所属しているという意識の低さを何とかしたいという想いがあった。これには厳しい条件と言われていた資格認定の条件を時代の特徴に合わせた。申請をされる学会も自身の努力によって目的が達成されている。例えば新規の認定分科会への登録がされたときや専門分科会に加入されたときの記念式典において、喜びの声を聞くたびに、日本歯科医学会への帰属意識の向上が実感できる。

この会誌では特別企画座談会を組んで歯科界が目指す方向を示してきた。第 35 巻・第 36 巻では「歯科とスポーツの関わり」、続く第 37 巻・第 38 巻では「子どもの食を育む歯科からのアプローチ」をテーマとした座談会を提供してきた。第 39 巻・第 40 巻では「2040 年への歯科イノベーションロードマップ」、第 41 巻では「第 24 回日本歯科医学会学術大会からみえてきたこれからの歯科界」、第 42 巻においては「サステナブルでシームレスな歯科医療を目指して ～口腔健康管理と健康寿命～」を企画した。本第 43 巻は第 25 回日本歯科医学会学術大会の趣旨から「歯科イノベーションによる新時代の創生」を取り上げた。

これらの一連の企画は 6 期の間における執行部の学会事業での「存在意義」を示すもので、目的は一般国民のアクセスも期待したものである。電子ジャーナルはオープンアクセスとし、日本歯科医学会から直接国民に発信し、歯科の重要性を知らせ、社会的機運を高める想いで続けてきた。しかし、発信手段である HP の機能が十分に発揮できていないということから、新年から本誌の情報提供の主体となる学会 HP を大幅に見直した。これからも引き続き、このような検証とそれをもとにした改善をしっかりと見届けたい。

● インフォメーション ●

日本歯科医学会誌構成の解説

本誌第43巻では巻頭言の次に、特別企画（P.5～23）、学術研究（プロジェクト研究、P.24～51）、学際交流（P.52～59）、学会活動報告（P.60～110）等の構成となっています。

本巻の特別企画の座談会は「『歯科イノベーションによる新時代の創生』について語る」をテーマとしております。今回の参加者は、川口陽子先生（第25回日本歯科医学会学術大会 会頭／日本歯科医学会 副会長）、大川周治先生（第25回日本歯科医学会学術大会 準備委員長）、西郷 巖先生（第25回日本歯科医学会学術大会 事務局長）、高橋英登先生（日本歯科医師会 会長）、住友雅人先生（日本歯科医学会 会長）です。2025年は「2040年への歯科イノベーションロードマップ（健康寿命の延伸）」の第一期を終了する節目の年になることから、2025年にパシフィコ横浜で開催される第25回日本歯科医学会学術大会のメインテーマである「歯科イノベーションによる新時代の創生」について語られています。このメインテーマは『歯科イノベーションロードマップ』を次のステップに発展させるために、ロードマップの見直しやアップデートを見据えたもので、第25回日本歯科医学会学術大会の成功へ向けて様々なアイデアや企画が討議されています。学術大会への3万人以上の参加者を目標に掲げ、歯科医師会と歯科医学会とのコラボレーション、デンタルショーとの学術的連携など「学術大会に行きたくなる企画とは」について触れられ、歯科医師はもとよりコ・デンタルスタッフや学生までもが参加したくなる第25回日本歯科医学会学術大会の魅力が語られています。

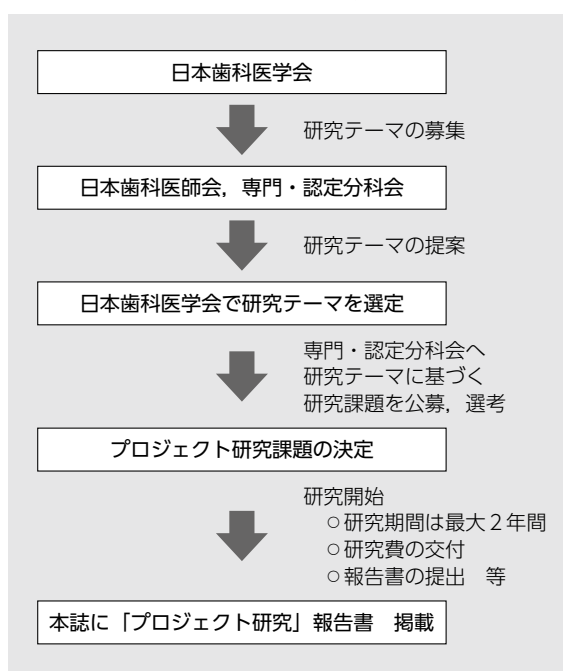
「学術研究」では、令和3年度採択プロジェクト研究（A. 歯科界のニューノーマル（各種感染症対策、高齢者の歯科治療体制の確立）：1編、B. これからの歯科医療のDX（AI・デジタルテクノロジーの応用）：2編、C. New for Old, 疾病構造の変化を見据えた歯科ストックの確保を目指して：1編）の報告が4編掲載されています。

また、本学会では、毎年、新たに構想された斬新な研究を促進することを目的に「歯科医学を中心とした総合的な研究を推進する集い」を開催しております。この「集い」では8件の演題について口演および質疑応答が行われ、活発な論議が展開されます。本誌の「学際交流」には、令和5年度の第39回「集い」の事後抄録が8編掲載されています（P.52～59）。

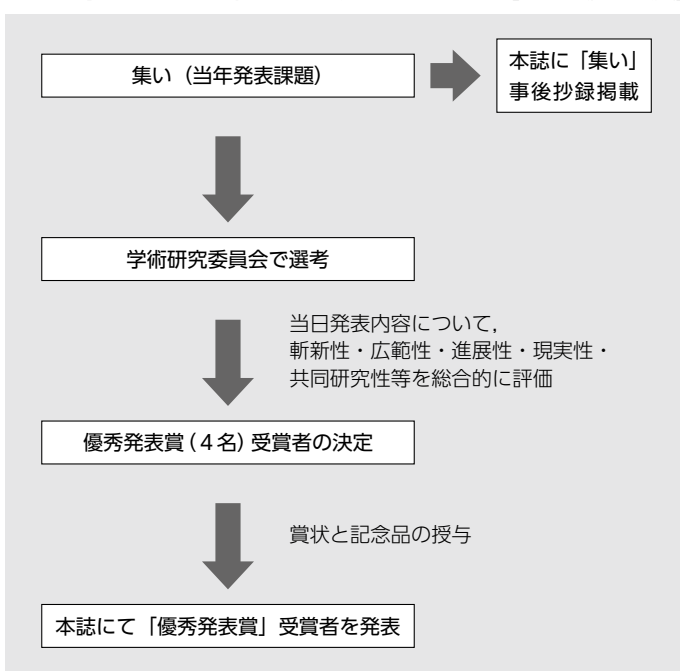
そのほか、「学会活動報告」では日本歯科医学会に属する専門分科会ならびに認定分科会について、この1年間の活動報告の概要を知ることができます（P.60～108）。また、巻末には、令和6年度の各分科会総会一覧もありますのでご活用ください。

（日本歯科医学会 理事 横瀬 敏志）

プロジェクト研究



「歯科医学を中心とした総合的な研究を推進する集い」と「優秀発表賞」



特別企画



・ 座 談 会 ・

歯科イノベーション による新時代の創生 について語る

とき ● 令和5年11月17日(金) ところ ● 歯科医師会館 8階 801会議室／オンライン 併用開催

参 加 者

川口 陽子	第25回日本歯科医学会学術大会 会頭／日本歯科医学会 副会長
大川 周治	第25回日本歯科医学会学術大会 準備委員長
西郷 巖	第25回日本歯科医学会学術大会 事務局長
高橋 英登	日本歯科医師会 会長
住友 雅人	日本歯科医学会 会長
松野 智宣	日本歯科医学会誌編集委員会 委員長／座長
大久保力廣	日本歯科医学会誌編集委員会 副委員長／オブザーバー（オンライン参加）

新型コロナウイルス感染の状況を踏まえ、当日は十分な感染予防対策を行ったうえで、座談会を開催いたしました。

松野 本日はご多忙の中、2023年度日本歯科医学会誌特別企画の座談会にご参集いただき誠にありがとうございます。私は、日本歯科医学会誌編集委員長として本日の座談会の司会進行を務めさせていただきます、日本歯科大学附属病院の松野智宣です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、2019年、2020年は「歯科イノベーションロードマップ」、2021年は「第24回日本歯科医学会学術大会からみえてきたこれからの歯科界」、そして、去年は「Sustainableでシームレスな歯科医

療を目指して」というテーマで座談会を行って参りました。つまり、これまでの4回とも、「歯科イノベーションロードマップ」をベースにした座談会でした。今回は、2025年9月にパシフィコ横浜で開催される第25回日本歯科医学会学術大会のテーマが『歯科イノベーションによる新時代の創生』に決まりましたことから、今回も「歯科イノベーション」をキーワードに座談会を行うことにさせていただきました。

1 紹介

松野 まず、本日の出席者をご紹介します。

日本歯科医学会から住友雅人会長、日本歯科医師会から高橋英登会長、そして第25回日本歯科医学会学術大会会頭の川口陽子先生、準備委員長の大川周治先生、事務局長の西郷巖先生、この5名の先生方にお集まりいただきました。また、オブザーバーとして、編集委員会副委員長の大久保力廣先生にもオンラインでご参加していただいております。

それでは、本日お集まりの先生方から、近況も含めて自己紹介をお願いしたいと存じます。

まず初めに、日本歯科医学会・住友会長、よろしくお願いいたします。

住友 この「歯科イノベーションロードマップ」がどういう経緯でできたかを一部ご紹介いたします。2018年6月5日、各分科会宛てに「歯科イノベーションロードマップ」について提案があれば教えてくださいと発出いたしました。テーマは、「逆転の発想 2040年への道しるべ」です。年次計画は2018年スタートで、2019年～2025年を第1期、2026年～2032年を第2期とし、そして2033年～2040年に向けてそのロードマップを完成していこうというもので、ステージごとに各分科会から3～5つ程度の提案をいただきました。そこでは、1つの項目で第Ⅰ～第Ⅲステージ、すなわち2040年にわたるようなもの——イノベーションとして時間のかかるもので、段階的に展開させるような項目も歓迎しているということを付け加えました。各項目につき、達成の予測根拠、手段など、400

字程度に加えて、項目内容を視覚的に表現するイラストもお願いいたしました。実際は400字に収まらなかったところもありました。これを日本歯科医学会の学術研究委員会の数人の委員にまとめていただいて、イノベーションロードマップとして全体に仕上げて、翌年設置した日本歯科医学会の重点研究委員会でも最終的に整理して発出いたしました。7年ごとの2025年、2032年、2040年の各ステージのマイルストーンでのテーマは、現段階では印刷物や動画でも発信しています（図1）。

松野 歯科イノベーションロードマップの生みの親でもある住友会長には、ロードマップの提案から発出までの経緯をご説明いただきました。

続きまして、日本歯科医師会・高橋会長、ご挨拶を兼ねよろしくお願い致します。

高橋 日本歯科医師会・高橋でございます。

歯科医学会との連携、融合、協調を進めるというのが、日本歯科医師会にとって1つの大きな目標です。日本歯科医師会は学術団体であるのにもかかわらず、歯科医学会との連携ができていないというのは非常に本末転倒です。もちろん、今までもその連携に尽力している両組織ですけれども、もう一歩進めた方がいいのではないかと。

いろいろな会員の先生方とお話をする中で、歯科医学会の存在を知らないというか、必要性を感じていない会員が非常に多くいらっしゃると感じました。実は私、大学で25年間教職にありました。やっぱり大学に長くいた人間というのは、歯科医学会の必要性・重要性を感じておりますが、大学

2040年への歯科イノベーションロードマップ 〈健康寿命の延伸〉

第1期
2019年～2025年

第2期
2026年～2032年

第3期
2033年～2039年

I 新規検査・技術・治療法 (口腔歯科治療のイノベーション, 口腔検査技術のイノベーション)

- ◆歯周病で失われた歯ぐきの再生が可能に。
- ◆むし歯と歯周病を発症させる歯垢細菌叢が判明。
- ◆歯や歯ぐきの中を見ることができる光センサー技術が実用化。
- ◆スマートフォンによる舌・口腔粘膜の検査が実用化。
- ◆オンラインとオンサイトが創造するワンデントリートメント。
- ◆善玉歯垢細菌群と悪玉歯垢細菌群との判定が可能になる。
- ◆レーザー照射による削らないむし歯予防が実用化。
- ◆幹細胞とiPS細胞を使った歯の再生が可能になる。
- ◆口の病気の発症リスクのゲノム予測診断が実用化される。
- ◆歯の神経や歯ぐきを修復する薬剤が開発。
- ◆血液検査に代わる新たな唾液検査が開発。
- ◆口腔がんを発生させる遺伝子異常が判明。
- ◆幹細胞とiPS細胞を使って唾液腺の再生が可能に。
- ◆悪玉歯垢細菌群を善玉歯垢細菌群に置き換えられる。
- ◆子どもたちの口の中に理想的な善玉歯垢細菌叢を創る技術が開発される。
- ◆血液検査に代わる唾液検査が実用化される。
- ◆遠隔診断による早期がん塗り薬治療が実用化される。
- ◆AI診断により最適治療法が確立する。

II 新規材料・機器 (Novel materials・Instrument・Device)

- ◆むし歯抑制, 歯を強くする機能性材料が実用化される。
- ◆歯の神経と歯周組織の再生技術が開発される。
- ◆天然歯に近い機能をもつ次世代バイオインプラントが開発。
- ◆歯と一体化する修復機能材料が開発される。
- ◆歯の神経と歯周組織の再生技術が実用化される。
- ◆ヴァーチャルリアリティ技術による遠隔歯科診療支援システムが実用化。
- ◆デジタル歯科医院が登場する。
- ◆歯と一体化する修復治療が一般化する。
- ◆歯の神経と歯周組織の再生治療が一般化する。
- ◆天然歯に近い機能をもつ次世代バイオインプラント治療が一般化する。
- ◆AIロボットによる遠隔歯科支援システムが実用化される。
- ◆デジタル高次歯科医院の登場。

III 健康長寿社会の実現・フレイル対策

- ◆オーラルフレイルの診断法と管理法が開発される。
- ◆オーラルヘルスのための画期的新材料(歯磨剤, 含嗽剤, 歯のコーティング, 義歯用材料)が開発される。
- ◆はめたらきれいになる歯磨き用のマウスピースが開発される。
- ◆口腔機能と認知症との関連についての解明が進む。
- ◆善玉菌の移植によるむし歯と歯周病の撲滅が始まる。
- ◆身体に優しい嚥下機能診断機器が開発される。
- ◆オーラルフレイル対策の充実により, 健康寿命の延伸。
- ◆あらゆる世代においてむし歯, 歯周病の撲滅が進行する。
- ◆歯科医療の革新的進歩により, 健康長寿社会が達成される。

図1 2040年への歯科イノベーションロードマップ(2020年10月28日更新)

座長



まつの 松野 智宣

日本歯科医学会誌編集委員会
委員長

の医局員を経験していない開業医の先生方は歯科医学会の存在価値をあまりわかっていらっしゃらないと思います。専門や目指すところは先生ごとに違いますが、それでも1つでもいいからどこか学会に入って、必ず年に1回はその学会の学術大会に参加してほしい。それを、本執行部としてはできるだけ強く推し進めつつあります。

その集大成が、日本歯科医学会の学術大会でしょう。すべての歯科医師が学術レベルを上げることは、国民のための歯科医療を遂行する上で、なくてはならないことなんですね。旧態依然とした診療は、国民に対して失礼に当たると思います。最新の情報を収集して、常に最新の・最先端の医療を国民に施す、それが我々の一つの大きな目的です。そのためには学術レベルを上げる。学会に入って、学術大会に参加して勉強する、それが一つの大きな手だて、方向性だと思っておりますので、できるだけそのような方向で会員への指導や促すようなことをしていくつもりです。

松野 日本歯科医学会は日本歯科医師会の中に設置された学術研究組織であり、その重要性和必要性を日本歯科医師会会員の先生があらためて認識していただけることが、第25回学術大会が目指すところではないでしょうか。高橋会長どうもありがとうございました。

続きまして、その第25回学術大会の会頭である川口先生からご挨拶をお願いいたします。

川口 ただいまご紹介いただきました川口です。本日は、第25回学術大会について話し合う機会を設けていただきまして感謝申し上げます。ありがとうございます。

日本歯科医学会の学術大会は、オリンピックのように4年に1度開催される、わが国の歯科界最大規模の学術大会です。会頭を拝命し、その重責に身の引き締まる思いです。一方で、新しい内容

で学術大会を企画運営していけるということは非常にわくわくする楽しい経験であるとも考えております。

2021年に開催されました第24回学術大会では、私は学術部会の部会長を務めました。オンライン開催となったので今回の開催形式とは違いますが、その経験を活かしてよりよい大会になるよう、そして学術プログラムが先生方に満足のいただけるものになりますよう、企画を考えていきたいと思っています。

学術大会開催まで2年を切りまして、準備委員会のメンバーも決まりました(図2)。現在、プログラムの企画を考え、検討しているところです。準備委員長の大川先生、事務局長の西郷先生をはじめ多くの先生方にご協力いただきまして、全国の先生方にたくさん参加していただけるよう、楽しくて有意義な学術大会にしたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

松野 川口先生、どうもありがとうございました。第25回学術大会が歯科のみならずより多くの医療関係者、そして国民の皆様にとりましても意義のある素晴らしい大会になるよう、どうぞよろしくお願いいたします。

その第25回学術大会の準備委員長であります大川先生、ご挨拶よろしくお願いいたします。

大川 ただいまご紹介にあずかりました、明海大学の大川と申します。第24回学術大会では講演シンポジウム委員会委員長を拝命いたしました。今回の第25回学術大会では、準備委員長を拝命しております。準備委員長としてどこまでやれるかまだまだ試練の途中ですけれど、一助となりますよう頑張りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

松野 大川先生、ありがとうございます。これから大変お忙しくなるかと思いますが、お体にも配慮され、大会のご準備どうぞよろしくお願いいたします。

そして、事務局長の西郷先生からもよろしくお願いいたします。

西郷 事務局長を拝命しております神奈川県歯科医師会の西郷巖でございます。神奈川県歯科医師会では、常務理事、専務理事を経まして、現在は第25回日本歯科医学会学術大会に専念すべく、神奈川県歯科医師会学術委員会特別委員として委員会内に特別委員会を設置し、鋭意準備をしている

第25回日本歯科医学会学術大会 準備委員会組織図

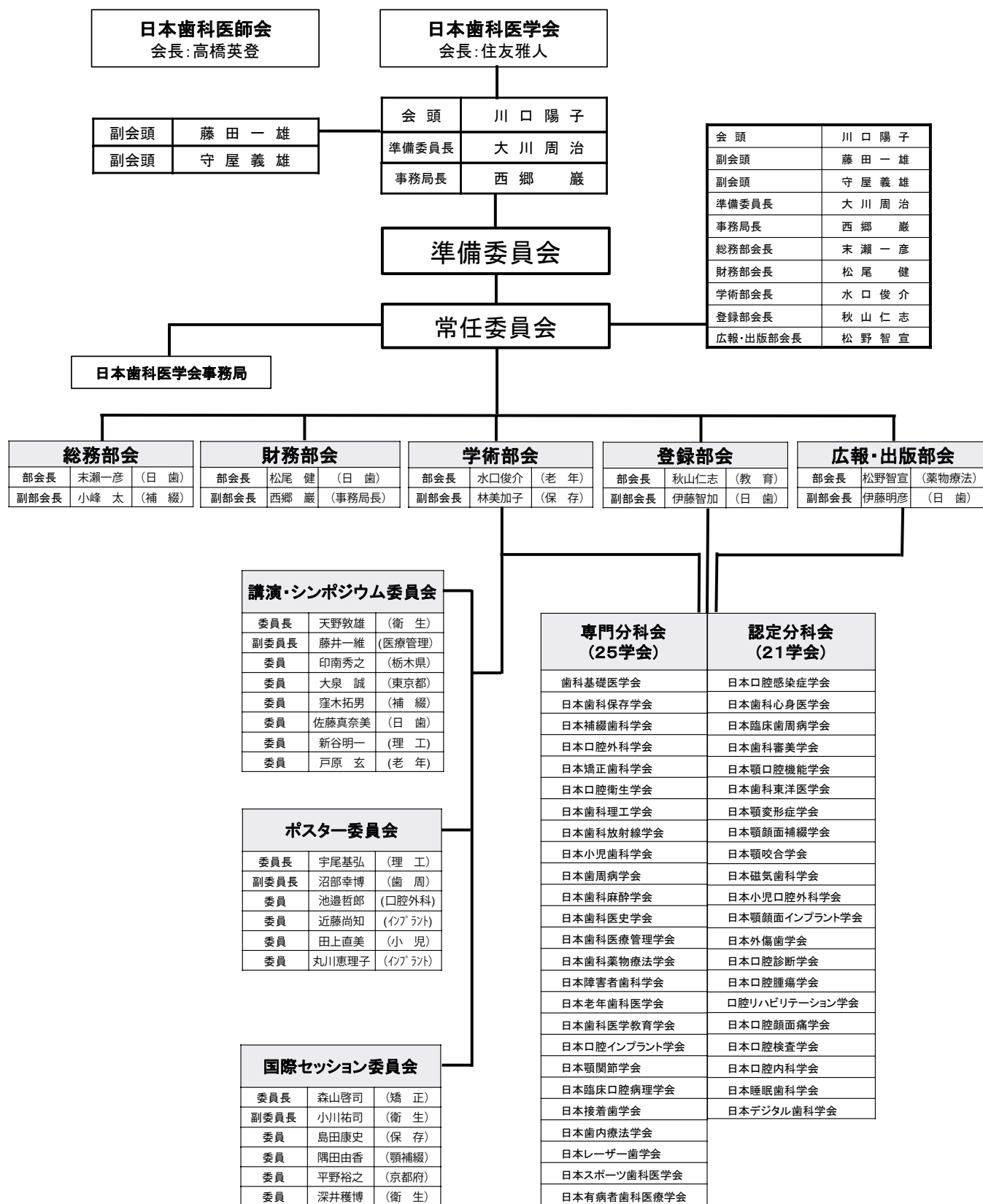


図2 第25回日本歯科医学会学術大会 準備委員会組織図

ところでございます。

前回、第24回学術大会では、国際セッションのシンポジウムのモデレーターとして大会に参加させていただきました。いち会員としてとても貴重な経験をさせていただいて、本当に感謝を申し上げたいと思います。事務局長という大役を務められることが果たしてできるのか、まだまだ不安を拭い去ることはできませんが、少しでもお役に立てますよう力の限り頑張らせていただきたく思っております。とは申しまして、空回りしてしまってもいけませんので、意欲を維持しつつも冷静さを失わずに取り組んで参りたいと思っております。

開業医などの会員の方々や地域歯科医師会の生の声を学術大会へお届けすることも、私の大切な任務の一つであると思っております。また、4年に1度の開催の歯科医学会学術大会というものが、自分たちの現在だけでなく、まだ見ぬ将来像を描くための道しるべになり得るんだという発信をし、多くの会員の皆様に足を運んでいただけるよう考えて参りたいと思っております。どうぞよろしく

お願いいたします。

松野 西郷先生、ありがとうございます。西郷先生のお膝元である横浜での大会の開催ということになります。横浜からのおもてなしもどうぞよろしくお願いいたします。

西郷 できる限り頑張って参りたいと思います。

松野 それでは、オブザーバーとしてオンライン参加されている大久保副委員長からもご挨拶お願いいたします。

大久保 オブザーバーとして参加させていただきます鶴見大学の大久保力廣と申します。現在、日本歯科医学会誌編集委員会副委員長を仰せつっております。本日は、とても豪華な先生方による第25回学術大会を見据えた歯科のイノベーションについてのお考えや方針などについて聞けますことを楽しみにしてきました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

松野 大久保先生ありがとうございます。大久保先生には今回も座談会の総括をお願い申し上げます。



2 歯科イノベーションロードマップの リノベーション

松野 それでは、座談会をスタートさせていただきます。

これまで、日本歯科医学会は「歯科イノベーションロードマップ」、日本歯科医師会からはいわゆる「歯科ビジョン」、そして歯科医師会、歯科医学会と日本歯科商工協会が作成した「新歯科医療機器・産業ビジョン」の将来の歯科の方向性を示した、三種の神器といわれる道しるべがあります。これらは、いずれも健康長寿社会の実現がエンドポイントになっています。

そこで、住友会長にトップバッターになっていただき、「歯科イノベーションロードマップの現在・過去・未来」についてお話をいただければと思います。住友会長よろしくお願いいたします。

住友 「2040年への歯科イノベーションロードマッ

プ」の目的は、健康寿命の延伸でございます。Ⅰの分類は「新規検査・技術・治療法」、Ⅱは「新規材料・機器」、Ⅲは「健康長寿社会の実現・フレイル対策」です。このイノベーションロードマップはオープンイノベーションで、どなたもがこのテーマを活用してもいいということです。いろいろな分野の方々に参加していただければと思っています。例えば「歯の神経と歯周組織の再生技術が開発される」という項目が新規材料・機器の第2期にありますが、なぜこれが必要なのかというポイントは全く書いていないんですね。それぞれのアイデアによって、例えば歯髄の再生をすれば、歯髄機能を持った人工的なものを開発していくとか、それは歯科関係だけでなく、いろいろな分野の人たちが関与していただきたいのです。

細かな議論をしてまずは具現化して、続いて社会実装を目指していただきたいのです。そこで、これを提案していただいた分科会にどの段階まで進んでいるかという調査をさせていただいています。2024年には重点研究委員会で整理いただいて報告する予定です。それらの状況は、第25回学術大会においても公開できるのではないかと思います。

松野 各項目がどれだけ進んでいるのかは、私も非常に興味を持っておりました。第1期が2025年までで、まさに第25回学術大会のときにその報告があるとのことで、たくさんの方々が興味津々、とても楽しみにされることでしょう。

一方、日本歯科医師会からは2020年4月に「2040年を見据えた歯科ビジョン—令和における歯科医療の姿—」が刊行されました。ここにも、2040年までの戦略ロードマップが示されています（図3）。そこで、高橋会長からこの歯科ビジョンの進捗などについてお話しいただきたいと思います。

高橋 2020年に歯科ビジョンが策定されましたが、

時代的・时期的なズレというか、進んでいるところもありますし、まだまだ手を入れなければいけないところもありますので、現在、その検証をしているところです。

2018年に発信されました歯科医学会のイノベーションロードマップとの兼ね合いに関しても、いろいろ検討させていただいています。私は材料の開発などを中心に仕事をしておりましたので、新規材料等は非常に興味のある分野です。2040年の歯科ビジョンに照らし合わせて、重なるところや方向性の同じところ、それから進んでいるところ、まだ足りないところ等いろいろ検証しています。

治療法とか口腔歯科治療のイノベーションなどでは、再生分野の研究は大分進んできて、歯を再生させる、もう一回乳歯から永久歯になる、もう一回永久歯を再生させる元気があるけれども、それを押さえている物質があるということまでわかってきました。そういう「再度生えてくるのを抑えるようなもの」が研究されれば、いわゆる再

戦略ロードマップ

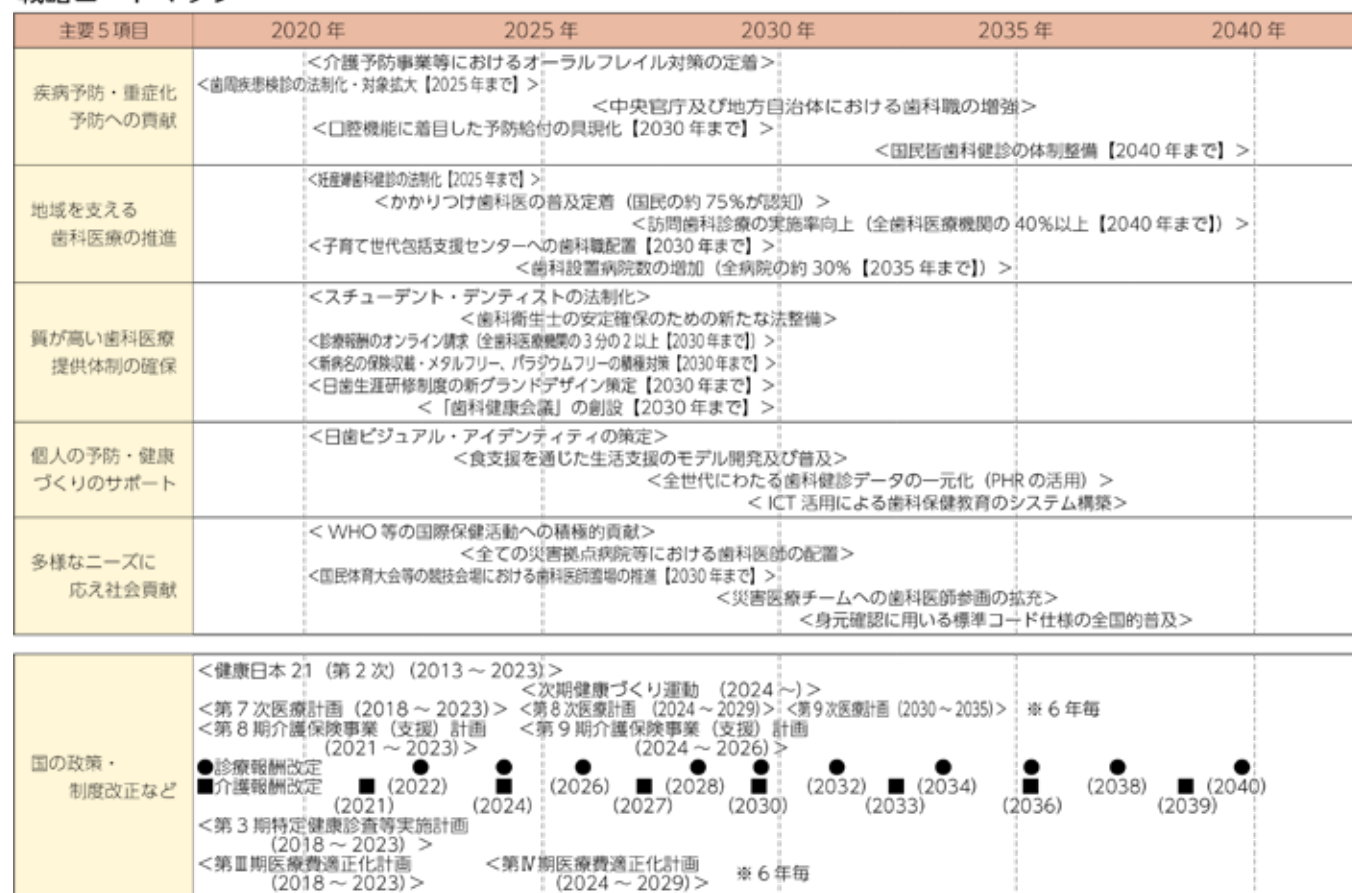


図3 日本歯科医師会発行「2040年を見据えた歯科ビジョン—令和における歯科医療の姿—」に掲載された「戦略ロードマップ」

生抑制物質をどうにか働かせないようにすることで歯の再生ができるようなところまで来ているという話もあります。現在、一部分での再生の研究をしている先生はいらっしゃいますけれども、歯根膜も含めてそのすべての歯の機能を持った再生というのはなかなか難しい。もう1回乳歯から永久歯に生え変わる、もしくはもう2回、3回とできるのであれば、歯科にとっては根本的な、それこそ大きなイノベーションになると思うんですね。私は最近、「10年一昔」ではなくて「2年一昔」ではないかという感覚を持っていて、進んできている項目をタイムリーに改変していかないと、時代に取り残されてしまうと危惧しております。

例えば、口述記録カルテはもうほぼ完成しています。歯科の辞書も中に入っています。歯周病の検査で「右上1番4ミリ」と言ったら、画面上の図に4ミリが瞬時に表示されます。間違ったら、「戻って」と言えば戻ります。「右上6番の頬側出血」と言ったら、もうそのままパッとコメントが記入されます。特にAIに関する部分はものすごい勢いで進んでいますので、イノベーションロードマップがついてこられなくなる。それは致し方がないことで、最新バージョンに常に置き換えるということが必要かなと思っています。

これからはお年寄りの歯が残ってくる時代になって参りました。30年前は7%だった8020が51.6%にまでなりました。残っている歯も歯周病のコントロールによって動揺が少なくなってきた。次に何が起こるかといったら、Tooth Wearが起こるわけです。Tooth Wearに関して、今は材料が全然ついてこられていない。人間の歯の擦り減りに対して、追従できる材料はございません。私は教授に「擦り減る材料を作れ」と言われて25年間苦労したけど、結局完成しなかった。しかし、お年寄りの歯がもっと残る時代は必ずきます。そのときに、ある程度Tooth Wearに追従できるような材料もこれからは必要だと思いますし、これからどんどん研究していかなければいけない。擦り減る材料、生体の変化についてこられる材料が必要かなと思います。

それから運用の面では、どんな擦り減る材料だっ

て骨格の変化にはなかなか追従できない。90歳までずっと同じ骨格ではないわけですから、その変化にまである程度追従するような材料が必要です。私の大学の中原 泉理事長がオーストラリアのアデレード大学に行ったときにアボリジニの研究をして、顎骨が年齢によって変化することを論文にしています。その顎骨の変化に追従できるような歯とか、人工的な歯を作っていかなければいけないと思います。

また、健康長寿社会においては根面に対するフッ化物の活用をもう一回見直すべきだと思います。我々がやらなければいけないことのひとつに、口腔機能管理があります。前・厚生労働大臣に何度も何度も、「何で日本は予防に給付されないんですか」とって散々言いました。そうしたら、「高橋さん、これからは予防に給付していかないともう追いつかないわな」と。「疾病が発生し、それから治療する今までの医療から脱却しなければだめだよな」と厚生労働大臣はおっしゃいましたけど、我々が「健康寿命の延伸」という点で最も寄与できるのは口腔機能管理の部門かと思っています。特に日本人の死因の3位に躍り出た、誤嚥性肺炎を含めた肺炎ですね。それをどうにかするのにも歯科の役目だと思います。それはもちろん歯周病の管理、摂食嚥下、咀嚼も含めての口腔機能管理。口腔機能を衰えさせないような、オーラルフレイルを防ぐのは、これからの我々の国民に対する最も影響力の大きい仕事になると思いますので、その辺も第25回学術大会で強く打ち出していただいて、「歯科はむし歯を削って詰めるだけではないんだよ」と国民にアピールしていただければと思います。

松野 高橋会長、これからの歯科に必要な戦略の一部をお示しいただきありがとうございます。

歯科イノベーションロードマップも歯科ビジョンも2025年が最初の節目に当たる年になります。当然、この2つが発出された後も新たな技術がどんどん出てきています。特に、生成AIなどはその最たるものかと思いますが、やはり、節目節目で見直しや改訂、つまりロードマップをリノベーションしながら2040年の未来へと継続していかなくてはならないと思います。

3

第25回日本歯科医学会学術大会に向けて

松野 それでは、その節目の年でもある2025年にパシフィコ横浜で開催される第25回日本歯科医学会学術大会の会頭である川口先生から、この大会の目指すもの、メインテーマ、シンボルマークなどについてご説明いただきたいと思います。

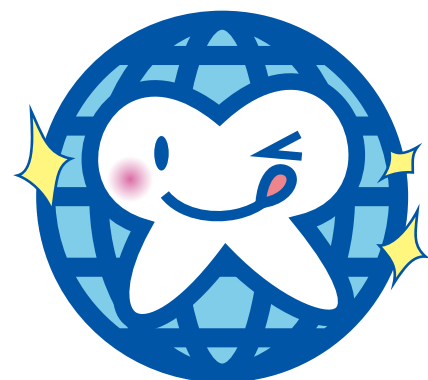
川口 今回の学術大会のメインテーマは、「歯科イノベーションによる新時代の創生」です。歯科イノベーションロードマップ、それから歯科医師会の歯科ビジョンがまずは頭に浮かんだので、「歯科イノベーション」という言葉を入れようと考えました。このロードマップをみますと、目標として「健康寿命の延伸」とあります。Ⅰ・Ⅱ・Ⅲという内容で分けていますが、健康長寿社会の実現、フレイル対策に歯科がどう関わっていくのか。そのために、新規検査・技術・治療法、また新規材料・機器をいろいろ開発して新しくイノベーションしていくことになると思います。ちょうど学術大会が行われる2025年はこの第1期の終了時点なので、その時点における進捗状況を発表することによって、もしかしたらまだ到達できていないところもあるかもしれないし、もう既に完成したものもあり、さらに新たな対策が必要となるものも考えられるということで、この学術大会の中でロードマップを一度見直して、そして第2期や2040年に向けて新たに追加したり、方向を変えていくというような見直しができる年であると考えております。

先ほど高橋会長が「これからは口腔機能管理が重要である」とおっしゃいました。第25回学術大会のシンボルマークは、歯に舌がついているイラストです（図4）。口腔機能を表す代表的なものとして舌を意図的に書き加えました。そして、日本歯科医学会の英語名JADS（Japanese Association for Dental Science）の「D」も舌と同じ色で赤くし、歯科では口腔機能がとても大切だと示しています。コンセプトとしては歯科医学の今後の革新、

イノベーションが創り出す新しい社会、新しい世界をわかりやすい表現でマーク化しています。歯科界のいろいろな活動によって「輝く未来」になり、これからの時代が明るく輝く社会になるというコンセプトをこのシンボルマークで表現しています。初めのイラスト案では「べーっ」と舌は下向きに描かれていたのですが、それでは「あっかんべー」しているみたいで少し下品であるという意見もあって、ペコちゃんみたいに可愛い笑顔の上向きの舌にしました。歯科は歯を削ったり詰めたりするだけではなく、口腔機能全般に関与して治療・機能管理を行っている、そういう情報を広めるために意図的に舌付きの歯のマークにしてみました。

また、国際セッションでの海外に向けた英語発信や、市民セッションでの一般市民に向けた情報発信も行う予定なので、歯科の学術大会であるということが誰にでも世界共通で理解してもらえるように、わかりやすいシンボルマークを作成いたしました。

松野 第25回学術大会のメインテーマは「歯科イノベーションによる新時代の創生」で、ロードマッ



25th JADS
YOKOHAMA 2025

図4 第25回学術大会のシンボルマーク



かわぐち ようこ
川口 陽子

**第25回日本歯科医学会学術大会
会頭**

日本歯科医学会 副会長

1979年東京医科歯科大学歯学部卒業後、同 予防歯科学講座助手に。1994年メルボルン大学歯学部（オーストラリア）客員研究員。1996年東京医科歯科大学歯学部予防歯科学講座講師、1998年NIDR（米国）、コペンハーゲン大学（デンマーク）文部省在外研究員を経て、2000年東京医科歯科大学大学院健康推進歯学分野教授に就任。2020年同大学名誉教授。2019年から日本歯科医学会副会長を務める。

でも一区切りの2025年に当たる年です。そこから過去を振り返ってみて、先程のお話のように方向を変えていかなければいけないところも当然出てくると思いますし、また新たな目標も立ってくると思います。この歯科イノベーションというのは、その時代時代を見据えて、さらにその先のことを考えていくということで、「新時代の創生」というすばらしいメインテーマがついたんだと思います。

このメインテーマを考案されたのは大川準備委員長とお聞きしました。大川先生からも少しご説明いただきたいと思います。

大川 「歯科イノベーションロードマップ2040」、「2040年を見据えた歯科ビジョン」そして「新歯科医療機器・歯科医療技術産業ビジョン」を“三種の神器”として、歯科界は大きく前進しつつあります。2025年は“三種の神器”が提示されて数年が経過しており、ある程度状況が見えてきているのではないかと、歯科の新時代創生という旗揚げとして非常にいいタイミングになるだろう、そして新時代をこれから創っていくんだという意気込みを何とか表したいということで、このテーマを思いつきました。

高橋会長からもお話がありましたように、日本

歯科医師会は学術団体です。つまり、会員が学術大会に参加することは基本であり、参加して研修を積んでいただく。そして、その結果として、歯科医療技術の質とレベルの向上を図りたいというのが、我々の一つの大きな目的になると思います。その目的を達成すべく、今回の第25回学術大会では、柱となる連携として以下の3つを考えています。まずは企業との連携です。具体的な形としては、テーブルクリニック等の学術プログラムへの企業の参画です。2つ目は専門・認定分科会（以下、分科会）との連携です。各分科会には準備委員会における学術部会、登録部会そして広報・出版部会の職務遂行に一致協力していただきたい。3つ目はコ・デンタルスタッフとの連携です。特に、歯科技工士の働き方改革へDXやAIというものが確実にどんどん入り込んできています。その流れはもう止められないだろうということで、今どの程度進んでいるのか、今後どういう展開になるのかなどを企画としてそろえられたらいいのではないかと考えております。

松野 歯科の新時代の創生、つまり旗揚げが先ほどの節目に当たる2025年であり、まさに第25回学術大会にふさわしいメインテーマを大川準備委員長が創出されたのですね。

そして、高橋会長からもお話があったとおり、歯科医師会会員の先生方には是非、この学術大会に参加してもらい歯科医療技術の質とレベルの向上を図りたいというのが大きな目的とされていることがよく分かりました。テーブルクリニックなどはかなり魅力的なプログラムですよ。

そこで、住友会長や高橋会長からは目標とすべき来場者数その具体的な数字をあげていただき、どうやったらそこにたどり着けるか、そのための準備やプログラムなどのアイデアも含めて伺いしたいと思います。

まず、高橋会長。歯科医師会の先生方はこれまで歯科医学会の学術大会にあまり馴染みがなかった感があるんですけども、その点についていかがですか。

4 日本歯科医学会学術大会はオリンピック

高橋 学術大会は4年に1回の「オリンピック」なんだから、そんなときぐらいはみんな参加しようよという感覚を私は持っていたんですけど、なかなか腰が重いみたいで……会員の半分ぐらいしか参加していないというデータがあります。私は大学におりましたから、今でも十幾つ学会に入っていて会費がすごく大変なんですけれども（笑）、学術大会に参加するというのは我々の最低限やるべきことというような感覚を持っています。本来ならば全会員の10万7,443人がなんらかの学会に入会し、学術大会に参加するのが筋ではないかなと考えております。そこで、第25回学術大会を契機に学会をもうちょっと身近なものにする動きを、日本歯科医師会サイドからもすべきだと考えております。

日本歯科評論（通刊861号）に「そうだ！学会

に出よう！」の記事を掲載していただき（図5）、いろいろなところに配っていますが、学会に入会して、年に1回はその学術大会には出ましようよ、そして4年に1回の「オリンピック」である日本歯科医学会学術大会にも出ましようよ、結果それが国民のためになるんだよ、それが歯科医としての必要最低限のことなんですよというアピールをしたいなと思うんです。

住友会長といろいろ話し合いをさせていただいて、歯科医師会と歯科医学会がもっと連携して、融合して、一体化していくことが必要かなと思っています。これを具現化して、会員に対してアプローチをしていくのに、第25回学術大会が大きなきっかけになってほしい。それには広報も大事だと思います。例えば、NHKに会場まで来てもらって、「ここに集まっている人は最先端の医療を学ぶために来ているんですよ」とテレビ放送してもらえば、国民に対する1つのアピールになるかなと考えています。

松野 この大会が歯科医師会の先生方のみならず、歯科医師全員に対しても発信できれば、歯科界がとて明るくなりますし、また、人材育成等にもつながっていくと思います。

第24回学術大会のときはコロナ禍で、準備・計画されたプログラムが十分に実施できなかったものもあると思います。一方で、SNSやオンライン会議ツールなどが発展し、国民に向けては『ハビルちゃん』をはじめ、さまざまな情報が今までとは違った形でアピールすることができるようになりました（図6）。

ところで、学会、特に日本歯科医学会の分科会に入っていない一般開業医の先生方に向けて、これからの歯科医学会のアピール、重要性などを住友先生からお話しただけませんか（表1）。

住友 私が第25回学術大会に期待しているというか、もう命令に近いんですけども（笑）、3万人以上の参加者を集めてくださいと、川口会頭にお願いしました。なぜ3万人かというと、第24回学術大会時の最初の常任委員会で「3万人は参加してほしい」と発言しましたら、当時の鈴木駿介副



図5 高橋会長執筆記事「そうだ！学会に出よう！」

（日本歯科評論 通刊861号、株式会社ヒョーロン・パブリッシャーズ）



図6 ハビルちゃん

第24回学術大会時、国民向けに作成された「子どもたちのお口の発達をサポートするキャラクター・ハビルちゃん」(動画「こんにちは、ハビルちゃんです!」<https://www.youtube.com/watch?v=YPeCADrYTRg>)

(提供：一般社団法人日本歯科医学会連合)

会頭は「そんな人数でいいんですか」と言う。「何人考えているんですか」と聞くと、「5万人です」と。日本歯科医学会の会員は10万人余いるわけですから、半分は参加していいのではないかとのことでした。私はそこまでは求めません。もちろん、上限も求めませんが(笑)。いままでの学術大会で3万人が集まったことはないの、それを目標にしてくださいというのを川口会頭をお願いしていて、大会の内容等に関してはお任せです。

3万人の根拠として、私もいろいろ学術大会等の開催に関わってきましたが、会員の3割以上が参加しない催し物はある意味失敗だと言っていたんです。わずか3割ですよ。日本歯科医学会の場合10万人以上の会員がいるので、日本歯科医師会とその分科会の会員の3割で3万人というのは最低限の数だと考えています。参加してもらうかは実際の運営を任された三役にかかっているわけで、どうすればいいか。それは、わくわくするよ

表1 日本歯科医学会 専門分科会・認定分科会(2024年1月末現在)

専門分科会	1. 一般社団法人 歯科基礎医学会	認定分科会	24. 一般社団法人 日本スポーツ歯科医学会
	2. 特定非営利活動法人 日本歯科保存学会		25. 一般社団法人 日本有病者歯科医療学会
	3. 公益社団法人 日本補綴歯科学会		1. 一般社団法人 日本口腔感染症学会
	4. 公益社団法人 日本口腔外科学会		2. 一般社団法人 日本歯科心身医学会
	5. 公益社団法人 日本矯正歯科学会		3. 特定非営利活動法人 日本臨床歯周病学会
	6. 一般社団法人 日本口腔衛生学会		4. 一般社団法人 日本歯科審美学会
	7. 一般社団法人 日本歯科理工学会		5. 日本顎口腔機能学会
	8. 特定非営利活動法人 日本歯科放射線学会		6. 日本歯科東洋医学会
	9. 公益社団法人 日本小児歯科学会		7. 特定非営利活動法人 日本顎変形症学会
	10. 特定非営利活動法人 日本歯周病学会		8. 一般社団法人 日本顎顔面補綴学会
	11. 一般社団法人 日本歯科麻酔学会		9. 特定非営利活動法人 日本顎咬合学会
	12. 日本歯科医史学会		10. 日本磁気歯科学会
	13. 一般社団法人 日本歯科医療管理学会		11. 一般社団法人 日本小児口腔外科学会
	14. 一般社団法人 日本歯科薬物療法学会		12. 公益社団法人 日本顎顔面インプラント学会
	15. 公益社団法人 日本障害者歯科学会		13. 一般社団法人 日本外傷歯学会
	16. 一般社団法人 日本老年歯科医学会		14. 一般社団法人 日本口腔診断学会
	17. 一般社団法人 日本歯科医学教育学会		15. 一般社団法人 日本口腔腫瘍学会
	18. 公益社団法人 日本口腔インプラント学会		16. 一般社団法人 日本口腔リハビリテーション学会
	19. 一般社団法人 日本顎関節学会		17. 一般社団法人 日本口腔顔面痛学会
	20. 特定非営利活動法人 日本臨床口腔病理学会		18. 一般社団法人 日本口腔検査学会
	21. 一般社団法人 日本接着歯学会		19. 一般社団法人 日本口腔内科学会
	22. 一般社団法人 日本歯内療法学会		20. 特定非営利活動法人 日本睡眠歯科学会
	23. 一般社団法人 日本レーザー歯学会		21. 一般社団法人 日本デジタル歯科学会

うな学術大会を開催する。いろいろな意味で行ってよかったなと思ってもらえる学術大会にすることです。

前回は関東地区、東京地区の会員を5～6割集めれば3万人も夢ではないなと興味を持っていただけるような企画で準備していましたが、初めての全面オンライン開催になってしまいました。今回はオンデマンドでの登録に加えて、全国から現地に参加者を集めることができますから、条件としてはとても良いわけです。ぜひ3万人を目指していただきたい。

前回大会で現地に来ている先生にお話を伺いました。3日間ずっと会場に詰めても全部のプログラムは見られない。隣では日本デンタルショーもやっていて、そっちも興味がある。現地では、行きたいところだけ行けばいい。見逃したプログラムは後からオンデマンド配信で習得すればいい。友人、同級生、先輩、後輩、いろいろな関係者たちと一緒に現場で楽しみたい。そういう機会をぜひ作ってください。ですから、いろいろなバリエーションを以てこの大会を考えれば間違いなく3万人以上は集まるし、それが会長として希望する条件なので、今回の三役の方々にぜひお願いしたい。

今まで、日本歯科医学会学術大会には日本歯科医師会の純然たる会員が三役に入ったことはありません。みんな大学関係者がやっていました。ですから、西郷先生の肩にはそれだけの責任が乗っかっている（笑）。

西郷 なぜか、最近肩凝りがひどいんですけど（笑）。

住友 西郷先生には全国の歯科医師会会員へのアピールをぜひお願いしたいと思います。川口先生、大川先生は、分科会会員の皆さんに来てもらえるように、アピールをしっかりやる。高橋会長の号令が加わるから間違いなく最低限3万人は来ていただけると、私は確信しております。どうぞよろしくお願いします。

ところで、大阪・関西万博の最初のテーマをご存じですか。「健康は人類にとって根本的な課題と捉え、慢性疾患の増加やグローバル化に伴う新たな感染症のまん延の可能性拡大という新たな健康の問題を、人類の存在を脅かす重大な危機として



すみとも まさひと

住友 雅人

日本歯科医学会 会長



1969年日本歯科大学卒業後、1973年同大学院歯学研究科（歯科理工学専攻）修了。同大学口腔外科学第1講座助手を経て、同大学歯科麻酔学教室助手。同教室で講師、助教授を歴任、1995年同大学歯学部附属病院副院長となる。1996年同大学歯学部共同利用研究所教授（歯科麻酔学併任）。2001年同大学歯学部総合診療科教授、同附属病院長に就任。2007年同大学病院歯科麻酔・全身管理科教授。2008年日本歯科大学生命歯学部歯科麻酔学講座教授、日本歯科大学生命歯学部長に就任。2013年大学退職後、現職を務める。

21世紀が四半世紀を迎える2025年を契機に世界がこの課題への危機感を共有し、解決の糸口を発見するために、大阪において社会からの知を集め、人類社会に貢献することを基本理念としました」だったんですね。これは2016年6月に作成されています。実際コロナ禍という、人類の存在を脅かす重大な危機が来たわけですよ。基本理念は、「人類の健康長寿への挑戦」がテーマ案だった。そして、テーマを実現するための視点は、「健康に貢献する第四次産業革命」でした。最終的に「いのち輝く未来社会のデザイン」という言葉で穏やかにされましたが、目的は「健康寿命の延伸」なんですよ。つまりこの万博は、健康寿命の延伸に、多くの分野から様々なイノベーションが示されると思います。そこに歯科も便乗しない手はないということで、これが2025年にちょうどぶつかったというか、そういう気運ができるということです。このことは記憶にとどめておいて、学術大会の連携と協力の中に打ち立てていただきたいと思います。

松野 2025年の大阪・関西万博は、第25回学術大会の共創パートナーという形で進んでいるわけですね。歯科の役割というのがどんどん打ち出せる、ちょうどいいタイミングなのですね。



5 学術大会に行きたくなる企画とは

松野 住友会長からは3万人という最低限の目標人数を出していただきました。そのためには、やはり歯科医師会の先生方にこの学術大会を認識というか理解していただくことが重要になってくると思います。今回、西郷先生が三役の中に入れているということで、47都道府県の歯科医師会の先生方が一堂に会して、ポスター発表するようなプログラムを組んで優秀発表賞を授与するとか具体的な企画などはあるのでしょうか。

西郷 現在はプログラム作成を委員会の先生方にお願いしています。それが出そろってからまた別途、歯科医師会単位のプロプログラムもご提案したいと考えておりました。ただ、全国の歯科医師会の会員の先生が一堂に会するということは無理な話で、集まれる最小単位が各ブロックの歯科医師会なんですよ。7ブロックあるわけで。前回の関東地区歯科医師会役員連絡協議会のときは担当を務めさせていただいておりました私が音頭をとりまして、役員連絡協議会の中で、第24回学術大会を盛り上げる旨の協力をお願いして、いろいろプログラムを、ほぼシンポジウムでしたけれども提案させていただきました。

どうやって会員の先生方に足を運んでいただくかという話がありましたが、やはり会員の先生方が自ら進んで足を運びたくなるような学会に仕上げなければいけないと思っています。魅力があれば必ずや多くの方に参加していただけたと思います。ですが、それをどうやって周知するかが問題だと思います。「歯科イノベーションによる新時代の創生」はすばらしいテーマですが、これをみただけではなかなか理解できない方も多いと思います。

イノベーションロードマップは歯科の行く末をどのように導いていってくれるのかを理解しやすいロードマップだと思います。ただし、これをどうやって会員の先生方に周知するのかという、そこがまた問題です。私がもしできるとすれば、例えばさっきお話しした各ブロックの歯科医師会、役員連絡協議会もございますし、都道府県歯科医師会でも学術大会等がございますので、そういう

ところでロードマップを説明できるような機会があればと考えております。

松野 県単位あるいは地区単位の歯科医師会の学術大会に川口先生、三役あるいは準備委員会の先生方が行ってアピールすることも必要になってくるかもしれませんね。そういうことを一緒にやって共創していくという……。

高橋 「これを聞きたいな」って思えるようなプログラムがあれば絶対行くと思うんですね。そこで、会員の先生方々には、例えば各地区の歯科医師会の活動などに参加していただいて、こういうテーマでセッション・シンポジウムをやってくれというご意見を積極的に挙げていただけたらと思います。

今、マイナ保険証の利活用に対する問題がどんどん出ているわけですよ。それをどう解決すべきか、これからどうなるのか。皆さん専門分野があるわけで、例えばインプラントだったらどういうクレームが起こって、どういう対応をしているのか、インプラントをやっている人は絶対聞きたいですよ。

今、材料がどんどん変わってきて、PEEK材料が保険に入りました。PEEK材料というのは接着が非常に難しいわけですよ。どういうところにどうやって使うんだとか。それから、今まではACRON®のようなPMMAだったけど、プロインパクト®のような新しい新機軸・新材料の製品が出てきています。口腔内スキャナー（IOS）がこれから必ず保険に入ると思いますよ。こういう新器材・新材料が保険に入る可能性があるときに、「どんな材料なのかをあらかじめ知っておいて」「将来こうなるんだから今から勉強しておいて」というアピールを歯科医師会・歯科医学会側からするだけではなく、逆に会員から「〇〇の話が聞きたいから、〇〇のテーマでセッションをしてくれ」と具体的な意見を挙げてほしい。これは絶対いっぱい出てくると思いますよ。どういうことを知りたいのか、どういう講演をやってほしいのかというのを、参加する会員からアプローチしてもらって、それからプログラムを組み立てるのも一つの手だと思

ます。そうしたら、興味ある人は絶対来ますから。

今、自見英子さんという小児科のお医者さんが万博担当大臣です。だから、住友会長と自見英子さんの対談をやるのかな。

住友 怖いですね（笑）。

高橋 それをしたら絶対マスコミに流れますから。歯科医学会が万博に関与しているなんて、一般国民にはあまり知られていない。そこでNHKに放送してもらうんです。住友会長と自見英子さんが握手している姿がテレビに出るわけですよ。そういうのも、私は会員を集めるための一つの手かなと思います。

松野 マスコミをうまく利用するのも一つの手ですね。それから、歯科医師会の会員の先生からリクエストやアイデアをいただくというのもいい案だと思いました。川口先生、今、いろいろアイデアが出てきましたが、現在の企画案などはいかがでしょうか。

川口 現在、準備委員会の約30名の先生方に企画案の作成をお願いしているところです。委員としては日本歯科医師会、都道府県歯科医師会、また、歯科医学会の分科会の先生方がいらっしゃいますので、いろいろなアイデアが出てくると思います。

また、テーブルクリニックのような会場で体験できるプログラムはとても人気がありますので、そのような企画も取り入れていこうと検討しているところです。やはり「学ぶ」という目的で来た人の期待に応じたものを提案していかないとならないと思います。

今回も学術大会の記念誌の作成を考えております。内容は広報出版部会部会長の松野先生と今後詰めていく予定です。現在、歯科医学会の分科会は46あります。歯の数は32本しかないのにそれ以上の数の分科会があって、我々もすべての学会の詳細な内容を十分理解できていないところがあります。そこで、歯科医学会の各分科会の2025年時点での研究内容とか、最新情報をまとめた冊子を作ろうと考えております。

日歯広報の紙面には、毎回各都道府県の活動紹介記事が2～3県ずつ掲載されています。第25回学術大会は、歯科医師会と歯科医学会を合わせたオールデンタルでの開催なので、記念誌では47都道府県歯科医師会、46分科会の2025年時点での活動や研究の情報などをまとめた記念誌を作成し



25th JADS
YOKOHAMA 2025

たかはし ひでと
高橋 英登
日本歯科医師会 会長

1977年日本歯科大学歯学部を卒業後、1979年東京都杉並区に井荻歯科医院開設。2007年東京都杉並区歯科医師会会長就任。2009年日本歯科医師連盟常任理事。2010年日本接着歯学会副会長。2011年杉並区歯科保健医療センターセンター長。2013年東京都歯科医師連盟会長を経て、2015年日本歯科医師連盟会長に就任。2022年鶴見大学歯学部臨床教授、松本歯科大学歯学部客員教授（～現在）。2023年6月から現職。おもな著書に「よみがえれ！歯科医院 意識改革・納得診療・経営転換」（医歯薬出版株式会社、2009年）、「「ずっと元気」をかなえる 歯科患者学」（共著、クインテッセンス出版、2021年）、「日本歯科評論」別冊 保険診療と歯科修復（共著、ヒョーロンパブリッシャーズ、2022年）などがある。

たいと考えています。自分が所属する都道府県歯科医師会や分科会のことはわかっているけど、意外と他の都道府県、他の分科会のことは知らなかったりするんで、歯科界全体の状況を把握するうえでも役立つかなと考えております。

松野 川口先生ありがとうございました。

川口先生には日本歯科医師会雑誌の76巻4号（2023年7月発行）の「内の目 外の目」というコーナーに、「第25回学術大会に向けて」という2ページの記事をご執筆いただきました。その中に、連携を強化したプログラムの提供ということで、縦割りの分科会が横になってつながる連携プログラムやポスターによる研究発表（公募）も提案されております。

先ほども話しましたが47都道府県の歯科医師会から1題ずつポスターを出していただいて、コンペティション形式で表彰すれば今後の研究活動にもつながるのかなと。

高橋 会場に投票箱を置いておいて投票してもらおうとかね。

松野 そうですね、そういうのもありかなと思います。

分科会の理事長が投票するのも地区歯科医師会の先生方と一体になって大会を盛り上げていける




さいごう
西郷

いわお
巖

**第25回日本歯科医学会学術大会
事務局長**

1984年東北大学歯学部卒業。1991年保土ヶ谷駅ビル歯科を開業し、1998年医療法人社団星陵会設立。2007年保土ヶ谷区歯科医師会専務理事、2013年同副会長、2015年神奈川県歯科医師会常務理事、2019年同専務理事を歴任。2019年に第24回日本歯科医学会学術大会準備委員、2023年には第25回日本歯科医学会学術大会準備委員会事務局長に就任した。2019年からのコロナ禍において、神奈川県歯科医師会内に設置された「新型コロナウイルス感染症対応室」の室長として、県民及び歯科医療従事者向けに「歯科医療機関における新型コロナウイルス感染症への対応指針（ver1～ver10）」の発出を主導し、行政と連携してその対応にあたった。

のでいいのかなと思います。

また、川口先生は今回の学術大会は海外へ発信されるということをお話しされていますね。今までのように海外から演者をお呼びしてというのではなく、日本から海外へ情報発信するという企画ですが、これについて少しお話しいただけますか。

川口 これまでは海外の著名な講師を日本にお招きして、英語で講演をしていただいております。もちろん、同時通訳が付く場合もありました。しかし、歯学研究にしろ、歯科医療技術にしろ、日本発の素晴らしいものはたくさんあると思います。特にアジア諸国などでは日本に留学した後、母国で活躍している歯科医師が多数います。そのような視点からみると、日本の歯科材料とか歯科医療機器、歯学研究や歯学教育などは海外から非常に高く評価されています。今回はオンライン配信という手段がありますので、英語で日本の最先端の歯科情報を発信し、それを海外の歯科医師に視聴してもらうことを考えています。また、大学関係者が講演する場合には、海外の歯科学学生の聴講も可能になるようなウェビナー形式を考えています。これは初めての試みになりますが、JADR（国際歯科研究学会（IADR）の日本部会）等の先生方とも協力した形で、日本から歯科の情報発信をしたいと考えています。これは講演形式で、10演題くらいを予定しています。

これまでは、海外の歯科医師が実際に歯科医学会の学術大会に参加する機会は非常に少なかったのですが、今後は多くの海外の先生方に日本に来ていただきたいと考えています。それには日本語による発表だけでは不可能です。将来を見据えて、まずは第一段階として、日本における歯科医学・歯科医療を英語で発信する機会を本学術大会で設けてみたいと企画しました。今後、国際化の進展に合わせて、本学術大会が日本だけではなく、国際的な歯科の学術大会に発展していくことを期待したいと思います。

松野 これまでにないような新しい企画もどんどん立ち上がっているということですね。

そして、準備委員長の大川先生には第25回学術大会に向けて並々ならぬご尽力を賜ることになるかと思いますが、3万人の目標についてはいかがでしょうか。

大川 3万人集めるということに関して、いろいろ考えてみました。

まずは、デンタルショーです。デンタルショーには約3万人集まっていることがわかっています。つまり、学術大会には参加しないでデンタルショーだけ見て帰るというパターンがありそうということがわかりました。学会に参加しようという誘ってもなかなかハードルが高くて、その一步が踏み出せない。一方、デンタルショーでの新しい機器や材料に関しては、開業されている先生方は、やはりかなり興味を持たれているようです。そこで、「デンタルショーに参加したけれど、気がついたら学会にも参加していた」という形をとりたいと考えました。そこから徐々に引き込みたいということで、デンタルショーで開催している企業セミナー（名称に関しては「臨床セミナー」など、現在検討中）やテーブルクリニックなどを学会場で実施できないか考えてみました。2023年9月29日から10月1日に開催されたワールドデンタルショー2023に行ってみたところ、参加者が非常に多く（累計入場者数：54,494名）、会場はとても活気に溢れていました。この活気を何とか学会場のほうにもってこられないかと思いましたが、宣伝販売に関しては公益社団法人の活動として支障が生じることになります。ただ、パンフレット等を多数配付するなど企業としてかなりPRしていると思われるランチョンセミナーは問題ないようです。ワールドデンタルショー2023に出展している企業数社の担

当者に、もし可能であれば学術プログラム（臨床セミナー、テーブルクリニック等）として第25回学術大会に参画していただくのはいかがでしょうかと伺ったところ、とても強い関心を示されました。企業側も人集めにかなり苦勞されていて、企業セミナーの抄録が日本歯科医師会雑誌に載せてもらえることになれば非常に助かるとの回答でした。企業が開催する臨床セミナーやテーブルクリニック等が第25回学術大会の学術プログラムとなり、本学術プログラムに参加するとなれば、当然のことながら参加登録の手続をとらなければいけません。そこで、デンタルショーの会場にも参加登録窓口を作ってもらえたらどうかと考えています。

それから、日歯生涯研修等における学術大会参加の単位認定についてです。現地参加なら2単位で、オンライン参加のみならば1単位というようにすることができないか。日本歯科医学会の分科会においても、認定医であれば学術大会参加の単位にならないか。専門医はちょっと難しいかもしれませんが、認定医であれば単位認定は可能ではないか。第25回学術大会への参加が認定医の申請や更新における単位として認定可能なのか、について議論してほしいというのを分科会に強く働きかけたいと考えています。

そして、各分科会と都道府県歯科医師会との連携です。例えば、各分科会が都道府県歯科医師会と連携して生涯学習研修セミナーを実施する、といったコラボです。具体的には、某歯科医師会が希望する生涯学習研修セミナーのテーマを当該分科会へ申請してもらい、旅費等は分科会側が負担して無償で講師を派遣し、申請が提出された当該歯科医師会において生涯学習研修セミナーを実施する、といった内容です。実はこのようなコラボはすでに日本歯科医学会と日本歯科医師会との連携を通じて、日本補綴歯科学会と都道府県歯科医師会との間で行われています。このような連携が各分科会と都道府県歯科医師会との間で進展していくことを期待しています。

また、2021年9月1日、日本補綴歯科学会と日本磁気歯科学会が共同で提出した新規の歯科医療技術「磁性アタッチメントを用いた義歯の支台装置」が保険収載されました。これを機に、日本磁気歯科学会には認定医の認定要件を、経験症例数に重点を置いた内容に改正するなど、認定医制度



おおかわ しゅうじ
大川 周治

**第25回日本歯科医学会学術大会
準備委員長**



1980年広島大学歯学部卒業。1981年広島大学歯学部歯科補綴学第一講座助手、1987年同講座講師。1988年、1991年エアランゲン大学（ドイツ連邦共和国）客員研究員。1993年国家公務員共済組合連合会呉共済病院 歯科医長。2001年明海大学歯学部 助教授（歯科補綴学講座）、2002年同 教授（歯科補綴学講座）。2005年明海大学歯学部 教授（機能保存回復学講座歯科補綴学分野）、2016年明海大学歯学部付属明海大学病院 病院長を歴任。2021年明海大学臨床教授に就任（現職）。おもな著書に、「無歯顎補綴治療学第2～4版」（編著者として、医歯薬出版）、「日本歯科医学会学術用語集 第2版」（学術用語委員会副委員長として、医歯薬出版）、「エキスパートたちが教えるパーシャルデンチャーのPitfallと回避策35」（編著者として、日本歯科評論 別冊2016）がある。

の見直しについて議論してほしいと提案しています。つまり、各分科会のさらなる活性化も視野に、分科会側から歯科医師会の先生方へ積極的にアプローチしていくような、そんな努力をしてもらえないか、という働きかけを考えています。

デンタルショーとの学術的連携、第25回学術大会参加における研修単位認定の提案、各分科会と都道府県歯科医師会との連携強化の提案等を何とか起爆剤にして、参加登録者数3万人超を達成できないかと考えているところです。

松野 大川先生、すでに着々と準備委員長の活動を進められていたのですね。「デンタルショーに参加して気がついたら学会にも参加していた」という作戦、ナイスアイデアですね。どうぞよろしくお願いいたします。

一方で、人材育成という視点で第25回学術大会を考えると、未来の歯科を担う歯科学士の参加の促しが必要になってくるかと思います。29歯科大学の学生参加を促すような、隠し球というか、仕掛けみたいな企画はございますか。

川口 実は、日本歯科医学教育学会理事長の秋山仁志先生に登録部会長として入っていただきました。歯科学士だけではなく、歯科技工士、歯科衛生士の養成機関の学生さんたち、またそのほか



の歯科医療関係者にもぜひ参加してもらいたいと考えています。また、その学生さん・歯科医療関係者たちが参加したいと思えるようなプログラムも、これから考えていきたいと思っています。

大川 実は、コ・デンタルスタッフの働き方改革として、厚生労働科学研究事業である「歯科技工士の業務内容の見直しに向けた調査研究」において、2020、2021年度の研究代表者を務めさせていただきました。厚労省の担当の方に、本厚労科研の進捗状況について報告してもらいたいと考えています。このテーマなら、コ・デンタルスタッフの方々にもかなりの興味を持ってもらえるのではと考えています。

川口 このほかにも何かお知恵がありましたら、ご教示のほどよろしく願いいたします。

松野 29歯学部すべてにポスター発表していただき、それを参加学生が投票するという、学生たちのコンペティション企画も面白いかもしれませんね。

川口 ありがとうございます。ポスター発表に関しては、今回は賞を設けようと考えています。学部学生部門とか、分科会部門とか、都道府県歯科医師会部門とか、そういう形での取組です。ただ、けんかにならないかが心配です（笑）。

松野 そこは、高橋会長にうまくまとめていただいて（笑）。

川口 きっとわくわくするものになると思います。アイデアありがとうございます。

松野 みんなが足を運ぶわくわくする第25回学術大会になるように、川口会頭を中心に準備していただきたいと思いますし、この歯科医学会誌でも大々的にアピールしていきます。また、私は日本歯科医師会雑誌の編集にも関わっておりますので、シンボルマークを毎号の表紙に載せようかなと……高橋会長、よろしいですか。

高橋 ぜひ進めてください。

松野 高橋会長、ご承諾ありがとうございます。

さて、あっという間に予定終了時間が近づいて参りました。

住友会長から一言お願いできるでしょうか。

住友 3万人という目標があると、この企画にこれだけの人が集められるという計算ができるんですね。ただやみくもに3万人ではなくて、その根拠を考えていく必要があるんです。3万人と目標だけ言っている人は人は集まらない。だから、そこに仕掛けが入る。第40巻の座談会のテーマでしたね。

松野 3万人が集まる仕掛けを、皆さんでつくって参りましょう。

では、ここでオブザーバーの大久保先生からこれまでの座談会の内容を振り返っていただき、コメントとおまとめをお願いいたします。

大久保 今回の座談会でも歯科の転換期を実感させる非常に有意義なお話を聞くことができました。

住友会長からはイノベーションロードマップ作成の経緯と方向性を教えていただきましたが、特に第25回学術大会ではちょうど1期の区切りということで、進捗状況のアンケートも予定されており、その状況をご報告していただけるとのことでした。とても楽しみにしております。

また、高橋会長からは、2040年を見据えた「歯科ビジョン」と「イノベーションロードマップ」を重ね合わせていくとより面白くなるのではないかというご示唆をいただきました。歯の再生とか、口述記録カルテとか、あるいはこれから残存歯が多くなって高齢化がさらに進んだときのトゥースウェア材料の開発、そういった具体的なご提案もいただきました。何よりも口腔機能管理、これは「健康寿命の延伸」に最も貢献する私たち歯科の役割ですので、第25回学術大会でぜひ明確に打ち出していただけるのではないかと思います。

また、川口先生からは、2025年時点でのロードマップを見直し、新たにアップデートしていくというとても興味深いお話がありました。さらに、大会のシンボルマークは赤い舌を出した図案にされたということで、口腔機能管理の重要性の意味を込められた、川口先生らしい優しいデザインだなと感じました。

大川先生からは、三種の神器をもとに第25回学術大会のメインテーマを「歯科イノベーションによる新時代の創生」に決定されたということで、

企業、専門認定分科会、コ・デンタルスタッフ、この3者の連携を大会でしっかり打ち出していく企画を今ご準備いただいていると聞いて、本当に楽しみにしているところです。

さらに住友会長からは、学術大会は3万人以上の参加者が最低限の目標だのご提示いただきました。西郷先生のご苦勞が偲ばれますが、たくさんの増員案を検討してくださっていますので、会員が参加したくなるような魅力ある学術大会になるのではないのでしょうか。また、魅力ある学術大会だということを会員の先生方に周知するということも必要なのだろうなと思いました。そして、デンタルショーにはたくさんの方々が参加されますので、そのまま学会に誘導できたらいいですね。企業セミナーやランチョンセミナー、あるいはテーブルクリニック、ハンズオン等の実施に加えて、一つ面白いなと思ったのは、各県の歯科医師会がポスターを1題ずつ出してポスターコンペティションを行うのも盛り上がるのではないかなということです。また、学術大会の記念誌を分科会あるいは歯科医師会の成果のまとめとしてつくってくださるということで、これも本当に楽しみだなと思いました。いずれにしましても、会員の声を吸い上げた第25回学術大会が開催できれば、みな

さんきっと大きな興味を持ってくださるはずで、参加者は3万人以上集まるのではないかなと期待しています。

最後に、高橋会長がおっしゃっていましたが、「歯科医師はまず学会に参加する、学会を身近なものにする」ということが重要で、それがそのまま「国民のためになる、それが歯科医師の責務なんだ、全歯科医師が自覚する必要がある」という学会参加の大切な意義を今日この座談会で強く感じた次第でございます。

松野 大久保先生には毎回、的確なコメントとおまとめをいただき、力不足の座長を支えていただいております。大久保先生、今回もどうもありがとうございました。

健康長寿社会の実現に向け、第25回学術大会では歯科界からの力強いメッセージを発信しなくてはなりません。

そこで、先生方には第25回日本歯科医学会学術大会に向けて『「歯科イノベーションによる新時代の創生」について語る』と題した座談会にお集まりいただきました。ご多忙の中、貴重なお時間をいただきどうもありがとうございました。

これで、本座談会を閉会とさせていただきます。

学術研究

『令和5年度プロジェクト研究』

解説／日本歯科医学会常任理事 末瀬一彦

令和5年度プロジェクト研究公募テーマは、テーマA「ESGを考慮したエシカルデンティストリー（Ethical dentistry）を目指して」、テーマB「アフターコロナのデンタルフィロソフィの変革と再定義」である。テーマAはESG（環境（Environment）、社会（Social）、ガバナンス（Governance））を踏まえたエシカルデンティストリーを念頭に、新しい材料、検査法、ガイドライン、DX等で継続的研究の足場となるもの、またSDGsとして提案できる研究を公募する。一方、テーマBは、アフターコロナのさまざまな事象について検証するとともに、その対応等、次の新たな感染症に備える研究を公募する。学会執行部と学術研究委員会で協議し、7題の応募があったテーマAからは、「バイオマス資源とデジタル技術を活用したエコフレンドリーな補綴歯科治療の実現に向けた研究」（申請学会：日本補綴歯科学会、研究代表者：馬場一美 昭和大学歯科補綴学講座）および「歯周病専門医による臨床データエビデンスに基づいたエシカルペリオドンティクス」（申請学会：日本歯周病学会、研究代表者：高柴正悟 岡山大学学術研究院医歯薬学域）の2題、2題の応募があったテーマBからは、「口腔に症状を呈する各種ウイルス感染症のチェアサイド迅速診断技術の確立とその院内感染対策への応用」（申請学会：口腔診断学会、口腔内科学会 研究代表者：里村一人 鶴見大学口腔内科学講座）および「歯科医師による新型コロナ感染症のワクチン接種に関する実態調査」（申請学会：日本歯科麻酔学会、研究代表者：宮脇卓也 岡山大学学術研究院医歯薬学域）の計4題が採択された。

現在遂行中の令和5年度プロジェクト研究課題

■公募テーマA

「ESGを考慮したエシカルデンティストリー（Ethical dentistry）を目指して」

ESGとは、環境（Environment）、社会（Social）、ガバナンス（Governance）の頭文字を取った言葉で、投資判断の新たな観点とされている。

一方、エシカル（ethical）とは、「倫理的な」と訳されるが、昨今、この用語は、「地球環境、人、社会に対して配慮された」というニュアンスで使われている。

歯科材料の日進月歩は、結果的に患者さんの満足度を上げることが必要である。また、我々、歯科医師は、口腔の健康状態を、諸検査等も用いて、完全かつ正確に診断し、問題点を明確化にして、最善の治療で解決しなければならない。

さらには、患者さんの定期的な通院で、患者さんの口腔の健康状態の悪化を防ぎつつも、過剰な検査・治療を回避しなければならない。そして、使用する材料・検査・治療法で、患者さんに有害な影響を与えてはならない。

また、昨今のトレンドとも言うべきSDGsにおいては、歯科領域での取り組みが少ないことから、これらへの取り組みも緊喫の課題として捉えるべきである。

本プロジェクトでは、ESGを踏まえたエシカルデンティストリーを念頭に、新しい材料、検査法、ガイドライン、DX等で継続的研究の足場となるもの、また、SDGsとして提案できる研究を公募する。

■公募テーマB

「アフターコロナのデンタルフィロソフィの変革と再定義」

昨今、企業フィロソフィという言葉を目にする。これは、企業理念として、企業の在り方や価値観などを明文化したものである。一般的には、創業者の考えをもとに提言され、企業の哲学やDNAとして不変的に受け継がれるものを指す。

一方、この3年間、我々の業界は、COVID-19のまん延で、診療環境整備、予防対策等を暗中模索してきた。

COVID-19の5類移行となった今、歯科界もこの3年間の事象を歯科的に検証する必要がある。また、国民のマスク長時間着用による口腔環境の変化、ウイルスの影響、表情変化等、検証すべき事項とともに、今後の、歯科としての対応が多くあると思われる。

本プロジェクトでは、アフターコロナのさまざまな事象について検証するとともに、その対応等、次の新たな感染症に備える研究を公募する。

学術研究

令和3年度採択プロジェクト研究

生涯研修コード 23 02

A. 歯科界のニューノーマル

(各種感染症対策, 高齢者の歯科治療体制の確立)

微量唾液を検体としたSARS-CoV-2 迅速スクリーニング検査法の確立と mobile 型 qPCR 装置 (PCR1100) の有用性の検討

戸田 (徳山) 麗子¹⁾, 寺田知加¹⁾, 竹部祐生亮¹⁾, 堀内俊克²⁾,
小川 隆³⁾, 喜久田利弘⁴⁾, 里村一人^{1,*}

抄 録 世界中で猛威を振るった新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は, 世界に定着し, 常時一定数の感染者が存在する感染症となった。現在, 問題となるのは感染者数の爆発的な再増加と重症化が医療を圧迫することである。SARS-CoV-2 の確実かつ迅速な診断と適切な隔離が重要であるが, 現行のqPCR 検査では人材不足や機器の不足, 検査に長時間を要することなどから, 十分な数の検査を行えない。抗原検査等が代替手段として行われているが, 感度, 特異度ともに qPCR 検査の方が優れている。そこでわれわれは, モバイル型 qPCR 装置を用いて, 微量唾液を検体とした SARS-CoV-2 迅速診断法の確立を目指した。医療従事者が容易に扱うことができるか否か, 短時間で検査の完遂が可能で, かつ洗口液 (微量唾液) を検体とできるか否か, 現行 qPCR 検査にて陽性と診断された COVID-19 患者を対象に迅速診断が可能か否かを検討した。その結果, 微量唾液を検体として短時間で SARS-CoV-2 の検出が可能であることが確かめられた。これらの結果から, 本法は, 何ら前処理を行っていない微量の洗口液を検体とした SARS-CoV-2 の迅速な検出を可能とし得る診断法として有用であることがわかった。本診断法であれば, 分子生物学の知識を有していない者でも確実に qPCR を実施でき, 歯科, 眼科, 耳鼻咽喉科等の小規模診療所にも導入可能であると考えられることから, 院内感染の効果的防止や医療関係者や医療現場の安全確保, さらに災害時等における大規模避難施設でのスクリーニング等にも応用が期待できると考えられた。

キーワード 唾液, SARS-CoV-2, 迅速qPCR検査, POCT (ポイントオブケアテスト)

1. はじめに

世界中で猛威を振るった新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) は, 世界に定着し, 常時一定数の感染者が存在する感染症となった。現在, 問題となるのは感染者数の爆発的な再増加と重症化が医療を圧迫することである。SARS-CoV-2 の確実かつ迅速な診断と適切な隔離が重要であるが, その前提として定量的 PCR (qPCR) による確定診断が, 現在最も信頼性が高く, 広く使用されている方法である。ただし, qPCR 検査は熟練した

臨床検査技師等が実施する必要があるため, その人材確保が困難で, また qPCR 検査機器の確保も問題となっている。さらに, ターンアラウンドタイムが長いことも問題であり, これらの複合要因により, 現在十分な qPCR 検査が行えていないのが現状である。さらに, サンプル収集に必要な鼻咽頭スワブなどの特殊な技術を実行するには, 十分な数の熟練した人材が必要であることに加え, サンプル採取の際の感染リスクも伴う。したがって, COVID-19 を効果的かつ安全, 確実に封じ込めるためには, 簡便な qPCR 検査法の開発と, 感染リスクの低いサンプル採取法の確立が望まれる。

受付: 2023年10月13日

(*: 研究代表者)

¹⁾ 鶴見大学歯学部 口腔内科学講座²⁾ 済生会 横浜市東部病院³⁾ 東京医科大学八王子医療センター 歯科口腔外科⁴⁾ 新百合ヶ丘総合病院 歯科口腔外科

最近, 小型のモバイル型 qPCR デバイス (PCR1100, 日本板硝子株式会社, 東京, 日本) が開発された。PCR1100 は, 本体サイズが H200 × W100 × D50 mm, 重さが約 560g と小型で軽量であり, 検査終了まで十数分と大幅な時間短縮を可能にするものである。PCR1100 は現在, サルモネラ菌, カンピロバクター菌, 大腸菌 O-157 の食品衛生検査, レジオネラ菌の環境細菌検査等で使用されている。そこでわれわれは, このデバイスを応用して SARS-CoV-2 の検出が可能か否か, さらに少量唾液をサンプルとすることが可能か否かについて検討し発表してきた^{1, 2)} ので, その概要を報告する。

2. 研究方法および結果

1) qPCR の設定

PCR1100 を用いた qPCR には, 試薬として THUNDERBIRD™ Probe One-Step qRT-PCR

Kit (TOYOBO, 大阪, 日本) を用い, ここに CDC より公開されている SARS-CoV-2 検出のためのプライマー及びプローブを混和したプレミックスを使用した。

2) 本装置の使用における簡便性の確認

PCR1100 本体の概要と画面を図 1 に示す。本装置を使った qPCR 検査が使用者を選ばない, すなわち誰にでも簡単に扱えることを確認するために, 分子細胞生物学的知識・経験のない看護師・歯科衛生士 10 名を対象に以下の検討を行った (表 1)。装置およびピペットの簡単な取り扱い説明ののち, 前述したプレミックスに RNase P 合成 RNA を混和させた反応液を流路チップに注入, 装置を操作して実際に qPCR を実施した。その結果, 図 2 に示すように 10 名中 8 名で初回から問題なく実施でき, 2 名も簡単なオンサイトトレーニングの後に正常に実施することができた。Ct 値も平均 27.56

表 1 被験者の職種及び年齢

被験者	職 種	年 齢
1	歯科衛生士	43
2	歯科衛生士	26
3	歯科衛生士	29
4	看護師	47
5	歯科衛生士	36
6	看護師	53
7	歯科衛生士	37
8	看護師	45
9	看護師	49
10	看護師	44

参考文献¹⁾ の改変

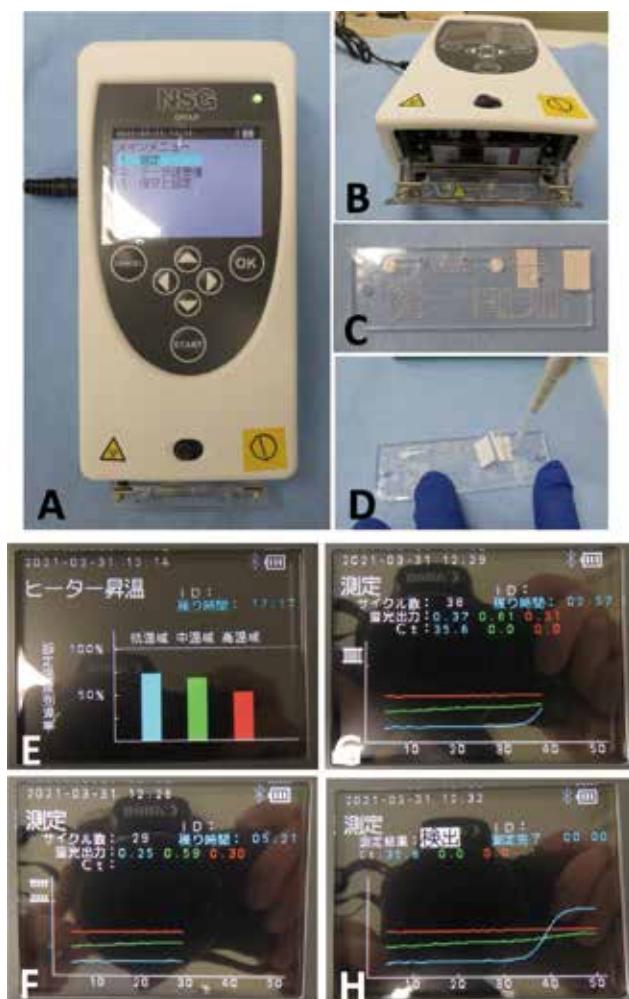


図 1 qPCR 装置 (PCR1100)

A: PCR1100 本体, B: 流路チップ挿入部, C: 流路チップ,
D: 孔に注入, E: 昇温中, F: 進行中, G: 検出時, H: 終了時

参考文献¹⁾ の改変

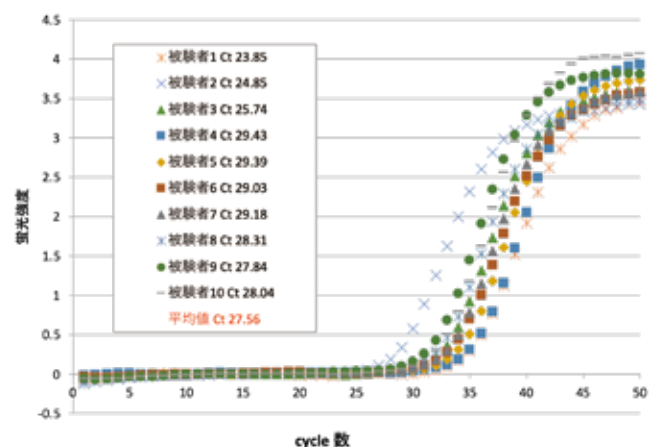


図 2 分子細胞生物学的知識・経験を持たない被験者による qPCR 実施の結果

参考文献¹⁾ の改変

と安定しており、本装置は分子生物学的知識・経験を持たない者でも、簡単な説明とトレーニングを受ければ問題なく使用できることが確認された。

3) 微量唾液の検体としての有用性

次に微量唾液を検体とできるか否かについて検討した。これ以降の検討では、サンプル量は $3\mu\text{L}$ とし、 $20\mu\text{L}$ のプレミックスに混和後、そこから $16.5\mu\text{L}$ を流路チップに注入することとした。唾液原液を用いた場合、流路チップ内の検体の移動に支障をきたし正常に動作しなかった。これは唾液の粘性が高いためと考えられた。2 倍希釈した唾液に RNase P 合成 RNA を混入した検体では qPCR は正常に進行した。また特定の被験者唾液による結果ではないことを証明するため、5 名分の唾液を混和した代表唾液を用いて同様に実施したところ、qPCR は正常に進行した。この結果、本装置は何ら前処理を行わない唾液を検体として qPCR を行えることが確認された (表 2)。

次に、唾液に RNase P 合成 RNA を混入せず、本来唾液中に存在する微量の内在性 RNase P をターゲットとして qPCR を行った。その結果、2 倍希釈でも 4 倍希釈でも RNase P を検出できることが確認でき、本装置は唾液中に含まれる微量の RNA を検出できることが証明された。ただし、4 倍希釈では Ct 値が 40 を超えたことから、希釈は 2 倍程度が妥当と考えられた (表 3)。

さらに、簡便かつ感染リスクの低い検体採取を可能とすべく、検体として洗口液を用いることが可能か否かについて検討した。その結果、何ら前処理していない洗口液を検体としても、唾液中の

RNase P RNA の検出が可能であった。生理食塩水 2mL 、15 秒程度の洗口が、実施も容易で、かつ安定した結果が得られることも明らかとなった。加えて 2 週間冷凍保存した検体でも検出可能であった (表 4)。

また、検出感度が食事およびブラッシングの影響を受けるか否かについて検討したところ、食事についてはほとんど影響を受けないが、ブラッシングに関しては Ct 値が上昇する傾向があり、検体採取にあたっては直前のブラッシングは避けるべきであることが確認できた (表 5)。

次に、実際の患者で SARS-CoV-2 の検出を目指すにあたり、人工的に合成した SARS-CoV-2 RNA を混和した洗口液で検討した結果、SARS-CoV-2

表 4 洗口液を検体とした結果

検体	検出 or 非検出	Ct 値
10 倍希釈 PBS1ml で 10 秒洗口	検出	37.30
10 倍希釈 PBS2ml で 10 秒洗口	検出	38.30
10 倍希釈 PBS1ml で 15 秒洗口	検出	34.43
10 倍希釈 PBS2ml で 15 秒洗口	検出	33.63
生理食塩水 2ml で 15 秒洗口 (被験者 1)	検出	37.74
生理食塩水 2ml で 15 秒洗口 (被験者 2)	検出	39.03
生理食塩水 2ml で 15 秒洗口 (被験者 3)	検出	35.76
生理食塩水 2ml で 15 秒洗口 (被験者 1) 冷凍保存 2w	検出	35.45
生理食塩水 2ml で 15 秒洗口 (被験者 2) 冷凍保存 2w	検出	37.98
生理食塩水 2ml で 15 秒洗口 (被験者 3) 冷凍保存 2w	検出	35.14

参考文献¹⁾ の改変

表 5 検体採取時の条件の検討結果

検体採取時の条件	洗口液
通常時 (食事・ブラッシング後 3 時間)	37.12
食後 (摂取後軽く洗口し 30 分)	37.54
ブラッシング後 (15 分)	41.15

参考文献¹⁾ の改変

表 2 唾液 (合成 RNA 含む) を検体とした結果

検体	検出 or 非検出	Ct 値
唾液 (原液)	非検出	
唾液 (純水で 2 倍希釈)	検出	23.34
代表唾液 (5 名分, 純水で 2 倍希釈)	検出	28.50

参考文献¹⁾ の改変

表 3 唾液 (合成 RNA を含まない) を検体とした結果

検体	検出 or 非検出	Ct 値
唾液 (PBS で 2 倍希釈)	検出	36.08
唾液 (PBS で 4 倍希釈)	検出	42.34

参考文献¹⁾ の改変

表 6 普遍性の検討結果

検体	RNase P	CDC N1	CDC N2
純水 + 合成 RNA	21.09	18.95	24.74
洗口液 1 + 合成 RNA	38.40	18.96	37.54
洗口液 2 + 合成 RNA	36.99	19.61	26.37
洗口液 3 + 合成 RNA	35.62	19.92	26.87
洗口液 4 + 合成 RNA	39.84	18.68	25.92

参考文献¹⁾ の改変

RNA の検出が可能であることが確認できた（表 6）。

4) COVID-19 患者に対する迅速診断の可能性

実際の COVID-19 患者（入院期間：2021 年 6 月 8 日～7 月 16 日）を対象として、ここまでで確立した方法で迅速診断が可能か否かについて検討した。その結果、表 7 に示すように洗口液を検体として PCR1100 で SARS-CoV-2 RNA を検出することが可能であった。また、検出時間は平均 18 分程度と、現行の qPCR 検査に比較して、圧倒的に短時間で結果を得ることが可能であった（被験者番号 1, 2, 5, 8, 9, 10, 12, 14, 16, 19, 20）。また、症状発現から 10 日目前後までは洗口液を検体として SARS-CoV-2 RNA を検出できたのに対し（被験者番号 9, 12, 14, 16, 19）、それ以上経過すると、検出できない傾向が認められた（被験者番号 4, 6, 8, 11, 13, 20）。この結果はこれまでに報告されている、唾液を検体とした現行の qPCR 検査結果

と矛盾のないもので、洗口液検体でも症状発現から 10 日目ぐらいまでが検出限界となる可能性が示唆された。ただし、症例によっては経過時間が長くても検出できる例もあり（被験者番号 1, 2）、これが果たして症状の程度に由来するのか、個人差に由来するのか、または別の要因があるのかについては、今後症例を重ねて検討する必要があると考えられた。また、陽性とする Ct 値の閾値をいずれに設定するかという課題に関しても、qPCR 検査の目的をスクリーニングとするのか、治療効果判定とするのか、感染力有無の判定とするのか等によって、今後さらに検討を重ねる必要があるものと考えている（被験者番号 1, 9, 19, 20）。

5) 検出感度および特異度の改善

ここまでの検討により、本法を用いて患者洗口液（唾液）を対象に、SARS-CoV-2 の迅速診断が可能であることが確認できた。しかしこの時点では、CDC N1 は検出できたが、N2 はいずれにおい

表 7 COVID-19 患者を対象とした迅速診断結果

Detection of SARS-CoV-2 viral RNA (CDC N1) in COVID-19 patients by PCR1100					
Subjects Age Sex	period from onset of symptom days / detect (Ct value) or not(-)			Symptom (days)	Past history
	1st	2nd	3rd		
1. 38 M	13 / 44.6	20 / (-)		fever(6), malaise, dysgeusia	HT, DM, HL, CCF
2. 90 M	7 / 29.3	14 / 34.5	21 / 38.8	fever(8), breathing difficulty	HT, DM, CKD
3. 56 F	18 / (-)	25 / (-)		fever, respiratory management(7)	n.p.
4. 34 M	11 / (-)			fever(10), dysgeusia	n.p.
5. 34 F	7 / 38.1	14 / (-)		fever(5), breathing difficulty	DM, HT, obesity
6. 47 F	11 / (-)	18 / (-)		fever(11), dysgeusia	CKD, thyroid and parathyroid cancer
7. 67 M	Exclusion				
8. 47 M	3 / 38.4	10 / (-)		fever(5), cough	CKD, HD, DM
9. 76 M	9 / 45.2			fever(7), breathing difficulty	n.p.
10. 44 M	7 / 36.9	14 / (-)		fever(10), breathing difficulty	DM, HT, HL
11. 30 M	10 / (-)			fever(10), breathing difficulty	n.p.
12. 22 M	8 / 35.7	15 / (-)		fever(10), diarrhea	n.p.
13. 57 M	10 / (-)			cough, breathing difficulty	DM
14. 61 M	8 / 34.2			fever(13), dysgeusia	integration disorder syndrome
15. 61 M	25 / (-)			fever(15), breathing difficulty	DM, HT
16. 34 M	11 / 34.1			fever(11), breathing difficulty	DM
17. 61 M	Exclusion				
18. 54 M	Exclusion				
19. 81 M	1 / 40.2	8 / 37.7		fever(1), pneumonia	HT *1
20. 60 F	5 / 40.9	12 / (-)		fever(4), breathing difficulty	CKD, HD

HT: hypertension DM: diabetes mellitus HL: hyperlipemia CCF: chronic cardiac failure CKD: chronic kidney disease

HD: hemodialysis *1: first vaccination 5 days before onset of symptoms

参考文献¹⁾の改変

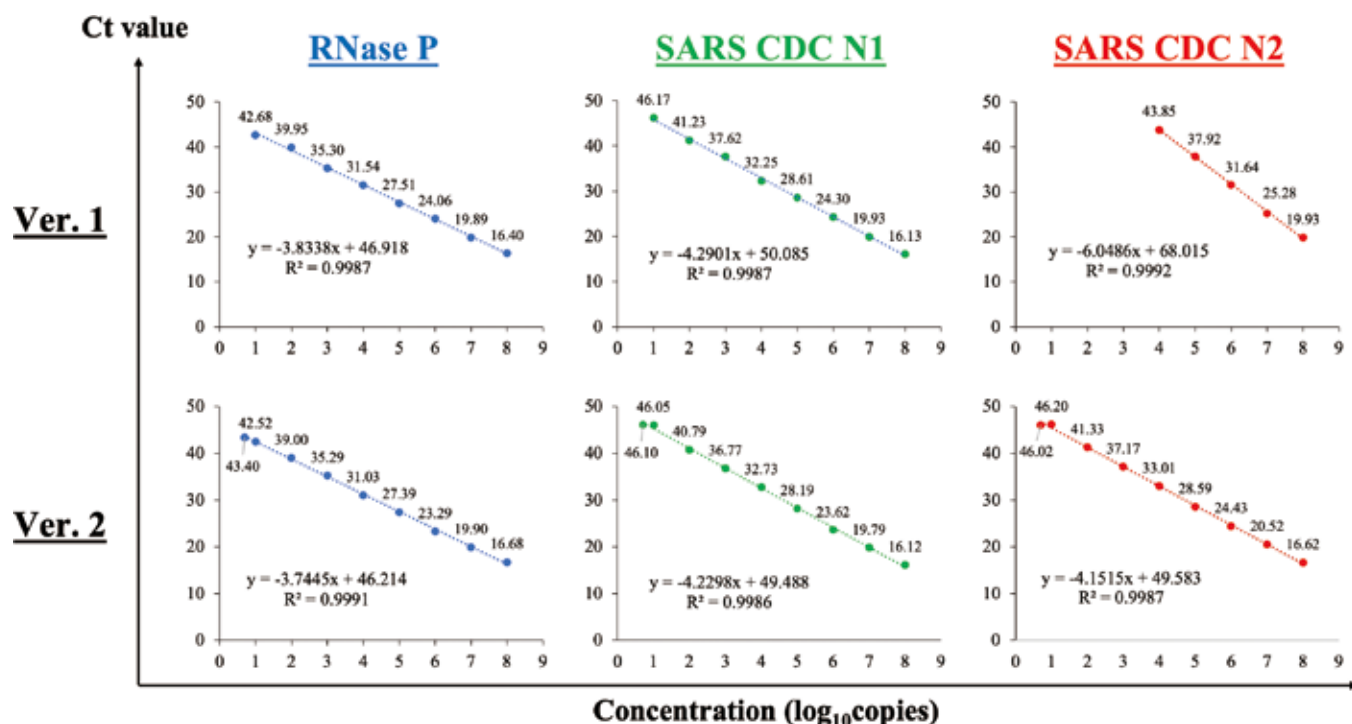


図3 qPCR 改良後の感度および特異度の検討

参考文献²⁾の改変

でも検出できなかった。合成 RNA レベルでは検出可能であったことから、qPCR 試薬の成分調整や、PCR 反応、特にアニーリング温度や時間の調整が必要であると考え、新たな試薬（primer 濃度と $MgCl_2$ 濃度の調整）を作製し（株式会社 iCAT）、さらに PCR 条件を変更（annealing/amplification 温度）し、これまでの試薬および qPCR 条件と検出感度を比較検討すると共に、新たな条件を適応した方法で実際の COVID-19 患者の洗口液を対象に qPCR 検査を実施し、改善された本法が有用であるか否かについて検討した。

まず *in vitro* において、図3に示すように、CDC N2 の特異度が上昇し、RNase P および CDC N1 と同程度に検出できるようになった。

次に、実際に現行の qPCR 検査にて SARS-CoV-2 ウイルス陽性となり COVID-19 の診断を受けた患者を対象に、これまでの旧試薬と PCR 条件および改良した新試薬と PCR 条件を用いて、qPCR 迅速診断を行い、CDC N2 の検出が可能か否かについて検討した。その結果、表8に示すように、CDC N2 の検出が可能となり、また RNase P、CDC N1 も含めて、Ct 値が低い傾向があり、検出感度が若干上昇しているものと考えられた。ただし、この検討期間はオミクロン株の流行期であり、対象とした患者のうち、症状発現から3日以上経過すると、CDC N2 のみならず N1 も検出できない症例が

表8 COVID-19 患者を対象とした新旧の診断法の結果の比較

Age/Sex	旧試薬			新試薬		
	ver. 1 Ct value RNase P	CDC N1	CDC N2	ver. 2 Ct value RNase P	CDC N1	CDC N2
1. 90/M	35.3	39.0	(-)	33.3	37.4	43.2
2. 56/F	37.8	37.0	(-)	34.1	33.9	46.3
3. 50/M	31.1	45.5	(-)	29.7	39.9	46.1
4. 25/F	36.0	33.0	(-)	35.0	32.0	34.0
5. 70/M	33.5	30.0	(-)	31.3	28.7	38.3
6. 90/M	32.0	35.2	(-)	30.3	31.4	35.6

検出感度の上昇

参考文献²⁾の改変

見られるようになった。これは旧試薬と方法による検討期間にはデルタ株流行期で、症状発現から10日前後まではいずれの症例でも検出可能であったことから、変異株によっては唾液中へのウイルス排出量、排出期間に差があるのではないかと考えられた。

症例6における実際の検査画面を図4に示す。本法では、測定後 PCR1100 画面に右図のような表示がなされる。PCR 反応は50 cyclesまで設定され、約18分で完了する。今回は RNase P：青、CDC N1：緑、CDC N2：赤で表示されている。ヒート

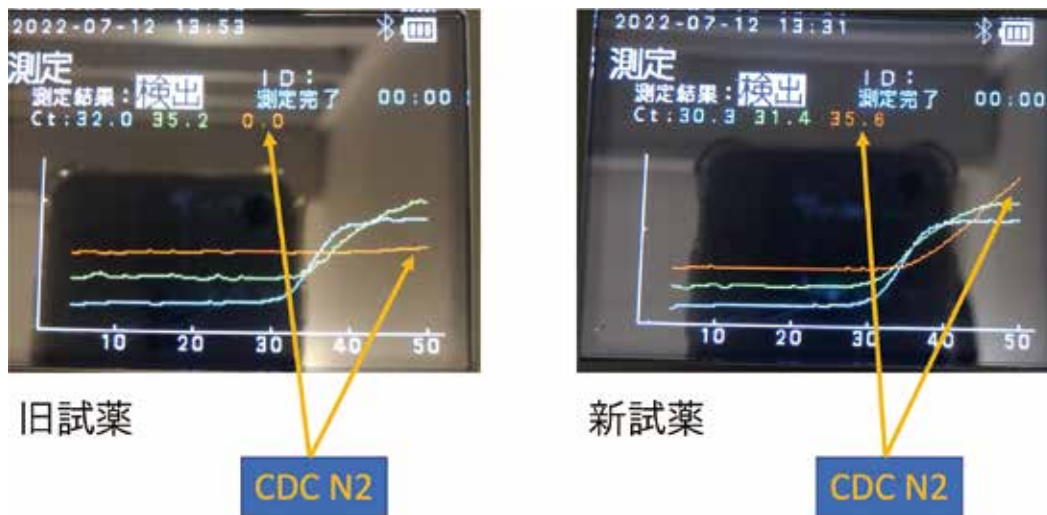


図4 代表例の測定画面

ブロックの昇温後、反応が始まるとグラフが表示され、cycle 数の増加と共にグラフが右に伸び、核酸が検出されるとグラフは上昇を始め、プラトーに達するか 50 cycles で停止する。核酸が検出された時点での Ct 値が上部に色分けして表示される。左に示す旧試薬および PCR 条件では CDC N2 は検出されていないが、右に示す新試薬および改良した PCR 条件では CDC N1, N2 共に検出され、また感度の上昇も認められた。

3. 考察および結論

COVID-19 のパンデミック対策としては、社会的距離、マスクの着用、手指衛生の維持などの予防措置が行われているが、その補完として、陽性患者の隔離と広範な集団スクリーニングの実施が重要と考えられている。しかし、従来の RT-qPCR 技術による SARS-CoV-2 RNA 検出は、高コストであり、所要時間が長く、専門的技術を有する臨床検査技師や大きな qPCR 装置が必要になる。さらに、鼻咽頭スワブによる検体採取時の感染リスクなどの問題もある。

qPCR の代替検査についても多くの報告がある。例えば抗原検査は、使いやすく、低コストかつ迅速で、デバイスも小型であるため広く利用されている。しかし、感度が qPCR 検査よりも低いため、スクリーニングテストとしての適性は劣る。また、ウイルスに変異が高頻度に発生することを考慮すると、確立した抗原抗体反応を用いた抗原検査では直ちに変異株に対応できない可能性も否定できない。一方、qPCR 検査では、変異部分に新しい

プライマーを設定することにより、早期に対応可能である。このことから、qPCR 検査は今後も極めて重要な検査であるものと考えられる。

最近、POCT（ポイントオブケアテスト）として qPCR を短時間で実行できるいくつかの小型デバイスが開発され、前述の問題の多くを克服できることから注目を集め、SARS-CoV-2 検出装置としてこれらを適用する試みも報告され始めている。POCT 機器の導入は低コストでありながらも、従来の qPCR 機器に匹敵する検出能を有し、大規模な実験室や機器の必要もない。このことから COVID-19 などのパンデミック時のスクリーニング検査として非常に有用であると考えられ、2020 年 1 月以降、さまざまな研究者や企業が SARS-CoV-2 迅速診断のための POCT 検査装置の開発を行い、抗体検出、抗原検出、核酸検出などの様々なタイプの POCT デバイスが開発されている。本研究で使用した PCR1100 は、核酸検出に焦点を当てた POCT デバイスの 1 つであるが、本研究で明らかになったように、分子細胞生物学の知識や経験がない医療スタッフでも使いやすく、簡単に実施できることが確認され、専門性の高い臨床検査技師やスタッフがいらない病院や小規模診療所（歯科、医科ともに）などでの迅速診断に大きく寄与するものと考えられる。

一方、現在使用されている検体採取法である鼻咽頭スワブは、採取時の飛沫による感染リスクがあり、また採取技術によって検体の品質に差が生じることも明らかとなっている。唾液を用いた検査は鼻咽頭スワブと同等の感度と特異度を有しているという報告も散見される。われわれの研究で

は、より安全かつ簡便で実施しやすい診断法を開発することが目的であり、唾液をサンプルとして使用できるかを検討した。その結果、2倍希釈唾液および洗口液で検出が可能であることが確認され、感染リスクの低い検査方法が確立できたものと考えている。唾液における SARS-CoV-2 の有無を迅速かつ容易に診断できる本診断法は、スクリーニング検査としても有用であり、また、小規模診療所における検査も可能とするものと考えられる。外来処置前のスクリーニング検査が可能となるなど、より安全な医療の実現に貢献できるものと考えられる。

以上のことから、本診断法は、特別な専門的知識や技術を有しない者でも、患者洗口液を検体として正確に qPCR を実施でき、歯科、眼科、耳鼻咽喉科等の小規模診療所にも導入可能であることが示唆された。本診断法を広く導入できれば、院内感染やクラスター発生を効果的に防止できると

ともに、感染リスクのある処置の実施可否の判断の一助ともなり、医療関係者の安全確保にも繋がるものと考えられる。さらには、災害時における大規模避難施設でのスクリーニング等、幅広く応用が期待できると考えられる。



本稿に関連し、開示すべき利益相反はない。

参考文献

- 1) Tokuyama-Toda R, Muraoka M, Terada-Ito C, Ide S, Horiuchi T, et al.: Feasibility of Rapid Diagnostic Technology for SARS-CoV-2 Virus Using a Trace Amount of Saliva. *Diagnostics*, 11 (11): 2024, 2021. doi: 10.3390/diagnostics11112024.
- 2) Tokuyama-Toda R, Terada-Ito C, Muraoka M, Horiuchi T, Amemiya T, et al.: Improving the Detection Sensitivity of a New Rapid Diagnostic Technology for Severe Acute Respiratory Syndrome Coronavirus 2 Using a Trace Amount of Saliva. *Diagnostics*, 12 (11): 2568, 2022. doi:10.3390/diagnostics12112568.

Feasibility of Rapid Diagnostic Technology for SARS-CoV-2 Virus Using a Trace Amount of Saliva

Reiko TOKUYAMA-TODA¹⁾, Chika TERADA-ITO¹⁾, Yusuke TAKEBE¹⁾, Toshikatu HORIUCHI²⁾,
Takashi OGAWA³⁾, Toshihiro KIKUTA⁴⁾, Kazuhito SATOMURA¹⁾

¹⁾ Department of Oral Medicine and Stomatology, School of Dental Medicine, Tsurumi University

²⁾ Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Saiseikai Yokohamashi Tobu Hospital

³⁾ Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Tokyo Medical University Hachioji Medical Center

⁴⁾ Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Shin-Yurigaoka General Hospital

abstract

The novel coronavirus infection (COVID-19) has become a global pandemic and continues to cause infections. Currently, the number of infected people is increasing again, and the severity of the disease is putting pressure on medical services. Reliable and rapid diagnosis of SARS-CoV-2 and appropriate isolation of patients are important; however, current qPCR tests have problems such as a lack of human resources and equipment and the long time required. Although qPCR tests are superior in both sensitivity and specificity, antigen tests are being used as an alternative test. In the present study, we aimed to establish a rapid diagnostic method for SARS-CoV-2 using a trace amount of saliva as a sample using a mobile qPCR device. First, we investigated whether medical staff could handle and complete the test in a short amount of time. Second, we investigated whether rapid diagnosis was possible for COVID-19 patients who have been diagnosed as positive by current qPCR tests using mouthwash (a trace amount of saliva) as a sample. We established a method that can detect SARS-CoV-2 from a trace amount of saliva in a short time. These findings suggest that our method is useful as a diagnostic method that can rapidly detect SARS-CoV-2 using a trace amount of mouthwash sample that has not been subjected to any pretreatment. Furthermore, we found that people without knowledge of molecular biology could reliably perform qPCR. Thus, our method can be introduced in small-scale clinics such as dentistry, ophthalmology, and otorhinolaryngology. This method was expected to be applied to the effective prevention of nosocomial infections, ensuring the safety of medical staff and medical sites, and even screening at large-scale evacuation facilities during disasters.

keywords : Saliva, SARS-CoV-2, Rapid qPCR Test, POCT

デジタルフェノタイピングデータと生体データの 組み合わせを活用した歯科治療恐怖症の新しい診断法の開発

鮎瀬卓郎¹⁾, 原田拓実²⁾, 小林 透²⁾

抄 録 生体検査データと、発話・表情・感情・動作情報等のデジタルフェノタイピングデータを組み合わせた解析を行うことで、歯科治療恐怖症の重症度を客観的かつ定量的に診断する方法の開発を目的とする。患者と歯科医師の問診時の患者の表情と会話などのデジタルフェノタイピングデータを AI により動画解析および自然文解析することで、歯科治療恐怖症の重症度をより客観的かつ定量的に診断することが可能になる。問診時の患者の AI 表情解析の結果、既存の歯科治療恐怖症の指標である MDAS を教師データとした場合、60%の精度が認められた。今後、表情 AI 解析に加えて、音声解析、自律神経系の解析を加えたマルチモーダル AI 解析により診断精度を高めることができると考える。

キーワード 歯科治療恐怖症, MDAS, 表情 AI 解析

1. はじめに

本研究は、唾液中ストレスホルモンや、患者の呼吸数、脈拍数、血圧、自律神経活性などの生体検査データと、発話・表情・感情・動作情報等のデジタルフェノタイピングデータを組み合わせた解析を行い、問診所見等と合わせて診断に用いることで、歯科治療恐怖症の重症度を早期に客観的かつ定量的に診断する方法の開発を目的とする研究である。患者と歯科医師の問診時の患者の表情と会話などのデジタルフェノタイピングデータを AI により動画解析および自然文解析する。これにより、歯科治療恐怖症の重症度を患者と医師の主観を可能な限り排除して、客観的かつ定量的に診断する方法の開発を目的とする研究である。本研究の最終目的は、歯科恐怖症の重症度を患者と医師の主観を可能な限り排除して、客観的かつ定量的に診断する方法の開発である。本研究の仮説として、歯科恐怖症の患者は発話・表情・感情・動

作情報等のデジタルフェノタイピングデータに特徴があると考えられる。仮説を検証するために歯科恐怖症患者のデジタルフェノタイピングデータを集める方法として、タブレット問診システムを開発し評価を行った。

2. 研究方法

1) 概要

歯科治療恐怖症の患者との問診時における医療面接において、患者の発話・表情・動作情報等のデジタルフェノタイピングデータをタブレット端末で記録し、表情の画像解析とテキストマイニングの解析を応用して、AI 深層学習による診断方法を確認する。AI 深層学習で用いる教師データとしては、The Modified Dental Anxiety Scale (MDAS) 日本語版の評価スコアおよび、歯科治療恐怖症の症例に特有の表情の変化を用いる。また、患者の唾液オキシトシン活性も教師データとして応用する。さらに歯科医師の“歯科治療恐怖症が重症かどうか”の最終判断および「鎮静下で治療が必要であったかどうか」を用いて歯科治療恐怖症の重症度の診断基準を定量化・客観化する。患者の画像および音声データ解析は、音声情報、視線解析

受付：2023年10月16日 (*：研究代表者)

¹⁾ 長崎大学 医歯薬学総合研究科 歯科麻酔学分野

²⁾ 長崎大学 情報データ科学部



図1 AIによる歯科治療恐怖症重症度診断システム

などと併せて本学工学研究科所属の研究分担者（小林）が統合的に行う。副次的な評価項目として治療終了後の患者の安心した表情と自信を取り戻した喋り方の治療後の変化も併用することで重症度の判定に対するAIによる深層学習効果が増すと考える。

2) 研究方法

タブレット端末へ、問診時の患者の表情記録システムとMDASの質問項目の評価機能を盛り込んだアプリケーションソフトを開発して移植し“歯科治療恐怖症診断ロボット”を完成させる。そのタブレット端末ロボットを使って、以下の対象者に問診における被験者の発話・表情・動作情報等のデジタルフェノタイプデータを収集してAIにより深層学習させる。

一般の歯科医院を受診する患者さんおよび大学病院麻酔科を受診する患者さんの初診時問診時、および再診時（研究分担施設の歯科医院では安静時の唾液サンプルを採取し唾液中のオキシトシン活性を測定する）。

3) 多機関臨床研究としての倫理申請

研究計画書を長崎大学病院臨床研究倫理委員会へ提出・申請を行い、2022年6月28日に承認を得た（承認番号：22062005）。その後、長崎大学での中央一括審査要件にて、各分担研究機関（大学病院歯科部門）の機関長の許可申請を行い、各機関から個別に研究許可承認を得た。

“歯科治療恐怖症診断タブレット”を用いて、以下の対象者に問診における被験者の発話・表情・動作情報等のデジタルフェノタイプデータを収集してAIにより深層学習させる。一般の歯科医院（4施設：約30症例×4施設＝約120症例）、を受診する患者さんの初診時問診時および初期治

療終了時（再診時）（研究分担施設の歯科医院では、安静時の唾液サンプルを採取し、唾液中のオキシトシン活性を測定する）。

さらに全国5大学の歯科麻酔科（長崎大学病院特殊歯科総合治療部、昭和大学病院歯科麻酔、昭和大学病院スペシャルニーズ口腔医学講座、日本歯科大学歯科麻酔科、北海道大学歯科麻酔科、福岡歯科大学歯科麻酔科）を「歯科治療恐怖症疑い」あるいは「局所麻酔アレルギーの疑い」で、紹介などにより受診する患者を対象にして、各施設1台ずつ配置したタブレット端末での“歯科治療恐怖症診断タブレット”により大規模データ（約30症例×6施設＝約180症例）を収集し、また唾液サンプルによるオキシトシン活性を測定する。

3. 研究結果

1) タブレット問診システム

歯科恐怖症の調査・研究のため、患者の問診時の様子を記録したいが、歯科医本人が問診を行うと、それ自体がプレッシャーとなり患者の回答に影響を与える可能性があると考えた。また、問診時の患者の表情や音声を録画する必要があったため、歯科医師と対面で問診を行うのではなく、タブレットで問診を行うことができるシステム（図2）を開発し、データ収集を行った。

システムの流れとしては、患者が問診に回答すると、問診アプリからサーバへ問診回答動画が送信される。Firebaseに問診データと動画の保存場所を送信する（図3a）。

歯科医師は問診のデータを確認したい場合、管理画面Webアプリを利用することで、サーバ上の問診回答動画や問診データを確認することができる（図3b）。



図2 問診アプリのデータ収集システム

2) 問診アプリ

歯科医師と患者が対面で行う問診をタブレット端末で行うことによって、患者の問診中の表情の変化や音声、動作等の情報をタブレット端末上のカメラ機能で撮影することが可能となる。

アプリの画面遷移は図4に示す。起動後の画面から、新規問診と継続問診を選択できる。

新規問診を選択した場合、問診番号が発行され今後、継続問診を行う際に必要となる。「問診をはじめる」のボタンを押すと問診が始まり、5つの質問の音声データが流れる。患者はその質問に対

して、任意のタイミングで回答を行う。問診の開始から終わりまでをビデオ撮影し、問診終了後にサーバに送信する。問診後アンケートに回答していただき、動画と同様にサーバに送信する。継続問診を選択した場合は、初めに前回の問診番号を入力し、「問診をはじめる」のボタンを選択する。以降は新規問診と同様に患者が質問に答えていく。本問診アプリを施行した際にタブレット端末のカメラに患者の顔が映らない状態で問診に回答してしまうという問題が発生した。そのため、図5に示すように問診中の画面右上にリアルタイムで撮

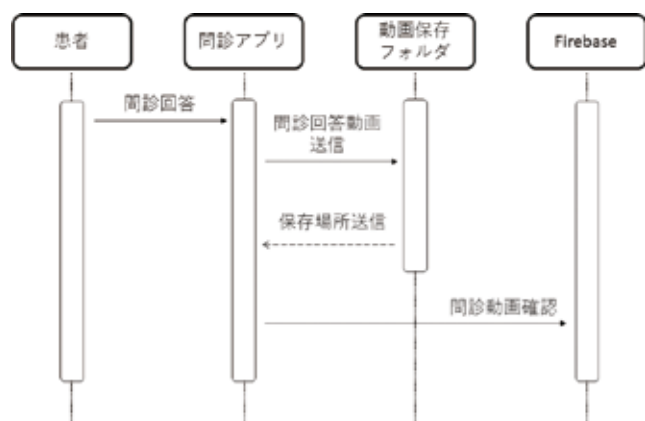


図3a 患者シーケンス図

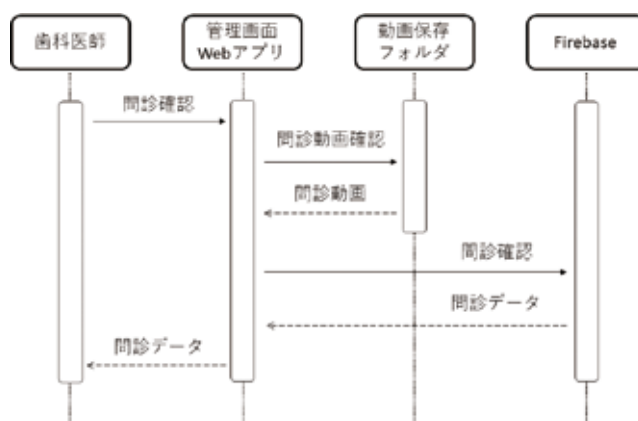


図3b 歯科医師シーケンス図



図4 問診アプリ画面遷移図

影している様子がわかるフレームを表示することで、上記の問題を解決した。

3) 問診内容

問診アプリのフローを図6に示す。問診アプリ上で問診が始まると、問診の質問内容をまとめた音声ファイルが再生される。音声ファイルは質問と質問の間に患者の回答時間を想定した無音時間を確保しており、音声ファイルの再生開始から再生終了まで、一連の流れを一つの動画として撮影する。問診中の質問内容は以下の通り。

- ①年齢はいくつですか？
- ②症状はいつごろからですか？
- ③口のどの部分に症状が出ていますか？
- ④いつも通っている歯医者がありますか？
- ⑤一番最近受信したのはいつですか？
- ⑥治療について何か不安はありますか？
- ⑦治療に対して何か希望はありますか？



図5 画面上フレームインセルフチェックウィンドウ

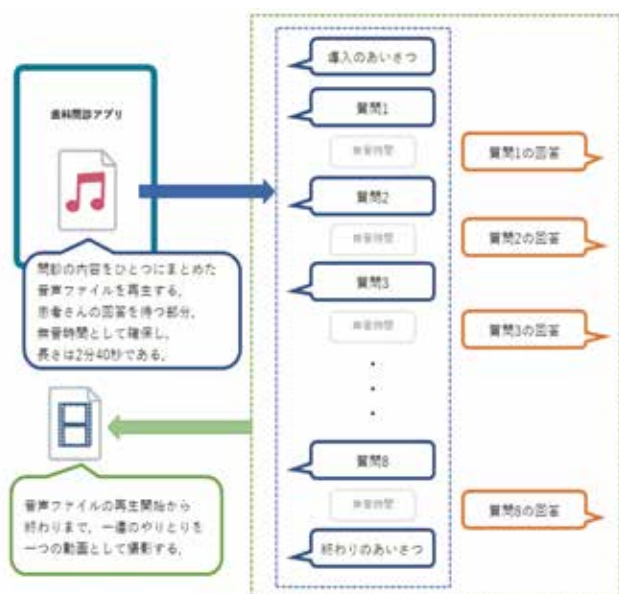


図6 問診フロー図

4) アンケート

諸外国では歯科恐怖症の診断基準に利用される心理尺度が複数開発され、世界的に使用されている。Modified Dental Anxiety Scale (MDAS) は5項目からなる質問紙で、「歯科受診の前日」「待合室で待機中」「歯の切削時」「歯石除去時」「局所麻酔時」の不安の程度を「全く感じない」から「非常に感じる」の5段階で評価し、最低点は5点、最高点は25点である。このMDASが19点以上で重度の歯科恐怖症であると判定される⁴⁾。本研究では、問診を受けた患者が実際に歯科恐怖症であるかを判定するための指標として、問診終了後にアンケートとして患者が回答するように設計した(図7)。

5) 管理画面 Web アプリ

歯科医師は問診を行った患者のデータや問診動画を管理画面 Web アプリから確認することができる。管理画面 Web アプリのメイン画面には問診記録、検索、アプリ内設定のタブがある。セキュリティの観点からベーシック認証を設定することで、Web ブラウザからアクセスする際は user 名と PW を管理した。

歯科医院で治療を受けることについて、どのくらい不安を感じますか
以下の1～5について、あなたが感じる不安の強さにもっともあてはまるものを1つ選んでください

1) 明日、歯の治療で歯科医院に行くとしたら、どのように感じますか？

全く不安を感じない 少し不安を感じる まあまあ少し不安を感じる かなり不安を感じる 非常に不安を感じる

○ ○ ○ ○ ○

2) 歯科医院の待合室で治療の順番を待っているとしたら、どのように感じますか？

全く不安を感じない 少し不安を感じる まあまあ少し不安を感じる かなり不安を感じる 非常に不安を感じる

○ ○ ○ ○ ○

3) 歯を削られ始めたら、どのように感じますか？

全く不安を感じない 少し不安を感じる まあまあ少し不安を感じる かなり不安を感じる 非常に不安を感じる

○ ○ ○ ○ ○

4) 歯石を取られたり、歯を磨かれたりするとしたら、どのように感じますか？

全く不安を感じない 少し不安を感じる まあまあ少し不安を感じる かなり不安を感じる 非常に不安を感じる

○ ○ ○ ○ ○

5) 上側の奥歯付近の歯ぐきに麻酔注射をされるとしたら、どのように感じますか？

全く不安を感じない 少し不安を感じる まあまあ少し不安を感じる かなり不安を感じる 非常に不安を感じる

○ ○ ○ ○ ○

図7 MDAS アンケート

(1) 問診記録

問診記録では、時間順で問診の情報が並んでおり、時刻、問診番号、問診回数、施設名、アンケート回答結果が確認できる。閲覧ボタンを選択すると、詳細ページに遷移し、実際の動画を確認することができる。詳細ページからは患者のデータ、問診動画を確認することができ、必要に応じてダウンロードボタンから問診動画ダウンロードすることができる。

(2) 検索

検索機能には期間検索、患者検索、施設検索がある。

期間検索では、左上の入力ボックスの start と end に日付を入力することで、指定した期間内に問診を受けた患者の一覧を表示することができる。また、カレンダーを使って期間を簡単に指定することも可能である。

患者検索では問診番号の一覧が表示され、「開く」を選択すると、指定した問診番号の患者が行ったすべての問診についての情報が表示される。

施設検索では、施設名（歯科医院名）を指定することで、指定した施設で問診した患者のデータの一覧を表示することができる。

(3) アプリ内設定

アプリ内設定では、問診アプリ上の設定を変更することができ、パスワードの変更や、新規問診、継続問診時の無音時間の設定を変更することができる。

6) 評価

現在、2章で説明した、タブレット問診システムを全国10か所の歯科医院等で利用していただき、データ分析に使用する、実際の患者データの収集を開始している。最終的には、各医院30名ずつ、計300名の患者データを収集する予定であり、現在約60名程度の患者のデータを収集することが出来ている。問診アプリは10台同時に使用した際にも、正常に動作することが確認できた。また、管理画面 Web アプリから患者データの確認や問診動画のダウンロードを行うことができ、ダウンロードした問診動画を使用することでデータ分析を行えることの確認ができた。

7) 表情データから AI 解析

タブレット端末で“歯科治療恐怖症診断タブレット”で得られた患者および一般成人の大規模データ（総計300症例分）をAIにより深層学習させることで、診断アプリの診断能力が向上し、臨床応用の次のステップへ移行することで、客観的な評価スコアの開発・実装化が可能になる。さらに収集したデータから大規模なコホート研究としての解析を行うことで、日本での歯科治療恐怖症の詳細な実態の把握が可能になる。

(1) OpenFace を用いた表情解析

表情は、思考、知覚、感情、計画などの心的状態を反映しうる媒体であり、様々な、センシング技術はこころの測定に利用可能な指標を拡張することが可能である。

本研究では、表情運動に関する情報を手軽に取得することができる OpenFace という手法を用いて AI 解析を行った。OpenFace とは表情分析用のアプリケーションで任意の顔画像・動画から、①表情上に付与された68個の特徴点（以下ランドマーク）における $x \cdot y$ 軸の動き、②顔の向き、③ Action Unit (AU) と呼ばれる表情運動要素、④視線の推定値を取得することができる。

自動表情運動検出システムである OpenFace では、2つの長所が考えられる。1点はその使い易さにある。ユーザーが画面上で視覚的にとらえて操作できる便利なアプリケーションが存在しているので、プログラミングに親しみのない人でも直観的な操作で表情の分析が可能となる。2点目は顔・表情の動画像から多様な情報を簡便に抽出することができる点である。動画の解析においてはフレームごとの画像から情報を取得するので、フレームの展開に応じた時系列・動的情報の検討が可能となる。OpenFace は表情の動画像から①表情ランドマーク、②顔の向き、③ AU、④視線といった多様な情報を取得することができる（図8）。

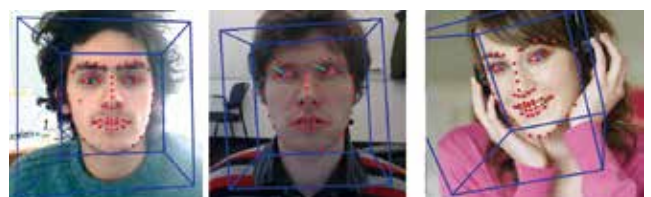


図8 表情 AI 解析

(2) OpenFace を用いた AI による表情の特徴解析

- ① MDAS で 19 点以上の歯科治療恐怖症患者（全体の約 1 割程度）の表情の変化を教師データとして svm という手法で解析を行う方法
- ② MDAS で 19 点以下の歯科治療恐怖症ではない患者（全体の約 8 割程度）の表情の変化を教師データとしてオートエンコーダという手法で解析を行う方法

(3) MDAS で 19 点以上の歯科治療恐怖症患者（全体の約 1 割程度）の表情の変化を教師データとして svm という手法で解析を行う方法

歯科恐怖症の人の表情＝不安（恐怖）の表情と
考えて、OpenFace のアクションユニットの項目から、不安（恐怖）の表情と認識される指標を用いて解析を行った。

不安（恐怖）な表情の特徴：上瞼をできるだけ上げる、顎を下げて口をあける、前方をまっすぐみる、両眉を上げ、中央に引き寄せる、目を見開く、瞼に力を入れる、口角を横に引く（表 1）。

(4) MDAS で 19 点以下の歯科治療恐怖症ではない患者（全体の約 8 割程度）の表情の変化を教師データとしてオートエンコーダという手法で解

析を行う方法

歯科恐怖症ではない人の表情＝穏やかな表情と
考えて、OpenFace のアクションユニットの項目から、穏やか（平静）の表情と認識される指標を用いて解析を行った（表 2）。

8) 今後の AI による表情の解析

本研究では、AI 解析精度が 60 % であるため、さらなる精度の増加が求められる。今後は、蓄積されたデータを OpenFace だけでなく、クラウドで提供される富士通の AI 解析プラットフォームおよび Android 端末および iOS 端末で使用可能な Affdex SDK（Affectiva 社製）を用いて、表情から読み取る感情認識 AI での解析を行い、本アプリによる歯科治療恐怖症の重症度の評価・診断の精度を高める方針である。さらに生成系 AI の ChatGPT による解析も試み、表情の変化、音声の変化、自律神経系の変化など、マルチモーダルな評価により、本システムの診断精度を高めることが可能と考える。

9) 唾液オキシトシン活性の評価

脳内オキシトシン活性の亢進は多幸福感や信頼感を生み出す作用があるとされる。そこで脳内オキ

表 1 OpenFace の不安アクションユニット

AU 番号	AU の部位・動作	AU 番号	AU の部位・動作
①	眉の内側を上げる	②0	唇両端を横に引く
②	眉の外側を上げる	23	唇を固く閉じる
④	眉を下げる	24	唇を押し付ける
5	上瞼を上げる	②5	顎を下げずに唇を開く
⑥	頬を持ち上げる	26	顎を下げて唇を開く
7	瞼を緊張させる	27	口を大きく開く
8	唇を違いに近づける	28	唇を吸い込む
9	鼻に皺を寄せる	29	下顎を突き出す
10	上唇を上げる	30	顎を左右にずらす
11	鼻唇溝を深める	32	唇を噛む
12	唇両端を引き上げる	35	頬を吸い込む
13	唇を鋭く引き上げる	41	上瞼を下げる
14	えくぼを作る	42	薄目
15	唇両端を下げる	44	細目にする
17	頬を上げる	45	まばたく
18	唇をすぼめる	46	ウインクする

表 2 OpenFace の平静アクションユニット

AU 番号	AU の部位・動作	AU 番号	AU の部位・動作
1	眉の内側を上げる	20	唇両端を横に引く
2	眉の外側を上げる	23	唇を固く閉じる
4	眉を下げる	24	唇を押し付ける
5	上瞼を上げる	25	顎を下げずに唇を開く
⑥	頬を持ち上げる	26	顎を下げて唇を開く
7	瞼を緊張させる	27	口を大きく開く
8	唇を違いに近づける	28	唇を吸い込む
9	鼻に皺を寄せる	29	下顎を突き出す
10	上唇を上げる	30	顎を左右にずらす
11	鼻唇溝を深める	32	唇を噛む
⑫	唇両端を引き上げる	35	頬を吸い込む
⑬	唇を鋭く引き上げる	41	上瞼を下げる
⑭	えくぼを作る	42	薄目
15	唇両端を下げる	44	細目にする
17	頬を上げる	45	まばたく
18	唇をすぼめる	46	ウインクする

唾液オキシトシンとMDASとの相関

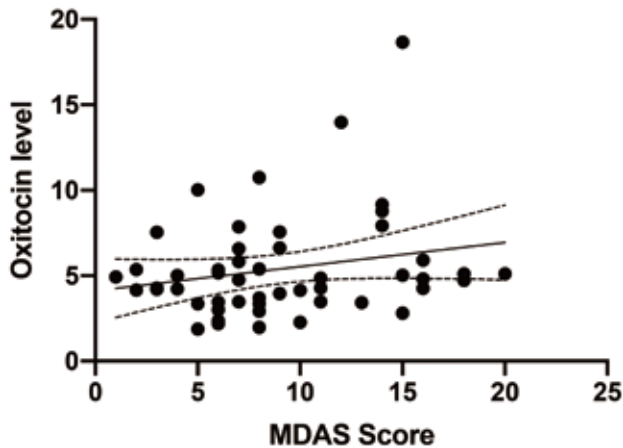


図9 唾液オキシトシンと MDAS との相関

シトシン活性の変化を唾液サンプルを用いて評価した。測定は、採取した唾液サンプルを別日にELISA法による比色競合法を用いて外注委託（フナコシ株）にて測定解析した。

50例の採取した唾液サンプルを解析した結果、歯科治療恐怖症の指標であるMDASの値と、オキシトシンレベルとの間に弱い正の相関が認められ

た（図9）。歯科治療に対する不安や恐怖のレベルと、快適な指標の一つであるオキシトシンレベルの相関があれば、診断法の裏付けになる可能性がある。今後、症例数を増やして統計解析を行い、歯科治療恐怖症の質問評価法と生体の検査値との関連を検討する予定である。

◆
本稿に関連し、開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) Raadal M : Cognitive Behavioral Therapy for Dental Phobia and Anxiety Oxford (UK): Wiley-Blackwell. 2013.
- 2) McNeil D,Randall C.In:Mostofsky DI,Fortune F, Dental fear and anxiety associated with oral healthcare: conceptual and clinical issues, Behavioral Dentistry. 2nd ed.Ames (IA): Blackwell; 2014. p.89–107.
- 3) Rodrigues, Silverira, E.J.Dentistry,2021,
- 4) HumphrisGM,Morrison T,Lindsay SJ, The ModifiedDental Anxiety Scale : validation and United Kingdomnorms, Community Dent Health, 1995, 12(3), 143–150.

Development of a New Diagnostic Method for Dental Phobia Utilizing a Combination of Digital Phenotyping Data and Biological Data

Takao AYUSE¹⁾, Takumi HARADA²⁾, Toru KOBAYASHI²⁾

¹⁾ Nagasaki University Institute of Biomedical Sciences, Dental Anesthesiology

²⁾ School of Information and Data Sciences, Nagasaki University

abstract

The aim of this study was to develop an objective and quantitative method for assessing the severity of dental treatment phobia. We used AI to analyze video and natural text of patient's facial expressions and conversations during interviews with the dentist. Our approach combined biological examination data with digital phenotyping data, including speech, facial expression, emotion, and movement information, to obtain a more objective and quantitative assessment of the severity of dental treatment phobia. AI facial expression analysis of patients during interviews obtained an accuracy of 60% when MDAS, an existing index of dental treatment fear, was used as training data. Further studies are needed to improve diagnostic accuracy through multimodal AI analysis that includes voice analysis and autonomic nervous system analysis in addition to facial expression AI analysis.

keywords : Dental Phobia, MDAS, Facial Expression AI Analysis

B. これからの歯科医療の DX
(AI・デジタルテクノロジーの応用)Extended Reality 技術を応用し
sustainableな歯科教育を確立する片倉 朗^{1,*}，菅原圭亮¹，小谷地雅秀¹，立澤孝太郎¹，小高研人²，松永 智³

抄 録

XRとは「Extended Reality／Cross Reality」の略称で、現実の物理空間と仮想空間を融合させて、現実では知覚できない新たな体験を創造する技術である。「VR（仮想現実）」「AR（拡張現実）」「MR（複合現実）」などの先端技術はいずれもXRに含まれており、それらの包括的な総称である。XRは医療分野でも急激に進化し、既に医療訓練、手術支援、リハビリテーション、健康支援など、さまざまな領域で活用されている。本プロジェクト研究はXR技術の導入による歯科口腔外科領域における手術支援と手術の精度向上、歯学教育における教育効果の向上を実現するハードウェアとソフトウェアの開発・臨床と教育への応用とその効果の検証を行った。その結果CTデータからHoloeyesMDでアプリケーションを作製し、Head Mounted Displayを装着し装着バーチャルセッション機能を用いたメタバース空間で「診断→インフォームドコンセント→手術時のガイド」が可能となり顎口腔領域の硬組織手術の手術精度と安全性が向上することが確認できた。また、歯学部学生の手術解剖の領域の学修でHead Mounted Displayを用いた学習者の方が従来の方略による学修者より短期的な学習効果の向上が認められた。

キーワード 歯科医学教育、デジタルトランスフォーメーション、Extended Reality (XR)、Computer aided design/Computer aided manufacturing (CAD/CAM)、Head Mounted Display

1. 歯科医療のどこにExtended Reality (XR) 技術を応用されていくのか

近年、様々な分野で情報処理のデジタル化は加速度的に拡大していることは明白である。さらにCOVID-19の世界的な感染拡大によって、学校での講義や授業、また会議や学会もオンラインで行われたが、アフターコロナとなった今はそれが普遍的な方略になり、その技術革新は今まで以上に加速している。歯科医療の分野でもデジタル化の流れは世界的に急速に進んでいる。電子カルテ、口腔内スキャナによる光学印象、石膏模型をデジタルデータに置き換える高精度光学スキャナ、デジタル

X線、CBCT、CAS (Computer Aided Surgery : コンピューター支援外科手術)、3Dプリンタ、Mixed Reality (MR) などが診断、治療計画の立案、処置など多くの歯科医療や歯学教育の現場で応用されている。医療分野では1980年代にエックス線CTを用いた医用3次元画像の高速再構築技術が画像診断と治療計画を一新した。1996年にMukherji SKらが報告¹⁾したCTとMRIのフュージョン画像 (CT/MRI Fusion Image) を用いた頭頸部癌の放射線治療 (3DCRT (三次元原体照射)) における照射野の設定、高精度放射線治療である定位放射線治療などが以前から行われている。筆者が専門とする口腔外科の領域では、顎変形症の治療で1990年頃に3次元的な顎顔面評価システムが報告され、2000年に顎顔面変形症治療システムとして発表された²⁾。さらに工学の世界では一般的なFabrication Laboratory (FabLab) が医療分野でも活用され3Dプリンタの発展により実体模型、Computer-aided design/computer-aided

受付：2023年11月16日 (*：研究代表者)

¹⁾ 東京歯科大学 口腔病態外科学講座

²⁾ 東京歯科大学 歯科放射線学講座

³⁾ 東京歯科大学 解剖学講座

manufacturing (CAD/CAM) が, HoloLens® などの Head Mounted Display の発展により Mixed Reality などの臨床応用が進んできた。筆者の所属する東京歯科大学には2013年に日本初の医療系ファブラボ (Fab Lab: パソコン制御の多様なデジタル工作機械を備えた次世代型実験工房) である「FabLab TDC (Fabrication Laboratory Tokyo Dental College)」が開設され, その設備を基盤に3DプリンタやXR技術を応用した手術を行ってきている³⁾。また, 手術のみならず若手歯科医師や歯学部 of 学生教育にも早くから用いてきた。本プロジェクト研究では, 診療支援への展開として, ①XR技術とCAD/CAM技術を併用した上顎骨形成術 (Le Fort I型骨切り術) の精度検証, ②XR手術支援による顎骨に発生した腫瘍切除術への応用, ③抜歯への応用, ④シームレスなXR技術の歯科臨床への適用, 教育への展開として, 若手の口腔外科医・歯学部学生教育への手技実習への応用を課題とした取り組みを行った。以下にその成果の概要を報告する。

2. XR技術による新たな診断・治療計画・手術支援

1) XR技術とCAD/CAM技術を併用した上顎骨形成術 (Le Fort I型骨切り術) の精度検証と若手口腔外科医への教育

顎変形症手術における上顎骨形成術 (Le Fort I型骨切り術) での上顎骨の移動や固定には従来は術前の石膏模型によって術中に骨片の位置決めを行うためのスプリントをレジンによって作製して

きた。しかし, 作製過程で人為的誤差が生じることに加え3次元移動を十分に再現できず, 術者の経験に依存している点があり, 計画通りに普遍的な手術を行うことが困難であった。従来は2mm程度の誤差は許容範囲とされていたが, これを改善するためにCAD/CAM技術で作製した骨切りガイドや骨片の位置決めガイドを用い手術の再現性を高める試行がされている³⁾。しかし, この方法だけでは手術中にガイド通りに上顎骨が適切に再配置されているかの確認が十分にできないために, 手術精度や安全性を向上するための新たな手術支援システムが必要であった。今回, 筆者らの研究チームは骨片の位置決め3DデバイスとXR技術を応用して, 術前のヴァーチャルオペレーションデータを術野に3次元的に再現し手術精度と安全性を向上させるシステムを開発した⁴⁾。患者固有のCTデータよりシミュレーションソフト (Materialise® Mimics および 3-matic) 上で実際の上顎骨の骨切りラインを設定し, 矯正歯科医と協議した位置に顎骨を移動させる。ヴァーチャルオペレーションデータから骨切りガイドと上顎骨移動後の位置を再現したりポジショニングガイドを設計し3Dプリンタでデバイスを作製した。手術時にガイドに沿って骨切りと上顎骨のリポジショニングを行う。また, ヴァーチャルオペレーションを行ったSTLデータをHoloeyes MDにアップロードしホログラムを作製した。独自に開発したホログラムと術野を重ね合わせるレジストレーションマーカーを接続し術中にヴァーチャルオペレーションで予定した位置に顎骨が移動できているか3次元的に確認し骨接合を行う。術後の精度検証

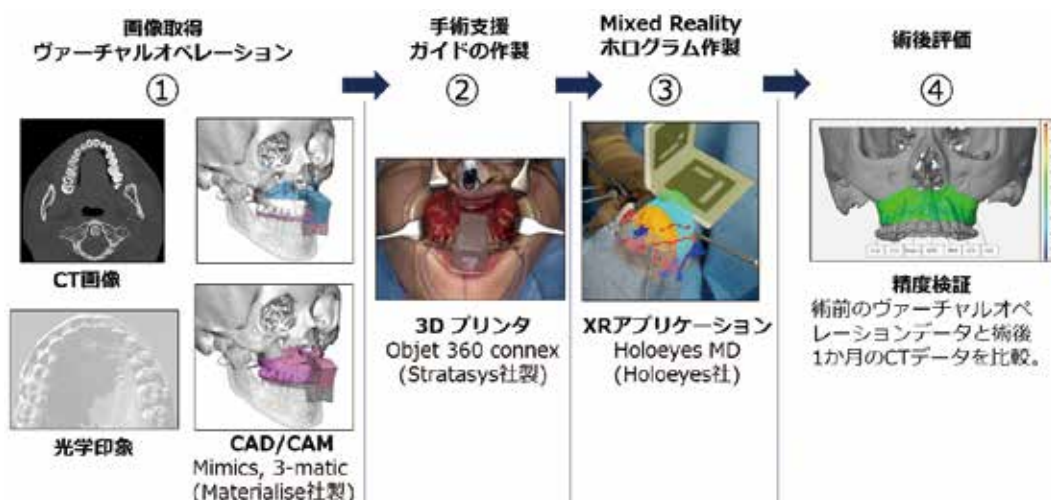


図1 XR技術とCAD/CAM技術を併用した上顎骨形成術



図2 VRを応用したカンファレンス

左：VR 技術を用いたメタバース空間内でのカンファレンス
右：ヴァーチャルオペレーションを反映したホログラムにより 3 次元的に手術内容を共有

では術前のヴァーチャルオペレーションデータと術後 1 か月の CT データを比較し高精度に手術が行えたことが示唆された (図 1)。また, Holoeyes バーチャルセッション機能を用い, メタバース空間上で口腔外科医同士の手術カンファレンスを行うことで, 手術のプランニングや注意すべき脈管神経, 顎骨移動の時の骨の干渉部などを共有して手術に臨むことが出来る (図 2)。この機能により手術の安全性は向上し, 若手口腔外科医の手術技能の教育にもつながっている。

2) XR 手術支援による顎骨に発生した腫瘍切除術

腫瘍切除術にも XR 技術は応用されている⁵⁾。CT データより顎骨, 腫瘍, 隣接する解剖学的構造を Mimics でセグメンテーションした STL データを Holoeyes MD にアップロードし, それぞれ色を分け表示した状態のホログラムを作製した (図 3)。術中は術者が HoloLens[®] (Microsoft) を装着しホログラムを共有し, ジェスチャー操作で顎骨の透明度を上げることににより, 腫瘍周囲の解剖学的形態を確認しながら手術を行うことで安全かつ正確な手術が行える (図 4)。また, 下顎骨の再建を伴うような症例では CAD/CAM 技術と XR 手術支援を併用することでより高精度な手術が行える可能性を報告した⁶⁾。本報告では TruMatch[®]CMF Reconstruction System (DePuy Synthes) で口腔外科担当医と海外のエンジニアにより Web での会議を行い, 術前に骨切りガイドを準備することにより切除範囲と骨移植範囲を決定した。さらに金属 3D プリンタで作製した顎骨固定用チタンプレートを準備した。しかし, 骨切りガイドを用いたとしても術中に予定通りに顎骨の骨切りが行えているか, 再建位置が正確か評価する方法はない。また, 腸骨の骨切りガイドは表層の骨切りラインは確認できるが既定の設定では深部については角度

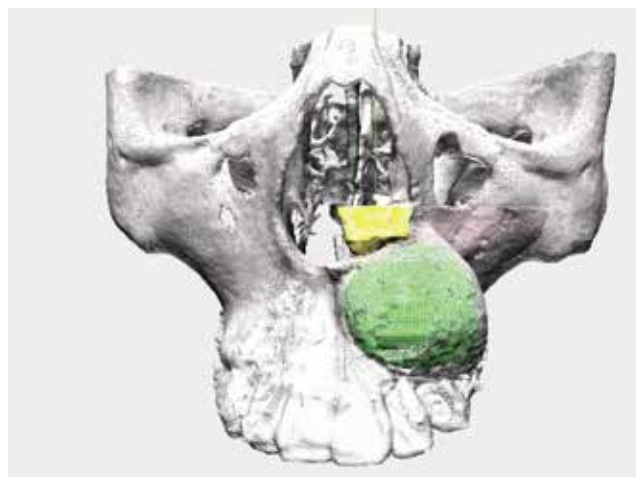


図3 XR 技術を用いた顎骨腫瘍切除術



図4 ホログラムを患者に重ね合わせ

腫瘍を緑色, 上顎洞をピンク, 鼻腔を黄色としたアプリケーションを作製し正確かつ安全な手術を実現した

などのガイドをすることができないため, 手術精度向上のため当科で開発した MR 技術を併用した (図 5)。術後 3 か月の顎骨 CT データから作製した STL データと比較した手術精度では表面偏差の誤差 2mm 以下の割合は顎関節部では 84.5%, 腸骨再建では 81.1%, 全体では 80.3% であり高精度に行えた。

3) 抜歯への応用

口腔外科における小手術で最も多い抜歯でも XR 技術は非常に有効である⁷⁾。複雑な形態の顎骨の中に他の歯根に近接して埋まっている歯を抜去する埋伏歯の抜歯では 3 次元的空間認識が手際よく安全に行うための大きな要素である。また, 隣在する脈管神経も損傷することなく抜歯を行う必要がある。歯科用コーンビーム CT の撮影デー

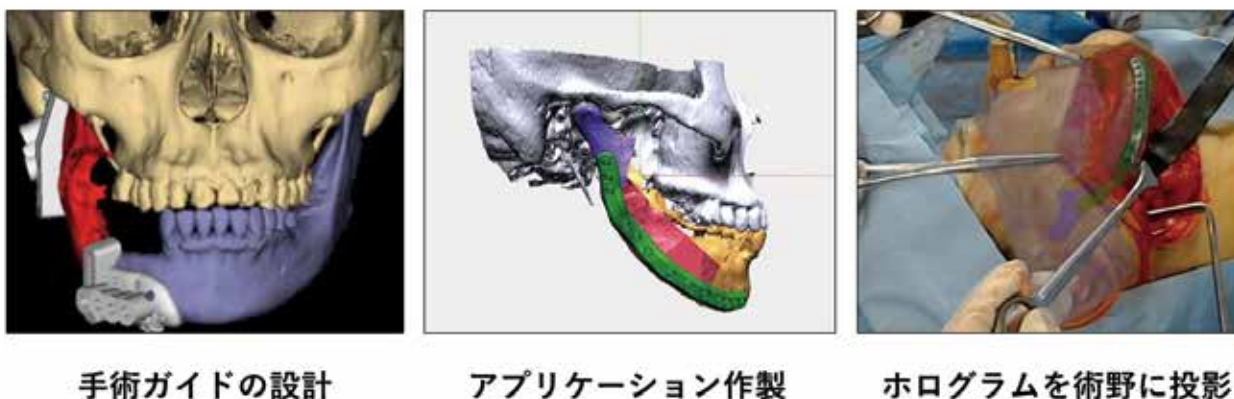


図5 XR技術とCAD/CAM技術を併用した顎骨再建

左：海外エンジニアとWEB会議で設計した手術ガイド

中央：設計したSTLデータよりXRアプリケーションを作製

右：XR技術搭載ヘッドマウントディスプレイを用いて術野にホログラムを投影し手術ガイドとの一助とした



図6 XR技術を応用した過剰埋伏歯抜歯

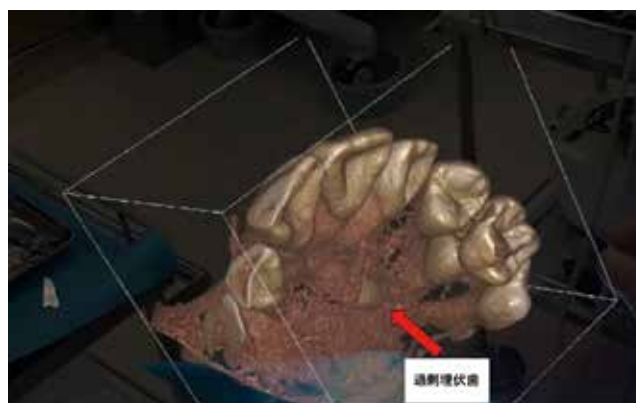


図7 ホログラムの術後への重ね合わせ

間接視野にホログラムを投影しながら手術を行うことで3次元的空間認識が向上する

タから抜歯を行う歯や臨在歯，顎骨をセグメンテーションしSTLデータを作製した。STLデータからHoloeyesMDでXRアプリケーションを作製し術野に投影しながら手術を行った。通常の抜歯は視線を術野から外して平面モニターで位置を確認しながら抜歯を進めるが，本法では間接視野にホログラムを表示しながら手術を行うことで術野から視線を外すことなく，3次元的な位置関係を術野内に投影しながら手術を行うことができる（図6）。また，CarnaLife Holo[®]（MedApp, Kraków, Poland）ではCTのDigital Imaging and Communications in Medicine（DICOM）データから直接ホログラムを作製することが可能であり，事前のセグメンテーションが不要である（図7）。

4）臨床におけるシームレスなXR技術の応用

XR技術の手術における有用性は数多く報告され

てきているが⁸⁾，患者教育においてもXR技術は有用である。図8で示すように，右側上顎第二大臼歯部に生じた顎嚢胞のCTデータからHoloeyesMDでアプリケーションを作製し，術前に術者と患者がMeta Quest 2（Meta）を装着し先述のバーチャルセッション機能を用いメタバース空間で手術の術式や合併症の説明を行った。本症例では顎骨，嚢胞および原因歯，隣在歯をアプリで明示しており，説明の際に病態，嚢胞と上顎洞との位置関係などを3次元的に説明することで患者の手術理解度は格段と向上する。さらに同じデータから作製したアプリケーションをHololens 2にインストールし手術時に前述したように使うことができる。このように1件のデータ処理により「診断→インフォームドコンセント→手術時のガイド」とシームレスにXR技術を活用するシステムが構築できることが検証できた。



図8 シームレスなXR技術の活用

上段：ヘッドマウントディスプレイを用いたメタバース空間内での手術説明

下段：患者説明に用いたホログラムの同データを用いて手術を行う

3. 若手の口腔外科医・歯学部学生教育への応用

XR技術は若手口腔外科医や歯学部学生の教育でも使用を試みて、特に手術に必要な解剖学の履修に有用と考えられた。従来の手術解剖学の学修はこれまでの解剖学実習や教科書の2次元的な図や写真によるものが主で、自学自修の際に3次元の構造を把握するには2次元を3次元に再構築する空間把握の能力により到達目標への差が生じていた。XR技術を用いた学修では1度ホログラムを作製すれば、3次元的な構造を自身の目で視覚的に体験・記憶することでその後の直感的な判断能力の涵養につながり、さらに学修者は自身で反復して学べる永久的な教材となる。さらにご遺体による実習では1グループ5、6人が限度であったが、1つのメタバース空間内には複数人が入ることができ大勢の学生に同質の教育を提供することが可能である。また、ホログラムを手術前の患者CTデータから作製することで、若手口腔外科医に対しても効率的な手術の事前学修が行える。私達は本プロジェクト研究で、XR技術を用いたメタバース空間を体験しながらの講義は通常のスライド等による講義に比較して学修直後の記憶は向上することを検証した。患者CTデータを用いて、平面モニターを通して解剖学の講義を行った2D群と、同じデータを用いてアプリケーションを作製しメ

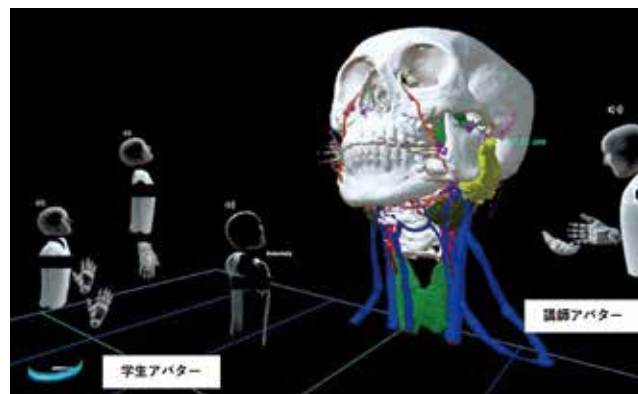


図9 メタバース空間内での臨床解剖学実習

一度に多数の学生が空間に入ることができ、3次元的に様々な角度から解剖学的構造を認識することが可能

タバース空間で学修した3D群に分け、学修前後に筆記試験を実施した(図9)。その結果、3D群の正答率が2D群と比較し有意に上昇したという結果も得られている。

本プロジェクト研究は、(公社)日本口腔外科学会、日本口腔診断学会、(一社)日本歯科医学教育学会の支援により行われた研究である。申請時から御支援と御協力を頂いた各学会の理事長をはじめとした関係者各位に心から御礼を申し上げます。

また、始終に技術的な御指導を頂いた共同研究者の帝京大学沖中総合研究所 教授・東京歯科大学口腔病態外科学講座 客員准教授 杉本真樹先生に感謝申し上げます。



本稿に関連し、開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) Mukherji, SK., Rosenman, JG., Mitchell Soltys, M.S., Aziz Boxwala, MS., Mauricio Castillo, et al. : A New Technique for CT/MR fusion for skull base imaging. Skull Base Surg, 6(3) : 141-146, 1996. 10.1055/s-2008-1058637
- 2) Xia J., Ip HH., Samman N., Wang D., Kot C S., et al. : Computer-assisted three-dimensional surgical planning and simulation: 3D virtual osteotomy. Int J Oral Maxillofac Surg, 29(1) :11-7, 2000. doi: 10.1016/S0901-5027(00) 80116-2.
- 3) Katsumi, Y., Sugahara, K., Matsunaga, S., Odaka, K., Mitomo, K., et al. : Planning for orthognathic surgery at medical fabrication laboratory in Tokyo Dental College (Fab Lab TDC): Clinical application of full-scale-model made by 3-Dimensional ink jet printer for orthognathic surgery. Oral Sci. Jpn., 2016 : 9-11, 2016.
- 4) Koyachi, M., Sugahara, K., Odaka, K., Matsunaga, S., Abe, S., et al. : Accuracy of Le Fort I osteotomy with combined computer-aided design/computer-aided manufacturing technology and mixed reality.

- Int. J. Oral Maxillofac. Surg., 50 (6) : 782-790, 2021. doi: 10.1016/j.ijom.2020.09.026
- 5) Sugahara, K., Koyachi, M., Koyama, Y., Sugimoto, M., Matsunaga, S., et al. : Mixed reality and 3 dimensional printed models for resection of maxillary tumor. Quant. Imaging Med. Surg., 11 : 2187-2194, 2020. doi: 10.21037/qims-20-597
- 6) Koyachi, M., Sugahara, K., Tachizawa, K., Nishiyama, A., Odaka, K., et al. : Mixed-reality and computer-aided design/computer-aided manufacturing technology for mandibular reconstruction : A case description. Quant. Imaging Med. Surg., 13 (6) : 4050-4056, 2023. doi:10.21037/qims22-1118.
- 7) Koyama, Y., Sugahara, K., Koyachi, M., Tachizawa, K., Iwasaki, A., et al. : Mixed Reality for Extraction of Maxillary Mesiodens. Maxillofac. Plast. Reconstr. Surg., 45 (1) : 2023. doi:10.1186/s40902-022- 00370-6.
- 8) Tingting, Jia., Bo, Qiao., Yipeng, Ren., Lejun, Xing., Baichen, Ding., et al. : Case report: Application of mixed reality combined with a surgical template for precise periapical surgery. Front. Surg. 9 : 2022. 10.3389/fsurg.2022.923299.

Applying Extended Reality Technology to Establish Sustainable Dental Education

Akira KATAKURA¹⁾, Keisuke SUGAHARA¹⁾, Masahide KOYACHI¹⁾, Kotaro TACHIZAWA¹⁾,
Kento ODAKA²⁾, Satoru MATSUNAGA³⁾

¹⁾ Department of Oral Pathobiological Science and Surgery, Tokyo Dental College, Tokyo, Japan

²⁾ Department of Oral and Maxillofacial Radiology, Tokyo Dental College, Tokyo, Japan

³⁾ Department of Anatomy, Tokyo Dental College, Tokyo, Japan

abstract

“Extended Reality/Cross Reality” (XR) is a technology that fuses real physical space and virtual space to create new experiences that can only exist in virtual reality. The use of XR is rapidly evolving in the medical field and it is already being used in various fields including medical training, surgical support, rehabilitation, and health support.

We aimed to verify the potential of XR technology to improve surgical support and surgical accuracy in the field of dentistry and oral surgery, and to improve the educational effects of dental education. We developed hardware and software, applied them to clinical practice and education, and verified their effectiveness. Specifically, we developed an application using HoloeyesMD based on CT data. We confirmed that it was able to perform diagnosis, guide surgery, and obtain informed consent in the metaverse space using a virtual session function with a head-mounted display. Furthermore, the short-term learning effect using the head-mounted display of dental students was improved compared to those using the conventional method. Our findings may improve the accuracy and safety of hard tissue surgery in the oral and maxillofacial region such as in the jaw and oral cavity.

keywords : Dental Education, Digital Transformation (DX), Extended Reality (XR), Computer-Aided Design/Computer-Aided Manufacturing (CAD/CAM), Head-Mounted Display

高齢者の医療・地域連携に貢献する 高齢者対応型病院歯科の普及に向けた調査・研究

大野友久^{1,3,*}，岩佐康行^{1,4}，梅田慈子^{1,5}，金森大輔^{1,6}，貴島真佐子^{1,7}，
阪口英夫^{1,8}，松尾浩一郎^{1,9}，元橋靖友^{1,10}，尾崎研一郎^{1,11}，水口俊介^{2,12}

抄 録

急性期，回復期，慢性期・維持期，終末期，どのステージにおいても口腔健康管理を必要とする入院高齢者は多い。高齢社会が進展する中で，医療連携を実践して高齢者に対応する高齢者対応型病院歯科の普及が必要である。しかし病院歯科は少ない。病院に歯科訪問診療を行う地域歯科診療所も増えているが，病院内に常駐していないため限界がある。そこで，高齢者対応型病院歯科の普及を目的に，①日本老年歯科医学会員が所属する病院の病院長への病院歯科に関する質問紙調査，②病院歯科が回復期リハビリテーション病棟入院患者の食事摂取状況に与える影響，③入院患者に対する病院歯科活動内容の把握と適正人員配置に関わる多機関共同研究，の3つの研究を実施した。その結果，①では歯科併設病院の病院長の多くは歯科が必要であると考えており，医科入院患者の一般歯科治療・口腔衛生管理を通して医療の質改善を歯科に期待していたが，病院歯科普及には収益性の向上と有効性を示すデータが必要と考えていた。また②では歯科医師の回復期患者への介入は，食欲不振や低栄養，サルコペニアと関連がある嚥下調整食よりもよい条件での経口摂取を達成することに寄与していた。回復期への歯科医師介入には病院歯科の開設は有効な手段となる。最後に③では，対象の病院歯科が対応する医科入院患者のほとんどが高齢者であった。また急性期や終末期は歯科医師の必要性が高く，回復期は歯科医師と歯科衛生士が同程度必要で，歯科診察室での歯科処置の必要性が高い結果となり，十分な設備と歯科医師と歯科衛生士双方の人員が必要であることが示唆された。維持期・慢性期は病棟往診での口腔衛生管理の必要性が非常に高い結果となり，歯科衛生士の必要度が高いことが示唆された。本プロジェクト研究を通して，高齢社会が進展する日本において，医療連携を実践して入院高齢者に関わる高齢者対応型病院歯科の必要性が高いことが示唆された。

キーワード ■ 医科歯科連携，口腔管理，高齢者，病院歯科，入院患者

1. 研究目的

高齢者歯科医療の推進において病院歯科は重要な役割を担うことができる。高齢者は重篤な疾患に罹患し入院する機会が多くなる¹⁾。入院が必要

な全身状態であると自力での口腔衛生管理が不十分となりやすく，さらには全身状態悪化の影響から口腔の環境も大きく変化する²⁾。そのため，医療者による口腔の健康管理を必要とする入院高齢者は多い。急性期，回復期，慢性期・維持期，終末期と，ライフステージによって高齢者が入院す

受付：2023年10月31日

(*：研究代表者)

¹⁾ 日本老年歯科医学会 病院歯科委員会

²⁾ 日本老年歯科医学会 理事長

³⁾ 浜松市リハビリテーション病院 歯科

⁴⁾ 原土井病院 歯科

⁵⁾ 聖隷三方原病院 歯科

⁶⁾ 藤田医科大学七栗記念病院 歯科

⁷⁾ わかくさ竜間リハビリテーション病院 歯科

⁸⁾ 陵北病院 歯科

⁹⁾ 東京医科歯科大学大学院 地域・福祉口腔機能管理学分野

¹⁰⁾ 武蔵村山病院 歯科

¹¹⁾ 足利赤十字病院 リハビリテーション科

¹²⁾ 東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 高齢者歯科学分野

る病院は異なるが、どのステージにおいても病院歯科は高齢者の口腔の転換期という要所に関わることができる。

超高齢社会を迎えている我が国の社会情勢からみて、医療連携を実践して高齢者に対応する高齢者対応型病院歯科の普及が必要である。高齢者対応型病院歯科が普及すれば、高齢者の口腔管理を通して患者の摂食嚥下機能・状況や栄養状態、Quality of Life、医科疾患治療の支援などが改善される可能性がある。また、医科歯科連携促進はもちろんのこと、地域歯科への高齢者歯科に関する知識の普及、病診連携の推進、人材育成の場の提供、さらには歯科医師の雇用促進にまで繋がる可能性がある。

しかし、そもそも歯科がある病院は少なく、また病院に歯科があっても一般的には口腔外科が多い。もちろん口腔外科も必要だが、高齢者対応型病院歯科の更なる普及が求められる。また病院への歯科訪問診療を行う地域の歯科診療所も増えてきているが、院内に常駐しているわけではないため、さまざまな面で限界がある。

そこで今回、高齢者対応型病院歯科の普及を目指し、なぜ必要か、そして普及のために何をすべきか、を明らかにする目的で3つの研究を実施した。

2. 研究方法

1) 日本老年歯科医学会員が所属する病院の院長への病院歯科に関する質問紙調査³⁾

どのように病院歯科をアピールし、普及につなげていくべきかを明らかにする目的で、すでに院内に歯科があることを経験している病院長を対象に、2022年3月7日～25日の間、郵送式による病院歯科に関する質問紙調査を実施した。対象者は日本老年歯科医学会会員である歯科医師が常勤で所属する病院の院長とした。質問項目としては①病院の地域での役割、回答者病院の院内歯科に関して、②認識している歯科業務内容、③最も期待する歯科業務内容、④歯科があることの利点、⑤歯科があることの最も重要な利点、⑥歯科に改善してほしいこと、⑦歯科に最も改善してほしいこと、⑧歯科は医師の負担軽減に繋がるか、⑨歯科衛生士は看護師の負担軽減に繋がるか、⑩歯科の必要度(11段階)、⑪病院歯科を増やすために必要なもの、⑫病院歯科医師に必要な資質、⑬病院歯科衛生士に必要な資質、⑭歯科医師採用時の

注視点、⑮病院歯科に対する要望・目指すべき方向性(自由記載)の15項目とし①～⑭は選択式で回答してもらった。以上の質問紙調査結果について集計、解析を実施した。

2) 病院歯科が回復期リハビリテーション病棟入院患者の食事摂取状況に与える影響

歯科医師が病院に在籍していることの利点を明らかにする目的で研究を実施した。2022年3月～8月までの期間の電子カルテに記録された患者データを利用した後ろ向き研究とした。歯科医師が常勤として在籍する病院であるA病院にて歯科受診した回復期リハビリテーション病棟入院患者と、歯科医師非在籍病院で歯科衛生士1名のみが在籍するB病院(外部からの歯科訪問診療あり)において、主治医、看護師および言語聴覚士にて口腔内に問題があると判断され、歯科衛生士による口腔内評価を行った回復期リハビリテーション病棟入院患者を対象に調査を実施し、2病院間比較を行った。評価項目としては、年齢、性別、入退院時Body Mass Index(BMI)、入退院時Functional Independent Measure(FIM)⁴⁾の運動と認知それぞれ、入院時Oral Health Assessment Tool(OHAT-J)⁵⁾、入退院時Food Intake LEVEL Scale(FILS)⁶⁾、入退院時機能歯数⁷⁾、歯科医師介入の有無、言語聴覚士介入の有無であった。単純な2病院間の比較だけでなく、入院時に有意差のある項目を用いて傾向スコアマッチングを行った2病院間比較も実施した。嚥下調整食は低栄養や食欲不振、サルコペニアに関連するとの報告があるが^{8,9)}、嚥下調整食より上の食形態を摂取している段階であるFILS ≥ 8 に影響する因子について多変量解析を実施した。

3) 入院患者に対する病院歯科活動内容の把握と適正人員配置に関わる多機関共同研究

高齢者対応型病院歯科の実態を把握する目的および、病院の持つ機能によって歯科医療従事者がどのように配置されるべきかに資するデータ採取目的で、多機関共同研究にて実態調査を実施した。入院患者の急性期、回復期、慢性期・維持期、終末期の4つの「期」別に歯科治療内容を検討し、「期」によってどの程度の歯科医療従事者が必要かを検討する基礎的データを採取した。調査期間は2022年1月～6月までの期間における1か月間で、

日常歯科診療の患者データを採取した。参加機関は日本老年歯科医学会病院歯科委員会委員の所属・関連病院 11 施設とした。採取したデータは、年齢、性別、入院主疾患、BMI、FIM（回復期のみ）、OHAT-J、FILS、残存歯数、機能歯数、残根歯数、患者の「期」（急性期、回復期、維持期・慢性期、終末期）、主な対応内容（口腔衛生管理、歯石除去、歯牙処置、歯周処置、義歯処置、診察・処方、拔牙、拔牙以外の外科処置、摂食嚥下リハビリテーション、顎関節関連、その他）、歯科医療従事者介入負担（歯科医師負担の大きさに応じて、歯科医師、歯科医師＞歯科衛生士、歯科医師＝歯科衛生士、歯科医師＜歯科衛生士、歯科衛生士の 5 段階）、歯科対応場所、とした。これらのデータから、病院歯科対応入院患者のうち高齢者の占める割合について検討し、さらに患者の「期」と歯科医療従事者介入内容の関係性等について比較した。

3. 研究結果

本研究結果の一部は他雑誌に投稿中のため、二重投稿とならないようにデータの一部のみを開示させていただいた。

1) 日本老年歯科医学会員が所属する病院の病院長への病院歯科に関する質問紙調査³⁾

232 名の病院長に質問紙を送付し 86 名から回答が得られた（回答率：37.1%）。病院歯科に最も期

待する歯科業務は、医科入院患者の一般歯科治療・口腔衛生管理（40.7%）であった（表 1）。歯科があることの最も重要な利点は、医療の質の向上への貢献が最も多く（68.6%）、最も改善してほしいこととしては、収益性の向上であった（25.6%）（表 2）。歯科の必要度の中央値は 10 [8-10] であった（0：まったく必要ない～10：必要不可欠）。病院歯科を増やすために必要なものは、診療報酬による裏付け（48.8%）、次に病院歯科の有効性を示すデータ（23.3%）という回答が多かった（表 3）。

2) 病院歯科が回復期リハビリテーション病棟入院患者の食事摂取状況に与える影響

歯科医師が在籍する A 病院と歯科医師が非在籍の B 病院において、それぞれ 333 名と 89 名の回復期リハビリテーション病棟入院患者が対象となった。A 病院の対象者は B 病院と比較して、全体的に入院時から有意に良好な全身状態であった。そのため、年齢、BMI、FIM 運動・認知、OHAT-J、FILS ≥ 8 か否か（全て入院時）、について傾向スコアマッチングを行い、背景因子の似た対象者を抽出して解析を実施した。その結果、各病院からそれぞれ 77 名の対象者が選ばれた。A 病院は、退院時 FILS ≥ 8 の割合（72.7% vs 55.8%）、言語聴覚士の介入率（77.9% vs 58.4%）と歯科医師の介入率（100% vs 11.7%）、入退院時の機能歯数（0 [0-0] vs 0 [0-0]）が有意に高かった。A、B 病院の対象患者を合わせた多変量ロジスティッ

表 1 病院長が認識している歯科業務と最も期待する歯科業務³⁾

設問項目	回答内容	N (%)	95% CI
歯科業務の認識 (n=86, 複数選択あり)	外来患者の一般歯科治療・口腔衛生管理	57 (66.3%)	56-76%
	医科入院患者の一般歯科治療・口腔衛生管理	82 (95.3%)	91-100%
	摂食嚥下リハビリテーション	55 (64.0%)	54-74%
	外傷・炎症・難拔牙等の口腔外科的処置・手術	58 (67.4%)	58-77%
	歯科訪問診療	21 (24.4%)	15-33%
	研究などの学術活動	31 (36.0%)	26-46%
最も期待する歯科業務 (n=86)	外来患者の一般歯科治療・口腔衛生管理	9 (10.5%)	4-17%
	医科入院患者の一般歯科治療・口腔衛生管理	35 (40.7%)	30-51%
	摂食嚥下リハビリテーション	11 (12.8%)	6-20%
	外傷・炎症・難拔牙等の口腔外科的処置・手術	20 (23.3%)	14-32%
	歯科訪問診療	1 (1.2%)	0-3%
	研究などの学術活動	0 (0%)	0-0%
	無回答	10 (11.6%)	5-18%

表2 病院長が考える歯科の利点と改善してほしいこと³⁾

設問項目	回答内容	N (%)	95% CI
歯科があることの最も重要な利点 (n=86)	医療の質向上への貢献	59 (68.6%)	59-78%
	他の病院との差別化	2 (2.3%)	0-6%
	摂食嚥下・栄養サポートの充実	15 (17.4%)	9-25%
	地域医療連携の推進	7 (8.1%)	2-14%
	院内職員の教育・啓発	0 (0%)	0-0%
	地域の医療従事者の教育・啓発	0 (0%)	0-0%
	収益性	0 (0%)	0-0%
	その他	1 (1.2%)	0-3%
	無回答	2 (2.3%)	0-6%
歯科に最も改善してほしいこと (n=86)	医療の質向上への貢献	13 (15.1%)	8-23%
	他の病院との差別化	5 (5.8%)	1-11%
	摂食嚥下・栄養サポートの充実	11 (12.8%)	6-20%
	地域医療連携の推進	9 (10.5%)	4-17%
	院内職員の教育・啓発	9 (10.5%)	4-17%
	地域の医療従事者の教育・啓発	4 (4.7%)	0-9%
	収益性	22 (25.6%)	16-35%
	その他	7 (8.1%)	2-14%
	無回答	6 (7.0%)	2-12%

ク回帰分析の結果、退院時 FILS ≥ 8 に対する有意な独立変数は、BMI, FILS, FIM 運動, OHAT (すべて入院時)、言語聴覚士と歯科医師の介入であった。なかでも、歯科医師介入のオッズ比は 10.33 であった。

3) 入院患者に対する病院歯科活動内容の把握と適正人員配置に関わる多機関共同研究

参加する 11 施設から 1,458 名 (延べ 3,761 名) の対象者のデータが得られた。そのうち 65 歳以上の高齢者は 1,298 人 (89.0%) であった。各期における歯科医療従事者介入負担の違いは「歯科医師」と「歯科医師>歯科衛生士」の占める割合で表すと、急性期は 61.6%, 回復期は 50.0%, 維持期・慢性期は 20.4%, 終末期は 62.8% であった。また急性期は歯科診察室 (46.8%) と病棟 (53.2%) が同程度であり、回復期は歯科診察室での対応が多かった (61.6%)。維持期・慢性期と終末期は病棟での対応が多い結果となった (維持期・慢性期: 86.9%, 終末期: 94.6%)。歯科処置内容は、急性期は診察・処方が多く (29.1%), 回復期は義歯処置が多かった (23.5%)。維持期・慢性期は口腔衛生管理が多く (68.0%), 終末期は口腔衛生管理 (42.6%) と診察・処方 (24.8%) と外科処置 (19.4%)

表3 病院長が考える歯科併設病院を増やすために必要なこと (n=86)³⁾

回答内容	N (%)	95% CI
診療報酬による裏付け	42 (48.8%)	38-59%
病院歯科に勤務する人材の教育	9 (10.5%)	4-17%
医師の理解	5 (5.8%)	1-11%
病院勤務希望の歯科医師数増加	6 (7.0%)	2-12%
病院歯科の有効性を示すデータ	20 (23.3%)	14-32%
その他	2 (2.3%)	0-6%
無回答	2 (2.3%)	0-6%

が多い結果となった。

4. 結論

1) 日本老年歯科医学会員が所属する病院の病院長への病院歯科に関する質問紙調査³⁾

回答者である歯科が併設されている病院の病院長の多くは歯科が必要であると考えていた。彼らは医科入院患者の一般歯科治療・口腔衛生管理への対応を通して医療の質改善を歯科に期待しているため、病院歯科業務として取り入れ、収益性の改善と病院歯科の有効性をデータで示すことが病院歯科の普及に必要である。

2) 病院歯科が回復期リハビリテーション病棟入院患者の食事摂取状況に与える影響

歯科医師の介入は、回復期リハビリテーション患者の食事摂取状況の改善に寄与していた。嚥下調整食の摂取は食欲不振や低栄養、サルコペニアと関連があると報告されており、患者の健康状態を改善するためには、回復期リハビリテーション病棟に積極的に歯科が介入し、患者によりよい食形態を提供できるようにする必要がある。回復期への歯科医師介入増加には歯科訪問診療も有効だが介入患者件数が限られるため、介入数が大きく増加する病院歯科の開設はより有効な手段となる。

3) 入院患者に対する病院歯科活動内容の把握と適正人員配置に関わる多機関共同研究

対象の病院歯科が対応する医科入院患者のほとんどが高齢者であったため、病院歯科は高齢者歯科医療を実践する場であることが示された。また急性期や終末期は歯科医師の必要度が高く、歯科医師の配置が必要であることが示唆された。急性期は周術期等口腔機能管理が関連していると考えられる。終末期は積極的な歯科処置が実施しにくい状況ではあるものの、病棟往診による歯科医師の診察・処方が必要であり、また口腔内環境が悪化するために歯科衛生士の口腔衛生管理も必要であることが示唆された。回復期は歯科医師と歯科衛生士双方の必要性があり、歯科診察室での歯科処置の必要性が高い結果となり、十分な歯科処置が実施可能な設備と歯科医師と歯科衛生士双方の人員が必要であることが示唆された。維持期・慢性期は病棟往診の口腔衛生管理の必要性が非常に高い結果となり、歯科衛生士の必要性が高いことが示唆された。

医療の質を向上するために医科入院患者に対応する病院歯科が病院長から求められており、対象医科入院患者のほとんどが高齢者であった。高齢社会が進展する日本において、各期を通じて入院高齢者に対応する高齢者対応型病院歯科の必要性が高いことが示唆された。急性期から終末期までシームレスな歯科介入が必要である¹⁰⁾。

エビデンスを集積してインセンティブを獲得していくことが病院歯科の普及・発展に必要である。まずその足掛かりとして、病院歯科は病院の持つ役割によって求められる役割が異なることを、病

院歯科に関わる、歯科も含めた医療従事者らが認識し、病院機能に応じて歯科医療従事者の配分や設備などを検討し、社会から必要とされる歯科対応を十分提供できる体制を作っていくことが必要である。今回のプロジェクト研究でそれに資する結果を明らかにすることができた。



本稿に関連し、開示すべき利益相反はない。

文 献

- 1) 厚生労働省. 令和2年患者調査. https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00450022&tstat=000001031167&cycle=7&tclass1=000001166809&tclass2=000001166811&tclass3=000001166812&tclass4=000001166813&stat_infid=000032212004&tclass5val=0 (2023年10月26日).
- 2) Dai, R. Lam, O.L. Lo, E.C. Li, Y. Wen, Y. McGrath, C.: Orofacial functional impairments among patients following stroke: a systematic review, *Oral diseases*, 21: 836~849, 2015. doi: 10.1111/odi.12274
- 3) 大野友久, 岩佐康行, 梅田慈子, 金森大輔, 貴島真佐子ほか: 日本老年歯科医学会が所属する病院の病院長への病院歯科に関する質問紙調査, *老年歯科医学*, 37: 320~328, 2023.
- 4) Tsuji, T., Sonoda, S., Domen, K., Saitoh, E., Liu, M., et al.: ADL structure for stroke patients in Japan based on the functional independence measure, *Am J Phys Med Rehabil*, 74: 432~438, 1995. doi: 10.1097/00002060-199511000-00007.
- 5) Kunieda, K., Ohno, T., Fujishima, I., Hojo, K., Morita, T.: Reliability and validity of a tool to measure the severity of dysphagia: the Food Intake LEVEL Scale, *J Pain Symptom Manage*, 46: 201~206, 2013. doi: 10.1016/j.jpainsymman.2012.07.020.
- 6) Chalmers, J.M., King, P.L., Spencer, A.J., Wright, F.A.C., Carter, K.D. The oral health assessment tool - validity and reliability. *Aust Dent J*, 50: 191~199, 2005. doi: 10.1111/j.1834-7819.2005.tb00360.x.
- 7) Maekawa, K., Ikeuchi, T., Shinkai, S., Hirano, H., Ryu, M., et al.: Number of functional teeth more strongly predicts all-cause mortality than number of present teeth in Japanese older adults, *Geriatr Gerontol Int*, 20: 607~614, 2020. doi: 10.1111/ggi.13911.
- 8) Shimizu, A., Fujishima, I., Maeda, K., Murotani, K., Kayashita, J., et al.: Texture-modified diets are associated with poor appetite in older adults who are admitted to a post-acute rehabilitation hospital, *J Am Med Dir Assoc*, 22: 1960~1965, 2021. doi: 10.1016/j.jamda.2021.05.018.
- 9) Shimizu, A., Fujishima, I., Maeda, K., Murotani, K., Ohno, T., et al.: Association between food texture levels consumed and the prevalence of malnutrition and sarcopenia in older patients after stroke, *Eur J Clin Nutr*, 76: 1576~1582, 2022. doi: 10.1038/s41430-022-01126-1.
- 10) 大野友久: 高齢者に対する医療連携型病院歯科の必要性と課題, *老年歯科医学*, 38: 43~47, 2023.

Survey for Promoting Hospital Dentistry Contributing to Medical and Community Cooperation for Older Adults

Tomohisa OHNO^{1,3)}, Yasuyuki IWASA^{1,4)}, Yoshiko UMEDA^{1,5)}, Daisuke KANAMORI^{1,6)},
Masako KISHIMA^{1,7)}, Hideo SAKAGUCHI^{1,8)}, Koichiro MATSUO^{1,9)},
Yasutomo MOTOHASHI^{1,10)}, Kenichiro OZAKI^{1,11)}, Shunsuke MINAKUCHI^{2,12)}

¹⁾ Hospital Dentistry Committee of Japanese Society of Gerodontology

²⁾ President of Japanese Society of Gerodontology

³⁾ Department of Dentistry, Hamamatsu City Rehabilitation Hospital

⁴⁾ Department of Dentistry, Haradoi Hospital

⁵⁾ Department of Dentistry, Seirei Mikatahara General Hospital

⁶⁾ Department of Dentistry, Fujita Health University Nanakuri Memorial Hospital

⁷⁾ Department of Dentistry, Wakakusa-Tatsuma Rehabilitation Hospital

⁸⁾ Department of Dentistry, Ryohoku Hospital

⁹⁾ Department of Oral Health Sciences for Community Welfare, Graduate School of Medical and Dental Sciences, Tokyo Medical and Dental University

¹⁰⁾ Department of Dentistry, Musashimurayama Hospital

¹¹⁾ Department of Rehabilitation Medicine, Ashikaga Red Cross Hospital

¹²⁾ Gerodontology and Oral Rehabilitation, Graduate School of Medical and Dental Sciences, Tokyo Medical and Dental University

abstract

Many older adult inpatients require oral health care management in acute, convalescent, chronic, and end-of-life stages. As society is aging, it has become necessary to promote generalized hospital dentistry that is designed to accommodate the needs of older adults through medical cooperation. However, this is limited by the supply of hospital dentistry. A growing number of community dental clinics provide a dental visit service to hospitals; however, they are not permanently based within the hospital. Three studies were conducted with the aim of promoting hospital dentistry for older adults: (i) a survey of hospital directors concerning the role of hospital dentistry, (ii) an assessment of patients' food intake status in a convalescent rehabilitation ward, and (iii) a multi-institutional study of characteristics of hospital dentistry for hospitalized patients to elucidate differences in acute, convalescent, chronic, and end-of-life phases. In (i), most hospital directors of hospitals with dental facilities believed that hospital dentistry was necessary and expected hospital dentistry to improve the quality of healthcare through general dental treatment and oral hygiene management of medical inpatients. However, data demonstrating improved profitability and effectiveness were needed. In (ii), dentists' interventions with convalescent rehabilitation patients had a bigger contribution to achieving oral intake than a texture-modified diet, which is associated with anorexia, malnutrition, and sarcopenia. The establishment of hospital dentistry is an effective option for intervention in the convalescent phase. Finally, in (iii), most of the medical inpatients in this study were older adults. Dentists were more necessary for acute and end-of-life phases. The convalescent phase placed an approximately equal burden on dentists and dental hygienists. Moreover, there was an increased need for dental procedures in the dental examination room. These findings suggest the need for adequate facilities and both dentists and dental hygienists. In addition, the chronic phase resulted in a high need for oral hygiene management, especially dental hygienists, in the hospital ward. Overall, our findings suggest that hospital dentistry is necessary in Japan, where the aging society is progressing, to engage with older adult inpatients through medical collaboration.

keywords : Medical-Dental Cooperation, Oral Management, Older Adult, Hospital Dentistry, Inpatient

学際交流

第39回歯科医学を中心とした総合的な研究を推進する集い

開催日：令和6年1月26日（金）

会 場：歯科医師会館1階大会議室

主 催：日 本 歯 科 医 学 会

『歯科医学を中心とした総合的な研究を推進する集い』

解説／日本歯科医学会常任理事 末瀬一彦

この「集い」は、臨産学の学術的な交流を通じて、新しい研究部門の開拓と研究組織の結成を推進するとともに、臨産学が協同してその具現化を図ることを目的にしている。昭和59年（1984年）に第1回が開催されて以来、原則的に毎年定期的に開催されてきた40年近い歴史のあるイベントである。令和6年（2024年）は「第39回の集い」として、令和5年7月に全国歯科大学・歯学部、都道府県歯科医師会、全国医科大学・医学部などに演題募集を行い、9月22日に応募が締め切られた。締め切り日までに計7演題の応募があり、日本歯科医学会学術研究委員会において臨産学協同を含めた学際的分野との交流を通して、お互いの研究者がジャンルを超えて、強調してグループを作ることができる内容であること、異なる視点から新しい要素を加えて、研究の活性化を図ることができる内容であることを考慮して、審査が行われ、7演題すべてが選択された。

「第39回の集い」は令和6年1月26日（金）午前10時から日本歯科医師会会館1階大会議室において開催され、日本歯科医学会 小林隆太郎副会長の開会の辞、日本歯科医学会 住友雅人会長の主催者挨拶、日本歯科医学会 末瀬一彦常任理事の経過報告の後、各演者30分の講演、10分の質疑応答で進行された。発表はいずれも専門性の高い、先進的な素晴らしい内容で、会場からも建設的な指摘、質問などが多く、講演者と参加者との距離が短く感じられる意見交換が行われた。

当日の発表者及び演題は下記のとおりである。

1. 口腔疾患と認知症 ～歯周病、歯の喪失、咀嚼機能障害等、病態別に異なる認知症増悪メカニズム～
演者：道川 誠
（日本歯科大学新潟生命歯学部 高齢者医療学）
2. 薬剤関連顎骨壊死の新規治療法の開発
演者：三田 公啓
（九州大学大学院歯学研究院 インプラント・義歯補綴学）
3. キトサン含有新規抗菌歯科材料の開発に向けた、口腔内

微生物に対するキトサンの抗菌活性と有用性の探索

演者：三浦 滉毅

（鹿児島大学学術研究院医歯学域歯学系 歯科保存学）

4. 人生を通じた口腔機能管理を行うことを目的とした顎関節症に関する研究

演者：島田 淳

（医療法人社団グリーンデンタルクリニック）

5. 機械学習搭載アプリケーションを導入したスマートフォンは口腔機能評価ツールとして実装可能か？

演者：山本 祐士

（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 小児歯科学）

6. 電子瞳孔計を用いた自律神経機能評価を舌痛症の診断と治療に応用する

演者：岡安 一郎

（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 歯科麻酔学）

7. がん支持療法としての口腔粘膜炎に対する漢方薬物療法のメカニズム解明

演者：王 宝禮

（大阪歯科大学 歯科医学教育開発センター）

講演者の発表がすべて終了した後、「第30回の集い」からの企画として、当日の発表に関して「斬新性」「広範性」「新規性」「進展性」「現実性」などについて総合的に評価し、厳正なる審査を行い、特に優秀な4演題を「優秀発表賞」として表彰する。

なお、優秀発表賞の授賞者には、賞状と記念品を授与する。授賞者の発表は、令和6年2月中旬に授賞者への通知をもってお知らせするとともに、日本歯科医学会ホームページおよび次ページ以降にすべての演題の事後抄録も掲載している。本誌はオンラインジャーナルとして日本歯科医学会ホームページ上でも無料公開している。

最後になりましたが、企画、運営されました日本歯科医学会学術研究委員会の諸兄ならびに本集いに積極的に応募、発表していただいた先生方に衷心より感謝申し上げます。



（開会の辞）
副会長
小林隆太郎



（挨拶）
会 長
住友 雅人



（経過報告）
常任理事
末瀬 一彦



（閉会の辞）
副会長
川口 陽子



会場の様子

1. 口腔疾患と認知症 ～歯周病，歯の喪失，咀嚼機能障害等， 病態別に異なる認知症増悪メカニズム～

道川 誠

日本歯科大学新潟生命歯学部 高齢者医療学講座

①研究の背景（これまでの実績を含む）と目的

【背景】 歯周病，歯の欠損，咀嚼機能低下などと認知症・アルツハイマー病との関連が数多くの疫学研究によって指摘されている。しかし，両者の関係を明らかにした基礎・臨床研究は十分ではなく，両者の因果関係の分子基盤は明らかではない。

【業績】 演者は，1986年より国立長寿医療研究センター・アルツハイマー研究部で室長・部長を務め，長年にわたり我が国のアルツハイマー病研究を牽引してきた。加えて，2011年からは歯周病，歯の欠損，咀嚼機能障害がアルツハイマー病発症を促進する分子メカニズム解明に関する研究を開始し，多くの論文を発表してきた。現在，日本歯科大学（新潟）に移り，「歯科と認知症」研究を継続している。

【目的】 歯周病，歯の欠損，および咀嚼機能低下がそれぞれアルツハイマー病分子病態ならびに認知機能障害にどのように影響し，その分子基盤は何かを明らかにすることを目的とする。また，これら歯科疾患の治療介入によるアルツハイマー病発症予防・進行予防効果を検証することを目的とする。

②研究内容の斬新性

歯周病，歯の欠損，および咀嚼機能低下などと認知症・アルツハイマー病との関連をアルツハイマー病モデルマウスを使って検討し，その因果関係を疾患別に明らかにした。ア）歯周病は脳内炎症を増悪させ，そのためにアルツハイマー病の原因分子 A β の脳内沈着を増悪させて発症を早めた。イ）一方，抜歯や咀嚼機能低下でも認知機能低下を招いたが，アルツハイマー病分子病態には影響しなかった。その代わり海馬の神経細胞脱落を誘

導した。ア，イ）の分子メカニズムも解明したが紙面の関係で省略する。脳と口腔疾患をむすぶ分子基盤を明らかにした点に斬新性，創造性がある。

③研究の発展性・進展性

歯科と認知症の研究は，アルツハイマー病の動物モデルを使用した我々の研究によってその基本的なところは終了したが，(1)まだメカニズムの詳細は不明なところもあり，基礎研究のさらなる進展が必要である。更に，(2)歯科疾患の治療によるアルツハイマー病など認知症の発症予防・進行予防効果を，臨床介入試験により証明する必要がある。いつまでも可能性だけ論じている場合ではない。

④関連領域とのグループ形成の有用性

(1)基礎研究のさらなる進展が必要である。例えばなぜ抜歯による三叉神経求心路の刺激低下が海馬神経脱落に至るのか，咀嚼機能低下は高齢者の脳機能低下のみならず脳の発達にも影響するのか，などの研究には，共同研究グループを形成することで，重層的，多角的な研究の進展が期待できる。

(2)臨床介入研究には多施設による協力体制が必要である。

希望する協力分野

(1)メカニズム解明のために基礎系の研究分野，
(2)臨床介入研究のために歯周病学，補綴歯科学，咬合機能学など歯周病，歯の欠損，咀嚼機能に関連する臨床分野

連絡先：〔電 話〕025-267-8129（ダイヤルイン）

〔E-mail〕mmichi@ngt.ndu.ac.jp

2. 薬剤関連顎骨壊死の新規治療法の開発

○ 三田公磨, 田崎萌亜, 鮎川保則

九州大学大学院歯学研究院 口腔機能修復学講座
インプラント・義歯補綴学分野

①研究の背景(これまでの実績を含む)と目的

ビスホスホネート製剤をはじめとする骨吸収抑制薬の投与後に発症する難治性の顎骨壊死は薬剤関連顎骨壊死(MRONJ)と呼ばれている。MRONJの詳しい発症メカニズムはいまだ明らかになっておらず、確立した根治的な治療法がないのが現状である。我々は、脂質異常症治療薬であるスタチンの多面的作用に着目し、先行研究においてスタチンの投与によってMRONJ症状の治癒が促進されることを報告した(Sanda et al. *J Periodontol.* 2021)。しかし、その細かいメカニズムについては未だ解明できていない。そこで本研究では、スタチン投与がMRONJの治癒にどのように寄与するのかを明らかにし、臨床応用への道筋をつけることを目的とする。

②研究内容の斬新性

我々は、先行研究においてMRONJ症状を発症したモデルラットにスタチンを局所投与することでMRONJ症状の治癒が促進されることを確認した。これまでスタチンの投与による上皮の治癒促進や骨形成の促進に関する細かいメカニズムは多数報告されているが、MRONJ症状の特徴的な所見である壊死骨が、スタチン投与によって消失するメカニズムは明らかになっていない。本研究で

は、MRONJにおける壊死骨の吸収に対するマクロファージやサイトカインの関与に着目している。

③研究の発展性・進展性

アメリカ口腔顎顔面外科学会が提唱するMRONJに関するポジションペーパーにおいても、MRONJの治療法は対症療法のみである。すなわち、現在MRONJに対する根治的な治療法はなく、新規治療法の確立は急務であると考ええる。本研究によって、MRONJに対するスタチンの治療効果のメカニズムを解明することで、MRONJの新規治療法開発の引き金となり得ることを確信している。

④関連領域とのグループ形成の有用性

MRONJの治療に最も携わっている口腔外科学分野、炎症状態から治癒までの過程におけるスタチンの作用メカニズムに関する免疫学分野および薬学系分野、これらの専門領域とグループを形成することは、MRONJに対するスタチンの治療メカニズムの解明に有用であると考えている。

希望する協力分野

口腔外科学分野, 免疫学分野, 薬学系分野
連絡先: [電話] 092-642-6441

[E-mail] ko-ma@dent.kyushu-u.ac.jp

3. キトサン含有新規抗菌歯科材料の開発に向けた、 口腔内微生物に対するキトサンの抗菌活性と有用性の探索

○ 三浦滉毅¹⁾，中田匡宣²⁾，西谷佳浩¹⁾

¹⁾ 鹿児島大学学術研究院医歯学域歯学系 歯科保存学分野

²⁾ 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 口腔微生物学分野

①研究の背景（これまでの実績を含む）と目的

超高齢社会において、口腔常在真菌である *Candida albicans* は、日和見感染症を惹起し、歯科領域では、義歯性カンジダ症や重度う蝕を増悪させる報告があり、口腔内での抗菌性材料の需要が高まっている。一例として、う蝕に対して抗菌性を付与した歯科修復材料の開発が行われているが、臨床応用に至ったものは国内外通じて少ない。この材料への抗菌性付与という着想を得て、口腔内全体の抗菌付与に貢献できる新規材料を開発し、歯科治療全般に応用できないかという着想に至った。そこで、発表者は複数種の甲殻類（イカとカニ）由来の抗菌活性を示す D- グルコサミン重合体であるキトサンに着目した。本研究では、費用対効果と抗菌活性が高く、抗菌スペクトラムが広いキトサンを検索し、歯科治療全般に広く応用可能なキトサン含有新規歯科材料の開発に応用することを検討する。

②研究内容の斬新性

生体親和性と抗菌性を具備するキトサンを口腔領域に応用し、国内外で製品化されていないキトサン含有歯科材料を開発するという試みには斬新性がある。そして、原材料やキトサン内在性要素の違いが口腔内微生物に対する抗菌活性に影響するかについての検討には独自性がある。また、日

本で豊富に採れる海産物から廃棄される原料からキトサンを安価に精製できるという利点もある。本研究の目的が達成されれば、社会貢献につながり学術的、社会的にも波及効果が高いと考える。

③研究の発展性・進展性

キトサンの口腔内微生物に対する抗菌活性、作用機序を本研究で解明し、抗菌活性・生体親和性を具備する新規歯科材料の開発・臨床応用を目指す。さらには、他分野でのキトサン応用の発展に寄与できると考える。

④関連領域とのグループ形成の有用性

本研究でキトサンが抗菌活性・生体親和性を有する材料であることを示し、工学系、医学系などの他領域と連携することで、新たな別の視点から社会で必要とされる新規抗菌材料の開発につながると考える。また、組織工学・理工学分野と連携してキトサンの抗菌活性機構のさらなる解明を目指す。

希望する協力分野

組織工学分野，理工学分野，医工学分野

連絡先：〔電 話〕 099-275-6192

〔E-mail〕 k0582463@dent.kagoshima-u.
ac.jp

4. 人生を通した口腔機能管理を行うことを 目的とした顎関節症に関する研究

島田 淳

医療法人社団グリーンデンタルクリニック

①研究の背景（これまでの実績を含む）と目的

現在歯科では、小児期には口腔機能発達不全症、高齢期には口腔機能低下症への対処が行われているが、成人期の口腔機能については問題とされていない。一方、顎関節症は成人に好発する顎機能障害であるが、口唇閉鎖力、舌圧など口腔機能についての評価は行われていない。しかし顎関節、咀嚼筋は咀嚼、嚥下、発音など口腔機能に関わることから、筆者は顎関節症を、成人期の口腔機能障害として捉え、20歳～50歳代の成人期顎関節症患者における顎関節症治療前後の口唇閉鎖力、舌圧を測定した。その結果、治療前に多くの被験者で基準値より低い値を示し、症状改善後も基準値よりも低い者がほとんどであったことを第35、36回日本顎関節学会学術大会、第29回日本学校歯科保健・教育研究会にて報告した。顎関節症は心理社会的要因が関与するとされており、成人では口腔機能の問題が体力的なもので補われ、そこに心理社会的要因、咬合などの問題が加わると顎関節症などの機能障害を引き起こすのではないかと考えられる。そこでこれを口腔機能変調症として捉え、対処することで、歯科における人生を通した口腔機能管理が可能となり、健康寿命を伸ばすことに繋がると考える。そのために多職種連携により、顎機能と口腔機能を様々な場面で広くスクリーニングを行い、成人期の口腔機能障害を発見し、早期の口腔機能管理を可能とすることで、成人期からの口腔機能の向上、維持に寄与する事を目的とする。

②研究内容の斬新性

これまで成人期の口腔機能へのアプローチはなされていない。しかし筆者の調査では成人期より顎関節症と結びつき口腔機能低下が生じている可

能性が高い。これを多職種連携により、広く調べることで、小児期、高齢期の口腔機能管理だけでなく、成人期における口腔機能管理の重要性を明らかにできる。

③研究の発展性・進展性

成人期の顎関節症で舌圧低下がみられたことと、隠れ顎関節症（自覚症状のない顎機能障害）が1,900万人程度と試算されることから、顎機能と舌機能を簡便に確認するため、開口時指が縦に3本入るか、舌の前方運動が適切にできるかを学校教育、施設、歯科検診、歯科医院でのメンテナンス時、あるいは整形外科などのリハビリの現場、隣接医学で、広くスクリーニングすることで成人期の口腔機能を把握する。口腔機能障害の初期段階では、適切なセルフケアで機能改善が見込まれることから、早期に介入することで健康寿命を伸ばすことにつながられる。

④関連領域とのグループ形成の有用性

学校教育、施設、開業歯科医および整形外科リハビリテーション、内科、耳鼻科など歯科の隣接医学領域での情報共有を行うことで、口腔機能障害を早期にスクリーニングし、口腔機能の問題を見つけだし、適切なセルフケア指導を行うことで、健康寿命の延長に寄与できる。

希望する協力分野

理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、歯科衛生士、看護師、耳鼻科医、整形外科医、内科医、小中高等学校教員、養護教員

連絡先：〔電話〕03-3261-0418

〔E-mail〕23ashimada@gmail.com

5. 機械学習搭載アプリケーションを導入したスマートフォンは口腔機能評価ツールとして実装可能か？

○山本祐士¹⁾，辻井利弥¹⁾，橋口真紀子¹⁾，佐藤秀夫²⁾

¹⁾ 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 小児歯科学分野

²⁾ 鹿児島大学病院発達系歯科センター 小児歯科

①研究の背景（これまでの実績を含む）と目的

小児期において、摂食嚥下機能を含む口腔機能は著しく発達し、発達段階に応じた評価・介入が必要不可欠である。本研究室では、非接触型モーションキャプチャシステムを用い、再現性を担保しつつ、口腔機能を定量評価することに成功した。本研究では、これまで蓄積したノウハウを基に、口腔機能の評価・介入が可能となる機械学習搭載アプリケーションをスマートフォンに実装することで、口腔機能評価ツールとして臨床応用を目指す。

②研究内容の斬新性

本研究室では、企業（株式会社モアソングジャパン、浜松市）と共同研究契約を締結して研究基盤となる機械学習搭載アプリケーション（<https://apps.apple.com/jp/app/おうちトレーナー/id6443540195>）を開発した（図）。アプリケーションを起動し、スマートフォンのインカメラにより食事の様子を撮影することで、食事時間や咀嚼回数等を測定し評価できる。本研究の斬新性は、機械学習により咀嚼機能を含めた口腔機能の評価が

可能なアプリケーションを汎用性の高いスマートフォンに実装する点にある。

③研究の発展性・進展性

発展性・進展性として、測定により得られたパラメータと実測値との相関関係を明らかにすることで、正確性や再現性を検証し、測定機器としての確立を目指す。そして、小型・低コストかつ非侵襲的である点を活かし、病院や施設等で測定を実施し、ビッグデータの獲得が期待される。さらに、横断的なデータのみならず、長期的な運用により縦断的なデータの取得も可能である。

また、顎運動や嚥下動態、発音時の筋活動や音声データを同時取得・同期可能なプラットフォームを作製し、AIによる分析により口腔機能評価や介入方法を提案することで、多施設・多職種間での連携を促進して、歯科医療のDX化の推進ならびに患者のQOL向上に寄与できる。

④関連領域とのグループ形成の有用性

本アプリケーションを実装し活用するため、医療機器としての展開を目標としており工学領域との連携が必要である。また、企業との連携により、口腔機能への意識の向上ならびに長期的な使用を想定した機能やデザインを付与することも検討中である。アプリケーションの活用により、オーラルフレイル予防を含めた健康面のサポートも実現可能である。

希望する協力分野

機械学習・情報通信・画像診断機器・計測関連の工学分野、アプリケーション開発やヘルスケア、食品、デザインに関連する企業

連絡先：〔電 話〕099-275-6262

〔E-mail〕y-yushi@dent.kagoshima-u.ac.jp



図 共同研究により開発したアプリケーション「おうちトレーナー」

6. 電子瞳孔計を用いた自律神経機能評価を 舌痛症の診断と治療に応用する

○岡安一郎，達 聖月，鮎瀬卓郎，和氣裕之，角 忠輝

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科 歯科麻酔学分野

①研究の背景（これまでの実績を含む）と目的

舌痛症の病態に神経障害性疼痛が関与している可能性が示唆されていることから，われわれはこれまで定量的感覚検査（Quantitative Sensory Testing：QST）を用いて，その診断と評価へのQSTの応用を模索してきた（Okayasu et al 2024）。一方，その病態を歯科心身症あるいは痛覚変調性疼痛として捉えて，心身医学的治療や漢方薬で対応が可能なケースも多い（Okayasu et al 2023）。そこで，心身相関に関与する自律神経機能に着目し，電子瞳孔計を用いた対光反射の応答（瞳孔反応）を分析することで，舌痛症の評価と治療効果を検証することを目的とした。

②研究内容の斬新性

舌痛症の病態は不明であることから，その診断と治療は未だ確立されていない。

これまで，運動機能（瞬目反射）やQSTを用いた感覚機能に着目した舌痛症研究が行われてきたが，未だ臨床応用には到っていない。運動機能，感覚機能に代わり，今回新たに，自律神経機能に着目し，瞳孔反応を詳細に分析する（主観に紐づいたデータを取得する）ことで，（主観的な）痛みの客観化，可視化が可能となる。

③研究の発展性・進展性

「舌痛症の病態には神経障害性疼痛が関与しているのか？痛覚変調性疼痛と捉えるのが妥当なのか？」という議論について，われわれがこれまで

行ってきたQSTの研究手法に，今回提案する自律神経機能評価を加えることで，一つの結論が導ける。また，舌痛症の診断と治療評価の新たなツールとして，電子瞳孔計を用いた自律神経機能検査の有用性を検証し，臨床応用を目指していく。

④関連領域とのグループ形成の有用性

舌痛症は身体・精神・社会的モデルとしてトータルから診ていくことが重要なため，医科歯科連携が必須である。確立した診断方法もないため，確かな検査手法の開拓が求められており，産学官連携を必要とする。

文 献

- 1) Okayasu I, Tachi M, Ayuse T, Wake H, Komiyama O, De Laat A. Age differences in pain sensitivity and effect of topical lidocaine on the tongue in healthy female subjects. J Oral Sci, 2024, 66, 26-29.
- 2) Okayasu I, Tachi M, Suzue E et al. A case report of burning mouth syndrome with dry mouth managed by kampo medicine. Anesth Prog, 2023, 70, 134-136.

希望する協力分野

心身医学，漢方医学，東洋医学，工学

連絡先：〔電 話〕095-819-7714

〔E-mail〕okayasu@nagasaki-u.ac.jp

7. がん支持療法としての口腔粘膜炎に対する 漢方薬物療法のメカニズム解明

王 宝禮

大阪歯科大学 歯科医学教育開発センター

①研究の背景（これまでの実績を含む）と目的

支持療法とは、がんに伴う症状や、治療によって起こる副作用に対して、予防的な対策や症状の軽減を目的として行う治療である。本研究では、がん支持療法としての口腔粘膜炎に対して4種の漢方薬（半夏瀉心湯、黄連湯、茵陳蒿湯、平胃散）の抗炎症作用メカニズムの解明を目的とし、新しい可能性を探求する。

②研究内容の斬新性

4種の漢方薬の中で黄連湯が口腔扁平上皮がん培養細胞の増殖抑制能が高く、黄連湯に含まれる生薬成分の黄連、半夏、人參、甘草、桂皮、乾姜、大棗の抽出物質ががん創薬発見の可能性がある。

③研究の発展性・進展性

化学療法を受ける患者 40%，分子標的薬 mTOR 阻害薬：60～70%，造血幹細胞移植患者（大量化学療法）80%，頭頸部がん放射線化学療法 100% が口腔粘膜炎を誘発する。本研究から4種の漢方

薬には炎症性サイトカインの産生抑制作用をもつことが示唆された。漢方薬の抗炎症作用は未病の概念を科学的に説明できるかもしれない。つまり、口腔粘膜炎の発症率が高いことから、事前にごん治療を受ける前に漢方薬の投薬が有効であると考ええる。

④関連領域とのグループ形成の有用性

医療の進歩と共にがん患者の生存期間が延長するにつれて、がんや抗がん剤治療による有害事象と付き合う期間も延長する。つまり、がんにつながる諸症状に対してがん薬物療法専門医のみで網羅できる範囲を超えてしまったことから、本研究結果から多職種連携が今以上に重要になると考えられる。

希望する協力分野

口腔外科，がん専門医

連絡先：〔電 話〕080-8314-8944

〔E-mail〕ohoh@cc.osaka-dent.ac.jp

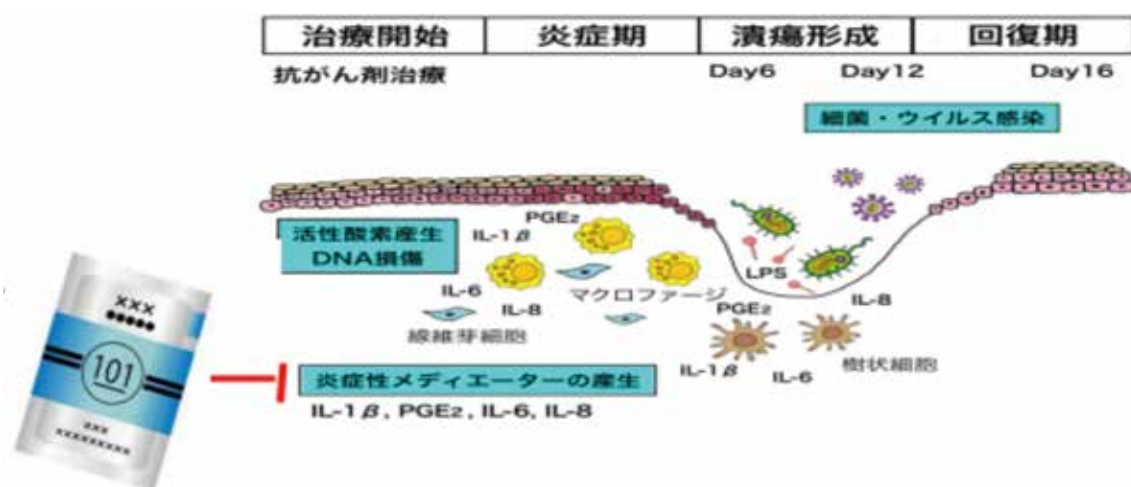


図 漢方薬の作用点

会務報告

日本歯科医学会

天野 敦雄

(日本歯科医学会総務理事)

令和5年度の本学会会務運営は、事業計画に基づき、幅広い諸施策を推進するとともに活発な事業展開を行った。

○医療問題の検討

歯科医療協議会（座長：小林隆太郎）は、学術的根拠に基づき社会保険医療の在り方を提言し、適切な診療報酬について検討を行うことを設置目的としている。

令和6年度診療報酬改定では、日本歯科医学会分科会から本学会へ104項目の医療技術評価提案書が提出され、歯科医療協議会により内容のブラッシュアップを行い、厚生労働省へ提出した結果、医療技術評価分科会にて、27項目が診療報酬改定において対応する優先度が高い技術として評価された。

現在、令和6年度改定において提出された提案書の内容の検証を行っている。

○歯科診療ガイドラインライブラリの整備

専門分科会および認定分科会が作成した歯科分野の診療ガイドラインを歯科診療の現場で広く活用できるよう、平成21年に「歯科診療ガイドラインライブラリー」を本学会ホームページ上に設置した。新たに、平成30年4月に「歯科診療ガイドラインライブラリ」に改名し、令和6年3月現在、32編の「診療ガイドライン」並びに60編の「その他の指針等」を掲載している。

また、歯科診療ガイドラインライブラリ協議会（座長：平田創一郎）では、Mindsが目指す診療ガイドラインを理解する・その実際の方法論を学ぶことを目的に、特定非営利活動法人日本コクランセンターの協力を得て、令和5年5月13日（土）に「系統的レビューワークショップ」（診療ガイドライン作成の実際と方向性）を開催した。講師は、日本コクランセンターの渡辺範雄氏、大田えりか氏、辻本康氏、歯科診療ガイドラインライブラリ協議会委員の蓮池聡氏で、参加者は23名であった。

○会員の顕彰

本学会最高の顕彰である日本歯科医学会会長賞の授賞式が第112回評議員会（令和6年2月20日（火）開催）において執り行われ、7名の方が受賞された。栄えある受賞

者は次のとおり。

(研究部門)

石井 信之（神奈川歯科大学教授）

井上 富雄（昭和大学名誉教授）

松村 英雄（日本大学特任教授）

(教育部門)

飯島 毅彦（昭和大学客員教授）

大川 周治（明海大学臨床教授）

小林 馨（鶴見大学名誉教授）

(地域歯科医療部門)

深井 穂博（埼玉県歯科医師会会員）

○日本歯科医学会誌の発行

本学会の機関誌である「日本歯科医学会誌」第43巻は、日本歯科医学会誌編集委員会（委員長：松野智宣）で、編集作業を行い、令和6年3月に発行した。本誌は第34巻（平成26年度）よりオンライン化へ完全移行され、本学会ホームページ上で利用者に無料公開している。

○The Japanese Dental Science Review の発行

本学会の英文機関誌「The Japanese Dental Science Review」は、インパクトファクター（IF）を取得し、レビュー誌として国際的に活躍する研究者のレビューを掲載している。

本誌は、年1巻のオンラインジャーナルとして、利用者にオンライン上で随時、レビューを無料公開している。

英文雑誌編集委員会（委員長：小見山 道）では、Vol.59（令和5年12月）の発行に向けて、その対応について検討した。

また、Clarivate Analytics 社より2023年6月に2022 JOURNAL IMPACT FACTOR が発表され、JDSRの初回IF値は6.6（歯科分野で5位／91誌）であった。

なお、JDSRは、Vol.60（令和6年12月発行予定）から日本歯科医師会との共同名義での発行となる。今後は、日歯・国際渉外部門の協力を得て、本誌を海外へ紹介、周知していくとともに、海外研究者からの投稿を促進していくことで、引用数を増やし、ひいてはIF値を上げていきたいと考えている。

○歯科学術用語の検討

ICD-11 の改訂に向けた対応として、厚生労働省国際分類情報管理室から令和5年8月2日付けで依頼を受けて、歯科学術用語委員会（委員長：川又 均）は日本口腔科学会と合同で ICD-11 の1用語についての追加和訳作業を行った。

本改訂については、ICD-10 以前から検討を行っている日本口腔科学会と協力体制をとりつつ作業にあたっている。

○学術研究の推進および実施

本学会事業の大きな柱である学術研究事業は、学術研究委員会（委員長：藤井一維）で、第39回「歯科医学を中心とした総合的な研究を推進する集い」（令和6年1月26日（金）開催）の発表演題（7題）の選考、企画および当日運営、優秀発表賞の選考、またプロジェクト研究事業について協議を行った。「優秀発表賞」は第30回（平成26年度）の“集い”より新設したもので、斬新性・広範性・進展性・現実性・共同研究性等の観点から発表内容を総合的に評価し、特に優秀な発表を行った4名に授与する（P.52

参照）。

プロジェクト研究事業は、事業計画の「重点計画－歯科医療への学術的根拠の提供」に基づき、歯科医学、医療の進歩発達を歯科医療現場に迅速へ導入することを目的として平成19年度に新設された公募型の競争的資金である。学術的かつ高度な研究結果を診療報酬改定時の新技術導入の一助となる研究課題や歯科医療を変える cutting-edge 研究を選考対象とするもので、分科会より申請のあった研究課題から慎重審議のうえ、プロジェクト研究課題（令和5年度）を選考した。

また、前述の公募型研究とは異なり、学会執行部が主体性をもって行う研究テーマについて、重点研究委員会（委員長：天野敦雄）で検討している。

日本歯科医学会の最重要課題である「2040年への歯科イノベーションロードマップ」を、さまざまな広報手段を駆使し、本学会から社会に効果的に発信する方法を引き続き検討し、また、2025年大阪・関西万国博覧会出展に向けて、「2040年への歯科イノベーションロードマップ」を実装させた出展内容の検討を併せて行っている。

令和5年度日本歯科医学会会長賞



令和5年度日本歯科医学会会長賞受賞者と本学会役員および評議員会正・副議長

（上段左から）天野総務理事，大島副議長，築瀬議長，小林副会長，川口副会長

（下段左から）松村英雄氏，井上富雄氏，石井信之氏，住友会長，飯島毅彦氏，大川周治氏，小林 馨氏，深井穂博氏

○専門分科会・認定分科会の資格審査

認定分科会の登録申請について、令和5年8月1日付にて公示し、8月31日に締め切ったところ、日本ヘルスケア歯科学会、日本全身咬合学会、日本顕微鏡歯科学会の3学会より登録申請があったことを受け、専門・認定分科会資格審査委員会（委員長：木本茂成）にて、日本歯科医学会規程、日本歯科医学会認定分科会承認基準に則り、登録申請学会から提出された日本歯科医学会認定分科会登録申請書等をもとに認定分科会への登録資格について審議を行い、令和6年1月23日に第2回理事会へ審査結果報告書を提出した。

また、専門分科会への加入申請について、令和5年8月1日付にて公示し、11月30日に締め切ったところ、日本歯科審美学会、日本口腔診断学会、日本口腔顔面痛学会、日本顎咬合学会、日本口腔腫瘍学会の5学会より加入申請があり、加入資格について審議を行っている。

○歯科医学研究等における研究倫理および利益相反（conflict of interest：COI）状態の適切な管理に向けた対応

歯科医学研究等の円滑な実施にあたっては、研究対象者等の尊厳や人権等を守るために、研究倫理に関する指針等の策定と遵守、ならびに当該指針等に基づき研究倫理審査委員会の設置が求められる。また、研究の公正性、信頼性の確保の観点から、研究者の利益相反について、その透明性を確保し適切に管理するための利益相反指針の策定と遵守、ならびに当該指針に基づき利益相反指針の設置が求められる。

本学会研究倫理審査委員会（委員長：林美加子）および利益相反委員会（委員長：関根秀志）で申請案件を審査し、会員の歯科医学研究等に係る研究倫理および利益相反状態を適切に管理するための対応を図るとともに、所属分科会に対しても必要な対応を要請している。

○働き方改革および歯科医療の新機軸の検討

前執行部の新歯科医療提供検討委員会（委員長：立浪康晴）の最終答申書（令和5年5月30日付）を基に、新歯科医療提供推進委員会（委員長：石田義幸）では、さまざまな地域における地域支援型多機能歯科診療所構想に資する情報を数多く収集し、経営、運用面を含めた幅の広い具体的な個別事例ならびに構想を示すことを目的とし、検討を行っている。今後は日本歯科医師会へ提案することをもって本委員会は終了する予定である。

○歯科におけるコンプライアンスについて

それぞれ使用されているカリキュラムの情報を全国的に得て、日本歯科医学会で改めて編集したものをすべての医育機関に提示することにより、コンプライアンス認識への均等化を図るとともに、大学間のコンプライアンス教育の

レベルを調整し、カリキュラムの完成度を上げることを目的に今期のコンプライアンス調査・普及委員会（委員長：大槻昌幸）を設置した。

本委員会では、前期委員会答申書の「コンプライアンスに関して歯科医療従事者が習得すべきカリキュラムの作成について」を基に諮問事項の検討を行っている。

○「口腔健康管理」および「オーラルフレイル」の定義定着について

「口腔健康管理」および「オーラルフレイル」の定義定着に関する協議会（座長：小林隆太郎）は、日本歯科医師会からの依頼の基づき、「口腔健康管理」および「オーラルフレイル」の定義定着、活性化に向けた対応について審議することを目的に設置した。

「口腔健康管理」チーム、「オーラルフレイル」チームに分かれ議論を行い、令和5年6月5日付で答申を行った。

○第25回日本歯科医学会学術大会の準備

第25回日本歯科医学会学術大会の準備は、川口陽子会頭、大川周治準備委員長および西郷巖事務局長のもと、計画概要および趣意書の作成、メインテーマおよびロゴマークを決定するなど基本的な準備作業を行い、続いて学術プログラムの編成等について検討を行っている。

□名 称

（和文） 第25回日本歯科医学会学術大会

（英文） The 25th Scientific Meeting of the Japanese Association for Dental Science

□メインテーマ

（和文） 歯科イノベーションによる新時代の創生

（英文） New Era Creation through Dental Innovation

□主 催

日本歯科医師会、日本歯科医学会

□後 援（予定）

文部科学省、厚生労働省、日本学術会議、日本医師会、日本医学会、神奈川県、横浜市

□会 期

2025年9月26日（金）、27日（土）、28日（日）

オンデマンド配信：10月1日（水）～10月31日（金）

□ 会場

パシフィコ横浜

□行 事

開会式、会長講演、会頭講演、特別講演、閉会式

講演、シンポジウム、e-ポスターセッション、国際セッション、市民セッションなど

□併催行事

日本デンタルショー 2025

専門分科会

一般社団法人 歯科基礎医学会

理事長 宇田川信之

<http://www.jaob.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第65回歯科基礎医学会学術大会は、日本大学を主管校として2023年9月16日～18日に日本大学駿河台キャンパスにて開催された。メインテーマは「偶儻不羈（てきとうふき）」として行われた。大会長は小林真之教授（日本大学歯学部薬理学講座）、準備委員長は篠田雅路教授（日本大学歯学部生理学講座）である。ロッテ基金特別講演では、特別講演1：隈部 肇先生（J-QuAD DYNAMICS／デンソー）から「自動運転へのAIの適用」、特別講演2：池谷裕二先生（東京大学大学院・薬学系研究科）から「脳をAIに接続したら何ができるようになるのだろうか」、特別講演3：石井 健先生（東京大学医科学研究所・感染免疫部門）「新しいワクチンサイエンスとデザイン」という題名でそれぞれ最新の話題をご提供いただいた。その他日本学術会議シンポジウム（市民公開講座）、日韓シンポジウム、先端歯学国際教育研究ネットワークシンポジウム、歯科イノベーションロードマップシンポジウム、メインシンポジウム、アップデートシンポジウム、教育講演が予定され、一般演題も口演66題、ポスター192題（モリタ優秀発表賞のエントリーは49題）の発表とともに活発な議論が行われた。

2. 学会活動について

2023年度歯科基礎医学会の主な事業は、①学術大会ならびに総会の開催、②歯科基礎医学会機関誌（Journal Oral Biosciences）の刊行、③歯科基礎医学会学会賞、歯科基礎医学会ライオン学術賞、歯科基礎医学会学会奨励賞、歯科基礎医学会ベストペーパー賞、歯科基礎医学会モリタ優秀発表賞の選考および授与、④韓国 Korean Association of Oral Science（KAOS）との学術交流事業などである。

本年度のトピックス

歯科基礎医学会機関誌（Journal Oral Biosciences）は、Impact Factor 2.4（Clarivate社 2023年6月発表）が付与され、Journal Citation Indicator（JCI）では、DENTISTRY, ORAL SURGERY & MEDICINEのCategory 156誌中78位の位置にある。今後も積極的な投稿をお願いしたい。また、第65回歯科基礎医学会学術大会において、日韓シンポジウムに加え韓国歯科基礎医学会 KAOS（Prof.Kyung-Nyun Kim 理事長）と日本歯科基礎医学会（宇田川信之理事長）との間に日韓連携協定の締結がなされた。

（文責：二藤 彰／総務委員会委員長）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

【会員数】1,884名（2023年11月30日現在）

【設立年】1959年（昭和34年）

【機関誌】「Journal of Oral Biosciences」を年3回発行

特定非営利活動法人 日本歯科保存学会

理事長 林 美加子



<http://www.hozon.or.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

春季学術大会（第158回）は、大会長の古澤成博東京歯科大学歯内療法学講座教授のもと、6月22日～23日にくにびきメッセ（島根県立産業交流会館）で開催され、また、7月6日よりオンデマンド配信を実施した。ニューヨーク大学歯学部岡崎勝至先生による「特別講演」，“歯周治療のネクストステージ再生療法の最前線”をテーマとした「シンポジウム1」，“非歯源性疼痛治療の最前線”をテーマとした「シンポジウム2」，“う蝕治療のネクストステージう蝕治療の最前線”をテーマとした「シンポジウム3」，“学会主導型シンポジウム”，「認定研修会」，“認定歯科衛生士教育講演”や一般口演，ポスターの発表が行われた。また，コロナ禍以降，執り行うことができていなかった表彰式を会場で実施することができた。

秋季学術大会（第159回）は，大会長の二階堂徹朝日大学歯学部口腔機能修復学講座歯科保存学分野歯冠修復学教授のもと，11月11日～12日にアクトシティ浜松で開催された。また，11月30日よりオンデマンド配信を実施した。

カンピナス大学 Marcelo Giannini 先生による「特別講演1」，テキサス大学 Bennett T. Amaechi 先生による「特別講演2」，日本接着歯学会との合同企画・学会主導型シンポジウムである「シンポジウム1」，“シンポジウム2”，「シンポジウム3」，“認定研修会”，「歯科衛生士シンポジウム」，“認定歯科衛生士教育講演”や一般口演，ポスターの発表等が行われた。認定研修会では，現在検討中の日本歯科専門医機構の歯科保存専門医（仮称）に係る制度について，説明がなされた。

2. 学会活動について

保存修復・歯内療法・歯周治療の三領域の連携のもと，歯の保存を通じて人々の健康長寿を支えることを目標として，学術研究活動，教育活動，医療・予防活動，国際活動，関連団体との連携などの取り組みを重ねている。すなわち，機関誌6冊（和文誌5冊，英文誌1冊）の刊行，国際学術交流（大韓歯科保存学会など），診療ガイドラインの発行，指導医・専門医・認定医の養成，日本歯科衛生士会との連携による認定歯科衛生士（認定分野B：う蝕予防管理）の審査，学術用語集の編纂などを行った。

本年度のトピックス

学術大会は，昨年度秋季学術大会に引き続き，会場開催に加えてオンデマンド配信を実施し，参加機会を増やすように努めた。また，2021年から認定歯科衛生士教育講演が開始されていたが，秋季学術大会（第159回）では教育講演に加え歯科衛生士シンポジウムも開催され，多くの歯科衛生士の方に参加いただける大会プログラムを目指した。

認定歯科衛生士（う蝕予防管理）については，本学会で審査を行い2020年5名，2021年103名，2022年53名が日本歯科衛生士会により認定され，今年度は審査に合格した55名が認定予定である。

日韓歯科保存学会は11月4日～5日にソウルで開催され，本学会より14名が参加し，理事長講演・口演発表・ポスター発表が行われた。

本年3月末に，保存修復学専門用語集第3版と歯内療法学専門用語集第2版を発行した（歯内療法学専門用語集は，日本歯内療法学会との共同発行である）。

また，現在，日本歯内療法学会と協働で「歯髄保護」に関する診療ガイドラインを作成中で，来年度の完成を予定している。

日本歯内療法学会とともに，日本歯科専門医機構の歯科保存専門医（仮称）制度の検討を重ね制度の構築をしてきた。制度運用のトライアルの実績も作ることができ，日本歯科専門医機構へ制度を申請し，認証を目指している。

（文責：林美加子）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル4F
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891，FAX：03-3947-8341

【会員数】4683名（2023年11月現在）

【設立年】1955年（昭和30年）

【役員】理事長：林美加子，副理事長：前田英史・山本一世，常任理事14名，監事2名

【機関誌】和文誌「日本歯科保存学雑誌」第66巻1～5号，英文誌「Operative Dentistry, Endodontology and Periodontology」第3巻1号を発行（電子ジャーナル）。春季および秋季学術大会抄録はHPに掲載

【認定医・専門医など】認定医589名，専門医749名（うち指導医267名を含む）（2023年11月現在）

公益社団法人 日本補綴歯科学会

理事長 窪木 拓男

<https://www.hotetsu.com>

本年度のトピックス

1. 学術大会・総会の開催について

第132回記念学術大会は2023年5月19日～21日に、馬場一美教授（昭和大学歯学部 歯科補綴学講座）を大会長としてパシフィコ横浜にて開催した。なお、本学術大会はWeb配信を併用するハイブリッド開催とした。本学術大会の参加者総数は、3,055名であった。メインテーマを昨年度と同様に「補綴の未来、歯科の未来。Society 5.0に向けたイノベーションの創出」とし、理事長講演1セッション、特別講演1セッション、海外特別講演1セッション、メインシンポジウム1セッション、シンポジウム5セッション、診療ガイドライン委員会セミナー1セッション、臨床スキルアップセミナー1セッション、臨床リレーセッション3セッション、症例報告コンペティション1セッション、専門医研修会1セッション、歯科技工士セッション1セッション、歯科衛生士セッション1セッション、ハンズオンセミナー6セッション、教育講演2セッション、臨床研究セミナー1セッション、臨床エクストリームセッション1セッション、イブニングセッション4セッション、Meet the Expertsを実施した。また課題口演9題（コンペティション）、一般口演36題、ポスター133題が発表された。

本会は事務局を港区に置き、全国に9支部を有する。令和4年度は、各支部が支部学術大会と総会を、Webあるいは対面との併催にて開催した。

2. 学会活動について

本会は歯科補綴学の専門学会として国民の健康・口腔保健の向上のための国民、行政、学術団体への情報発信、提言、ならびに歯科医学・歯科医療の発展、向上に資する公益社団法人日本歯科医師会、日本歯科医学会、関連学会への情報発信、提言を、積極的、効果的に行うことを目標としている。これらの基盤となる歯科補綴学、補綴歯科医療の発展、向上に向けて、学術活動、教育活動、国際学術交流の更なる充実、活性化、ならびに学会運営の効率化などを図っている。出版では、英文誌 Journal of Prosthodontic Research がインパクトファクター 3.600 を獲得した。また、国際学術活動として、世界各国の補綴関連学会と活発に交流を行っている。社会貢献活動としては、市民フォーラムを開催し、補綴歯科治療の啓発活動を行っている。

1) 専門医制度

補綴歯科専門医制度が（一社）日本歯科専門医機構によって認定され、10月12日に厚生労働省の医療広告ガイドラインに補綴歯科の記載が追加され、広告可能な補綴歯科専門医制度へ移行した。

2) 90周年記念事業

本会が2023年に創立90周年を迎えるにあたり、2023年5月に開催された第132回学術大会を設立90周年記念大会として開催し、2023年6月に設立90周年記念事業を行った。

3) Journal of Prosthodontic Research (JPR)

本会英文誌 JPR は、本年度 3,600 のインパクトファクターを獲得し、歯科分野のジャーナルにおける上位 25% の地位 (Q1) を 6 年連続で維持した。本会のグローバルなプレゼンス向上と国際的な学術プロモーションに貢献するため、2021 年から完全なオープンジャーナルとして新たなスタートをきった。

(文責：窪木拓男)

《問い合わせ先・事務局》

〒105-0014 東京都港区芝2-29-11 高浦ビル4階
TEL: 03-6722-6090, FAX: 03-6722-6096

[会員数] 6,823 名 (2023 年 9 月 30 日現在)

[設立年] 1933 年 (昭和 8 年)

[機関誌] 英文誌「Journal of Prosthodontic Research」を年 4 回、和英混交誌「日本補綴歯科学会誌」を年 4 回、学会特別号 (抄録集) を年 1 回発行している

[認定医・専門医など] 補綴歯科専門医 71 名 (うち指導医 71 名)、認定研修機関は 69 施設 (甲 58, 乙 11) が日本歯科専門医機構に認定されている (2023 年 9 月 30 日現在)

公益社団法人 日本口腔外科学会

理事長 池邊 哲郎

<https://www.jsoms.or.jp/>



1. 学術大会・総会の開催について

2023年度の第68回総会・学術大会は、奈良県立医科大学の桐田忠昭教授を大会長として、久しぶりに対面形式メイン（一部オンデマンド併用）で、大阪国際会議場で開催された（2023年11月10日～12日）。総参加者数6,015名、そのうち現地参加者3,259名、オンデマンド参加者2,756名、参加演題数722題で、多くの会員が大阪に集まり大盛況であった。

本大会で特記すべきは、口腔癌での適用が得られたアルミノックス治療（光免疫療法）の臨床応用を推進された楽天メディカルの三木谷浩史会長に特別講演をお願いし、イノベーションの極意を話していただいた。さらに、日印、日韓、日台、日独の国際シンポジウムが企画され、それぞれ口腔前がん病変、顎矯正術、関節突起骨折、再建手術について議論された。この国際企画もポストコロナ時代を一層実感したイベントであった。

2024年度の第69回大会は、2024年11月22日～24日に、パシフィコ横浜会議センターで開催される予定である。

2. 学会活動について

例年通り、北日本支部、関東支部、中部支部、近畿支部、中国四国支部、九州支部で支部集会と歯科臨床医リフレッシュセミナーがほぼ対面（一部オンライン）で開催された。また、初めての試みとして7月に「第1回若手口腔外科医交流会・学術集会」が大阪で開催された。専門医取得前の若手による若手のための集会で、これにより若手同士が情報交換し交流を深め次世代の口腔外科を担ってもらいたいと思っている。

専門医制度では、認定医253名、専門医75名、指導医46名が資格認定された。日本歯科専門医機構口腔外科専門医は864名となった。

本年度のトピックス

1) 薬剤関連顎骨壊死ポジションペーパー 2023 の発行

2016年版ポジションペーパー以来7年ぶりの改訂を行い公表した。今回は、日本口腔外科学会が主導して、7年前と同じく日本骨代謝学会、日本骨粗鬆症学会、日本歯科放射線学会、日本病院薬剤師会、日本臨床口腔病理学会と協力して作成した。2016年版は顎骨壊死をARONJと記載したが、2023年版はMRONJとした。最大のリスク因子は菌性感染源の存在としている。特に、抜歯前の休薬に関して、システムティックレビューをもとに慎重に協議し、原則として抜歯時に休薬しないことを提案している。また、医歯薬連携の重要性を強調した。ご参照いただきたい。

2) 口腔癌取り扱いガイドラインの発行

日本口腔腫瘍学会と合同チームを設け、2019年以来約4年ぶり3回目の改訂となった。こちらも口腔癌治療の最新のエビデンスをもとに、さらに関連学会の意見やパブリックコメントも参考にして、改訂作業が行われた。

3) 第1回若手口腔外科医交流会・学術集会の実施

上述したように7月に第1回若手口腔外科医交流会・学術集会を大阪私学会館で開催した。参加者743名であり、ハンズオンや日本歯科専門医機構の共通研修も取り入れた。若手口腔外科医を何とか刺激して口腔外科医療の人材確保に努めたい。

（文責：池邊哲郎）

《問い合わせ先・事務局》

〒108-0014 東京都港区芝5-27-1 三田SSビル3F
TEL：03-5422-7731, FAX：03-6381-7471

【会員数】11,289名（正会員、2023年8月31日現在）

【設立年】1933年（昭和8年）

【機関誌】和文誌「日本口腔外科学会雑誌」年13回、
ニューズレターを年2回発行、英文誌「Journal of
Oral and Maxillofacial Surgery, Medicine, and
Pathology」年4回発行

【認定医・専門医など】認定医3,290名、専門医2,286名、
指導医1,047名、研修施設321施設、准研修施設311
施設（2023年10月1日現在）

公益社団法人 日本矯正歯科学会

理事長 齋藤 功

<https://www.jos.gr.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

第82回日本矯正歯科学会学術大会は、齋藤 功大会長(新潟大学大学院医歯学総合研究科歯科矯正学分野 教授)のもと、2023年11月1日～3日の日程で朱鷺メッセ新潟コンベンションセンター・ホテル日航新潟において開催された。「矯正歯科のあるべき姿を再考しよう—伝統と進化—」を大会テーマとして、海外教育講演、海外特別講演、国内特別講演、シンポジウム1～4、ラウンドテーブルディスカッション、臨床セミナー1～2、スタッフ&ドクターセミナー、学術展示/症例展示、生涯研修セミナー、サテライトセミナーなどが企画・実施された。また、JOSフォーラムホットトピックスでは、昨年に引き続き一般社団法人日本歯科専門医機構 今井 裕 理事長に矯正歯科専門医(仮称)制度の認定に向けた進捗状況についてご講演いただいた。本学術大会は、学会の学術活動、隣国との連携ならびに社会活動について議論する意義ある場を提供した。

2. 学会活動について

広告可能な矯正歯科専門医(仮称)制度の認定に向けた活動として、本年3月に開催された日本歯科専門医機構(以下、機構)・専門医申請学会評価認定委員会によるヒアリングを経て制度認定に関わる申請書類修正版を作成して機構に提出した。学会内では、制度の認定およびそれに続いて行われる運用審査への対応を逐次進めている。また、矯正歯科治療に関する不適切な情報に対しては、学会ホームページに当会としての見解を継続的に掲載するとともに、関連団体・関連行政と情報を共有し、今後必要に応じて協議、対応していくこととしている。一方、当会は2026年に創立100周年を迎えることから、これを記念して行う事業である、学術研究プロジェクトの実施、記念誌の編纂、記念学術大会の企画の具体化など準備を本格化させている。機関誌“Clinical and Investigative Orthodontics”は、昨年度から総説と原著論文のオープンアクセス化され、本年6月にインパクトファクター(IF)が付与された。引き続きMEDLINEへの再掲載を果たすべく引き続き検討、改善を図っている。

本年度のトピックス

1. 矯正歯科専門医(仮称)制度の認定に向けた活動

「矯正歯科専門医(仮称)制度の認定に向け機構・専門医申請学会評価認定委員会による審査が継続して行われ、本年10月の第6回理事会において、今後も機構との協議で微修正される可能性を含んだうえで「矯正歯科専門医制度規則・施行細則」と「認定研修施設制度規則・施行細則」が承認された。

2. 学会創立100周年記念事業「学術研究プロジェクト」

学会創立100周年記念事業の一環として、公募し採択された学術研究プロジェクトの進捗状況について、第82回学術大会のシンポジウム『100周年学術研究プロジェクトの意義、進捗そして今後』において報告された。本プロジェクトはいずれも臨床的かつ多機関(多施設)の共同研究が実施されており、いずれの課題についても矯正臨床に関わる貴重な成果が期待されている。

3. 「矯正歯科診療のガイドライン(前歯部)開咬編」の公表

不正咬合と矯正歯科治療の正しい理解と、適切な矯正歯科治療が実施されることを通じて患者の健康に寄与すること、顎口腔機能を改善し生活の質を向上させること、矯正歯科治療の質の向上ならびに安心かつ安全な矯正歯科治療を提供すること目的として、本年9月、「矯正歯科診療のガイドライン(前歯部)開咬編」が学会ホームページに公表された。(文責：齋藤 功)

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル 3F
(一財) 口腔保健協会内
TEL: 03-3947-8891, FAX: 03-3947-8341

【会員数】 7,077 名 (2023 年 11 月現在)

【設立年】 1926 年 (大正 15 年)

【役員】 理事長：齋藤 功、常務理事：新井一仁、大坪邦彦、佐藤嘉晃、延島ひろみ、理事 14 名、監事 2 名 (任期：2022 年 2 月 28 日～2024 年 2 月 29 日)

【機関誌】 和文誌「Clinical and Investigative Orthodontics-Japanese Edition」年 2 回、英文誌「Clinical and Investigative Orthodontics」年 4 回発行、Information letter 年 2 号発行

【認定医・専門医など】 認定医 3,493 名、指導医 503 名、臨床指導医(旧専門医) 369 名 (2023 年 11 月現在)

一般社団法人 日本口腔衛生学会

理事長 三宅 達郎

<https://www.kokuhoken.or.jp/jsdh/>



1. 学術大会・総会の開催について

第72回日本口腔衛生学会学術大会は、2023年5月19日～21日に大阪大学の天野敦雄教授を大会長として大阪国際交流センターで開催した。「令和の健口戦略「防ぎ守る」」をテーマに、基調講演1題、シンポジウム13題、学術賞LION AWARD受賞講演2題、論文奨励賞受賞講演3題、日韓国際交流招待講演2題、ランチョンセミナー4題、ミニシンポジウム5題、一般口演・ポスター発表120題（学部学生発表含む）と国内外から730名余の参加者を得た。

第73回学術大会は、2024年5月10日～12日、「健康の伸びしろ」をテーマに、トーサイクラシックホール岩手（岩手県民会館）にて、岩手医科大学の岸 光男教授を大会長として開催を予定している。

2. 学会活動について

17委員会を中心に活発な学会活動を行い、その成果は、会員の研究論文と共に機関誌である口腔衛生学会雑誌やホームページで公表している。また、北海道、東北、甲信越・北陸、関東、東海、近畿・中国・四国、九州の7地域の関連学会等とも連携して、地域と個人の口腔保健の推進に努めるとともに、その中核となる認定医・専門医・指導医・地域口腔保健実践者・認定歯科衛生士を養成し、Oral Health Promotionの普及に努めている。

「健康な歯とともに健やかに生きる 一生涯28（ニイハチ）」を学会声明として掲げ、2011年8月に制定された「歯科口腔保健法」や各地で制定されている「口腔保健条例」を科学的・技術的に支援することを目標としている。また、数多くの学会声明、提言、意見を発出し、すべての人が健全な口腔と高いQOLを享受する社会の実現をめざし、会員一人一人が努力している。

韓国予防歯科学会（Korean Academy of Preventive Dentistry and Oral Health）とは、毎年交互に代表を派遣し講演と情報交換を行っている2023年5月19日～21日に開催された第72回日本口腔衛生学会学術大会では、慶北大学のYoun-Hee Cho先生ならびにソウル大学のBo-Hyoung Jin先生が講演を行った。さらに、Global Oral Healthに関しては、WHO（世界保健機関）との緊密な連携を図っている。

本年度のトピックス

1. 生活習慣病予防と歯科口腔保健—特定健診・特定保健指導における歯科口腔保健の展開—についての学会声明

特定健診・特定保健指導における歯科口腔保健が果たす役割について、コモンリスクアプローチの考え方に基づき、咀嚼が食生活に及ぼす影響等を中心に声明を、2023年5月19日に発出した。

2. 感染症法による新型コロナウイルス感染症の5類移行後の集団フッ化物洗口のさらなる推進についての学会意見

2023年5月8日から新型コロナウイルスが5類感染症に移行された。新型コロナウイルス感染症流行時は、子どもたちのう蝕が増加したという報告があるため、フッ化物洗口を中断された市町村や施設に対し、早急な再開をお願いするとともに、未実施の市町村や施設に対しては、フッ化物洗口の開始をお願いする学会意見を、2023年5月10日に発出した。

3. 乳幼児期における親との食器共有についての学会意見

以前から、親から子どもへのう蝕原因菌の感染を予防するために、食器の共有を避けるようにとの情報が広がっている。しかし、食器を共有しないことでう蝕予防できるという科学的根拠は必ずしも強いものではない。また、最近、親の唾液に接触することが、子どものアレルギーを予防する可能性を示すという研究が報告されている。乳幼児期における親との食器共有に関する適切な情報を提供するため、学会意見を、2023年8月31日に発出した。

4. 香港予防歯科学会（the Society of Preventive Dentistry of Hong Kong）とのMOU（Memorandum of Understanding）の締結

学会間の国際交流をさらに緊密に行うため、香港予防歯科学会とMOUを2023年6月2日に締結した。

5. 令和4年度歯科疾患実態調査に関する集計・分析

令和4年度歯科疾患実態調査の集計および分析等について厚生労働省医政局歯科保健課から依頼があり、本学会が受託した。厚生労働省から概要版が2023年6月29日に、統計表が同年12月15日に公表された。

（文責：三宅達郎）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891、FAX：03-3947-8341

【会員数】2,134名（2023年11月1日現在）

【設立年】1952年（昭和27年）

【役員】理事長：三宅達郎、副理事長：山本龍生、深井稜博、天野敦雄、理事15名、監事2名、代議員150名

【機関誌】口腔衛生学会誌を年4回発行

【認定医・専門医など】口腔衛生学会認定医94名、専門医185名、指導医57名、認定研修機関22施設、認定歯科衛生士42名（いずれも2023年11月1日現在）

一般社団法人 日本歯科理工学会

理事長 宇尾 基弘

<http://www.jsdmd.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第81回日本歯科理工学会学術講演会は、2023年4月15日～16日に明海大学歯学部機能保存回復学講座歯科生体材料学分野（大会長：日比野靖）が担当し、東京都江戸川区のタワーホール船堀で開催した。一般演題（口頭発表18題、ポスター発表66題）の他は特別講演1題、学会主導型シンポジウム1題、ランチョンセミナー1題であった。初日に定時社員総会・会員総会を実施し、夕方からは着席形式の定員制として懇親会が開催された。

今回の学術講演会より年2回（春期・秋期）から年1回（春期）の開催となったが、本会にとって慣れ親しんだ船堀の会場での開催ということもあり、2日間で400名を超える参加者があり、研究発表や学術交流は例年以上の盛り上がりで深まりを見せた。次の学術講演会は、2024年4月20日～21日に鹿児島市（かごしま県民交流センター）にて開催の予定である。

2. 学会活動について

会員の研究発表や交流の場として、様々なかたちで5つの地方会でセミナーが開催された。前述の通り、本会の学術講演会が年2回から年1回の開催になったことを受け、秋期に開催される地方会の活性化と所属地方会を超えた横断的な会員間の交流を期待し、本学会も地方会セミナーの充実に協力して取り組むこととした。

また、日本歯科医学会に所属する学会を中心に、様々な他学会との連携強化を図っている。

国際交流面では、学会の国際的プレゼンスの向上を目指して、4年ごとに国際学会（International Dental Materials Congress：IDMC）を開催している。さらに、アジアの歯科材料関連学会を束ねるネットワーク組織として Asian Network of Dental Materials Societies（ANDeMS）を立ち上げ、2024年1月に日本（東京医科歯科大学）でキックオフミーティングを開催の予定である。

本年度のトピックス

1. DMJ が完全オンラインジャーナル化

本学会が発行している英文機関誌（Dental Materials Journal：DMJ）は我が国の歯科界で初めてインパクトファクターを獲得した権威ある学術雑誌である。今年度のIF値は、2022年IF値、5年IF値とも2.5と昨年と同等の値を得ている。

同誌には毎年300を超える論文が掲載されており、2022年からはオンラインジャーナルのメリットを十分に活かし、アクセプトされた論文の速やかな発信に務めている。

従前は冊子体も並行して発行していたが、2023年（42巻）1号よりオンラインジャーナルのみとなっている。

今後もDMJのプレゼンスのさらなる向上を目指して、様々な試みを継続していく。

2. 学術講演会の年1回化と地方会セミナーの充実

従前は春期・秋期の年2回開催していた学術講演会を2023年度より春期の1回とした。会員の発表と交流の機会を確保するため、5地方会で従前より開催していたセミナーを拡大し、会員の一般講演の機会を確保することとした。各地方会において夏期から秋期にかけて趣向を凝らしたセミナーが企画・開催され、活発な会員の発表と交流が行われた。

3. 日本歯科理工学会誌（和文誌）の完全オンライン化への取り組み

和文誌も現在、冊子体発行と並行して部分的なオンライン掲載も行っているが、更に幅広い情報発信とペーパーレス化を目的として、2025年発行号を目標とした全論文の完全オンライン化を目指した取り組みを開始した。

（文責：宇尾基弘）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
（一財）口腔保健協会内

TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

【会員数】1,546名（2023年12月1日）

【設立年】1982年（昭和57年）

【機関誌】和文誌「日本歯科理工学会誌」（年3回、Special Issue年2回）、英文誌「Dental Materials Journal」（年6回）、和文誌「日本歯科理工学会誌（DE（Dental Engineering）併催）」（年3回＋抄録号2回）

【称号】Dental Materials Adviser 93名、Dental Materials Senior Adviser 208名

特定非営利活動法人 日本歯科放射線学会

理事長 金田 隆



<https://www.jsomfr.org>

1. 学術大会・総会の開催について

NPO 法人日本歯科放射線学会第 63 回学術大会・第 19 回定例総会（吉浦 一紀大会長：九州大学）は、2023 年 5 月 26 日～28 日に九州大学医学部百年講堂（福岡県福岡市）で、現地と Web 視聴のハイブリッド形式による開催がなされた。なお、特別講演 2（日本歯科専門医機構認定共通研修）は演者の体調不良のため、後日オンデマンド配信による Web 講演となった。また、11 月 3 日～5 日には第 4 回秋季学術大会（村上秀明大会長：大阪大学）が千里ライフサイエンスセンター（大阪府豊中市）で現地開催され、初日には市民公開講座として『大切な人の「想い」とともに』（講師：清水 健）が開催された。第 64 回学術大会・第 20 回定例総会（林 孝文大会長：新潟大学：<https://omfr64.secand.net/>）は 2024 年 5 月 24 日～26 日に新潟市内のホテルイタリア軒で、第 5 回秋季学術大会（田中良一大会長：岩手医科大学）は同年 10 月 25 日～27 日にマリオス盛岡市民文化ホール（岩手県盛岡市）で開催予定である。

2. 学会活動について

本学会は歯科放射線学および関連する学術研究促進を推進するため 18 の委員会を中心に歯科放射線学の普及を図り、学術および医療の進展に寄与することを目的とする法人である。具体的な学会活動は地方会も含む学術大会および各種の研修会開催、欧文および和文の 2 つの学術雑誌の発行、国民に貢献する歯科放射線専門医や認定医の授与、諸外国および関連学会との連携協力である。特に国民に貢献する医療の充実には歯科放射線専門医、指導医、認定医および准認定医を中心に担っている。それらを増加させる活動内容として会員や歯科開業医に向けての学術大会や各種研修会および実技研修会等を継続的に開催している。ここ数年のコロナ禍における学会活動は多々制限があったものの、昨年に引き続き Web 開催やオンデマンド開催等を積極的に試み、アフターコロナも見据えた継続的な学会活動を行っている。

本年度のトピックス

(1) 歯科用 CBCT 認定医講習会の継続的な実施および各種認定医の充実、(2) 学術英文誌（Oral Radiology）と和文誌の充実、(3) 会員への情報発信として各種メディアを用いた広報媒体の充実、(4) 会員カードを用いた出席管理運用の開始、とくに(1)は昨年に新設した歯科用 CBCT 認定医制度であるが、現在、全国で 23,000 台以上普及している歯科用 CBCT の臨床応用および医療法規も念頭に置いた、適正利用も兼ねた講習会を実施しており、現在合計 168 名が登録されている。同資格を持つことにより、安全、良質な歯科医療を国民に提供し、日本の健康増進及び福祉向上に貢献することを引き続き目標として活動している。(2) 国際英文雑誌である Oral Radiology の IF は 2.2 で年々上昇しており、それに伴い投稿数も急激に増加した。(3) 他学会同様、メルマガ等のメールを用いた情報提供を行い、学会や勉強会の開催を多くの会員に周知した。とくに日本歯科専門医機構認定共通研修の単位に関する件を重点的に発信した。また、学会ホームページのユーザビリティ向上を目指し、リニューアル準備に着手した。(4) 日本歯科専門医機構認定共通研修をはじめ、各講習会に於ける出席管理の厳密化と獲得単位数の把握を目的に「会員カード」を配布し、第 4 回秋季学術大会で初運用を行った。その他、昨年より参画していた「薬剤関連顎骨壊死の病態と管理：顎骨壊死検討委員会ポジションペーパー 2023」は日本口腔外科学会より完成に至った旨連絡があり、会員に周知を行った。

（文責：金田 隆）

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11

一ツ橋印刷(株)学会事務センター内

（担当：並河 宏樹）

TEL：03-5620-1953, FAX：03-5620-1960

【会員数】1,571 名（2023 年 10 月 10 日現在）

【設立年】1960 年（昭和 35 年）

【機関誌】和文誌「歯科放射線」年 2 回、英文誌「Oral Radiology」年 4 回発行

【認定医・専門医など】准認定医 584 名、認定医 490 名、専門医 262 名、指導医 106 名、研修機関 34 機関、PET 核医学歯科認定医 30 名、口腔放射線腫瘍認定医 25 名、歯科用 CBCT 認定医 168 名

公益社団法人 日本小児歯科学会

理事長 新谷 誠康

<http://www.jspd.or.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第61回日本小児歯科学会大会は、2023年5月に現地開催とWebオンデマンド配信のハイブリッド形式として、出島メッセ長崎で行われた。新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行に伴い、現地参加への制限を設けない形で開催された。本大会は藤原卓教授（長崎大学）を大会長として開催される予定であったが、2022年4月に逝去されたため、福本敏教授（九州大学）が急遽大会長代理を務め、全国に散らばっていた長崎大学にゆかりのある会員が一致協力して運営にあたった。その結果、2022年とほぼ同数の2,000名近い参加者を集め、成功裡に大会を終えることができた。また、秋には地方会が郡山市（福島県）、川口市（埼玉県）、岐阜市、豊中市（大阪府）、米子市（鳥取県）、福岡市の全国6会場で開催され、多くの会員が参加した。

来年度の第62回日本小児歯科学会大会は、2024年5月16日～17日に、横須賀芸術劇場（神奈川県）にて木本茂成教授（神奈川歯科大学）を大会長として開催される。

2. 学会活動について

日本小児歯科学会は、小児歯科医療の発展と向上をはかり、小児口腔保健の充実と増進に寄与するために活動が行われている。学会大会のほか、各種セミナーを開催している。コロナ禍によって制限されていた活動も再開されつつあり、本年は海外諸国の小児歯科学会、国際小児歯科学会に多くの会員が参加した。また若手会員向けに、海外の学会における発表の奨励・英文発表に対する表彰制度を新設した。さらに教育に関するワークショップが4年ぶりに開催され、各大学から参加者が集まって討議が行われた。以前から、会員の資質向上を目的として、小児歯科専門医制度、学会認定歯科衛生士制度を設け、運営を行っているが、専門医制度施行に伴い認定を停止していた学会認定医制度も本年度から再開させた。この新認定医制度によって、小児歯科に携わる若手歯科医がキャリアアップを行いやすくすることを期待している。学会発行の「小児歯科学雑誌」、[Pediatric Dental Journal (PDJ)]についてもさらなる充実を図っている。

本年度のトピックス

国際小児歯科学会（IAPD）大会の日本誘致を長く本学会をあげて取り組んでいたが、このたび2027年に大阪で開催されることが正式に決定した。1991年京都での開催以来、36年ぶりの日本開催となる。仲野和彦教授（大阪大学）が大会長を務めることとなり、現在大会組織委員会を設立し、国内外の参加者を迎える準備を開始している。また、

20年前から学術交流を続けている韓国小児歯科学会（KAPD）との協定を更新したのに加え、新たに台湾小児歯科学会（TAPD）との学術協定を締結した。この両学会には日本からも多くの参加者があり発表も行われたが、両学会の会員向けにも「ASUNARO award」を新設し、受賞者の日本招待を行うなどして、会員の国際交流を進めている。折しも本年度、学会発行の英文誌（PDJ）にインパクトファクターが付与された。海外からの投稿を多く受け入れ、国内の研究についてもさらなるレベルアップを目指している。

本学会など4学会の合同による提言「フッ化物配合歯磨剤の推奨利用について」は、4月に普及版が発出され、ホームページで公開している。牧前理事長が委員長を務め、土岐志麻理事（青森市）が引きついでいる「コロナ禍における児童・生徒の調査研究」の報告書が6月に出され、歯肉炎の増加、歯磨きやフッ化物洗口の中止事例、虐待が疑われた事例などが報告された。現在、厚生労働省が主催する「ライフステージに応じた歯科口腔保健推進事業」の検討委員会に、本学会から新谷理事長が参加している。そのほかにも、本学会の各委員会では小児歯科学の進歩や知識の普及、医療の向上のため、精力的な活動が行われているところである。

（文責：櫻井敦朗／庶務担当常務理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル3F
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

【会員数】 会員総数 5,135 名（内訳：名誉会員 40 名、正会員 4,566 名、準会員 497 名、賛助会員 32 社）（令和 5 年 11 月 15 日現在）

【設立年】 1963 年（昭和 38 年）

【機関誌】 和文誌「小児歯科学雑誌」を年 4 回、英文誌「Pediatric Dental Journal」を年 3 回発行

【認定医・専門医など】 専門医指導医 231 名、専門医 1,086 名、認定医 71 名、認定歯科衛生士 148 名（令和 5 年 11 月 15 日現在）

特定非営利活動法人 日本歯周病学会

理事長 沼部 幸博



<https://www.perio.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第66回春季学術大会は湯本浩通大会長（徳島大学大学院医歯薬学研究部教授）のもと「歯周病」を語ろう！～その原点から未来へ～として、2023年5月26～27日にレクザムホール（香川県民ホール）ならびにJRホテルクレメント高松で対面形式（1,800名限定）および終了後の6月20日～7月20日にオンデマンド配信で、また第66回秋季学術大会は吉村篤利大会長（長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授）のもと「グローバルな歯周治療」として、2023年10月13～14日に山崎メッセで対面形式（1,800名限定）および終了後の11月1日～30日にオンデマンド配信で開催した。対面とオンデマンド参加を合計して春季学術大会は4,906名、秋季学術大会は4,578名の参加者があった。

2. 学会活動について

日本歯周病学会は、科学者がリーダーシップを執る信頼される学会として、継続的に学会のあり方および発展の方策を検討している。

- (1)研究：「歯周病に対する新規臨床検査、治療技術の開発」を継続している。とくに、多施設臨床研究として、新たな歯周病重症度検査の検討や侵襲性歯周炎患者のデータベース構築を行っている。
- (2)医療・あり方：診療ガイドラインの改訂の実施、歯周治療のガイドライン2022の発刊。高齢者の歯周治療のガイドライン、ならびに歯周病患者に対する禁煙支援のガイドラインの策定、医療技術評価提案に関する恒久的な検討を実施している。
- (3)教育：歯周病学基礎実習動画の学会ホームページでの公開、用語の検討、歯周病学基礎実習用顎模型の開発を行っている。
- (4)臨床：専門医、認定医および認定歯科衛生士試験を年2回実施している。またCOVID-19感染が終息したことを受けて、各県での臨床研修会の開催を再開した。
- (5)地域貢献：専門医、認定医の適正配置を図るとともに、都道府県歯科医師会との連携を推進している。地域活動賞の授与等、地域との連携を強化している。
- (6)国際貢献：アメリカ歯周病学会との学術大会を2024年に共同開催する。また、韓国・中国・ヨーロッパ・インドなど、各国の歯周病学会との交流を展開している。
- (7)その他：歯周病の予防および治療法の更なる国民への周知（国民向け新ホームページの新設、歯周病啓発動画「にゃんかむちゅー」の制作等）に注力している。

本年度のトピックス

第66回春季・秋季学術大会ともに人数制限を設けた現地開催とオンデマンド配信によるハイブリッド開催を行った。

ガイドラインの改訂および新指針は、①歯周病患者における再生治療のガイドライン2012、②糖尿病患者に対する歯周治療ガイドライン改訂第2版2014の改訂を完了、発刊するとともに、③高齢者に対する歯周治療のガイドライン、④歯周病患者に対する禁煙支援のガイドラインの作成と発刊に向けて作業を行っている。

歯周病の予防および治療法の更なる国民への周知のために、いい歯の日（11月18日）に合わせて、歯周病啓発動画「にゃんかむちゅー」第2弾を公開した。また国民向け新ホームページの新設も進めている。

臨床研修委員会では昨年を引き続いて歯科医師、歯科衛生士に対する歯周治療のさらなる啓発のために、PDF形式の「歯周治療を適切・安全に行うためのポイントー全身状態への配慮ー」を作成・公開するとともに群馬県で臨床研修会を開催した。臨床データベース委員会では、歯周病臨床データベースの構築に向けて検討を進めている。

第66回春季学術大会ではアメリカ歯周病学会（AAP）理事長を、第66回秋季学術大会では韓国歯周病学会（KAP）理事長を招聘し、各々招待講演を実施した。

若手研究者への支援強化の一環として、第66回春季学術大会時に第56回若手研究者の集いをWeb形式で、第66回秋季学術大会時に第9回若手合宿研修を現地（長崎）で各々実施した。来年度から学部学生を対象とした学生会員制度を、さらに同ポスター発表を対象とした学部学生優秀発表賞を創設する。（文責：沼部幸博）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891、FAX：03-3947-8341
E-mail：gakkai16@kokuhoken.or.jp

【会員数】12,711名（2023年10月31日現在）

【設立年】1958年（2003年3月法人格取得）

【機関誌】「日本歯周病学会会誌」年4回発行（2015年よりオンラインジャーナル）、ニュースレター年2回発行

【認定医・専門医など】専門医1,177名、指導医292名、認定医1,416名、認定歯科衛生士1,413名、指定研修施設数168箇所（2023年10月31日現在）

一般社団法人 日本歯科麻酔学会

理事長 宮脇 卓也

<http://kokuhoken.net/jdsa/>

1. 学術大会・総会の開催について

第51回学術集会・総会が鮎瀬卓郎会長（長崎大学生命医科学域 医療科学専攻 歯科麻酔学分野 教授）のもと、2023年10月6日～8日まで出島メッセ長崎で開催された。加えて、2023年10月16日～11月16日までオンデマンド形式によって配信された。

特別講演3，教育講演7，久保田康耶記念講演，学術委員会指名講演，シンポジウム2，学会企画教育講座，実習型バイタルサインセミナーなどが企画され，最優秀発表賞候補演題，一般演題と合わせて155題が発表された。参加者総数は2,726名（現地参加1,433名）であった。また，学会初日に開催された会員総会では，会務報告がなされた。

2. 学会活動について

社員総会（10月6日）において，第19期会計決算，第20期補正予算案，第21期事業計画案・予算案，次期役員等が承認された。また，第54回（2026年）総会・学術集会の会長として佐藤健一氏（岩手医科大学）が承認された。

教育研修活動として，第37回リフレッシュコース（夏季Web開催）を7月12日～8月31日，Web上で開催した。また，第37回リフレッシュコース（秋季現地開催）を学術集会会期中の10月7日と10月8日にそれぞれ開催した。

各種資格認定事業については，認定歯科衛生士37名，登録医6名，認定医46名，専門医18名が資格審査に合格した。

地域医療の推進活動として全国で2か所の歯科医師会でバイタルサインセミナーを開催した。

本年度のトピックス

日本歯科麻酔学会は，歯科麻酔科医による麻酔管理の安全性を評価するために，日本歯科麻酔学会指導施設全32施設の5年間の麻酔管理症例を対象に後方視的観察研究を行い，その成果が国際学術雑誌に掲載された（Sanuki T, et al., A survey on the safety of anesthesia management provided by dental anesthesiologists in Japan: a 5-year survey by the Japanese Dental Society of Anesthesiology. Clin Oral Investig. 2023 Sep; 27(9): 5475-5483）。調査の結果，2014年から2018年までの麻酔管理症例は219,343件（全身麻酔80,138件，鎮静127,819件，バイタルサイン・モニタリング11,386件）であり，歯科麻酔臨床において発生した危機的偶発症の発生数は10,000件あたり2.14件，麻酔関連危機的偶発症の発生数は0.96件，麻酔に起因する死亡例はなかった。一方，日本麻酔科学会による医科の麻酔科医による麻酔管理症例を対象とした最新の調査では，心停止と麻酔関連心停止の発生数は，それぞれ10,000件あたり2.3件と0.96件であったと報告されていることから，本調査結果は歯科麻酔科医が行う麻酔管理の安全性を裏付けるエビデンスとなった。なお，この研究成果は，出版社Springer Natureの許可を得て，日本歯科麻酔学会雑誌に二次出版される。

（文責：宮脇卓也）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル4F
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891，FAX：03-3947-8341

【会員数】2,897名（2023年8月31日現在）

【設立年】1973年（昭和48年）

【機関誌】和文誌「日本歯科麻酔学会雑誌」年4回（論文号）年1回（抄録号），Anesthesia Progress（アメリカ歯科麻酔学会発行，日本歯科麻酔学会機関誌）年4回，「ニューズレター」年4回発行

【認定医・専門医など】認定歯科衛生士173名，登録医54名，認定医1,438名，専門医366名（2023年8月31日現在）

日本歯科医史学会

理事長 渋谷 鑛



<http://www.jsdh.org/>

1. 学術大会・総会の開催について

2023年度の学術大会は、会長 佐藤利英（日本歯科大学新潟生命歯学部教授・日本歯科医史学会理事）のもと2023年9月30日に第51回日本歯科医史学会総会・学術大会として開催された（会場：新潟市，日本歯科大学新潟生命歯学部）。

特別講演は「嗚呼！東京医科歯科大学」（中原 泉：日本歯科大学理事長），一般演題は28題（うち誌上発表4題）であった。プログラムには、同校に併設された「医の博物館」見学の時間が設けられた。

次年度，第52回歯科医史学会総会および学術大会は2024年9月28日，会長 石橋 肇（日本歯科医史学会理事）で東京ガーデンパレスにおいて開催予定である。

2. 学会活動について

1) 月例研究発表会

本学会では設立以来，月に1回を目途に形式にとらわれない自由な発表討論と会員相互の親睦を図る目的から「月例会」を開催している。本年は，いずれもリモート開催で1月～12月（通算492～500回）に実施された。

2) 日本医史学会，日本歯科医史学会，日本薬史学会，日本獣医史学会，日本看護歴史学会，洋学史学会の六史学会合同例会（2023年12月16日）に「日本歯科医史学会50年の軌跡」（渋谷 鑛）を発表した。

本年度のトピックス

1. 日本歯科医史学会月例会500回記念講演会の開催

2023年12月の開催で通算500回を迎えた。特別企画として12月15日に記念講演会を開催した（会場：日本歯科大学九段ホール）。「日本歯科医学会会長，6期目の重さと軽さ」（日本歯科医学会会長 住友雅人）および「日本歯科医史学会月例会500回の軌跡」（渋谷 鑛）の2題の発表が行われた。

2. 事務局の移転

下記に記載のように事務局の移転とともにHPの改変を行った。

（文責：渋谷 鑛）

《問い合わせ先・事務局》

〒115-0055 東京都北区赤羽西 6-31-5

（株）学術社内

TEL：03-5948-5584，FAX：03-5924-4388

【会員数】 一般会員 502 名（2023 年 9 月末日現在）

【設立年】 1973 年（昭和 48 年）4 月

【機関誌】 和文誌「日本歯科医史学会々誌」，第 35 巻
第 1 号，第 2 号発刊

一般社団法人 日本歯科医療管理学会

理事長 尾崎 哲則

<http://www.jsdpa.gr.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

第64回総会・学術大会は2023年7月14日～16日、山内六男大会長（朝日大学教授）のもと、じゅうろくプラザにて開催された。メインテーマは「歯科医療管理学会はどこを目指すのか ―教育、専門医の視点から―」である。

4年ぶりの現地かつ懇親会開催のフルスペックでの開催となった。大会長にはご苦労も多かったと思うが、200名を超える参加者があった。

数年ぶりで会えた方とは笑顔で「やはり顔が見える学会はいいね」、「ディスカッションは楽しいね」などの嬉しい声を聞くことができた。

本学術大会では、（一社）日本デジタル歯科学会との共催講演「医療の電子化・標準化で見える新しい景色 ―オンライン資格確認、電子処方箋、その次―」（玉川裕夫先生）、大会長講演「学術大会メインテーマ決定に至った経緯」（山内六男大会長）、特別講演1「医療管理学の人材育成とビッグデータ：歯科医療管理学のポテンシャル」（京都大学教授 今中雄一先生）、特別講演2「日本歯科専門医機構の挑戦 ―新たな歯科専門医の制度設計に挑む―」（一般社団法人日本歯科専門医機構理事長 今井裕先生）をお話いただいた。また、シンポジウムでは、シンポジウム1「歯学部における歯科医療管理学教育の現状と課題」とシンポジウム2「基本領域以外の歯科専門医の未来」について、討議された。大会初日の最後には女子プロゴルファーそして解説者として長年活躍されている森口祐子氏（朝日大学体育会ゴルフ部スーパーバイザー）に「ゴルフから学んだこと」と題してご講演をいただいた。懇親会には約110名が参加し、久しぶりに対面での楽しいひとときを過ごすことができた。

また口演発表は10題、ポスター発表は18題、認定医研修会は「地域包括ケアシステムとかかりつけ歯科医機能」（平田創一郎先生）」と題して講演があった。

2. 学会活動について

本学会の常置委員会は、編集、学術・教育、認定医制度、認定医資格審査会、医療情報、医療保険・地域医療検討、諸規則等運用、広報、倫理審査、利益相反である。

地域関連団体の活動は次の通り。北海道地区：2023年11月23日現地とWebのハイブリッド開催。東北地区：2023年10月22日宮城県歯科医師会館開催。関東甲信越地区：2023年11月12日神奈川歯科大学附属横浜クリニック開催。東海地区：2023年7月14日～16日じゅうろくプラザ開催（第64回日本歯科医療管理学会総会・学術大会と併催）。近畿北陸地区：2023年9月10日に和歌山県歯科医師会館開催。中国地区：2023年10月29日サンピーチ

OKAYAMA開催。四国地区：2023年8月27日高知県歯科医師会館開催。九州地区：2023年11月12日長崎県歯科医師会館で開催した。

なお第65回日本歯科医療管理学会総会・学術大会は越智守生大会長（北海道医療大学教授）のもと2024年7月13日～14日に札幌市の共済ホールで開催予定である。

本年度のトピックス

毎月全会員にメール配信しているマンスリレターでは学会執行部からの最新情報、地域関連団体からの情報を発信してきた。会員諸氏からは情報の共有、全国の各地域の状況がわかるなど大いに役に立ったとの声が寄せられている。さらに充実していく予定である。

また常務理事会、理事会においてはZoom開催に慣れ、資料に基づき大いに意見を述べ合う場面があるなど会議の活性化がみられた。

2022年度日本歯科医療管理学会学会賞の論文は、「歯科医療における歯科医師の説明に対する患者の満足度に関する研究」として濱寄朋子（九州女子大学家政学部栄養学科）、「医療のデジタルトランスフォーメーション政策における日本のデジタル歯科医療の現状分析」野村真弓（ヘルスケアリサーチ(株)）であり、表彰された。

（文責：福澤洋一／総務担当）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
（一財）口腔保健協会内

TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

【会員数】正会員1,016名、団体会員31団体、維持会員5社、賛助会員9社（2023年11月30日現在）

【設立年】1960年（昭和35年）

【機関誌】「日本歯科医療管理学会誌」を年4回発行

【認定医・専門医など】認定医129名、指導医27名、認定士5名（2023年11月現在）

一般社団法人 日本歯科薬物療法学会

理事長 松野 智宣

<http://jsotp.kenkyuukai.jp>



1. 学術大会・総会の開催について

9月22日～24日、栃木県総合文化センターにおいて、第43回日本歯科薬物療法学会学術大会が岩渕博史大会長（国際医療福祉大学病院歯科口腔外科教授）のもと開催された。今回は日本口腔診断学会、日本口腔内科学会、日本口腔感染症学会との4学会合同での学術大会の開催となった。大会テーマは「口腔医学の集結」とし、特別講演2題、教育講演2題、シンポジウム6テーマ、大会長特別企画2テーマ、公開CPC、歯科衛生士シンポジウム、第11回認定制度教育講演、公開市民講座など多彩なプログラムが行われた。特別講演では日本医師会の山本学先生に「医師主導治験について」、大会長特別企画では神奈川歯科大学歯科保存学講座の石井信之先生に「ホルムアルデヒド製剤の医療訴訟と使用撤廃」と題して講演していただいた。一般演題数は185題、参加者はオンデマンドも合わせ819名であった。なお、社員総会はWebで6月21日に開催した。

2. 学会活動について

年1回の学術大会開催、年2回の学術誌および関連書籍などを発行している。また、認定医・認定薬剤師・認定歯科衛生士の養成および認定の他、ICD講習会の開催と認定制度にも関わっている。一方、歯科における未承認薬、保険適用外薬および漢方薬の歯科における普及についても検討を行い、他学会および関連行政団体への働きかけを行っている。

特に、現在問題となっている薬剤耐性（AMR）対策と術前予防抗菌薬の保険適用を含めた抗菌薬の適正使用（AMS）に関して、次年度以降に歯科医療協議会において本学会を中心としたワーキンググループを立ち上げ、歯科におけるAMR対策およびAMSの普及を目指す。

また、歯科薬物療法の正しい知識とその普及に努め、超高齢社会における医科歯科連携の基盤作りと薬剤情報の共有、高齢者のポリファーマシーおよび服薬アドヒアランスなどへの対応も強化している。さらに、菌性感染症への適切な抗菌薬療法の普及、あるいは歯科医院におけるスタンダードプリコーションや新興感染症を含めた医療関連感染対策、さらに新たな消毒薬に関する研究なども行っている。

本年度のトピックス

本年度のトピックスは、以下の通りである。

- ①第43回大会が前述のごとく、4学会合同という初の試みで開催された。
- ②昨年発刊した『日本歯科用医薬品集』の第5版が一部改訂されて増刷となり、さらに電子書籍化されることが決まった。
- ③日本感染症学会・日本化学療法学会発行の『JAID/JSC 感染症治療ガイド2023』が発刊され、本学会は「XV. 菌性感染症、口腔カンジダ症、抜歯後SSI予防」の項を担当した。
- ④第8回認定試験では認定医5名が登録された。
- ⑤関連学会として日本口腔感染症学会に加え、日本歯科東洋医学会との連携が図られた。
- ⑥第45回学術大会は、日本歯科大学附属病院口腔外科・松野智宣教授が大会長に任命された。

なお、次年度の第44回大会は日本歯科大学共同利用研究センター・葛城啓彰教授の大会長のもと、2024年7月13～14日、新潟県民会館において『味覚障害の基礎と臨床』をテーマに開催される。

会員以外の歯科医療関係者にお伝えしたいこととして、本学会は歯科においてICDを申請できる4学会のひとつである。そのため、ICD講習会などを通して歯科医師のICD養成を担っているので、ICD取得を考えている先生方には是非ご入会いただきたい。

（文責：岩渕博史／副理事長、松野智宣）

《問い合わせ先・事務局》

〒151-0051 東京都渋谷区神宮前2-4-11
Daiwa 神宮前ビル1F (株)大伸社(DS&C)内
TEL: 03-6863-1777, FAX: 050-3153-0400
E-mail: jsotp-sec@daishinsha.jp

【会員数】 会員573名、賛助会員4社（2023年12月8日現在）

【設立年】 1979年（昭和54年）

【機関誌】 和文誌「歯科薬物療法」を年2回発行。日本歯科用医薬品集を発行

【認定医・専門医など】 専門医63名、認定薬剤師7名、認定歯科衛生士4名、ICD108名

公益社団法人 日本障害者歯科学会

理事長 小笠原 正

<https://www.jsdh.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第40回総会および学術大会（大会長 八若保孝先生（北海道大学大学院歯学研究院口腔機能学分野 小児・障害者歯科学教室教授）は、“笑顔こぼれる明日へ—持続可能な社会とともに—”をテーマとして2023年11月10日～12日にロイトン札幌にて開催された。一般演題は290演題であった。第40回記念事業として、特別講演「日本障害者歯科学会の歩み—どのようにして始まったのか—（池田正一先生）」、座談会「元理事長経験者4人が語るあんなこと、こんなこと—それぞれが目指した障害者歯科の姿—」、理事長講演「障害者歯科医療の課題と発展への期待（小笠原正先生）」、第40回記念国際シンポジウムが開催された。学術大会プログラムは、教育講演1「小児在宅医療の過去・現在・未来（前田浩利先生）」、教育講演2「自閉症という障害が僕に教えてくれたこと（東田直樹先生）」、シンポジウム3題、教育講座4題、市民公開講座1題、委員会企画講演9題などであった。

2. 学会活動について

学会誌は、原著論文が6編、症例報告12編、臨床集計8編、臨床ヒント1編、総説論文（講座）4編が掲載された。本学会は27の委員会が活動し、診療ガイドラインの作成、IT化を進めている。専門医基本研修会3題、認定医研修会2題を2回開催した。地域医療推進のために3月に熊本県、10月に富山県にて障害者歯科セミナーを開催した。

認定医・認定医指導医試験、専門医・専門医指導医試験、認定歯科衛生士試験は10月15日に全国5カ所で実施された。

本年度のトピックス

本年度の大きなトピックは公益社団法人として初めての周年事業、すなわち日本障害者歯科学会として40周年、その前の研究会から換算すると50周年を開催したことである。

この第40回大会会期中には、本学会の記念事業として40周年事業を行い、30周年以降、本学会に対して貢献の大きかった方々に感謝状や記念品の贈呈を行った。また、大会長の八若保孝先生に了承を得て、40周年の特別企画で、これまでの理事長経験者にこれからの学会に期待することについて意見交換が行われた。そして、記念国際シンポジウムでは、国際障害者歯科学会（iADH）の会長 Gustavo Molina 先生（アルゼンチン）を始め、アジア障害者歯科学会（AADOH）の次期会長で、2024年の国際障害者歯科学会（iADH）の大会長 Young J Kim 教授（ソウル大学）、台湾障害者歯科学会（TADOH）の Alicia Ko 先生が祝辞と今

後の展望について述べていただいた。初雪が降雪した寒い札幌ではありましたが、多くの参加者が集い盛会に終了したことが本年の大きなトピックであったと思う。

一方で、本学会・研究会の設立者の一人である、上原 進先生が本年11月24日にご逝去された（享年91歳）。昨年の39回大会では、セッションを1つ持たれて、お元気な姿を会員一同に披露されていたが、40回大会期間中は、入院中とのことで、参加は叶わなかった。40周年記念大会が無事に終了された事に安堵されて旅立たれたのであろう、と自分は勝手に思っているが、会員一同深い悲しみに包まれている。この場をお借りして哀悼の意を表したいと思う。これからも、本会の運営を発展させ、上原先生に毎年良い報告ができるよう精進したいと思っている。

（文責：弘中祥司／庶務担当理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル4F
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341
E-mail：jsdh@kokuhoken.or.jp

【会員数】正会員4,022名、準会員1,119名、名誉会員19名、賛助会員7社（2023年11月現在）

【設立年】1973年（昭和48年）

【機関誌】「障害者歯科」を年3回発行、ニュースレターを年3回発行

【専門医制度】2017年発足。2023年11月末日現在、専門医指導医44名、専門医189名、専門医研修施設56施設

【認定医制度】2003年発足。2023年11月末日現在、名誉指導医・認定医6名、認定医指導医207名、認定医1,401名、臨床経験施設270施設

【認定歯科衛生士審査制度】2008年発足。2023年11月末日現在、指導歯科衛生士89名、認定歯科衛生士408名、臨床研修施設27施設

一般社団法人 日本老年歯科医学会

理事長 水口 俊介

<http://www.gerodontology.jp/>



1. 学術大会・総会の開催について

第34回学術大会（第33回日本老年学会総会および第12回アジア／オセアニア国際老年学会議合同開催）は、羽村章副理事長（日本歯科大学生命歯学部高齢者歯科学）を名誉大会長、菊谷武理事（日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック）を大会長に、2023年6月16日～18日の3日間、パシフィコ横浜ノースで開催された。メインテーマを「生きるための、しあわせのための「くち」を守る」とし、特別講演4、シンポジウム13、ランチョンセミナー6、飲茶セミナー3を企画した。口演発表41題、ポスター発表152題、合同ポスター5題、合同シンポジウム6題で、優秀口演賞2名と優秀ポスター賞3名が表彰された。

定時社員総会は同年6月17日に同会場で開催した。

2. 学会活動について

本会は、日本老年学会の構成団体である。日本老年医学会、日本老年社会科学会、日本基礎老化学会、日本老年精神医学会、日本老年看護学会、日本ケアマネジメント学会に加え、本年からは日本老年薬学会とともに8学会で連携して活動している。本会の理事長と理事6名が日本老年学会の理事となっている。本会より国際老年学会議（IAGG）の評議員が選出されている。

本会には25の委員会が設置され、地域や病院および高齢者に関わる現場と学会を繋ぐ重要な役割を担っている。本会では学会認定医制度、専門医制度、摂食機能療法専門歯科医制度を運営し、高齢者に対する高い専門的知識と技術を有する歯科医師の育成に力を入れている。また、日本歯科衛生士会の認定歯科衛生士（認定分野B：老年歯科）の専門審査を行っている。

また、ガイドラインやマニュアルおよび立場表明の公表などに積極的に取り組み、エビデンスの確立に向けて高い意識を持って活動している。

学会活動にオリジナルキャラクターを取り入れ、高齢者自身が口腔の健康状態を受け入れ易い働きかけを工夫している。

本年度のトピックス

「歯科訪問診療における感染予防策の指針 2022年版」、「口腔ケアリーフレット用動画」等を作成した。日本歯科医学会歯科診療ライブラリーには本会編纂の「歯科訪問診療における感染予防策の指針 2022年版」および「在宅歯科医療の基本的考え方 2022」が収載された。本会会員に対してだけでなく、会員外の歯科医師や歯科衛生士、医療・介護職に対しても情報提供を行っている。歯科診療に関する基本的な考え方の「口腔機能低下症に関する基本的な考え方」の作成・改訂にも協力している。また、「4学会合同のフッ化物配合歯磨剤の推奨される利用方法 2023」を発刊するなど、国民や患者さんに対して科学的根拠を基にした情報提供を積極的に行っている。

「老年歯科医学用語辞典 第3版」を発刊し、老年歯科医学に関連する医学用語の整理を行った。また、「老年歯科医学 歯科衛生士教育基準」を公表するなど、老年歯科の教育分野の責任学会としての既刊の改訂も含めた継続的な取り組みをしている。

本会は47都道府県に支部を置き、それぞれの地域性により異なる課題や事例を全国で共有し、臨床・歯科連携・人材育成・多職種連携などの活動の後押しをしている。学術大会の際には、支部長会やシンポジウムを開催し、支部間の情報交換を行い、充実した支部活動の推進を行っている。

（文責：上田貴之／総務担当常任理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込 1-43-9 駒込TSビル
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891、FAX：03-3947-8341

【会員数】 4,242名（2023年12月8日現在）

【設立年】 1986年（昭和61年）

【機関誌】 「老年歯科医学」年4回、「Gerodontology」年4回、「ニューズレター」年4回発行

【認定医・専門医など】 認定医数349名、専門医数296名、指導医数193名（以上、のべ人数）、摂食機能療法専門歯科医師108名

一般社団法人 日本歯科医学教育学会

理事長 秋山 仁志

<https://jdea.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第42回日本歯科医学教育学会学術大会は7月15日～8月31日に福岡歯科大学を主管校としてオンライン形式で開催された。大会長は高橋裕（福岡歯科大学学長）である。「デジタル時代の歯科医学教育を考える」をテーマに、特別講演として「歯学教育におけるDXについて」「臨床実習評価システムの開発について」「歯学系共用試験の現状と展望」の3題、シンポジウムとして「デジタル・デンティストリーの臨床と教育」「歯科医学教育白書2021年版にみるわが国の歯科医学教育の現状」の2題が行われた。一般発表は、口演5題、ポスター38題の発表が行われた。参加者は304名であった。

2. 学会活動について

本学会では11の委員会を設置し、歯科医学ならびに関連領域の教育向上、充実および発展を見据えた積極的活動を行っている。総務委員会は庶務事項、学術賞の選考、規程・規約の策定・改定作業を行っている。財務委員会は予算・決算案の作成を行い、学術委員会は学術大会のテーマ・企画の検討を行っている。企画・将来構想委員会は、学会の在り方、オンラインでの講習会の実施方法について検討し、編集・広報委員会は学会誌の編集作業、学会Webサイトの管理、メールマガジンの配信を行っている。教育国際化推進委員会は諸外国の歯科教育関連学会に参加し、情報の収集・発信に努め、教育能力開発委員会は各種ワークショップの運営を行っている。教育方略委員会は倫理・プロフェッショナリズム、多職種連携等の学習方略の調査・検討を行っている。教育評価委員会は歯科医師国家試験に関するアンケート調査を実施し、教育一貫性委員会は卒前教育から生涯教育のシームレスな学習の在り方を検討している。機関会員委員会は歯科大学・大学歯学部29校が会員として参加し、利益相反委員会は会員の利益相反状態の管理・対応を行っている。

本年度のトピックス

前年度に引き続き、文部科学省委託事業、厚生労働省補助事業を実施している。文部科学省委託事業の「歯学教育モデル・コア・カリキュラム改訂を踏まえた調査研究」では、歯学教育モデル・コア・カリキュラム令和4年度改訂版の各大学での適用状況を調査し、FD・e-ラーニングコンテンツの開発・普及活動を目的としている。

厚生労働省補助事業の「臨床研修活性化推進特別事業」は前年度と同様に指導歯科医講習会の講師養成のための研修会の実施と、指導歯科医のフォローアップ研修のためのe-ラーニングシステムの運営および教材のブラッシュアップを行う。「令和5年度歯科医師臨床研修指導医講習会（プログラム責任者講習会）」も前年度同様、2回の講習会を実施することとなっている。

（文責：藤井一維／総務担当常務理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

[会員数] 1,586名（2023年11月30日現在）

[設立案] 1982年（昭和57年）

[機関誌] 「日本歯科医学教育学会雑誌」を年3回発行

公益社団法人 日本口腔インプラント学会

理事長 細川 隆司



<https://www.shika-implant.org>

1. 学術大会・総会の開催について

第53回日本口腔インプラント学会学術大会を、2023年9月15日～17日、札幌コンベンションセンターにおいて、「国民から信頼される口腔インプラント治療」をメインテーマに、そして「口腔機能回復によるQOL向上への貢献」を大会サブテーマとして開催した（横山敦郎大会長：北海道大学歯学部）。本学術大会は、専門医教育講座・倫理関連セミナーに始まり、BACK TO THE BASICSと続き、インプラント治療の根幹となる内容でオープニングセッションを引き締めた。大会テーマの「国民から信頼される口腔インプラント治療」を具現化するための序章を期待させるものであった。特別講演「はやぶさ2・リュウグウ・地球・生命」では北海道大学大学院理学研究院の塚本尚義先生から、人類史上初めて小惑星リュウグウに着陸し、その星のサンプルを地球に持ち帰った小惑星探査機はやぶさ2に関わるエピソードをご紹介いただいた。3年ぶりに開催された国際セッションでは、ドイツ、インドネシア、タイからの演者の講演で国際色豊かとなり学術大会に華を添えるかたちとなった。シンポジウム企画は10を数え、最新の技術を紹介する「デジタル技術を応用したインプラント治療の現状と課題」に始まり、最も重要かつ基本的な知識の確認を目的とした「インプラント治療において押さえておくべき解剖学的知識」、「インプラント治療を行う際に必要な全身の知識」と続き、さらには「長期安定性から見たインプラント周囲疾患の予防と治療：現状と課題」で、インプラント周囲粘膜炎ならびにインプラント周囲炎等の併発症にどのように対処していくべきかについての討論がなされた。さらに「未来のインプラント治療に貢献しうる幹細胞研究」、「顎顔面補綴に対するインプラント治療の理論と実際」など基礎研究と特殊治療にも目を向け、インプラント治療の多様性についても示すことのできた企画であった。大会企画として、10のシンポジウムが、日本補綴歯科学会、日本歯周病学会、日本口腔外科学会、日本デジタル歯科学会など、多くの学会との共催企画として開催され、インプラント治療に必要な知識を情報共有する良い機会となった。上記の企画に加え、従来通り、優秀研究発表、一般口演、ポスター発表、専門医教育講座をはじめ各種教育講座なども開催され、本学術大会は盛会裏に閉会をむかえることができた。第54回学術大会は、2024年11月1日～3日に国立京都国際会館で開催予定である（阪本貴司大会長：大阪口腔インプラント研究会）。総会は、2023年6月18日にヴェルサル八重洲で開催し、2022年度収支決算報告、事業報告などが承認された。

2. 学会活動について

本部の活動と並行して、全国6支部（東北・北海道、関東・甲信越、中部、近畿・北陸、中国・四国、九州）が支部活動を行っている。学会活動を通して優れた研究や業績を収め、それをもって国民の健康に寄与・貢献した会員に対して、優秀論文賞、奨励論文賞、優秀研究発表賞（基礎）、

優秀研究発表賞（臨床）、優秀ポスター発表賞、優秀歯科衛生士発表賞、優秀歯科技工士発表賞等を設け、表彰を行っている。認定制度事業として、口腔インプラント専門医臨床技術向上講習会を2023年2月23日、7月16日、11月23日にオンライン開催した。いずれも600名規模の定員で、専門医だけでなく全ての会員が受講可能としている。学会の刊行物として、和文誌「日本口腔インプラント学会誌」と国際誌「International Journal of Implant Dentistry」があり、編集委員会、国際委員会のもと定期的に発刊され、エビデンスに基づいた重要かつ有益な情報を、会員はもとより世界中に提供し続けている。

本年度のトピックス

上述の学会誌、特に国際誌は、インパクトファクターを獲得して以来、国内外からの投稿が急激に増加したこと、そして注目度の高まったことから、学術領域における本学会の果たすべき役割と責任はより重いものとなった。また、本学会は継続的に国民が安心して受診できるインプラント治療の構築、インプラント歯科専門医の育成と認定制度の確立を進めてきた。インプラント治療のあるべき方向性を示す「口腔インプラント治療指針」と、学術活動の基軸となる専門用語を収めた「口腔インプラント学 学術用語集」を発刊し、4年ごとに改定を行っている。現在、2024年の改訂版発刊にむけ、各委員会が準備を進めている。それに加えて、オンラインセミナーなどを活用し、医療倫理・医療安全についても、積極的に取り組んでいる。その他の診療学術等に有益な情報については、学会ホームページ上に掲載し、無料ダウンロード可能として、国民の健康に寄与すべく尽力している。さらには、コロナ禍においても、国民が安心して受診できるよう、最新かつ重要な情報の発信や、相談窓口を設置して各方面からの要望に対応を続けている。来年度に向け、より一層の学術活動の活性化を期待し、そして次期学術大会においては国内ならびに海外との学術交流が広く展開されるよう準備を続けている。

（文責：近藤尚知／学術関連統括常務理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒108-0014 東京都港区芝4-3-5 ファースト岡田ビル8F
TEL：03-5765-5510、FAX：03-5765-5516
【会員数】17,206名（2023年10月末現在）
【設立年】1972年（昭和47年）
【機関誌】和文誌「日本口腔インプラント学会誌」年5回発行。英文誌「International Journal of Implant Dentistry」年2回発行
【認定医・専門医など】専修医1,070名、専門医1,379名、指導医256名、インプラント専門歯科衛生士979名、インプラント専門歯科技工士250名（2023年10月末現在）

一般社団法人 日本顎関節学会

理事長 依田 哲也

<http://kokuhoken.net/jstmj/>

1. 学術大会・総会の開催について

第36回日本顎関節学会学術大会を2023年7月8日～9日に、依田哲也大会長（東京医科歯科大学 顎顔面外科学分野 教授）の下、東京ビッグサイト TFT ホールで開催した。「顎関節サイコウ（再考，再興，最高!!）；みんな集まれ!」をテーマに，シンポジウム，教育講演，若手研究企画や，その他多数の口演発表・ポスター発表が行われ，参加者数は652名だった。

次回の第37回学術大会は2024年7月13日～14日にあわぎんホール（徳島）にて，松香芳三大会長（徳島大学歯学部・大学院口腔科学研究科 顎機能咬合再建学分野 教授）の下で開催予定である。

2. 学会活動について

本学会は理事25名（理事長1名，副理事長1名，常任理事5名を含む），監事2名で役員を構成し，23の常置委員会，2つの暫定委員会があり活動を行っている。

年3回の学術講演会をはじめ，2015年より，要望のある都道府県歯科医師会で「新顎関節症の病態分類」に関する学術講演を実施。現在は「顎関節症治療の指針2020」に関する学術講演を企画しており，会員・非会員を問わず，顎関節症ならびにその他の顎関節疾患の標準的な診療の啓発活動に積極的に取り組んでいる。

また，認定制度により専門医・指導医，認定医を認定するとともに，2015年より暫定指導医制度を運用し，全国的に認定研修機関を設置して，専門医育成の環境作りを進め，これまで以上に顎関節症をはじめとする顎関節疾患の標準的な診療の普及に力を入れている。

国際交流に関しては，アジア顎関節学会（隔年開催）との交流を行っている。

また，現在世界標準の顎関節症（TMD）診断基準であるDC/TMD（Diagnosis of Criteria for Temporomandibular Disorders）のInternational Networks for Orofacial Pain and Related Disorders Methodology（INFORM）公認のDC/TMD認定トレーニングコースを行う。

本年度のトピックス

2023・2024年度，日本顎関節学会では，継続事業である学術講演会が開催済み，また開催予定である。テーマは第57回「顎関節と咬合の関わりに関する様々な対応」，第58回「症例から考える一顎関節症を難しくする鑑別診断と治療選択」，第59回「顎関節症の基本治療が奏功しない場合の対応—外科治療を中心に—」であり，若手からベテラン，多科からの観点，多職種との関わり等，顎関節症に関する知識を広く普及させるべく取り組んでいる。

学会における23の委員会は前年度から新体制となり，それぞれの課題解決に向け取り組みを行っている。

重点目標のひとつである顎関節症治療への歯科衛生士の参画については，歯科衛生士委員会が担当しており，第36

回本学会学術大会では，日本歯科衛生士会共催・臨床医の会合同シンポジウム「歯科衛生士と行う顎関節症病態別治療」が開催され，日本歯科衛生士会会長と歯科衛生士委員会委員長が座長となり，顎関節症治療に従事する会員歯科医師と歯科衛生士がシンポジストとなって，臨床における取り組みを紹介し活発な議論がなされた。2024年7月には歯科衛生士部会が発足予定である。

総務委員会では本学会が編纂する「新編顎関節症改訂版（2013年版）」について，現在の顎関節症に関する研究の進展を反映させるべく改定作業を行っており，2024年6月発行予定である。

超高齢社会に向かっている日本においては，口腔機能低下症（オーラルフレイル）への対応が重要な課題のひとつと認識されている。疫学調査委員会では，顎関節障害とオーラルフレイルとの関連について高齢者施設において疫学調査を行い，学会誌，学術大会において発表を行い，現状分析と今後の取り組みについての見解を公表している。こうした結果も踏まえ，オーラルフレイル委員会では，日本歯科医学会「口腔機能低下症に関する基本的な考え方」精密検査に，新たに顎関節検査を加えるべく働きかけを行っている。

本学会は，こうした新しい課題である多職種連携，オーラルフレイル対応や新たな知見を加えた解説書の改定など精力的に活動しており，本国の歯科医療従事者に最新の情報を提供し，国民の生活の質の向上に寄与できるよう尽力していく所存である。

（文責：羽毛田 匡／理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル401

（一財）口腔保健協会内

TEL：03-3947-8891，FAX：03-3947-8341

【会員数】正会員1,951名，準会員32名，名誉会員59名，賛助会員3社（2023年12月7日現在）

【設立年】顎関節研究会：1980年，日本顎関節学会：1988年，有限責任中間法人日本顎関節学会：2008年，一般社団法人日本顎関節学会：2009年

【機関誌】和文誌「日本顎関節学会雑誌」を年4回発行（大会特別号を含む）。ニューズレター，メールマガジンを随時発行

【認定医・専門医など】現在101研修施設，23関連研修施設，研修補助施設4施設があり，歯科顎関節症専門医（307名），指導医（195名），認定医（55名），基礎系指導者（3名）が在籍している

特定非営利活動法人 日本臨床口腔病理学会

理事長 豊澤 悟



<https://www.jsop.or.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

2023 年度第 34 回日本臨床口腔病理学会総会・学術大会は、8 月 24～26 日に、豊澤悟大会長（大阪大）のもとに、大阪大学コンベンションセンターで対面開催された。特別講演は、森井英一教授（大阪大・医学系研究科）により、教育講演は長尾俊孝教授（東京医科大）により行われ、ランチョン講演は田中陽一客員教授（東京歯科大）と北村温美副部長（大阪大・医学部附属病院）により行われた。シンポジウムでは、「口腔表在癌を考える」（山城正司部長／NTT 東日本関東病院、佐藤由紀子副医長／がん研・有明病院、辺見卓男講師／日本歯科大）、「バイオインフォマティクス研究」（大庭伸介教授／大阪大、大塚邦紘助教／徳島大、廣瀬勝俊助教／大阪大）、「口腔細胞診」（久山佳代教授／日大松戸、岸野万伸教授／宝塚医療大、北村哲也所長／北海道口腔病理診断所、重岡学講師／神戸大）が行われた。また、症例検討、研究発表、若手の集い、専門医講習会が行われ、多数の一般口演やポスター発表があった。

次回の第 35 回日本臨床口腔病理学会総会・学術大会は、2024 年 7 月 30 日～8 月 1 日に田沼順一大会長（新潟大）のもとに、新潟大学内施設で行われる予定である。

2. 学会活動について

日本臨床口腔病理学会では、口腔領域の様々な疾患の治療方針決定に不可欠な病理診断を行うため、病理診断の標準化を目指した学会活動を行っている。その中で口腔上皮性異形成（oral epithelial dysplasia：OED）の病理診断の標準化のため、OED 学会主導調査研究ワーキングが活動しており、2024 年の本学会総会・学術大会にてその成果が報告される。

第 57, 58 回口腔四学会合同研修会では、タイトル「病理診断、検体検査における誤診の防止のために」（本学会担当・田沼順一教授／新潟大）の講演をオンデマンド形式で 2～3 月に上映し、研修を行った。第 54, 55 回口腔三学会連携協議会は、7 月に Web にて、11 月に対面にて開催された。11 月開催の第 68 回日本口腔外科学会では、口腔三学会合同シンポジウム（本学会担当・松坂賢一教授／東京歯科大）と口腔細胞診セミナー（久山佳代教授／日大松戸）を行った。

日本口腔外科学会・顎骨壊死検討委員会作成の「薬剤関連顎骨壊死の病態と管理：顎骨壊死検討委員会ポジションペーパー 2023」（本学会担当・池田通教授／東京医科歯科大）が刊行された。

「若手の集い」とよばれるミニ学会を学術大会前日に開催した。これは若手会員の交流や活動活性化に向けて、

立案から開催までの全てを 40 歳以下の会員で実施するものである。プログラム内容は、研究や病理診断、教育講演など多岐にわたり、多くの若手会員が参加して活発な意見交換が行われた。

頭頸部腫瘍・WHO 分類の改訂（2022 年）に伴って、病理診断および歯科教育において使用される各疾患標準和名を作成した。日本口腔外科学会と日本歯科放射線学会との調整のうえ、2024 年 1 月に疾患標準和名を本学会ホームページから公開する。

本年度のトピックス

日本臨床口腔病理学会では、ICT の利活用を推進して、病理組織画像共有による会員情報交換や社会への情報発信力の強化のため、学会ホームページの全面的なリニューアルを行った。学会ホームページを介して、病理診断コンテンツを配信して、口腔病理医のための病理診断教育支援を行うなど、病理診断の精度管理の向上や口腔病理医の育成に向けて運用していく。本学会 HP リニューアルにより、本サイトへのアクセス数が増加しており、今後、口腔病理診断の精度向上に繋がることを期待している。

（文責：豊澤 悟）

《問い合わせ先・事務局》

〒110-0016 東京都台東区 4 丁目 22-8
ワタナベビル 2 階 (株)ウイザップ東京支店内
TEL：03-6284-2560, FAX：03-6284-2561
E-mail：jsop-info@sksp.co.jp

【会員数】512 名（2023 年 10 月 10 日現在）

【設立年】1990 年（平成 2 年、日本口腔病理学会）、法人 2006 年（平成 18 年、特定非営利活動法人 日本臨床口腔病理学会）

【機関誌】英文誌「JOMSMP」（各年 6 号発行）「JOPM」（各年 10 号発行）

【認定医・専門医など】口腔病理専門医（一般社団法人日本病理学会認定）

一般社団法人 日本接着歯学会

理事長 坪田 有史

<https://www.adhesive-dent.com/>

1. 学術大会・総会の開催について

2023年9月30日～10月1日に第42回日本接着歯学会学術大会（大会長、二瓶智太郎教授）をタワーホール船堀にて開催した。メインテーマは「Back to the basic」であり、参加者は293人であった。開催内容としては日本歯科医学会会長講演、理事長基調講演、招待講演、シンポジウム Part1（4題）、シンポジウム Part2（5題）、口頭発表5題、ポスター発表24題であった。また、大会中に設立40周年記念祝賀会を会員懇親会とともに併催した。

2023年5月28日に2023年度第1回および第2回理事会、第1回定時社員総会および第1回臨時社員総会をオンライン開催した。

2. 学会活動について⑥

2023年5月28日に2023年度学術セミナー・研修医認定研修会を、講演ビデオのオンライン配信およびライブによる質疑応答で開催した。テーマは「接着技術に立脚した補綴臨床の意義とその価値」であり、参加者と講演者を交えた活発なディスカッションが行われた。また機関誌の「接着歯学」41巻の1号から4号（3号は大会抄録集の電子版）とDental Materials Journal Vol. 42 No. 1～6を刊行する。

本学会では、学術・編集・広報・社会医療検討を含めた常設12委員会による事業によって、会員や一般臨床家のみならず国民が望む接着歯学活用の良質な歯科医療への寄与を念頭に、精力的な活動を行っている。さらに専門医認定委員会および研修検討委員会は、「卓越した専門医の育成」および「厳格な認定制度の確立」に邁進している。

科治療において必須であり、日々の臨床現場で歯科接着を活用しないことには臨床が成立しない。そして、信頼性の高い歯科接着は、健全歯質の保存、歯自体の保存や咬合の保全などに寄与する。

接着歯学は、歯科領域での様々な歯科接着を研究する学問を指し、長期に渡る健康維持、そして健康寿命の延伸に欠かせない学問といえる。日本接着歯学会の会員は、この接着歯学を学び、臨床で実践している。なお、本会の認定制度により、接着歯学に関する最新の専門的知識と臨床技能及び医療人としての取り組みを有する「接着歯科治療専門医」に認定された会員は、ホームページ「認定制度」内で検索できる。

日本接着歯学会は、さらに国民、ならびに歯科医療関係者に接着歯学的重要性を広く周知していく。そして、本会の特徴の一つである臨産学の強い連携により、国民の健康維持、健康寿命の延伸に寄与する日本接着歯学会を目指していく。

(文責：峯 篤史／役員幹事)

本年度のトピックス

本会は、1983年3月20日に「日本接着歯学研究会」としてスタートし、1987年4月25日、第5回学術講演会総会で「日本接着歯学会」と改組され、2008年には日本歯科医学会の専門分科会に加入した。2016年4月1日の一般社団法人化を経て、学術団体として発展し続け、40年の節目を本年度に迎えた。

本会「定款」第1章第2条に本会の目的は、「接着歯学に関する学問と技術を研究し、接着歯学の進歩発展を図り、歯及び歯列の保存と口腔機能の長期維持を指向した歯科治療を実現することにより、国民の健康及び福祉の向上に寄与すること」と明記されている。歯科接着は、「Minimal intervention dentistry (MID)」のコンセプトの実践、歯冠修復、歯冠補綴、欠損補綴を含め全ての歯

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル3F
(一財) 口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

【会員数】937名（2023年12月15日現在）

【設立年】1987年（昭和62年）

【機関誌】「接着歯学」年4回発行、「Dental Materials Journal」年6回発行

【認定医・専門医など】接着歯科治療専門医126名、指導医73名、専門医認定研修施設34施設（2023年12月15日現在）

一般社団法人 日本歯内療法学会

理事長 柴 秀樹



<https://jea-endo.or.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第44回学術大会はKAE（韓国歯内療法学会）とJoint-Meetingの形式で7月8日～9日に品川区の上條記念館にて3年ぶりの対面で開催された。参加者は事前登録438名、当日登録164名、計602名、KAE（韓国歯内療法学会）からの招待者が19名、名誉会員2名が参加し合計623名の参加となった。演題はテーブルクリニック6題、ポスター29題、講演6題という内容だった。理事会、総会は2023年7月7日～8日にコロナ禍になって初めて対面にて開催された。

2. 学会活動について

現在の会員構成は、大学関係者と開業医でほぼ同数で約2,700名が所属しており、専門医（含指導医）は262名となっている。学会活動は、学問と実際の臨床の融和を目指している。内容は、本年度はコロナ以降初の対面開催で行われた学術大会（1回／年）、理事会（3回／年）研修会（3回／年）認定臨床研修会（2回／年）専門医セミナー（1回／年）を行っており、さらに機関誌（3回／年）を発刊している。一昨年より開発が行われていたマイクロエンドドンティクストレーニング用人工歯が完成し、多くの大学や研修会で使用されることとなった。今後は更に学生教育や卒直後教育のツールとして大いに役立つ事を期待している。

歯内療法を一般の方々により理解して頂く為、ホームページの改良、マスメディアを通じての歯内療法の啓発活動を推進している。

本年度のトピックス

日本歯内療法学会の最大の特徴は大学人と開業医がほぼ同数在籍しており、「臨学一体」で活動しているところである。これにより歯内療法の質の向上に努めている。2024年の学術大会は大阪大学が主催となり大阪府の千里ライフサイエンスセンターにて7月21日～22日に開催する予定。

本学会は、歯内療法の専門として海外のAAE（アメリカ歯内療法学会）やKAE（韓国歯内療法学会）との交流を行うと同時に、IFEA（国際歯内療法連盟）やAPEC（アジア太平洋歯内療法学会）のメンバーとしても活動している。これにより、日々変わりゆく最新の歯内療法に対して研鑽を積み、国民へ寄与することを心がけている。

本学会は歯内療法の専門医の試験申請にあたり決められたカリキュラムを履修後、術後の予後評価を必須とした症例報告・口頭試問・筆記試験を実施している。これからの歯内療法の役割を考え、また国民の更なる信頼を得るためにこの審査を厳格にし、新たに専門医制度推進検討委員会を立ち上げ、現状の専門医制度を更に改良しより高度なものへと進化させるために取り組んでいく。また、学会独自で卒後教育として技能習得動画等を作成しHPにて公開している。また、倫理審査会の設置により研究発表の審査が独自でできるようになり、開業医でも審査可能な体制を整えている。

これからも「臨学一体」となって専門性を維持し、歯内療法の発展のため精進するとともに国民の健康に寄与するよう邁進したい。

（文責：大久保建吾／事務局長）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

【会員数】2,770名（2023年9月30日現在）

【設立年】1980年（昭和55年）

【機関誌】和文誌「日本歯内療法学会雑誌」を年3回発行

【認定医・専門医など】専門医（含指導医）262名、指導医44名、認定研修施設30施設、研修責任者5名（2023年9月30日現在）

一般社団法人 日本レーザー歯学会

理事長 横瀬 敏志

<https://jsld.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第35回総会・学術大会は亀山敦史大会長（松本歯科大学）のもと、Laser Week IV in Tokyoと銘打って第44回日本レーザー医学会総会、第33回日本光線力学学会学術講演会、第35回日本脳神経外科光線力学学会との合同で、11月25日～26日に京王プラザホテル東京で開催した。「レーザー医学・医療の叡智の融合」を4学会共通のメインテーマに掲げ、理事長講演：横瀬敏志先生（明海大学）、特別講演：都築 稔先生（日本薬科大学）、教育講演：末石倫大先生（末石・古久保法律事務所）、認定講習会：青木 章先生（東京医科歯科大学）、パラデンタル対象認定講習会：古川敏子先生（明海大学）、安全講習会／スイーツセミナー：丸岡 豊先生（国立国際医療研究センター病院）、合同シンポジウム：横瀬敏志先生（明海大学）、水谷幸嗣先生（東京医科歯科大学）、谷口陽一先生（谷口歯科医院）、シンポジウム1：永井茂之先生（永井歯科診療室）、須崎 明先生（ばんだ歯科）、和田圭祐先生（i-Smile Dental Clinic Tokyo）、柿本和俊先生（大阪歯科大学）、シンポジウム2：春山亜貴子先生（東京歯科大学）、甲田恭子先生（ルミエールデンタルクリニック）、関川翔一先生（東京歯科大学）、症例報告会：村極悦子先生（日本歯科大学）、中根 晶先生（アキおやこ歯科医院）、野上琴代先生（松本歯科大学）、加藤邑佳先生（明海大学）、そしてポスター発表25題という大変充実した内容であった。

第36回総会・学術大会は、前田初彦教授（愛知学院大学）のもと、2024年10月19日～20日に愛知学院大学楠元キャンパスで開催予定である。

2. 学会活動について

2023年度事業概要としては、

- ①学術大会：第35回総会・学術大会（2023年11月25日～26日）を京王プラザホテル東京で開催した。学術大会期間中に認定講習会、パラデンタル対象認定講習会、安全講習会を開催した。また、筆記試験（11月25日）と口頭試問（11月26日）による認定試験が行われた。
- ②刊行物：学会機関誌「日本レーザー歯学会誌」第33巻（1号、2号）を発行した。
- ③ホームページの大幅なリニューアルを行った。
- ④その他：日本レーザー歯学会 認定医制度が2001年度に発足し（専門医制度は2013年度、認定パラデンタル制度は2015年度に発足）、認定パラデンタル22名、認定医38名、専門医164名、指導医76名である。また、認定研修施設は18機関である（2023年10月31日現在）。

本年度のトピックス

レーザーの生体への応用は、1960年代にSternやGoldmanらがヒトの抜去歯にルビーレーザーを照射した報告に始まる。その後、本学会（当時は日本レーザー歯学会研究会）が設立された1989年頃からはレーザー機器の低価格化、小型化、高機能化が急速に進んだことで基礎研究および臨床応用が一層盛んとなった。その後、様々なエビデンスを蓄積してきた成果として保険収載されたレーザー歯科治療は、う蝕無痛の窩洞形成加算、歯肉剥離掻爬手術時又は歯周組織再生誘導手術におけるレーザー照射の応用加算、口腔粘膜処置、歯肉・歯槽部腫瘍等の軟組織摘出術におけるレーザー機器加算、口腔粘膜血管腫凝固術、エナメル質初期う蝕管理加算となっている。また、2020年度に舌悪性腫瘍手術時の口腔粘膜蛍光観察評価加算が新たに承認された。

レーザー機器が普及し始めた頃、レーザー治療は単に既存の治療・器材の代替として考えられることが多かったが、現在はレーザーがなければ成し得ない利用法が検討されている。さらに、青色LEDをはじめとして光源が多彩になったことにより、既知のレーザー波長に加えて「光」全般を研究の対象として扱っている。すなわち、抗菌光線力学療法（Antimicrobial photodynamic therapy：a-PDT）、口腔粘膜疾患のスクリーニング検査（Fluorescence visualization）、レーザー溶接やレーザーシタリング（3Dプリンター技術）、細胞・組織に対する低出力レーザー照射の作用機序の解明、歯科用OCT（Dental optical coherence tomography）、歯周組織再生への応用などは、歯科界に新しい価値を生み出すことができる技術として期待されている。本学会は「光」による技術革新とその安全な使用方法の啓発に努め、国民の健康の増進に貢献することを使命として活動している。（文責：鈴木雅也／総務幹事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル4F
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

【会員数】887名（機関、2023年10月31日現在）

【設立年】1989年（平成元年）12月

【機関誌】和文誌「日本レーザー歯学会誌」年3回発行
【認定医・専門医など】「日本レーザー歯学会専門医制度」専門医164名、指導医76名、認定医38名、認定パラデンタル22名、認定研修施設18機関（2023年10月31日現在）

一般社団法人 日本スポーツ歯科医学会

理事長 安井 利一

<https://kokuhoken.net/jasd/>



1. 学術大会・総会の開催について

第34回日本スポーツ歯科医学会総会・学術大会は、城戸寛史学術大会長（福岡歯科大学咬合修復学講座口腔インプラント学分野）のもと、2023年11月18日～19日に福岡歯科大学50周年記念講堂で現地開催された。今回は「スポーツ外傷予防でアスリートの未来を守る」をメインテーマとし、特別講演3題、シンポジウム2題（うち1題兼市民公開講座）、DTセミナー1題、SDHセミナー1題、認定アドバンスドセミナー1題（兼認定研修会）、一般演題70題、企業展示他の内容であった。学会前日にはスポーツ歯学教育ワークショップも開催された。次期学術大会は、山本一世学術大会長（大阪歯科大学歯科保存学講座）のもと、大阪にて開催予定である。

2. 学会活動について

本会の活動目標は(1)スポーツによる国民の健康づくりへの歯科的支援、(2)マウスガードやフェイスガード等によるスポーツ歯科傷害の安全対策、(3)競技力の維持・向上に向けた歯科的支援であり、臨学一体を念頭に、さまざまな活動を展開し、競技者やスポーツ愛好家、国民の口腔保健と安全確保に貢献している。本会には学術研究、学会賞選考、学術論文賞選考、教育普及、編集、認定、マウスガードテクニカルインストラクター選考、マウスガード研修施設選考、渉外広報、社会保険、倫理の各委員会が設置されている。スポーツ歯科の普及啓発のため、日本歯科医師会、日本学校歯科医会、日本歯科技工士会、日本歯科衛生士会等の外部団体との学術交流や情報交換を積極的に推進し、2013年度より開始された日本スポーツ協会公認スポーツデンティスト養成事業にも協力している。また米国、ドイツ、大韓民国、ヨーロッパ、ブラジル各国のスポーツ歯科医学会等との国際交流にも努めている。

本年度のトピックス

本会ではスポンサー企業各社の協賛をいただき、2006年度からスポーツ歯学の進歩と本会の発展に寄与する優れた業績を発表した者に対して学術表彰を行っている。本年度受賞式は第34回総会・学術大会にて執り行われた。各賞の受賞者については以下の通りである。

〈学会賞〉

- 日本メディカルテクノロジー賞：筒井新ら（東京歯科大学口腔健康科学講座スポーツ歯学研究室）
- モリタ賞：田邊元ら（明海大学歯学部スポーツ歯学分野）

〈研究奨励賞〉

- ロッチ賞：鈴木達ら（日本歯科大学大学院新潟生命歯学研究科機能性咬合治療学）
- 大栄歯科産業賞：平林怜ら（新潟医療福祉大学運動機能医科学研究所）
- ネオ製薬工業賞：渡會侑子ら（日本歯科大学新潟生命歯学部歯科補綴学第1講座）

〈学術論文賞〉

- ジーシー賞：坂東陽月ら（ばんどう歯科医院）

〈論文奨励賞〉

- スマートブラクティスジャパン賞：鈴木善貴ら（徳島大学大学院医歯薬学研究部顎機能咬合再建学分野）
- 山八歯材工業賞：杉本承子ら（昭和大学歯科病院歯科衛生室）

本年度より新しい認定制度規則での運用となり、認定医に加えて専門医と指導医を新設し、研修カリキュラムおよび審査試験・登録に係る諸料金を改定させていただいた。またスポーツ歯科に関する臨床指針として本会が編纂した学会図書「スポーツ歯科臨床マニュアル（医学情報社）」第2版が好評発売中である。本書は学会認定医や専門医、指導医、マウスガードテクニカルインストラクター、スポーツデンタルハイジニストといった認定資格の取得を目指す方だけでなく、JSPO公認スポーツデンティストやかかりつけ歯科医の先生にも役立つ内容となっているので、ご一読いただければ幸いである。

（文責：上野俊明／庶務担当理事）

〈問い合わせ先・事務局〉

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891、FAX：03-3947-8341

〔会員数〕2,023名（2023年11月1日現在）

〔設立年〕1990年（平成2年）

〔機関誌〕和文誌「スポーツ歯学」年2回、英文誌「International Journal of Sports Dentistry」年1回を発行

〔認定医・専門医など〕認定医31名、専門医115名、指導医64名、認定マウスガードテクニカルインストラクター242名、認定マウスガード研修施設34施設、認定スポーツデンタルハイジニスト90名

一般社団法人 日本有病者歯科医療学会

理事長 坂下 英明

<https://www.jjmcp.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

第32回総会・学術大会は、2023年3月17日～19日の日程で栗田浩先生（信州大学医学部歯科口腔外科教授）のもと、大会テーマ「2025年を目指した歯科医療体制の再構築」とし、軽井沢プリンスホテルウエスト（長野県北佐久郡軽井沢町）にて開催した。そのテーマに沿い、これからの歯科医療、病院歯科・口腔外科の役割など討論し、ハイブリッド形式で盛大に開催した。参加者は906名、うち約600名が現地参加であった。

今大会では、特別企画プログラム「温故知新から未来に向かう」と題して、住友雅人先生（日本歯科医学会 会長）、特別講演を「知るを愉しむ」と題して、小平奈緒先生（オリンピック・スピードスケート金メダリスト、相澤病院所属・信州大学客員教授）、教育講演1を「大規模出生コホート研究としてのエコチル調査と現在までに分かったこと、そして今後について」と題して、野見山哲生先生（信州大学医学部 衛生学公衆衛生学／小児環境保健疫学研究センター 教授）、教育講演2を「薬剤関連顎骨壊死対策のポジションペーパーの改訂」と題して、岸本裕充先生（兵庫医科大学歯科口腔外科学講座主任教授）、教育講演3を「医療安全管理マニュアル」と題して、柳本惣市先生（広島大学大学院医系科学研究科口腔腫瘍制御学教授）および近藤英司先生（信州大学医学部歯科口腔外科学教室教授）にご講演いただいた。さらに、シンポジウム2題、歯科衛生士セミナー1題を企画した。一般演題は131題であった。

次年度の第33回総会・学術大会は、2024年3月8日～10日の日程で田中彰先生（日本歯科大学新潟生命科学部歯科口腔外科学 教授）のもと、メインテーマ「地域で支える有病者歯科医療 地域完結型医療、地域共生社会に向けた新展開」と題して新潟グランドホテル（新潟県新潟市中央区）にて、新潟県歯科医師会会長 松崎先生を副大会長にお迎えし、共同して開催した。

2. 学会活動について

第13回学術教育セミナーを、4年ぶりに定員制で現地聴講を復活、定着してきたWebと合わせて、ハイブリッド開催とし、2023年10月29日に、現地聴講（AP東京八重洲：東京都中央区京橋）とライブ配信、11月1日～14日までオンデマンド配信を実施。「全身疾患に対する歯科医療の関わり—医科と歯科の連携を通して—」をテーマに開催、参加者は過去最高の494名、うち現地聴講は45名であった。

また、学会刊行物として、確実性の高い歯科治療を選択するための道標となる「有病者歯科学第3版」および、歯科診療所における安全管理の基本テキストとして、「歯科医療安全管理マニュアル」を発刊した。

本年度のトピックス

2023年3月、前理事長 今井裕の後任として、坂下英明が、新理事長に就任した。

本学会の本質は「統合医療としての歯科医療を学術すること」にあり、その範囲が「有病者」とであると理解している。特に、部位、年齢および治療手段を規定していないことが特徴で、医学に基礎を置いた歯科医療に主軸を置いて発展する学会であると考えている。

近年の医療の進歩にはめざましいものがあり、超高齢社会における歯科医療の対応も多岐に渡らざるを得なくなっている。このため、情報源としての本学会誌やHPのさらなる充実を図っていきたい。

また、（一社）日本歯科専門医機構のもと、新たな総合歯科専門医（仮称）制度の構築に備え、当学会においても、専門・認定委員会を中心として新しい専門医制度を始めるための準備は喫緊の課題である。

（文責：坂下英明）

《問い合わせ先・事務局》

〒115-0055 東京都北区赤羽西6丁目31番5号

（株）学術社内

TEL：03-5924-3621, FAX：03-5924-4388

【会員数】2819名（2023年9月30日現在）

【設立年】1991年（平成3年）

【役員】理事長：坂下英明、副理事長：石垣佳希、常任理事7名、監事3名

【機関誌】「有病者歯科医療」年6回、「NEWSLETTER」年2回発行

【認定医】認定医741名（2023年9月30日現在）

【専門医】専門医497名（うち指導医284名を含む。2023年9月30日現在）

【施設など】認定研修歯科診療施設154施設、認定歯科衛生士268名（2023年11月30日現在）



1. 学術大会・総会の開催について

第32回総会・学術大会を岩渕博史大会長（国際医療福祉大学病院歯科口腔外科教授）のもと、2023年9月21～23日、栃木県総合文化センターで開催した。本大会は、第43回日本歯科薬物療法学会、第36回日本口腔診断学会、第33回日本口腔内科学会との4学会合同学術大会となり、「口腔医学の集結」のテーマのもと対面形式で活発な質疑応答が行われた。内容は、特別講演「膜小胞ワクチン：歯周病や感染症の制御に向けた取組み」（国立感染症研究所細菌第一部 第六室口腔細菌感染症室 中尾龍馬先生）他1題、教育講演「AYA世代におけるがん・生殖医療」（国際医療福祉大学病院病院長／国際医療福祉大学医学部産婦人科学教授 大和田倫孝先生）他1題、シンポジウム1「診断学を極める～臨床推論の重要性」、2「MRONJ ポジションペーパー 2023 で何が変わったか?」、3「歯科における適応外薬への対応」、4「舌痛症/Burning Mouth Syndrome は神経障害性疼痛か痛覚変調性疼痛か」、5「口腔乾燥症新分類と唾液の質的变化」、6「重症感染症と菌性感染症を再考する」、7「歯科衛生士が行う医療安全管理・院内感染対策・医薬品安全管理・医療機器安全管理」、一般口演（117演題）、ポスター（68演題）などがあり、参加者は819名であった。併せて、第425回ICD講習会を開催した。

2. 学会活動について

本学会では、院内感染予防対策認定制度を実施しており、毎年、認定制度講習会スプリングカンファレンスを開催している。昨年は、2023年4月29日～5月14日にWebで、講演1「顎矯正手術におけるSSI回避のために出来ること」（大阪歯科大学歯学部口腔外科学第二講座主任教授 竹信俊彦先生）、講演2「薬剤関連顎骨壊死ポジションペーパー 2023～改訂の要点～」兵庫医科大学歯科口腔外科学講座主任教授 岸本裕充先生）の内容で開催した。参加者は179名であった。

本年度のトピックス

第33回総会・学術大会が近藤誠二大会長（福岡大学医学部医学科歯科口腔外科学講座教授）のもと、2024年9月21日～22日、福岡県歯科医師会館で開催予定である。テーマは「口腔感染症におけるワンヘルスアプローチ」で、ICD講習会も併催される。

また、認定制度講習会スプリングカンファレンスを2024年5月に開催予定である。昨今の事情を鑑み、現地開催になるかWeb開催になるかは今のところ未定である。決定次第、学会のホームページ（<https://www.jaoid.org>）に掲載させていただく。是非とも多数の皆様にご参加いただきたい。

本学会では、院内感染予防対策の知識と実践に優れた歯科医師・歯科衛生士を育成することにより、患者と医療従事者の健康と福祉に貢献するとともに社会に信頼される安全な医療の提供に寄与することを目的とし、2006年より院内感染予防対策認定制度を実施している。2024年1月1日現在、認定医63名、認定歯科衛生士31名となっている。COVID-19の蔓延により、歯科医療現場では厳密な院内感染予防対策が求められており、より多くの歯科医師・歯科衛生士の皆様に認定制度を取得していただきたい。認定審査は年2回行っている。詳しくは学会ホームページでご確認いただきたい。

（文責：古土井春吾／専務理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒663-8501 兵庫県西宮市武庫川町1-1
兵庫医科大学医学部 歯科口腔外科学講座内
TEL：0798-45-6677, FAX：0798-45-6679

【会員数】600名（正会員578名、名誉会員19名、賛助会員3社、2024年1月1日現在）

【設立年】1993年（平成5年）2月

【機関誌】和文誌『日本口腔感染症学会雑誌』年2回、ニュースレター年2回発行

【認定医・専門医など】院内感染予防対策認定制度。認定医63名、認定歯科衛生士31名（2024年1月1日現在）

一般社団法人 日本歯科心身医学会

理事長 安彦 善裕

<https://www.sikasinsin.or.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

第38回日本歯科心身医学会総会・学術大会は、「身近でわかりやすい歯科心身医学」をメインテーマとし、奥羽大学歯学部口腔外科学講座、高田 訓大会長のもと2023年6月30日～7月1日に郡山ビューホテル・アネックスおよびビッグアイ7階市民プラザで開催された。初日には、一般演題11題の発表の後、奥羽大学客員教授の植田耕一郎先生による「摂食・嚥下障害に対する心理的アプローチ」というタイトルでの特別講演が行われた。2日目は、4題の一般演題から始まり、シンポジウムとして「医療従事者が遭遇する心理的苦悩」というタイトルで4名の演者の発表があった。ランチョンセミナーでは、奥羽大学歯学部歯科麻酔学分野の山崎信也先生に「歯科恐怖症の管理と生体モニター」というタイトルで講演いただき、4題の一般演題の後、特別講演として大阪医科薬科大学医療管理学教授の上田英一郎先生に講演いただいた。以降は6題の一般演題発表があり、活発な議論とともに学術大会は盛況のうちに閉会となった。本学術大会は、コロナ禍により、4年ぶりの対面での開催となったが、高田 訓大会長、小嶋忠之準備委員長をはじめとする大会事務局の皆様のご尽力により、トラブルもなく成功裏に終了した。次回第39回総会・学術大会は、2024年7月19日～20日に村上 聡先生（松本歯科大学大学院病理学講座教授）主宰により長野県松本市にて開催予定である。

2. 学会活動について

「歯科領域の心身医療の発展をはかる」ことを目的として1986年に設立され、以降、歯科領域で唯一の心身医療に特化した学会として発展してきた。現在行われている主な事業は、(1)学術集会の開催、(2)機関誌の刊行、(3)教育講習会、(4)認定医制度に伴う試験の実施と教育施設の指定などがある。歯科心身医療をアジアに広めるために、会員による韓国歯科心身医学会での発表と、インドネシア歯科医学会での特別講演、および韓国歯科心身医学会との合同シンポジウムを行った。これらの活動を通じて、「同分野の学問や教育に関する議論と共に、国民の健康および福祉に寄与する」ことを重視し、会員の診断・治療能力の向上と歯科心身医療の普及を図っている。

本年度のトピックス

歯科心身症が国家試験の出題範囲に明記され、その中の「口腔セネストパチー」について、会員間でも概念の取り扱いに相違がみられたため、学術委員会および教育委員会を主体として「口腔セネストパチー」の疾患概念についての議論を行った。この結果は、本学会雑誌に「口腔セネストパチーの概念的整理」とのタイトルで投稿した。掲載後には、歯学教育に広く用いられることが期待される。また、韓国、インドネシア、タイ、マレーシアの歯学部教員へ、本学会が取り組む歯科心身医療を広く紹介した。今後のアジアでの歯科心身医療分野での連携が期待される。

(文責：安彦善裕)

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11

一ツ橋印刷(株) 学会事務センター内

TEL：03-5620-1953, FAX：03-5620-1960

E-mail：jspd@onebridge.co.jp

[会員数] 381名（2023年12月15日現在）

[設立年] 1986年（昭和61年）

[機関誌] 和文誌「日本歯科心身医学会雑誌」を年2回発行

[認定医・専門医など] 認定医30名、指導医58名

特定非営利活動法人 日本臨床歯周病学会

理事長 木村 英隆

<https://www.jacp.net/>



1. 学術大会・総会の開催について

第41回年次大会は、2023年6月24日～25日の2日間にわたり、福岡国際会議場にて現地開催、7月18日（火）～8月31日（木）までオンデマンド配信のハイブリッド形式で開催された（大会長：吉田茂，実行委員長：山下素史）。テーマは「再生療法 NEXT STEP」で、再生治療の進展を考える場となった。特別講演としてペンシルベニア大学のRodrigo Neiva教授による「Lasso Technique」を中心とした最新の骨造成に関する講演があり、会場との活発なディスカッションが繰り広げられた。また、歯科医師・歯科衛生士特別シンポジウムとして「再生療法を極める一匠の技」というテーマで、船越栄次先生、中田光太郎先生、長谷川嘉昭先生がそれぞれの経験とエビデンスに基づいた再生治療への思いを熱く語り聴衆を魅了した。さらに、若手会員による「歯科医師・新進気鋭セッション」や「歯科衛生士・ミニシンポジウム」が行われた。参加登録者が2,000名を超える大変な盛況ぶりであり、大会は成功裏に終了した。

来年の年次大会は、2024年6月15日～16日の2日間、瀧野裕行大会長のもと大阪国際会議場において開催予定である。

2. 学会活動について

本学会には北海道、東北、関東、中部、関西、中国四国、九州の7支部があり、毎年数回の支部教育研修会を開催している。現地開催とオンデマンド配信のハイブリッド開催が中心となっている。

姉妹提携をしている台湾歯周病学会（TAP）年次大会が2023年10月14日～15日台北で開催され、本学会から石川知弘先生、溝上宗久先生が講演を行い、上田直矢先生、大杉和輝先生、片山昇先生、川名部大先生、高野琢也先生、中山亮平先生の6名がポスター発表を行った。

第109回アメリカ歯周病学会（AAP）は、2023年11月9日～12日テキサス州オースティンで開催された。現地にてAAP、日本歯周病学会、当学会による会議が行われ、2024年10月31日～11月3日にサンディエゴで共催される年次大会についての協議が行われた。

本年度のトピックス

2年前より日本歯周病学会と共同で推進してきた国民への歯周病啓発活動の一環である「にゃんかむちゅ～」のYouTube動画は累計100万回視聴を記録し、若者からお年寄りまで盛況を受けている。

また、市民公開講座が、日本臨床歯周病学会主催、日本歯周病学会共催、葛飾区歯科医師会後援という形で2023年11月4日に東京都葛飾区のシャミコ会館にて開催された。演者は、木村英隆当学会理事長、沼部幸博日本歯周病学会理事長、コラムニストのトコ氏の3名で、「歯なしにならないお断り（はなし）—人生100年を楽しく生きる—」というテーマのもと、笑いあり痛快トークで、50名を超える参加者からは「もっと早く知っていた」「目から鱗でした」と大変高評価をいただき盛会に終わった。来年度もよりパワーアップした市民公開講座を企画中である。

（文責：山下素史／常務理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891、FAX：03-3947-8341

【会員数】5,298名（2023年12月1日現在）

【設立年】2006年（平成18年）

【機関誌】「日本臨床歯周病学会誌」年2回、「メールマガジン」月1回発行

【認定医・専門医など】認定医419名、指導医98名、
歯周インプラント認定医91名、歯周インプラント指導医62名、
認定歯科衛生士412名、指導歯科衛生士27名

一般社団法人 日本歯科審美学会

理事長 山本 一世

<https://www.jdshinbi.net/>

1. 学術大会・総会の開催について

定時社員総会は2023年6月11日に、新型コロナウイルス感染拡大防止のためオンライン会議で開催した。2023年12月9日～10日には、第34回学術大会（西谷佳浩大会長、鹿児島大学）を「明日へとつなげる歯科審美」というテーマで、川商ホール（鹿児島）にて開催した。

2024年度の第35回学術大会（保坂啓一大会長、徳島大学）は、12月7日～8日に、「歯科審美の守破離」をテーマに、あわぎんホール（徳島）にて開催予定である。

2. 学会活動について

本学会は、歯科審美に関する学問の基礎ならびに臨床に関する研究の発展を期し、併せて審美歯科の進歩発展を図り、顎口腔の形態美・色彩美・機能美の調和が図られた歯科医療を実践することを目的に掲げている。機関誌として「歯科審美」の年2号の発行、学会活動に関する各種情報提供として「ニュースレター」を年2号発行している。また、迅速な情報提供手段としてホームページと電子メールを活用している。学術大会の他に年数回の学術講演セミナーを開催している。一昨年度からコロナウイルス感染拡大防止のため、開催形式をオンライン形式に変更して行ってきたが、最近では対面形式での開催も行っている。また、医療従事者養成機関への出張講義を行っており、2022年度は歯科衛生士および歯科技工士の養成校の計51校において実施した。

認定制度としては、歯科医師を対象とした認定医、歯科衛生士・歯科技工士を対象とした認定士に加えて、歯の漂白治療に携わる歯科衛生士を対象にしたホワイトニングコーディネーター制度を設けている。また、本法人の目的を達成するための事業として、専門医制度導入の準備や日本歯科医学会連合医療問題関連事業の推進を行っている。

本学会は国際交流事業として、国際歯科審美学会（IFED）およびアジア歯科審美学会（AAAD）に組織加盟している。また、American Academy of Cosmetic Dentistry（AACD）および韓国歯科審美学会（KAED）と姉妹協定を締結している。本年度は、AAADが2023年11月17日～19日にコロomboで開催され、本学会から田上直美常任理事が講演を行った。また、KAEDが11月12日にソウルで開催され、本学会から山本一世理事長が招待講演を行った。さらに、IFEDのInternational Challenge2023の初戦が2023年12月3日に開催され、本学会の代表チームは南アフリカに勝利した。本コンペティションは、40歳未満の若手歯科医師を対象とし、チームで歯科審美のプレゼンテーションを行うものである。コンペティションの2回戦は、2024年1月中旬に開催される予定である。

本年度のトピックス

学会主導型研究事業として、「AI活用によるオンライン口腔健康度管理システムの構築」を実施している。本事業は、藤澤政紀常任理事を研究代表者とし、令和元年度日本歯科医学会プロジェクト研究事業に採択されたことを機に、現在も研究を発展的に継続し、「口元の審美意識が健康寿命を延伸する」とした研究の調査ならびに分析を実施している。本研究の進捗状況の報告は、2023年12月9日～10日に第34回学術大会で発表した。

歯科衛生士を対象に、ホワイトニングの専門的知識、臨床技能・対応および経験を有する歯科衛生士のさらなる水準の向上を図り、国民の保健福祉の増進と生活の質の向上に貢献することを目的とした「ホワイトニングコーディネーター」の資格認定を行っている。講習会は毎回好評を博しており、今後の講習会は、2024年1月21日に神戸、3月17日には東京で開催予定である。さらに、「ホワイトニングコーディネーター」の商標登録の準備を進めている。

（文責：三浦賞子／総務担当常任理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
（一財）口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

【会員数】5,766名（2023年9月30日現在）

【設立年】1988年（昭和63年）（2015年4月法人格取得）

【機関誌】「歯科審美」年2回、【ニュースレター】を年2回発行

【認定医・専門医など】認定医178名、歯科技工認定士23名、歯科衛生認定士29名、ホワイトニングコーディネーター1,697名（2023年9月30日現在）

日本顎口腔機能学会

会長 増田 裕次



<http://jssfumin.ne.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

2023年度、本学会は4月に第69回大会を、11月に第70回大会を開催し、総会は第69回大会開催会期中の2023年4月21日に実施された。

第69回大会は、2023年4月22日～23日の会期で、小見山道先生（日本大学松戸歯学部）を大会長に開催された。特別講演では、新津葵一先生（京都大学大学院情報学研究科）が、「半導体集積回路の進化が切り拓くバイオ・医療応用IoTの研究開発と将来展望～涙液糖発電センシングによる単独自立動作持続血糖モニタリングコンタクトの開発～」と題して講演した。また、第67回大会優秀賞受賞者企画では、「デバイスの融合から再考する嚥下機能～岩手大学×新潟大学の共同研究から見た“歯工連携”の可能性～」と題して、受賞者の杉本大輔先生（岩手大学）と板離子先生（新潟大学）が講演した。さらに、学会賞・学会奨励賞授賞式後に、学会賞は堀一浩先生（新潟大学）が「咀嚼嚥下時の機能評価」と題して、学会奨励賞は富田洋介先生（高崎健康福祉大学）が「顎口腔機能研究における歯科と理学療法のコラボレーション」と題して受賞講演を行った。また会期中は8題の一般口演が行われた。

第70回大会は、2023年11月4日～5日の会期で、山口泰彦先生（北海道大学）を大会長に開催された。シンポジウムとして、「咬合力：その実態解明の軌跡と展望」をテーマに、服部佳功先生（東北大学）、志賀博先生（日本歯科大学）、依田信裕先生（東北大学）、土方亘先生（東京工業大学）が講演した。また、第68回大会優秀賞受賞者企画では、「顎口腔機能セミナーを活かそう！大学院生が研究者になるまでの第一歩。～嚥下時の舌運動をみる～」をテーマに、受賞者の新開瑞希先生（徳島大学）、李宙垣先生（九州歯科大学）、佐藤里加子先生（新潟大学）が講演した。会期中は9題の一般口演が行われた。また、大会初日に、井上富雄先生（昭和大学）、皆木省吾先生（岡山大学）、山崎要一先生（鹿児島大学）、林豊彦先生（新潟大学）に名誉会員記が授与された。

2024年度は加藤隆史先生（大阪大学）を大会長として、2024年4月13日～14日の会期で第71回学術大会を、戸原玄先生（東京医科歯科大学）を大会長として、2024年12月に第72回学術大会の開催が予定されている。

2. 学会活動について

本学会は原則、年2回の学術大会開催（第67回大会以降は現地開催）、年2回の学会雑誌の発行を行っている。また、若手研究者の育成を目的に、研究立案から実際の研究手技の習得、統計処理・発表方法までを学ぶ第13回

顎口腔機能セミナーを、2024年9月20日～22日に開催予定している。

本年度のトピックス

本会は、1982年に下顎運動機能とEMG研究会を前身として発足し、当初は、日本ME（Medical Engineer）学会専門別研究会であった。その後、1986年に顎口腔機能研究会に、1993年には日本顎口腔機能学会となり、今日に至る。本会は、咀嚼、嚥下、発音などの顎口腔系の複雑な諸機能について基礎から臨床まで、歯科のみならず隣接医学や工学など、多様な専門家が学際的な活動続け、多くの実績を残してきた。

新しい研究の芽を育て、大きな花として社会貢献できるよう、学術大会では一般口演で発表15分・質疑応答15分を設け、この多様な領域の専門家達が喧々々と充実した討論を行い、情報を共有している。これは本会の前身時代から綿々と続く伝統である。昨年度から現地開催が復活し、本年度開催された2回の学術大会ともに100名近い参加者が熱い討論を交わした。また、大会優秀賞受賞者が、次々回の学術大会で学術シンポジウムを企画・開催し、若手研究者の育成にも努めている。さらに、昨年度に新たに学会賞と学会奨励賞を規定し、大会内で授与式と記念講演を行い学術大会の充実を図っている。

隔年開催のサマーセミナーに関しては、来年度の開催予定で企画中である。

（文責：富士岳志／会長幹事）

《問い合わせ先・事務局》

〒399-0781 長野県塩尻市広丘郷原1780

松本歯科大学総合歯科医学研究所

顎口腔機能制御学部門内

TEL：0263-51-2253

（2024年4月以降は下記へお問合せください）

〒980-8575 宮城県仙台市青葉区4-1

東北大学大学院歯学研究科 加齢歯科学分野

TEL：022-717-8396

【会員数】424名（2023年10月末現在）

【設立年】1982年（昭和57年）（前身：日本ME学会）

【機関誌】和文誌「日本顎口腔機能学会誌」を年2回発行、学術大会抄録集を年2回発行

日本歯科東洋医学会

会長 山口孝二郎

<https://jdtoyo.net/>

1. 学術大会・総会の開催について

2023年度は第41回学術大会を2023年12月15日～2024年1月31日に、砂川正隆大会長（昭和大学医学部教授・本会専務理事）のもと、オンライン形式（オンデマンド配信）で開催された。

特別講演は「漢方医学的診察法と処方～特に舌診を中心に～」(三谷和男 一般社団法人日本東洋医学会 会長), 「頭頸部領域に対する漢方治療の効果」(小川恵子 広島大学病院漢方診療センター 教授), 「痛みと鍼治療～基礎研究から鍼灸臨床まで～」(久保亜抄子 新潟医療福祉大学リハビリテーション学部鍼灸健康学科 教授) の3題が行われた。教育講演としては「桂枝加朮附湯について」(川添和義 昭和大学薬学部臨床薬学講座天然医薬治療学部門 教授), 「根元(ねもと)の医療を実践する～酸化ストレスと免疫と炎症～」(堀口裕 医療法人社団健翔会 堀口医院 院長・香川県坂出市) の2題が行われた。その他に2023年9月に逝去された福岡明 本学会第2代会長を偲ぶ特別企画「故福岡明先生(第2代会長)が遺してくれたもの」として「私の診療室 福岡明先生の遺されたもの 統合医療+歯科」(小山悠子 医療法人社団明悠会サンデンタルクリニック 理事長・東京都新宿区), 「父 福岡明のもとでなぜ患者は治ったのか?」(医療法人社団明徳会福岡歯科 理事長・東京都中央区) の2題が行われた。過去の学術大会, 研修会からのリバイバル企画2題, 一般口演4題等も行われた。

来年度の第42回学術大会は, 小野圭昭 大会長(大阪歯科大学 教授)のもと, 2024年10月19日～20日の日程で, 大阪歯科大学創立100周年記念館で開催される予定である。

2. 学会活動について

2023年度より運営組織体制を改正し, 教育部門(学術委員会, 教育カリキュラム委員会), 研究部門(編集委員会, 倫理委員会, 利益相反委員会), 臨床部門(薬剤検討委員会, 医療安全委員会, 認定医制度委員会, 臨床研究委員会), 総務部門(あり方検討委員会, 渉外委員会, 広報委員会, インターネット・マーケティング委員会, 会計委員会)の4部門による運営を行うこととした。

歯学教育モデル・コア・カリキュラム令和4年度改訂版において, 平成28年度改訂版と同様に「薬物」の項目が「薬物(和漢薬を含む)」と記載されており, 歯科医師国家試験出題基準令和5年版にも「和漢薬」に関する出題基準が記載されていることを踏まえ, 本学会が歯科医療における東洋医学のアカデミズムをリードすべく, 教育カリキュラムの策定, 適応方剤拡大に向けての活動, 研修会の開催, 啓発活動を行っている。

本年度のトピックス

学術研修企画としてワークショップ形式の研修会「歯科漢方薬&鍼灸 The Workshop」を2024年2月24日に昭和大学旗の台キャンパスで開催する予定である。「和漢薬」として歯学教育モデル・コア・カリキュラムにも漢方薬に関する内容が含まれており, 漢方薬の知識は医療人に必須となってきたことから, ワorkshop形式で実際に漢方薬と鍼灸に触れることができる内容を企画している。

(文責: 棕梨兼彰/専務理事)

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込TSビル
(一財)口腔保健協会内

TEL: 03-3947-8891, FAX: 03-3947-8341

【会員数】534名(2023年11月30日現在)

【設立年】1983年(昭和58年)

【機関誌】和文誌「日本歯科東洋医学会誌」年1回発行

【認定医・専門医など】専門医16名, 指導医26名, 認定医59名

特定非営利活動法人 日本顎変形症学会

理事長 森山 啓司



<https://jaw-deform.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

2023年6月8日～9日にかけて第33回特定非営利活動法人日本顎変形症学会総会・学術大会が学術総合センター（東京）を会場とし、4年ぶりの完全対面形式にて開催された。須田直人大会長（明海大学歯学部形態機能成育学講座歯科矯正学分野 教授）のもと、「現在から未来へ 顎変形症治療のこれから」をメインテーマに、特別講演、教育講演、シンポジウム、ランチョンセミナー、口演、ポスター発表など多彩なプログラムが実施された。また、大会期間中、学会員を対象に「顎変形症治療の基礎知識（認定医試験に向けて）」を主題として、第19回教育研修会をウェビナーにて開催した。本大会参加者は1,040名にものぼり、口腔外科、矯正歯科をはじめとした多くの参加者によるディスカッションの場として有意義な大会となった。

2. 学会活動について

本学会は、1982年に始まった顎変形症研究会が母体となり1991年1月に発足し、2005年7月には特定非営利活動法人となり、矯正歯科医や口腔外科医を中心に2,600名以上の会員数を擁する学術団体へと成長を遂げている。本学会は、顎変形症に関する学術研究および教育普及活動等を行うことで、医療水準の高揚と次世代人材の育成を図り、国民の医療福祉の増進に寄与することを目的とし、年次学術大会ならびに教育研修会等の開催、機関誌である「日本顎変形症学会雑誌」の定期刊行、ホームページを通じての普及啓発活動等に努めている。また、日本学術会議、日本歯科医学会、日本歯学系学会協議会等との連携を図りながら、学術団体として基盤強化に努めている。

本年度のトピックス

1. 認定医制度の施行

顎変形症治療の医療水準の高揚と次世代人材の育成を図りつつ、安全性向上と学術研究及び教育普及活動等について学際的な発展を目指す中で、優れた臨床医が社会での医療福祉の増進において、国民の健康に貢献していく先駆けとなるべく認定医制度が施行された。2023年6月に第1回認定医試験が実施され、合計141名の認定医が誕生した。本認定医制度は、外科的治療ならびに矯正歯科治療等の関連口腔医療の専門的知識と技能を有する歯科医師を養成することを目的とし、国民の医療福祉の増進に大きく寄与するものとする。

2. KAMPRS との国際交流

KAMPRS（Korean Association of Maxillofacial Plastic and Reconstructive Surgeons）とは毎年、相互の学術大会において会員との学術交流が活発に行われている。本年度の学術大会においてはKAMPRSの2名の理事の先生にシンポジストとして登壇していただき、また、10月に開催されたKAMPRSの学会へは、理事長をはじめ本会員の先生方が参加し、山西整先生と上岡寛先生がシンポジストとして講演された。例年KAMPRSとの合同理事会を開催しており、両学会の今後のさらなる連携強化について協議し、会員の人的交流による人材育成について今後もサポートしていくことで合意した。

（文責：森山啓司）

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11

一ツ橋印刷(株)学会事務センター

TEL：03-5620-1953, FAX：03-5620-1960

【会員数】2,723名（2024年2月1日現在）

【設立年】2005年（平成17年）

【機関誌】日本顎変形症学会雑誌年4回発行

【認定医・専門医など】認定医（口腔外科、矯正歯科）、指導医（口腔外科）、研修施設（口腔外科）

一般社団法人 日本顎顔面補綴学会

理事長 松山 美和

<https://jamfp.sakura.ne.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

日本顎顔面補綴学会第40回総会・学術大会を2023年6月1日～3日に愛知学院大学楠元キャンパスにて開催した。武部純教授（愛知学院大学歯学部）を大会長とし、「社会に寄り添う顎顔面補綴」をテーマに掲げ、花井信広先生（愛知県がんセンター）の特別講演「頭頸部がん治療の最前線」や小野高裕教授（大阪歯科大学）の基調講演「顎顔面補綴から咀嚼・嚥下機能研究へ」、第27回教育研修会「顎顔面補綴補綴治療の機能評価を再考する」があった。一般口演25題とポスター発表13題、日本顎顔面インプラント学会との共同研究の報告も行われた。さらに大会終了後には、本学会初の第1回ハンズオンセミナー「PAP治療ワークショップ」を開催した。

次年度の第41回総会・学術大会は古賀千尋教授（福岡歯科大学口腔医療センター）を大会長とし、2024年11月30日～12月1日に福岡市にて、日本顎顔面インプラント学会と合同開催の予定である。

2. 学会活動について

学術雑誌「顎顔面補綴」46巻1号と2号を発行した。1号には第39回総会・学術大会のシンポジウムⅡ「顎欠損における外科と補綴の融合を『探求』する」の内容が総説としてまとめられた。ニュースレターNo.37とNo.38も発行し、本学会の認定制度の説明や海外留学報告などの記事が掲載された。

昨年度より日本顎顔面インプラント学会と広範囲顎骨支持型装置・広範囲顎骨支持型補綴に関する多機関共同研究を進めており、結果の一部を第40回総会・学術大会にて報告した。

新たな国際交流活動としてAmerican Academy of Maxillofacial Prosthetics (AAMP; 米国顎顔面補綴学会)との連携を図るため、2023年10月22日にSan Diegoにて調印し、協定を締結した。

さらに地域医療支援活動を本格的に開始し、地域歯科医師会等と共催・後援して地域医療支援セミナーを実施した。

本年度のトピックス

1) 第1回ハンズオンセミナーの開催

学会初のハンズオンセミナー「PAP治療ワークショップ」を第40回総会・学術大会終了後に開催した。参加者15名に対して講義と相互実習を行い、好評であった。

2) 共同研究の遂行

昨年度から開始した日本顎顔面インプラント学会との広範囲顎骨支持型装置・広範囲顎骨支持型補綴に関する多機関共同研究は、全国病院歯科対象のアンケート結果を第40回総会・学術大会にて報告した。引続き、効果・予後に関する疫学研究を準備している。

3) AAMP (米国顎顔面補綴学会) との協定締結

2023年10月22日にSan Diegoにて、AAMPと調印し協定を締結した。年次会議への会員価格での参加と、ウェブサイト上の情報交換（無料）が可能となった。

4) 地域医療支援セミナーの開催

昨年度新設の地域医療支援委員会が軸となり、第1回地域医療支援セミナーを弘前歯科医師会との共催で2023年11月24日に実施した。他に3つのセミナーを年度内に予定している。

5) 医療技術評価の提案

「歯科口腔リハビリテーション料1項目2（算定制限の見直し）」について医療技術評価提案書を作成し、日本補綴歯科学会と日本顎口腔機能学会と共同提案した。

6) 合同学術大会開催の計画

学会初の試みとして、合同学術大会を計画し準備を開始した。次年度の第41回総会・学術大会は通常開催時期から半年延期し、第28回日本顎顔面インプラント学会総会・学術大会に合わせ、2024年11月30日～12月1日に福岡市にて開催予定である。

(文責：松山美和)

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川2-4-11

一ツ橋印刷(株) 学会事務センター内

TEL: 03-5620-1953, FAX: 03-5620-1960

E-mail: max-service@onebridge.co.jp

[会員数] 554名 (2023年11月30日現在)

[設立年] 1984年 (昭和59年) 1月

[機関誌] 「顎顔面補綴」ならびに「日本顎顔面補綴学会ニュースレター」を年2回発行

[認定医・専門医など] 顎顔面補綴認定医、同認定歯科衛生士、同認定歯科技工士、同認定言語聴覚士

特定非営利活動法人 日本顎咬合学会

理事長 貞光謙一郎



<https://ago.ac>

1. 学術大会・総会の開催について

第41回日本顎咬合学会学術大会・総会は、2023年6月17日～18日「顎咬合を語ろう！ 専門医時代に向けて身に付けるべき知識と技術」をメインテーマに東京国際フォーラムにて開催された。新型コロナウイルスの5類移行を受けて5年振りの実開催となった。特別講演はEdward Pat Allen先生による「演題：軟組織移植術の現在地」であった。依頼演題132件、会員発表は口演90件、ポスター55件であった。

公開フォーラムは「お口の健診を受けて健康長寿を目指そう」をテーマに参議院議員の山田宏氏と武道家の藤岡弘氏をゲスト講師に迎え行われた。学術大会参加登録者数は3,411名であった。

第41回学術大会後日配信（2023年7月28日～8月20日）の視聴者数は、登録ユーザー数2,438人中ログイン人数576人であった（ログイン率23%）。今後は視聴者数と費用対効果を整合させるべく実開催下での後日配信事業の再検討を行う。

2. 学会活動について

2023年3月刊行の学術雑誌「日本顎咬合学会誌」Vol.42 no.3は、総説1編、原著論文3編、症例報告1編、連載1編が掲載された。同年9月刊行のVol.43 no.1には、症例報告4編、技術報告1編、連載4編が掲載された。提携英文誌Journal of Interdisciplinary Clinical Dentistry 2023年（Vol.4 no.1, no.2）に各1編が掲載された。

学会誌の内容は、専門医制度を鑑みて原著論文掲載の比重を増やししながらも、会員の症例報告の機会を減じないための、柔軟な紙面作りを模索している。

次回は、2023年年末にVol.43 no.2、2024年3月にVol.43 no.3を刊行予定である。

また、第22回咬合フォーラム（10月15日大阪オービックホール）は、「咬合治療に原点回帰2 ～生理的な下顎位（水平的・垂直的）を診断する～」をテーマとして開催され、192名が参加した。

2006年より開始した日顎基金事業の活動は、新潟中越地震、東日本大震災、熊本地震の被災地への支援などを行ってきた。2020年には京都大学基金の「iPS細胞研究基金」に、2022年には日本赤十字にそれぞれ寄付を行った。2024年以降も基金事業を充実したものにするため会員各位に日顎基金への理解と協力を引き続き求めて行きたい。

本年度のトピックス

次回第42回学術大会のテーマは「踏襲から発展—学術と臨床の融合—」である。（2024年6月8日～9日東京国際フォーラムにて開催）特別講演はProf.Dr.Wael Att（Tufts University School of Dental Medicine, USA）が予定されている。

学会の運営方針は、専門医時代に向けてDr., DT, DHの全会員が、咬合治療の専門家として相互に連携できる「臨床力」を研鑽する教育・研修体制を充実させることである。

学会の認定する、「咬み合わせ認定医」を取得する学会員を可能な限り多く養成する。

また、指導医には会員の認定医取得への教育が可能となるよう、エビデンスの更新と最新技術のリスクリングを、指導医研修会を通じて支援していく。

2024年度以降も、日本補綴歯科学会のみならず他学会との連携を強く打ち出していく。公告開示可能な日本歯科専門医機構認定「歯科専門医」の認証と、日本歯科医学会専門分化会の認可を目標とする。当会会員からより多くの専門医を輩出するため、専門医取得を支援する体制の構築を最重要課題とする。

（文責：貞光謙一郎）

《問い合わせ先・事務局》

〒102-0093 東京都千代田区平河町1-8-2
山京半蔵門パレス201
TEL：03-6683-2069, FAX：03-6691-0261

【会員数】7,828名（2023年12月26日現在）
【設立年】1979年（昭和54年）3月
【機関誌】和文誌「日本顎咬合学会誌」年3回発行
【認定医・専門医など】認定医2,907名、指導医247名
（2023年12月26日現在）

日本磁気歯科学会

理事長 秀島 雅之



<http://www.jsmad.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第33回日本磁気歯科学会学術大会は、田中譲治理事（千葉県開業）を大会長として、2023年11月11日～12日にかけて東京医科歯科大学内で開催された。2019年開催の第19回大会以来、4年ぶりの会場参集の大会となった。特別講演、教育講演、シンポジウム、学会課題研究報告が企画され、一般演題は20演題であった。特別講演では「磁性アタッチメントによる補綴歯科治療の革新——保険収載によるパラダイムシフト——」と題して、明海大学歯学部の大川周治名誉教授に講演いただいた。さらに11月12日午後には一般の非会員を対象とした、磁性アタッチメント臨床セミナーも開催された。

2023年度総会（2023年11月12日）では、各委員会の事業報告後、本年度決算案と会計監査報告、次年度事業と次年度予算案が承認された。なお、次期第34回学術大会は、2024年11月9日に明海大学浦安キャンパスにおいて、岡本和彦教授を大会長として開催される予定である。

2. 学会活動について

本学会は、磁気歯科学の進歩普及および歯科医療の発展向上を目的として、磁性アタッチメントのみならず、磁界や磁力に関する基礎的研究から臨床応用の実践まで、幅広く活動している。現在、磁性アタッチメント応用症例の長期的術後調査による臨床評価、磁気歯科学に関する用語集の作成、磁性アタッチメントの診療ガイドライン（HP参照）の周知、磁性アタッチメント装着者を対象としたMRI安全基準マニュアル（2013年度版）および患者説明用リーフレット“ピタッと吸いつく磁石の入れ歯”（HP参照）の周知活動等を行っている。国際規格化（2012年7月15日にISO13017の取得、2020年7月16日に第2版発行）と、2021年9月に磁性アタッチメントが保険収載されたことを機に、今後も磁性アタッチメントの普及推進に向けて、本学会から国内外へと展開していく予定である。

本年度のトピックス

歯科用磁性アタッチメントがC2区分（新材料・新技術）にて保険収載されてから2年が経過し、「フィジオマグネット」と「マグフィット」の2製品が保険適用可能である。当学会では保険収載を受けて、磁性アタッチメントの適正な術式を会員ならびに一般臨床医に周知すべく、ワーキンググループを結成し適用症例、術式等の資料、動画を作成して、日本歯科医学会ならびに本学会のHPにアップロードした。日本歯科医学会のHPでは、「磁性アタッチメントを支台装置とする有床義歯の診療に対する基本的な考え

方」,「磁性アタッチメント研修動画」について、以下のURLで閲覧可能である。

- <https://www.jads.jp/basic/index.html>
- <https://www.jads.jp/basic/mov.html>

しかし、上述の保険適用の「基本的考え方」にある以下の適用症、注意点は、一般医だけでなく会員にも、十分には周知されていないのが現状である。

- ①適応症：少数歯残存（9歯以上欠損）のオーバーデンチャーか、小臼歯・犬歯支台の遊離端部分床義歯の適応が望ましい。
- ②技工：キーパーは鋳接ではなく、キーパーボンディング法と呼ばれるセメント合着を行い、必要時にキーパーを除去しやすくする。
- ③義歯修理：義歯修理時に適用可能である。

本学会では、保険収載により磁性アタッチメントが適正に臨床活用され、多くの患者さんに適用されるよう、多くの情報発信できる環境作りを進める所存である。そのため、学会運営がスムーズかつ継続的に遂行できるよう事務局を外委託し、HPより入会、会費支払い等も可能となった。今後も学会運営体制の強化や、HPの充実を図る予定である。

（文責：秀島雅之）

《問い合わせ先・事務局》

〒160-0022 新宿区新宿1-27-2-2F

ケイ・コンベンション内

TEL：03-5367-2409, 2382, FAX：03-3567-2187

E-mail：jsmad@k-con.co.jp

【会員数】338名（2023年9月30日現在）

【設立年】1991年（平成3年）

【機関誌】和文誌「日本磁気歯科学会雑誌」年1回、英文誌「The Journal of the Japanese Society of Magnetic Applications in Dentistry」を年1回発行

【認定医・専門医など】日本磁気歯科学会認定医28名、認定歯科技工士1名（2023年11月30日現在）

一般社団法人 日本小児口腔外科学会

理事長 金子 忠良



<http://www.jspoms.jp>

1. 学術大会・総会の開催について

第35回日本小児口腔外科総会・学術大会は東京歯科大学小児歯科学講座教授 新谷誠康大会長により、『こどもまんなか時代の小児口腔外科』のテーマで、2023年11月25日～26日に東京歯科大学新館校舎・血脇記念ホールにおいてハイブリッド形式で開催された。

初日に開催された日本歯科医学会会長講演は、住友雅人先生に「6期目の決心」と題してご講演いただいた。特別講演は、東京歯科大学口腔病態外科学講座教授 片倉朗先生に「口腔外科における医療DXの推進—CAD/CAM, Extended Reality, メタバース医療—」と題してご講演いただいた。教育講演1は、東京歯科大学矯正学講座教授 西井 康先生に「埋伏歯のタイプと治療戦略」と題してご講演いただいた。特別企画として『子ども虐待の現場から』と題して講演が行われた。教育講演2はジャパングリーニクリニック 小児科医師 内山健太郎先生に「『これって虐待?』って思ったら。」と題してご講演いただいた。シンポジウムでは、『子ども虐待について』のテーマで、一般社団法人ママリングス代表理事 落合香代子先生に「専門職が地域で子どもを守るためにできること—市民協働 虐待予防研修プログラムの実際—」と題して、さらに東京都福祉局江東児童相談所統括課長代理児童福祉司 久保 隆先生に「児童相談所からの報告～虐待防止に向けた歯科との連携～」と題して、2講演が行われた。一般演題では、口演セッションとポスターセッションで併せて41演題が行われた。

●次年度の学術大会予定

大会長：川又 均（獨協医科大学医学部口腔外科学講座教授）

期 日：2024年11月8日（金）～9日（土）

会 場：栃木県総合文化センター（現地会場開催とオンデマンド配信）

テーマ：こどもたちの食べる・話すを創り支える口腔医療

2. 学会活動について

主な事業計画は下記の通りである。

①総会および学術大会の開催、②機関紙発行、③各種委員会の開催、④研修会の開催、⑤認定医制度、⑥教育講演会の開催

本年度のトピックス

2023年度より、本学会員に限らず小児口腔外科医療に関わる多くの医療従事者が、最新の小児医療に関する情報や知見を受容できる講演会とするため、本学会の『認定医・指導医の申請・更新のための教育講演会』を『教育講演会』と名称を改めた。本年度は、『第12回教育講演会』を、2023年6月20日～7月31日までの間、オンデマンド形式で開催した。内容は、講演1：朝日大学歯学部口腔構造機能発育学講座小児歯科学分野教授 齊藤一誠先生に「小児の口腔機能の発達と口腔機能発達不全症」、講演2：明海大学歯学部機能保存回復学講座摂食嚥下リハビリテーション学分野教授 大岡貴史先生に「乳幼児期の摂食機能発達と支援」、講演3：東京大学大学院医学部感覚運動機能学講座口腔顎顔面外科学分野准教授・同大学医学部附属病院口唇口蓋裂センター長 西條英人先生に「鼻咽腔閉鎖機能の解剖と、機能不全に対する治療法」、講演4：愛知学院大学健康科学部准教授 早川純子先生に「小児診療に関わる歯科医師に皆様のために一口腔機能発達不全症や歯と構音の関係についての基礎知識—」と題して、乳幼児から小児に関しての4講演が行われた。本年度2回目の『第13回教育講演会』は、10月25日、第35回日本小児口腔外科学会総会後に対面形式で開催された。内容は、講演1：千葉歯科医院 院長 浜野美幸先生に「口腔機能の育成—子どもを取り巻く社会の視点から—」、講演2：沖縄県立中部病院歯科口腔外科部長 新垣敬一先生に「小児患者に必要な小手術—特に埋伏歯抜歯や小帯手術などのコツや勘所—」と題して2講演が行われた。同講演内容は、2023年12月5日～2024年1月10日までの間、オンデマンドで配信を行った。本年度に開催した『第12回ならびに第13回教育講演会』には、本学会員のみならず非会員の皆さまにも多数ご参加いただいた。

本学会は、今後も本学会員を含め小児口腔外科医療に関わる多くの皆さまにも講演会等にご参加いただけるよう、多様なニーズに対応した学会事業を展開して参ります。

（文責：金子忠良）

【問い合わせ先・事務局】

〒115-0055 東京都北区赤羽西 6-31-5

（株）学術社内

TEL：03-5924-1233, FAX：03-5924-4388

【会員数】 632名（2023年9月30日現在）

【設立年】 1989年（平成元年）

【機関誌】 和文誌「小児口腔外科」年3回発行

【認定医】 190名（2023年9月30日現在）

【指導医】 139名（2023年9月30日現在）

公益社団法人 日本顎顔面インプラント学会

理事長 嶋田 淳

<https://www.jamfi.net/>

1. 学術大会・総会の開催について

年1回の学術大会・総会を開催している。第26回日本顎顔面インプラント学会学術大会・総会は、Asian Pacific Implant Society (APIS) Winter Meeting を併催として、2022年11月26日～27日、メインテーマを「磨励自強；これからのインプラント卒後教育を再考する」と題し、近津大地を大会長として東京医科大学病院で開催された。また、第27回学術大会・総会は2023年12月2日～3日国際医療福祉大学三田病院 矢郷 香大会長のもとで APIS Winter Meeting を併催して行われ、さらに次回第28回学術大会・総会は2024年11月30日～12月1日、福岡歯科大学 城戸寛史大会長のもと、日本顎顔面補綴学会および APIS Winter Meeting の共同開催を予定している。

2. 学会活動について

本学会は、口腔顎顔面領域におけるインプラントを用いた形態的機能的再建に関する基礎的ならびに臨床的研究を推進し、とくにこの領域における口腔顎顔面外科を基盤とした正しいインプラントの知識を社会と国民に普及し、信頼される良質なインプラント治療の普及を図り、もってわが国の学術の発展と口腔機能の回復による国民の健康増進に寄与することを目的として活動が行われている。その活動内容は学術大会・総会を年1回、教育研修会を年3回開催し、適時理事会を開催している。現在の主な学会活動は「専門医制度の確立」「研修会の開催」「学術大会の充実」「学会誌・ニューズレターの定期的発刊」「調査研究」「診療ガイドライン策定」等である。専門医制度においてはエビデンスに基づいた高度で安全確実なインプラント外科医を目指している。また国民の医療の安心・安全を目的に「国際インプラント手帳」の発行や、口腔疾患と大きな関連のある喫煙について、口腔関連9学会と共同し脱タバコ社会実現に向けて取り組んでいる。歯科医学会のもと、診療報酬改定に向けた医療技術評価について提案した。

本年度のトピックス

1. 広告可能なインプラント歯科専門医への取り組み

(一社)日本歯科専門医機構の指導のもと、「国が広告可能と認める専門医制度」の確立にむけて取り組んでいる。

2. 教育研修事業の一環として教本の作成

「インプラントの専門医を取得するための研修マニュアル」を2023年12月に上梓した。

(文責：又賀 泉／理事)

《問い合わせ先・事務局》

〒108-0014 東京都港区芝5-29-22-805

TEL：03-3451-6916, FAX：03-5730-9866

E-mail：jamioffice@gmail.com

【会員数】1,444名(2023年9月末現在)

【設立年】1993年(平成5年)11月

【機関誌】和文誌：日本顎顔面インプラント学会雑誌
を年4回発行

【認定医・専門医など】指導医数210名、専門医91名
(2023年9月現在)

【認定研修施設】研修施設105施設、准研修施設25施設
(2023年9月現在)

一般社団法人 日本外傷歯学会

理事長 木村 光孝



<https://www.ja-dt.org>

1. 学術大会・総会の開催について

第23回学術大会は、2023年7月22日～23日、大会長三宅 実（香川大学医学部歯科口腔外科学講座教授）のもとで、香川県歯科医師会8020ホールで開催された。大会テーマは、「外傷歯と多職種連携」と題して、大会長講演は三宅実先生による「口腔顎顔面外傷の治療—他職種連携（チーム医療）—」、教育講演は三宅啓介（香川大学医学部脳神経外科教授）による「成人頭部外傷の診断と治療」、特別講演は佐野次夫（徳洲会口腔外科統括責任者）による「顎顔面外傷患者における歯科医の存在意義」、さらにシンポジウムⅠ～Ⅴ、一般口演が報告された。

本学会は基本的には口腔医学の立場から入会して直ちに認定医研修会を受講して会員になり、「認定医」を取得している。「認定医」を授与した受講者は、学会と併催して更新セミナーを受講することを義務づけている。

2. 学会活動について

本学会の特徴は一般的な外傷を意味するものではなく、外傷歯は特に口腔医学の立場から乳歯列期、混合歯列期、永久歯列期に至るまで成長期から老年期に至るまで脳中枢の伝達機構から全身を診ている。口腔機能の重要性について咬合、咀嚼による脳中枢の役割（脳幹による無意識機能）、脳中枢（脳幹による意識機能）はニューロンを中心にグリア、アストロサイトの役割は大きい。

本学会による長期臨床データから、学術的根拠により、脳幹から体幹に至るデータを必要としている。

本学会はアジア国際外傷歯学会（Asian International Association of Dental Traumatology (AADT)）により学会活動を行っている。

第10回AADTは2023年2月5日、Listed in Homepage: www.ja-dt.org の形式で無事終了している。

本年度のトピックス

本学会は一般社団法人日本外傷歯学会定款第4条に示す通り、国民の健康と福祉の増進に寄与することで、第42条に東日本地方会・西日本地方会の会則を定め総会・学術大会を開催している。第13回（一社）日本外傷歯学会東日本地方会総会・学術大会は2023年4月23日（ライブ配信）（4月29日～5月8日オンデマンド配信を実施）、オンライン（Web）開催において、戸谷収二（日本歯科大学新潟病院口腔外科教授）のもとで大会テーマ「外傷歯の過去と未来を再考する」と題して開催した。さらに（一社）日本外傷歯学会西日本地方会総会・学術大会は入江正郎（岡山大学学術研究生院生体材料学分野）により大会テーマは「口腔科学に基づく外傷歯治療の再考」と題して開催した。

本学会では「認定医」・「指導医」は学術大会と併催して認定医更新セミナーを開催しているので、年1回は単位取得のため受講することを義務付けている。

更に学会に参加するだけでなく、日常の臨床がいかに大切であるか、ハイレベルの口腔医療を国民に提供するためにも長期臨床データから学術的根拠を重要視している。

（文責：木村光孝）

《問い合わせ先・事務局》

〒803-0862 福岡県北九州市小倉北区今町2丁目12-13
事務センター内

TEL：093-562-6886, FAX：093-562-6887

【会員数】1,013人（2023年9月30日現在）

【設立年】1998年（平成10年）

【機関誌】和文誌「日本外傷歯学会雑誌」年2回発行

【認定医・専門医など】認定医569人、指導医212人（2023年9月30日）

一般社団法人 日本口腔診断学会

理事長 野村 武史

<https://www.jsodom.org>

1. 学術大会・総会の開催について

第36回日本口腔診断学会学術大会・総会は、日本歯科薬物療法学会、日本口腔内科学会、日本口腔感染症学会の4学会合同学術大会として、野村武史（東京歯科大学口腔腫瘍外科学講座 教授）大会長のもと、2023年9月22日～24日に「栃木県総合文化センター」にて開催した。テーマは「口腔医学の集結」で、教育講演2題、特別講演2題、シンポジウム7題、大会長特別企画2題、一般演題（口演、ポスター）185題、そしてICD講習会、精密触覚機能検査研修会と市民公開講座を企画した。基本は対面形式とし、併せて後日オンデマンド配信も行った。最終的な参加者数は819名であった。また3年ぶりに会員懇親会を開催し盛況であった。教育講演では、「AYA世代におけるがん・生殖医療」、「オスラー病」、特別講演では、「膜小胞ワクチン：歯周病や感染症の制御に向けた取り組み」、「医師主導治験について」と大変興味深い講演であった。また本学会が主導で、シンポジウム「診断学を極める～臨床推論の重要性」、「MRONJ ポジションペーパー 2023 で何が変わったか?」、「公開CPC（症例検討会）」を企画し盛況に終わった。多岐にわたる内容を発信することで、本学会が担う社会的役割、歯科界への貢献を果たすことができた。

2. 学会活動について

口腔診断学は、縦割りの専門学問を横断的に結びつける臨床歯科医学として、口腔外科系および診断系を中心に放射線系、保存系、補綴系と様々な専門分野の会員が集まり、互いを尊重しながら研究のみならず教育および臨床を探究する学問として前進している。専門が近似する他学会との合同開催も基本理念としている。このことは、会員個々の広い知識の学びや専門領域に近い者同士が一緒に学ぶことで、学問の統合、均てん化に貢献できると考えている。また本学会の特徴として、機関誌発刊当初より症例報告について多くの新知見を発信している。その理由は、中核となる診断（臨床）推論や診査法の学修に最適な「症例カンファレンス」を紙面で実現するためである。本学会の会員は、専門医（サブスペシャリティ）の根幹をなす診断学を学ぶことで、すべての専門領域を俯瞰して最適な歯科医療を提供するゲートキーパーとしての資質を備えている。今後も多くの会員に入会していただき、国民の健康に寄与できる学術団体として活動を続けていきたい。

本年度のトピックス

本学会の事業は、学術集会・総会、機関誌の発行、認定制度の施行、関連学会との連携等の事業活動が基本である。今年度は役員の改正が行われ、理事長、理事、委員会が新たに組織され、それぞれ新たな活動が開始している。その中で本学会の最大の懸案事項である、「新口腔診断学」の発刊に向けて今年度より本格的に編集作業が始まった。日本口腔診断学会が監修する本書の特徴は、全ての診療科が等しく診断学の基礎知識を習得できるように配慮した点である。また、臨床（診断）推論をふまえた症候学について、実際の症例を提示することで、本学会会員だけでなく、CBTやOSCE対策、臨床実習、歯科医師国家試験、卒後歯科研修の指南書として、卒前歯科学生や研修歯科医または一般開業歯科医が現場で活用できるバイブルを目指している。医学においては、専門医の広告が法律上制定された「総合診療医」という新しい学問領域が開設されている。その研修方略には、「臨床（診断）推論」の具有が求められている。すなわち、患者の訴える症状や徴候から診断する思考過程について認知心理学を基盤に学修し、臨床場面で活かそうとするものである。これまでの説明根拠を示すことが難しかった症候学をより科学的に表現アプローチするものである。歯科分野でも今後同様の考え方を取り入れることが必要であり、これを担うのは本学会であると考えている。将来目指すべき本学会会員のあるべき姿は、総合診療歯科医として患者中心の医療を実現し、様々な診断技術を駆使して、患者個々の最適な治療を選択することのできる人材の養成であると考えている。

(文責：野村武史)

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11

一ツ橋印刷(株) 学会事務センター内

TEL：03-5620-1953 FAX：03-5620-1960

E-mail：info@jsodom.org

[会員数] 正会員 1,269 名、名誉会員 8 名（2023 年 12 月 1 日現在）

[設立年] 1988 年（昭和 63 年）

[機関誌] 和文誌「日本口腔診断学会雑誌」年 3 回発行

[認定医・専門医など] 認定医 209 名、指導医 94 名、研修機関 53 指定

一般社団法人 日本口腔腫瘍学会

理事長 太田 嘉英



<https://jsoo.org/>

1. 学術大会・総会の開催について

第41回日本口腔腫瘍学会総会・学術大会は「Singularity～口腔腫瘍学の大転換～」をメインテーマに、長塚仁大会長（岡山大学学術研究院医歯薬域 口腔病理学分野 教授）のもと、2023年1月26日～2月28日にWeb開催（オンデマンドおよびライブ配信）された。海外招待講演1題、特別講演2題、教育講演10題（兼教育研修会）、ビデオ講演8題に加え4つのシンポジウム、8つのワークショップが組まれ、学際的に今後の口腔腫瘍学の方向性を示す極めて充実した学術企画に対し参加者も大変好評であり、多数の一般演題も併せ盛会裏に終了した。第42回総会・学術大会は上田倫弘大会長（北海道がんセンター口腔腫瘍外科医長のもと、「口腔腫瘍学の発展と調和」をテーマに2024年1月25日～26日に現地で開催され、さらにオンデマンド配信も行われる予定である。

2. 学会活動について

口腔がん専門医制度を有し認定を行っている。口腔がん専門医は光免疫療法施行時の所要条件としてのPMDAのリスク管理計画書に明記されている専門医資格である。通常専門医資格は名称の独占のみであるが、口腔がん専門医は歯科医学における専門医の中で唯一治療における所要条件としてPMDAに認定された専門医である。学術雑誌「日本口腔腫瘍学会誌」は年間4号（3月、6月、9月、12月）発行されている。第35巻は総説1編、原著2編、症例報告8編の全11編の論文を掲載した。口腔癌取り扱い規約、口腔癌診療ガイドライン、領域横断的がん取り扱い規約は日本癌治療学会のオフィシャルとして広く公開されている。また本学会は口腔がん治療の世界的な学会であるInternational Academy of Oral Oncology (IAOO) の日本におけるオフィシャルパートナーであり、国際的な学術交流も盛んに行っており、2023年韓国で開催された第8回IAOO学術大会においては本学会がJapanese sessionを担当した。本学会は、口腔がんや歯源性腫瘍などの臨床および基礎研究をメインに、学際的に広く学術活動を行っている。

本年度のトピックス

がん治療に関する新治療として光免疫療法が注目されている。光免疫療法とは、がん細胞の表面に多くあらわれるタンパク質に結合する薬剤（アキシャルックス®）を投与し、医療機器を用いてレーザー光を当てることでアキシャルックス®がこれに反応し、がん細胞を死滅させる治療法である。

口腔がん治療における光免疫療法の応用は従来耳鼻咽喉科・頭頸部外科のうち日本頭頸部外科学会認定頭頸部癌指導医のみに認められていた。日本頭頸部癌学会および日本頭頸部外科学会をはじめ関係各位のご理解、ご協力のもと2023年12月1日より歯科医師にも光免疫療法の応用が認められるようになった。歯科医師が光免疫療法を行う場合には、PMDAのリスク管理計画書に基づき、本学会が認定する『口腔がん専門医』と耳鼻咽喉科専門医の協力が必要不可欠である。本治療も含め今まで以上に耳鼻咽喉科・頭頸部外科との連携を深化させていくことが本学会の使命である。

（文責：太田嘉英）

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11
 一ツ橋印刷(株) 学会事務センター内
 TEL：03-5620-1953, FAX：03-5620-1960

【会員数】1,859名（2023年12月31日現在）
 【設立年】1983年（昭和58年）
 【機関誌】「日本口腔腫瘍学会誌」年4回発行
 【認定医・専門医など】口腔がん専門医71名、暫定口腔がん指導医113名、指定研修施設78施設

一般社団法人 日本口腔リハビリテーション学会

理事長 菊谷 武

<http://www.jaor.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第37回一般社団法人日本口腔リハビリテーション学会総会・学術大会は、兵庫医科大学医学部歯科口腔外科学講座 岸本裕充主任教授を大会長、大阪歯科大学医療保健学部口腔保健学科 糸田昌隆教授を副大会長、兵庫医科大学医学部歯科口腔外科学講座 野口一馬教授を実行委員長、徳本佳奈助教を準備委員長に、「オーラルマネジメント CREATE の”R”を強化！」のテーマで、2023年10月21日～22日に開催された。特別講演では兵庫医科大学医学部脳神経外科学講座 吉村紳一主任教授が「脳卒中治療の最前線：血栓回収療法の実際とリハビリテーションの必要性」を、基調講演では日本歯科医学会会長の住友雅人先生が「6期目の重さ」と題して地域支援型多機能歯科診療所の展開、重点研究委員会の役割の重要性についてそれぞれご講演された。また、教育講演では大阪歯科大学 覚道健治名誉教授に「顎関節症治療の変遷と治療の最前線」と題して、顎関節治療の変遷と治療の最前線をご講演いただいた。また「薬剤関連顎骨壊死患者のリハビリを見据えた医歯薬連携」をテーマにシンポジウムが組まれ、辻翔太郎、高岡一樹、小野高裕の3人の先生にご講演いただいた。ランチョンセミナーでは、大阪大学大学院歯学研究科顎口腔機能治療学講座 阪井丘芳教授に「除菌消臭成分 MA-T を含んだ未来型の口腔ケア用品の開発と社会実装」についてご講演いただいた。認定医研修セミナーでは、兵庫医科大学医学部歯科口腔外科学講座 野口一馬教授により「口腔癌治療の進歩とリハビリテーション」のご講演を、さらに認定関連専門職セミナーでは大阪歯科大学附属病院口腔リハビリテーション科 永久景那先生、今井美季子先生から「主訴／疾患別口腔リハビリテーションの診断とその対処法」のテーマで POS に基づいた、主訴からの原因評価・診断、口腔リハ計画立案・実施についての講演がなされた。一般演題は口演16題、ポスター7題で、大会参加登録者は約240名であった。

第38回大会は、東京慈恵会医科大学附属病院歯科口腔外科 林 勝彦教授のもとで「多職種連携で支える口腔リハビリテーション」をテーマに2024年12月7日～8日に東京慈恵会医科大学2号館講堂で開催される予定である。

2. 学会活動について

理事長1名、副理事長2名、理事22名、監事2名で理事会が構成され、その傘下に認定委員会、編集委員会、COI委員会、専門医制度準備委員会、表彰委員会、用語委員会、医療委員会の7常置委員会と、書籍「口腔リハビリテーション（仮称）」編集委員会および日本歯科医学会専門分科会昇格申請準備委員会の2特別委員会があり活動を

行っている。学会誌「日本口腔リハビリテーション学会雑誌」を年1回発刊し、原著5編、症例報告2編、調査1編、計8編の論文を掲載している。

本年度のトピックス

2023年は新たに日本歯科大学口腔リハビリテーション多摩クリニック 菊谷 武教授が第4代理事長に就任し、兵庫医科大学医学部歯科口腔外科学講座 岸本裕充大会長の下、開催した学会のテーマは、オーラルマネジメント CREATE, すなわち口腔清掃 (Cleaning) とリハビリテーション (Rehabilitation) から始まり、教育 (Education), 評価 (Assessment), 歯科治療 (Treatment) を行い、これらの結果、口腔の健康が得られれば、おいしく食べる (Eat, Enjoy) ことが可能となるという概念に則り「オーラルマネジメント CREATE の”R” Rehabilitation を強化！」としてこのうち、“R”にフォーカスを当てて、口腔リハビリテーション学の臨床と研究の成果発表の場となった。

(文責：菊谷 武)

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込1-43-9 駒込 TS ビル
(一財) 口腔保健協会内
TEL：03-3947-8891, FAX：03-3947-8341

[会員数] 629名 (2023年11月30日現在)

[設立年] 1987年 (昭和62年)

[機関誌] 「日本口腔リハビリテーション学会雑誌」年1回

[認定医・専門医など] 認定医100名、指導医38名、暫定指導医10名、認定歯科衛生士31名、認定言語聴覚士2名 (2023年11月30日現在)

一般社団法人 日本口腔顔面痛学会

理事長 小見山 道

<https://jorofacialpain.sakura.ne.jp>



1. 学術大会・総会の開催について

第28回日本口腔顔面痛学会学術大会は、2023年11月18日～19日、福岡県筑紫野市生涯学習センターにおいて坂本英治大会長（九州大学病院 顎口腔外科 口腔顔面痛外来講師）により、現地開催（＋後日オンデマンド配信）にて「impossible..., I'm possible!」をメインテーマに第21回アジア口腔顔面痛学会（Asian Academy of Orofacial Pain and Temporomandibular Disorders: AAOT）との併催で開催された。「難治性の慢性疼痛」、「痛覚変調性疼痛」、「集学的痛みセンターにおける心療内科によるアプローチ」、「口腔顔面痛の特異性、普遍性、多様性」などに関するシンポジウム、教育セミナー、リフレッシュコース、ハンズオンセミナーなどが多数開催された。アジア各国からの参加者を含め、基礎研究者と臨床医、さまざまな医療従事者により白熱したディスカッションが行われた。

2. 学会活動について

本学会は本邦歯科領域では唯一の疼痛専門学会であり、痛みの発症メカニズムの研究、診断・マネジメントに関する臨床研究、診療基盤の構築、教育活動を行っており、関連医科や職種との合同活動や国際学会との連携も非常に活発である。

厚生労働省慢性の痛み政策研究事業研究班との協働や日本痛み関連学会連合への参画による会員へのセミナー等の情報提供や診療連携システムの強化、日本いたみ財団と連携した動画配信など国民および多職種医療従事者への広報を行った。

学会主催の資質向上セミナーも多数開催し、現地開催のみならず、当学会で開発したWebアプリケーションによるlearning management system「アプリで学ぶ口腔顔面痛」を用いて、オンデマンドやオンライン形式でも実施した。歯科の中での境界領域、また医科と歯科の境界領域を扱う本学会では、今後も積極的に本邦の口腔顔面痛診療の質の向上に取り組みたいと考えている。

本年度のトピックス

国際疼痛学会／日本疼痛学会／ファイザーの公募プログラムにより、口腔顔面痛の学習管理Webシステムを開発し、すでに会員向けにアプリケーションを公開してきたが、まもなくこれらが一般公開予定となっている。主要な3つのコンテンツとして、①テキストベースで知識を身につけるe-learning部門、②本学会オリジナルで開発した実践的な学習を行うVirtual Patients部門、③最新の専門性の高い情報を配信するオンラインセミナー部門がある。特に新たな試みとして開発されたVirtual Patients部門は、アプリに動画で流れる模擬患者の医療面接から、患者の症状を把握し、必要な診査や検査を選択し、鑑別診断を列挙した後、最終診断を行い、治療方法を決定していくという臨床のプロセスを学習出来る画期的なシステムである。より多くの歯科医師、医療従事者に利用して頂き、口腔顔面痛の啓発に役立つ事を期待している。

さらに、本学会の最新版のテキストとして「口腔顔面痛の診断と治療ガイドブック第3版」も8月に出版されている。

また、当学会は、例年、口腔顔面痛に関する啓発ポスター発行しており、本年は「口腔顔面に現れる帯状疱疹」と題したポスターを作成し、全国の歯科医師会や病院、関係各所へ配布を行った。

2018年から精密触覚機能検査協議会において開催してきた精密触覚機能検査研修会においては、今後も当学会の重要な活動の一つとして全国各地で主催する予定である。

（文責：村岡 渡／総務担当常務理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11
一ツ橋印刷(株) 学会事務センター内
TEL: 03-5620-1953, FAX: 03-5620-1960
E-mail: jsop-service@onebridge.co.jp

【会員数】 931名（2023年12月28日現在）

【設立年】 2009年（平成21年）

【機関誌】 和文誌「日本口腔顔面痛学会誌」年1回発行。
News Letter 年5回発行

【認定医・専門医など】 認定医 194名、専門医 107名、
指導医 74名、認定研修施設等 43施設

一般社団法人 日本口腔検査学会

理事長 福本 雅彦

<https://jsedpl.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

2023年11月4日～5日、東京歯科大学にて第16回学術大会（山下秀一郎大会長）を開催した。今回は「臨床検査の新たな挑戦と進化」というメインテーマを掲げた。新型コロナウイルスが5類に移行したことを踏まえ、対面での開催形式とした。

初日は開会式の後、「検査に基づく補綴歯科治療介入の意思決定」と「新技術の保険導入に向けた流れについて」の2題の特別講演を、さらに認定医・認定歯科衛生士試験を実施した。

2日目は、午前中に一般講演（口演発表：12題）と歯科衛生士セッションを、昼休みには企業3社によるランチョンセミナーを実施した。午後に入り、「COVID-19に関わる検査と結果が示すこと」、「新技術の歯科への応用」、「連携が臨床検査・臨床研究推進の『鍵』」の3題の特別講演を、併せて一般講演（ポスター発表：13題）を実施した。

閉会式においては、優秀発表賞を該当する3名の演者へ授与した。参加者は133名であり、本学術大会は成功裏に終了した。

（文責：山下秀一郎／第16回学術大会大会長）

2. 学会活動について

本学会の活動の目的として「歯科医療に検査を根付かせる。」を掲げている。この目的達成のため以下のような活動を行った。①学術大会開催、②学会誌発行、③認定医試験実施、④国民皆歯科健診について考えるキックオフミーティング開催。

①の学術大会の開催に関しては前項を参照していただく。②2023年1月に学会誌を発行し、会員への各種検査の有用性を周知した。③認定医・認定歯科衛生士試験を11月に実施し、歯科医療に必要な幅広い検査知識を有する人材の育成の一助とした。④国民皆歯科健診について考えるキックオフミーティングを7月に開催、本ミーティングではセッション1として各界の国民皆歯科健診に関連する方々によるご講演を賜り、セッション2として具体的な検査項目について考え、セッション3では総合討論・質疑応答を行った。

本学会は、「検査は医療従事者の共通言語」という認識のもと、上記の活動を通して口腔領域検査と全身的検査とを横断的、重層的に結び付けて理解し、口腔と全身状態を連動させる能力を身に付けた人材を育成することに注力していく。

（文責：福本雅彦）

本年度のトピックス

「経済財政運営と改革の基本方針2022（骨太の方針2022）」として政府から発出された生涯を通じた歯科健診（いわゆる国民皆歯科健診）の具体的な健診・検査項目の議論は、当学会が積極的に担う課題と捉え、「国民皆歯科健診について考えるキックオフミーティング」を企画し、2023年7月23日に日本大学法学部10号館にて開催した。参加者は歯科医師・歯科衛生士など歯科医療従事者のみならず、検査に関わる企業担当者など合計152名で盛会であった。

最初に日本歯科医学会 副会長小林隆太郎先生に来賓ご挨拶をいただき、その後基調講演を日本歯科医師会常務理事 山本秀樹先生に「歯科健診の現状と課題～日本歯科医師会の立場から～」、参議院議員 山田宏先生に「国民皆歯科健診の道筋」、厚生省歯科保健課長 小椋正之先生に「生涯を通じた歯科健診」をご講演いただいた。そして、セッション「検査項目を考える」では、鶴見大学名誉教授 花田信弘先生に「全身からみた口腔検査」、信州大学医学部歯科口腔外科教授 栗田浩先生に「集団健診における唾液検査の有用性」、東京都健康長寿医療センター研究部長・歯科口腔外科部長 平野浩彦先生に「口腔機能検査の果たす役割」をお話いただき、その後パネルディスカッションを行った。健診検査項目・健診検査の普及・健診のゴールなど、会場からもさまざまなご意見をいただいた。検査項目を通じて実効性のある制度づくりに貢献できるように、2024年度も当学会で議論を続けていくとの結論をまとめ、閉会となった。次年度2024年5月に「第2回国民皆歯科健診について考えるミーティング」を企画している。

（文責：石井良昌／企画広報渉外委員・理事）

《問い合わせ先・事務局》

〒277-0872 千葉県柏市十倉二 155-17

(株)ディーアソシエイツ内

TEL：050-1741-4075

Email：info@jsedpl.jp

【会員数】 385名（2023年11月30日現在）

【設立年】 2007年（平成19年）

【機関誌】 「日本口腔検査学会雑誌」年1回発行

【認定医】 39名（2023年11月30日現在）

一般社団法人 日本口腔内科学会

理事長 里村 一人

<https://jsom.sakura.ne.jp>



1. 学術大会・総会の開催について

2023年度の第33回日本口腔内科学会学術大会は第36回日本口腔診断学会学術大会、第43回日本歯科薬物療法学会、第32回日本口腔感染症学会との4学会合同学術大会とし、岩瀬博史（国際医療福祉大学病院歯科口腔外科・教授）のもとに「口腔医学の集結」というテーマで開催した。開催形式は対面で開催し、会期は2023年9月22日～24日とした。

内容としては、特別講演2演題（中尾龍馬先生：国立感染症研究所細菌第1部第六室【口腔細菌感染症室】・主任研究官、山本学先生：公益社団法人日本医師会 医療技術課）、教育講演2演題（大和田倫孝先生：国際医療福祉大学病院・病院長、小宮山雅樹先生：HHT JAPAN【日本HHT研究会】／大阪市立総合医療センター脳血管内治療科）、シンポジウム7企画・計26演題、一般口演117演題、ポスター発表68演題であった。さらに、症例検討CPC（Clinico-Pathological Conference）、学術講演会なども企画され、参加者は600名を超え、盛大かつ活気のある学会となった。

2. 学会活動について

従前どおり、年1回の学術大会を前述のような内容で開催した。本学会は、日本口腔診断学会との合同学術大会を継続的に開催する方針としており、さらに関連学会との交流を目的として、積極的に他学会を加えた合同学術大会の開催を企画し、今年度は日本口腔診断学会、日本臨床口腔病理学会、日本歯科薬物療法学会、日本口腔感染症学会との4学会合同学術大会とした。他学会との交流や連携を深めることにより、より活発で有意義な学術大会となると自負している。来年度は、日本口腔診断学会との合同学術大会を企画している。

学会誌の発行に関しては、和文誌である日本口腔内科学会雑誌は2回、英文誌であるJournal of Oral and Maxillofacial Surgery, Medicine, and Pathology（本学会はOral Medicineのセクションを担当）は6回発行した。

2019年度に開始した専門医制度は、指導医11名、専門医8名、認定医24名、研修施設2件の申請を受け付け、認定医の試験についても実施することができた。特筆すべきこととしては、OLP委員会の活動を再開し、更なる学会活動の活性化を図っている。

本年度のトピックス

本学会は従来、関連する学会と合同で学術大会を開催し、口腔顎顔面領域に発生するさまざまな疾患に対する予防法、診断法および治療法に関する情報の交換や症例報告、研究成果発表等の機会を会員に提供するとともに、関連学会間での交流を積極的に推進してきている。このような伝統に基づき、今年度も合同学術大会を開催したが、これまで緊密な連携を図ってきた日本口腔診断学会に加え、日本歯科薬物療法学会および日本口腔感染症学会とも共催し、初めての4学会合同学術大会を成功裏に終了した。本合同学術大会では、恒例となった合同シンポジウムや臨床－病理検討会（CPC）を開催し、活発かつ有意義な議論が分野横断的になされた。このように、口腔に関連した学会間での交流や連携を深めることは、お互いの学会の学術活動の活性化やレベルアップに大きく貢献していると実感できていることから、今後も関連学会との合同学術大会の開催、情報交換、人材交流を積極的に図っていきたいと考えている。

また、未曾有の超高齢社会となったわが国では、粘膜疾患や口腔乾燥症、口腔心身症など内科的治療が主体となる口腔疾患を有する患者が相当数、潜在的に存在していると考えられている。さらに口腔の健康が全身の健康に大いに影響を与えることが明らかとなったことから、これらの疾患の病因・病態の解明とそれに基づく適切な診断法や治療法の確立が極めて重要となっており、日本口腔内科学会では、このような社会的要請に応えるべく邁進していきたいと考えている。

（文責：里村一人）

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11
一ツ橋印刷㈱ 学会事務センター内
TEL：03-5620-1953, FAX：03-5620-1960

【会員数】 872名（2023年12月現在）

【設立年】 2014年（平成26年）

【機関誌】 年2回日本口腔内科学会雑誌を発行（J-STAGE 電子発行同時）

【認定医・専門医など】 認定医71名、専門医169名、指導医144名（2023年12月現在）

【研修施設】 57施設

特定非営利活動法人 日本睡眠歯科学会

理事長 角谷 寛

<https://jadsm.jp/index.html>

本会は口腔と関連する睡眠障害の研究と臨床を推進し治療に関わる歯科医師、医師、デンタルスタッフの教育を進め、高度で専門的な睡眠歯科医療を提供して、広く国民の健康増進と福祉に貢献することを目的に2003年設立した。

1. 学術大会・総会の開催について

現在まで、22回の学術集会、総会、各種セミナーを開催し、2023年10月7日～8日京都大学医学部創立百周年記念施設 芝蘭会館にて、滋賀医科大学精神医学講座、角谷寛集会長のもと、会場参集にて開催された。また、その後オンラインデマンドも開催された。参加者は会場参加登録が356名あった。また、10月7日13時より1か月間、Webにて、市民公開講座“閉塞性睡眠時無呼吸”を催し、多数の市民の参加を得た。

2. 学会活動について

本学会機関誌には、年2回刊行の『睡眠口腔医学』と海外学会との連携誌である『Sleep and Breathing』がある。また本学会は関連学会である医科系の日本睡眠学会、日本睡眠検査学会と密接に連携し、日本睡眠学会で認定する「睡眠医療歯科専門医」に加え、本会独自の「睡眠歯科学会認定医・指導医」の取得が可能である。

本年度のトピックス

2024年11月3日～4日、徳島大学大塚講堂にて、徳島大学の岩崎智憲のもと開催する。同時に市民公開講座を開催する予定で、多くの市民に睡眠歯科医療を知ってもらう機会を作る。多くの皆様の参加を期待している。

(文責：角谷 寛)

《問い合わせ先・事務局》

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11

一ツ橋印刷(株) 学会事務センター内

TEL：03-5620-1953, FAX：03-5620-1960

[会員数] 1,056名 (2023年11月20日現在)

[設立年] 2006年 (平成18年)

[設立年] 理事長：角谷 寛, 理事16名, 監事2名

[機関誌] 和文誌「睡眠口腔医学」年2回, 抄録号1回発行, 関連英文誌「Sleep and Breathing」

[認定医・専門医など] 認定医100名, 指導医67名 (2023年11月現在)

一般社団法人 日本デジタル歯科学会

理事長 末瀬 一彦

<http://www.jaddent.jp>



1. 学術大会・総会の開催について

本学会は、2010年「日本歯科CAD/CAM学会」として250名の会員のもと設立し、2014年には「(一社)日本デジタル歯科学会」と改称し、現在に至っている。毎年、全国各地を回り、総会および学術大会を定期的に開催している。また、5年前からは夏季・冬季セミナーを開催し、時流に合った話題をテーマに講演会、シンポジウム、実技研修会などを開催している。

(回数：開催年月日／学術大会場所／大会長／大会テーマ)

- 第1回／2010年3月28日／東京都市センターホテル／山崎長郎／大会テーマ：Digital Dentistry が将来の歯科医療を変革する
- 第2回／2011年4月2～3日／日本歯科大学／新谷明喜／CAD/CAM医療イノベーション
- 第3回／2012年4月14～15日／東京医科歯科大学／三浦宏之／生体に調和したCAD/CAMテクノロジー
- 第4回／2013年4月20～21日／昭和大学／宮崎 隆／デジタルデンティストリーがもたらす歯科医療の未来
- 第5回／2014年4月19～20日／大阪歯科大学／末瀬一彦／デジタル機器を用いた包括的歯科医療
- 第6回／2015年4月25～26日／福岡国際会議場／佐藤博信／デジタルデンティストリー ―Now and Then―
- 第7回／2016年5月28～29日／北海道立道民活動センター／疋田一洋／拡大し続けるデジタルデンティストリーの世界
- 第8回／2017年4月22～23日／鶴見大学／大久保力廣／デジタルにより何が変わるのか？一次世代歯科医療への提言
- 第9回／2018年4月14～15日／アイーナ いわて県民情報交流センター／近藤尚知／Cutting Edge Digital Dentistry ―ヴァーチャルからリアルへ
- 第10回／2019年10月4～5日／奈良春日野国際フォーラム／末瀬一彦／温故知新 いにしえの都で最新のデジタルデンティストリーを語ろう！
- 第11回／2020年4月25～26日／誌上開催／武部 純／デジタル歯科力の進化―現在そして未来―
- 第12回／2021年4月24～25日／Web開催／馬場一美／デジタルをもっと身近に―革新から習慣へ―
- 第13回／2022年4月23～24日／タワーホール船堀／金田 隆／創ろう、究めようデジタル新時代：デジタルワークフロー、AI、デジタル診断の最前線
- 第14回／2023年4月22～23日／神奈川歯科大学／木本克彦／ここまで進んだ!! 歯科医療DX
- 第15回(予定)／2024年5月11～12日／長崎ブリックホール／澤瀬 隆／AIによる歯科医療―ディープラ

ーニングの活用ー

2. 学会活動について

本学会は、設立当初は「歯科用CAD/CAMシステム」の啓蒙活動を中心に行い、修復物製作技術や材料などに主眼をおいて研究、臨床活動を行ってきたが、最近では、画像診断・装置、矯正治療、インプラント治療などにおけるデジタル機器の活用促進、研究成果などを公表している。さらに、臨床現場におけるオンライン資格認証、オンライン請求や歯科技工におけるリモートワークについても会員の理解を得るべく周知している。

本年度のトピックス

2022年4月に日本歯科医学会認定分科会に加盟し、学会活動に対する重責を感じるとともに、日本の歯科医学の発展、向上に資するようにさらに気を引き締めて学会運営に努めている。日本歯科医学会の「令和4年度プロジェクト研究」に公募し、「歯科医療における匠の技のデジタル化―歯科技術の遠隔教育への挑戦―」のテーマで研究助成を賜り、鋭意研究を進め、今年度の本学会学術大会では、その成果を発表する予定である。また、本学会では「Journal of Digital Dentistry」は発刊し、日本の先端的なデジタルデンティストリー的话题を世界に発信するとともに、世界各国の情報も積極的に投稿公募を行っている。さらに、歯科技工士や歯科衛生士へのデジタル機器活用に関する「特別セミナー」の開催などを通して啓蒙を積極的に行っている。一方、医療保険への「口腔内スキャナー」の導入に向けて、技術提案なども行い、近い将来導入された場合には、会員が日常臨床で利活用できる体制を整えている。

(文責：末瀬一彦)

《問い合わせ先・事務局》

〒170-0003 東京都豊島区駒込143-9 駒込TSビル
(一財) 口腔保健協会内
TEL: 03-3947-8891, FAX: 03-3947-8341

[会員数] 正会員 974 名、協賛企業 57 社 (2023 年 9 月 30 日現在)

[設立年] 2010 年 (平成 22 年)

[機関誌] 日本デジタル歯科学会誌 (年 3 回発行)・英文誌 (年 1 回発行) オンラインジャーナル

[認定・専門医関連制度] 専門医 (歯科医師)、技術認定士 (歯科技工士・歯科衛生士)、認定技術アドバイザー (企業関係者)

令和6年度日本歯科医学会専門分科会総会一覧表

(令和6年1月現在)

専門分科会名	総会(学会)	開催期間・場所	責任者	連絡先・電話
歯科基礎医学会	第66回学術大会	10月12日(土)～14日(月・祝) 長崎大学医学部キャンパス	長崎大学大学院 医歯薬学総合研究科 筑波 隆幸 教授	㈱コンベンションリンケージ TEL：095-825-1955 / FAX: 095-825-1956 E-mail：jaob66@c-linkage.co.jp
日本歯科保存学会	2024年度春季学術大会 (第160回)	5月16日(木)・17日(金) 仙台国際センター	東北大学大学院歯学研究科 齋藤 正寛 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL：03-3947-8761 / FAX：03-3947-8873
	2024年度秋季学術大会 (第161回)	11月21日(木)・22日(金) アクリエひめじ(兵庫)	大阪歯科大学 前田 博史 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL：03-3947-8761 / FAX：03-3947-8873
日本補綴歯科学会	第133回学術大会	7月5日(金)～7日(日) 幕張メッセ	日本大学松戸歯学部 河相 安彦 教授	日本大学松戸歯学部 有床義歯補綴学講座 TEL：047-368-6111 (代表)
日本口腔外科学会	第69回総会・学術大会	11月22日(金)～24日(日) パシフィコ横浜	福岡歯科大学 池邊 哲郎 教授	㈱コングレ 内 TEL：06-6229-2555 (代表) E-mail：jsoms2024@congre.co.jp
日本矯正歯科学会	第83回学術大会	10月29日(火)～31日(木) パシフィコ横浜	東京医科歯科大学大学院 医歯学総合研究科 森山 啓司 教授	㈱インターグループ TEL：03-5549-6913 / FAX：03-5549-3201 E-mail：jos-meeting@intergroup.co.jp
日本口腔衛生学会	第73回学術大会	5月10日(金)～12日(日) トーサイクラシックホール岩手	岩手医科大学歯学部 岸 光男 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL：03-3947-8761 / FAX：03-3947-8873
日本歯科理工学会	第82回学術講演会	4月20日(土)・21日(日) かごしま県民交流センター	鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科 菊地 聖史 教授	(一社)日本歯科理工学会 事務局 TEL：03-3947-8891 / FAX：03-3947-8341 E-mail：jsdmd82@kokuhoken.jp
日本歯科放射線学会	第64回学術大会	5月24日(金)～26日(日) ホテルイタリア軒(新潟)	新潟大学大学院 医歯学総合研究科 林 孝文 教授	新潟大学大学院医歯学総合研究科 顎顔面放射線学分野内 TEL：025-227-2916 / FAX：025-227-0810
日本小児歯科学会	第62回大会	5月16日(木)・17日(金) 横須賀芸術劇場、横須賀市産業交流 プラザ、メルキュールホテル横須賀	神奈川歯科大学 木本 茂成 教授	神奈川歯科大学小児歯科学講座 E-mail：jspd62@kdu.ac.jp
日本歯周病学会	第67回春季学術大会	5月24日(金)・25日(土) ビッグパレットふくしま	奥羽大学歯学部 高橋 慶社 教授	㈱日本旅行 大阪法人営業統括部 MICE 営業部 TEL：06-4256-3869 E-mail：jsps67@nta.co.jp
	第67回秋季学術大会	10月4日(金)・5日(土) 札幌コンベンションセンター	北海道大学大学院歯学研究院 菅谷 勉 教授	㈱日本旅行 大阪法人営業統括部 MICE 営業部 TEL：06-4256-3869 E-mail：jsps67@nta.co.jp
日本歯科麻酔学会	第52回総会・学術集会	10月25日(金)～27日(日) 朱鷺メッセ(新潟)	新潟大学大学院 医歯学総合研究科 瀬尾 憲司 教授	新潟大学大学院医歯学総合研究科歯科麻酔学分野 TEL：025-227-2972
日本歯科医史学会	第52回総会・学術大会	9月28日(土) 東京ガーデンパレス	日本歯科医史学会 石橋 肇 理事	㈱学術社 TEL：03-5948-5584 / FAX：03-5924-4388 E-mail：jsdh@gakujyutsusha.co.jp
日本歯科医療管理学会	第65回総会・学術大会	7月13日(土)・14日(日) 共済ホール(北海道)	北海道医療大学歯学部 越智 守生 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL：03-3947-8761 / FAX：03-3947-8341 E-mail：jsdpa65@kokuhoken.jp
日本歯科薬物療法学会	第44回学術大会	7月13日(土)・14日(日) 新潟県民会館	日本歯科大学 共同利用研究センター 葛城 啓彰 教授	日本歯科大学新潟生命歯学部新潟病院 口腔外科医局内 TEL：025-267-1500 / FAX：025-267-1134
日本障害者歯科学会	第41回総会および学術大会	12月13日(金)～15日(日) 沖縄コンベンションセンター	(一社)沖縄県歯科医師会 米須 敦子 会長	(一社)沖縄県歯科医師会 TEL：098-996-3561
日本老年歯科医学会	第35回学術大会	6月28日(金)～30日(日) 札幌コンベンションセンター	北海道大学大学院歯学研究院 山崎 裕 教授	北海道大学大学院歯学研究院 口腔健康科学分野高齢者歯科学教室 TEL：011-706-4582
日本歯科医学教育学会	第43回学術大会	9月6日(金)・7日(土) 愛知学院大学名城公園キャンパス	愛知学院大学歯学部 本田 雅規 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL：03-3947-8761 / FAX：03-3947-8873 E-mail：jdea43@kokuhoken.jp
日本口腔インプラント学会	第54回学術大会	11月1日(金)～3日(日) 国立京都国際会館	大阪口腔インプラント研究会 阪本 貴司 施設長	日本コンベンションサービス㈱ 業務推進部内 TEL：03-3508-1214 / FAX：03-3508-1302 E-mail：jsoi2024@convention.co.jp
日本顎関節学会	第37回総会・学術大会	7月13日(土)・14日(日) あわぎんホール (徳島県郷土文化会館)	徳島大学大学院医歯薬学研究部 松香 芳三 教授	徳島大学大学院医歯薬学研究部 顎機能咬合再建学分野 TEL：086-633-7350 / FAX：086-633-7391
日本臨床口腔病理学会	第35回総会・学術大会	7月30日(火)～8月1日(木) 新潟大学／ 新潟大学医学部有壬記念館	新潟大学大学院 医歯学総合研究科 田沼 順一 教授	新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔病理学分野 TEL：025-227-2837
日本接着歯学会	第43回学術大会	11月30日(土)・12月1日(日) 奄美市市民交流センター	鹿児島大学大学院 医歯学総合研究科 西谷 佳浩 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL：03-3947-8761 / FAX：03-3947-8873
日本歯内療法学会	第45回学術大会	7月20日(土)・21日(日) 千里ライフサイエンスセンター (大阪)	大阪歯科大学歯学研究科 林 美加子 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL：03-3947-8761 / FAX：03-3947-8341
日本レーザー歯学会	第36回総会・学術大会	10月19日(土)・20日(日) 愛知学院大学楠元キャンパス	愛知学院大学歯学部 前田 初彦 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL：03-3947-8761 / FAX：03-3947-8341
日本スポーツ歯科医学会	第35回総会・学術大会	10月12日(土)・13日(日) 大阪歯科大学	大阪歯科大学 山本 一世 教授	(一財)口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL：03-3947-8761 / FAX：03-3947-8873
日本有病者歯科医療学会	第33回総会・学術大会	2024年3月8日(金)～10日(日) 新潟グランドホテル	日本歯科大学新潟生命歯学部 田中 彰 教授	日本歯科大学新潟生命歯学部口腔外科内 TEL：025-211-2113

令和6年度日本歯科医学会認定分科会総会一覧表

(令和6年1月現在)

認定分科会名	総会（学会）	開催期間・場所	責任者	連絡先・電話
日本口腔感染症学会	第33回総会・学術大会	9月21日（土）・22日（日） 福岡県歯科医師会館	福岡大学医学部 歯科口腔外科学講座 近藤 誠二 主任教授	福岡大学病院歯科口腔外科 TEL：092-801-1011 / FAX：092-801-1044 E-mail：jojd2024@fukuoka-u.ac.jp
日本歯科心身医学会	第39回総会・学術大会	7月19日（金）・20日（土） Mウイング（長野）	松本歯科大学 村上 聡 教授	一ツ橋印刷㈱ 学会事務センター内 日本歯科心身医学会 TEL：03-5620-1953 / FAX：03-5620-1960
日本臨床歯周病学会	第42回年次大会	6月15日（土）・16日（日） 大阪国際会議場	タキノ歯科医院 瀧野 裕行 院長	㈱ Atalacia TEL：072-807-3890 / FAX：072-807-3898 E-mail：japc42@atalacia.com
日本歯科審美学会	第35回学術大会	12月7日（土）・8日（日） あわぎんホール （徳島県郷土文化会館）	徳島大学大学院医歯薬学研究部 保坂 啓一 教授	（一財）口腔保健協会 コンベンション事業部内 TEL：03-3947-8761 / FAX：03-3947-8341
日本顎口腔機能学会	第71回学術大会	4月13日（土）・14日（日） 大阪大学大学院歯学研究科	大阪大学大学院歯学研究科 加藤 隆史 教授	大阪大学大学院歯学研究科口腔生理学講座 TEL：06-6879-2882 / FAX：06-6879-2882 E-mail：jssf71th@gmail.com
	第72回学術大会	12月予定 東京医科歯科大学特別講堂（予定）	東京医科歯科大学大学院 歯医学総合研究科 戸原 玄 教授	未定
日本歯科東洋医学会	第42回学術大会	10月19日（土）・20日（日） 大阪歯科大学創立100周年記念館	大阪歯科大学附属病院 小野 圭昭 教授	（一財）口腔保健協会 コンベンション事業部 TEL：03-3947-8761 / FAX：03-3947-8873
日本顎変形症学会	第34回総会・学術大会	6月27日（木）・28日（金） TFT ホール（東京）	鶴見大学歯学部 濱田 良樹 教授	㈱プロコムインターナショナル TEL：03-5520-8821 / FAX：03-5520-8820 E-mail：jsjd34@procom-ijp
日本顎顔面補綴学会	第41回総会・学術大会	11月29日（金）～12月1日（日） 福岡国際会議場	福岡歯科大学口腔医療センター 古賀 千尋 教授	福岡歯科大学咬合修復学講座有床義歯学分野 TEL：092-801-0425 / FAX：092-801-0513 （大学代表番号）
日本顎咬合学会	第42回学術大会・総会	6月8日（土）・9日（日） 東京国際フォーラム	日本顎咬合学会 貞光 謙一郎 理事長	（特非）日本顎咬合学会学術大会事務局 TEL：03-3261-0474 E-mail：gakujutsu@ago.ac
日本磁気歯科学会	第34回総会・学術大会	11月上旬 関東開催	未定	未定
日本小児口腔外科学会	第36回総会・学術大会	11月8日（金）・9日（土） 栃木県総合文化センター	獨協医科大学医学部 口腔外科学講座 川又 均 主任教授	獨協医科大学医学部口腔外科学講座 TEL：0282-87-2169 / FAX：0282-86-7644 E-mail：dkyomfs@dokkyomed.ac.jp
日本顎顔面インプラント学会	第28回総会・学術大会	11月30日（土）・12月1日（日） 福岡国際会議場	福岡歯科大学 城戸 寛史 教授	日本顎顔面インプラント学会事務局 TEL：03-3451-6916 / FAX：03-5730-9866
日本外傷歯学会	第24回総会・学術大会	7月13日（土）・14日（日） 神奈川県歯科医師会館	大船中央病院附属歯科診療所 栢岡 浩二 所長	大船中央病院附属歯科診療所 TEL：0467-47-3638 / FAX：0467-47-3638 E-mail：jad2024yokohama@gmail.com
日本口腔診断学会	第37回学術大会	9月27日（金）～29日（日） 松本歯科大学7階 大講堂	松本歯科大学病院 初診室 （総合診断科・総合診療科） 森 啓 准教授	松本歯科大学病院 初診室 （総合診断科・総合診療科） TEL：0263-52-2098
日本口腔腫瘍学会	第43回総会・学術大会	2025年2月26日（水）～28日（金） 一橋大学 一橋講堂	東京歯科大学水道橋病院 片倉 朗 教授	未定
日本口腔 リハビリテーション学会	第38回学術大会	12月7日（土）・8日（日） 東京慈恵会医科大学2号館講堂	東京慈恵会医科大学附属病院 歯科口腔外科 林 勝彦 教授	東京慈恵会医科大学 歯科口腔外科 TEL：03-3433-1111 / FAX：03-5400-1293 E-mail：38jaor@gmail.com
日本口腔顔面痛学会	第29回総会・学術大会	11月29日（金）～12月1日（日） 東京歯科大学水道橋校舎新館	東京歯科大学 福田 謙一 教授	一ツ橋印刷㈱学会事務センター内 日本口腔顔面痛学会事務局 TEL：03-5620-1953 / FAX：03-5620-1960
日本口腔検査学会	第17回学術大会	12月14日（土）・15日（日） 日本大学松戸歯学部新館	東京都健康長寿医療センター 病院歯科口腔外科 平野 浩彦 部長	（一社）日本口腔検査学会 TEL：050-1741-4075 / FAX：050-3737-2847 E-mail：info@jsedp1.jp
日本口腔内科学会	第34回学術大会	9月27日（金）～29日（日） 松本歯科大学7階 大講堂	松本歯科大学 栗原 祐史 主任教授	松本歯科大学病院 初診室 （総合診断科・総合診療科） TEL：0263-52-2098
日本睡眠歯科学会	第23回総会・学術大会	11月3日（日）・4日（月・祝） 徳島大学 大塚講堂	徳島大学大学院医歯薬学研究部 岩崎 智憲 教授	徳島大学歯学部小児歯科学分野 TEL：088-633-7358
日本デジタル歯科学会	第15回学術大会	5月11日（土）・12日（日） 長崎ブリックホール	長崎大学生命医科学域 口腔インプラント学分野 澤瀬 隆 教授	i コンベンション㈱ TEL：092-402-1320 / FAX：092-402-1340 E-mail：jadd15@iconvention.jp

日本学術会議・歯学委員会

委員長 村上 伸也

<http://www.scj.go.jp/>

1. 第26期歯学委員会および分科会の設置について

2023年10月1日に日本学術会議26期（3年間）がスタートし、10月2日～3日に開催された総会において、会員の互選により、光石 衛会長（機械工学）が選出され、三枝信子副会長（地球惑星科学／環境学）、磯 博康副会長（健康・生活科学）、日比谷潤子副会長（言語・文学）がそれぞれ就任した。また、歯学委員会が属する第二部では、神田玲子部長、尾崎紀夫副部長、奥野恭史幹事、堀 正敏幹事がそれぞれ就任した。

常置の分野別委員会の一つである歯学委員会を構成する会員としては、村上伸也（委員長）、森山啓司（副委員長）、樋田京子（幹事）埴 隆夫の4名が就任し、歯学関連の連携会員として30名が任命されている。また、26期の期首にあたり、25期からの引き継ぎ事項の1つとして、分科会設置のあり方の見直しが行われている。具体的には、1ヶ月ないし2ヶ月程度分野別委員会で集中的に議論した上で分科会設置の準備を進めるよう指示が出されている。25期においては、歯学委員会のもとに、基礎系歯学分科会、臨床系歯学分科会、病態系歯学分科会の3分科会が設置されていたが、年内を目途に歯学委員会において議論を行い、26期における分科会設置を決定する予定である。

2. 歯学委員会および分科会の活動について

●報告／提言の作成

本年25期には、以下の報告が日本学術会議内での査読過程を終え、発出されている。なお、（ ）内は決定（公表）年月日である。

- 歯学・口腔科学分野の課題と展望 2023（2023/9/22）
- コロナ禍における口腔に関連した諸問題とその対応（2023/9/22）
- 加熱式タバコの毒性を知り科学的根拠に基づく施策の実現を（2023/9/27）

●公開シンポジウム・講演会の開催

2023年には、以下の公開シンポジウムを開催した。

- 「口腔保健から Well-being を再考する」
2023年5月13日（土）15：40～17：10
共催：日本口腔科学会
会場：岡山コンベンションセンター
- 「脱タバコ社会の実現を脅かす加熱式タバコ消費拡大の問題点」
2023年5月21日（日）13：00～15：40
共催：日本口腔衛生学会
会場：大阪国際交流センター

- 「健康・幸福寿命の延伸に資するスマート歯科医学・歯科医療の実現」

2023年8月4日（金）14：00～16：00

共催：日本歯科医学会連合

オンライン+オンデマンド開催

- 「臓器再生最前線～ミニ臓器の作製から応用まで～」

2023年9月16日（金）17：30～19：00

会場：日本大学歯学部百周年記念講堂

本年度のトピックス

25期では、「学術の中長期研究戦略」の提案を広く募り、今後20～30年頃まで先を見通した学術振興の「グランドビジョン」を提示し、その「グランドビジョン」実現に必要となる「学術研究構想」を取りまとめることとなった。歯学領域からは、西村理行先生（25期会員）のリーダーシップの下、「健康・幸福寿命の延伸に資するスマート歯科医学・歯科医療の実現」が学術の中長期戦略として取りまとめられ、グランドビジョン“生命現象の包括的理解による真の Well-being の創出”のなかの1つの戦略として採択された。

引き続き日本学術会議への日本歯科医学会および所属分科会のご支援、ご協力をお願いする次第である。

（文責：村上伸也）

《問い合わせ先・事務局》

〒106-8555 東京都港区六本木7-22-34

TEL：03-3403-3793, FAX：03-3403-6224

[会員数] 210名（定員）、連携会員約2,000名（2023年11月15日現在）

[設立年] 1949年（昭和24年）、内閣府

[機関誌] 和日日本学術会議ニュース・メールなどの電子情報発信、地区会議ニュースなど

国際歯科研究学会日本部会 (JADR)

会長 森山 啓司



<http://jadr.umin.jp/>

1. 学術大会・総会の開催について

第71回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会 (山田 聡大会長, 東北大学) は, 2023年11月25日～26日の2日間にわたり, 対面形式にて東北大学医学部星陵オーデトリウムにて開催された。海外からの演題を含むポスター演題数は72題であった。学術大会では阿部高明先生 (東北大学医学系研究科病体液性制御学教授) による特別講演, IADR 会長の Ophir Klein 先生, KADR 会長の In-Sung Yeo 先生による講演, 日韓合同シンポジウム「Explore the Radiant Future of Dental Research」ならびに3つのシンポジウムが行われた。シンポジウムのテーマは「New insights in Biology of oral diseases」, 「Recent advances of skeletal development, regeneration and disease」, 「Immunity in Oral Disease」であった。

2. 学会活動について

米国に次ぐ世界第2位の規模の部会として, IADR の各種委員会に JADR から15名の委員を送り, IADR 全体の運営に積極的に関わるとともに, 活発な情報発信を通して, 世界およびアジア太平洋地区における日本のプレゼンスの向上に努めている。IADR-Asia Pacific Region (APR) では, 2021年は JADR の会長が President を務め, 若手研究者の発表と討論を行う IADR APR Young Researchers Forum を複数回にわたり開催した。また, 2023年10月28日～29日にかけて APR Chinese Division が主催にて The 2023 Rising Star/Guiding Star Symposium of IADR APR がハイブリッドにて開催され, JADR からは江草宏先生 (東北大学), 塚崎雅之先生 (東京大学) がそれぞれ講演した。

なお, 第72回学術大会については, 2024年11月16日～17日にかごしま県民交流センターにて大会長の後藤哲哉先生 (鹿児島大学) の下, 現地開催の予定で鋭意準備を進めている。

JADR としては, 今後も引き続き国内ならびに国際的な学術活動を推進していくことで, 歯学研究のさらなる活性化を図り, 会員数の増加に繋げていきたい。

Association for Dental, Oral and Craniofacial Research (略称は IADR のままとする) へと変更され, これに伴って新たなロゴが制定されたことが報告された。また, 各賞に関するセッションでは, 大変喜ばしいことに津賀一弘先生 (広島大学) の Award in Geriatric Oral Research 受賞が発表された。

会期中には IADR の会長職の引き継ぎセレモニーが行われ, Ophir Klein 先生 (米国) が新会長として正式に着任された。また同時に, 今大会より今里 聡先生 (大阪大学) が次期会長, Pamela Yelick 先生 (米国) が副会長にそれぞれ就任されている。今里先生は, 2024年3月に開催される IADR New Orleans 大会にて会長にご就任の予定となっている。

また, IADR-Asia Pacific Region (APR) では, コロナ以降 Web の Board Meeting ならびにシンポジウムを頻繁に開催して交流を深めており, 2023年10月28日～29日にかけて APR Chinese Division が主催にて The 2023 Rising Star/Guiding Star Symposium of IADR APR が中国・成都と, オンラインのハイブリッド形式にて開催された。JADR から江草 宏先生 (東北大学) と塚崎雅之先生 (東京大学) がシンポジストとして参加された他, 一般のポスターセッションも開催され大変有意義な会であった。

なお, 2021年より始まった KADR との日韓合同シンポジウムについて, 本年は初めての対面開催にて, 第71回学術大会 (於: 東北大学) にて開催された。JADR からは座長として江草宏先生 (東北大学) が, 発表者として塚崎雅之先生 (東京大学), 松本卓也先生 (岡山大学) が登壇し, 発表していただいた。

このように, 新型コロナウイルスの感染拡大を終えて, IADR ならびに IADR-APR の活発な交流が始まり, 世界中が研究活動を回復させようとしてきている。IADR 会員資格への入口ともなる JADR にますます多くの方にご入会いただき, 世界の歯学研究を大いに牽引していただきたいと思います。 (文責: 森山啓司)

本年度のトピックス

2023 IADR General Session & Exhibition は2023年6月21日～24日に, IADR としては2019年のバンクーバー大会以来, 4年ぶりに対面形式にて開催された。開催地となった南米コロンビアの首都ボゴタへは, 日本から飛行機を乗り継いで30時間以上の距離となり, 残念ながら従来の大会と比べて参加者数は少なめとなった。

開会式では, IADR 会長 (当時) の Brian O'Connell 先生 (アイルランド) から, 学会の正式名称が, The International

《問い合わせ先・事務局》

〒612-8082 京都市伏見区両替町 2-348-302

TEL: 075-468-8772, FAX: 075-468-8773

【会員数】844名 (2023年11月20日現在)

【設立年】1954年 (昭和29年) 11月16日

【機関誌】「JADR ニューズレター」年2回, 「Mail News」を年4回発行

公益社団法人 日本歯科医師会
スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム

SCRIP

令和6年度

30回
記念

日本代表選抜大会 大学代表学生 募集案内

スチューデント・クリニシャン・リサーチ・プログラム (SCRIP) は、
歯学生によるグローバルな研究発表大会です。



日本代表選抜大会の優勝者は、2025年3月に予定されている
国際歯科学研究学会米国部会 (AADOCR) 主催による学術大会
(米国・ニューヨーク市) に日本代表として招待され、発表する機会を
得られます。



参加登録締切日

2024年 **5月7日(火)**

・詳細に関しては、令和6年度 SCRIP 手引き
もしくは本会ホームページをご覧ください。

URL : <https://www.jda.or.jp/dentist/scrp/>



開催日：2024年8月6日(火)

開催場所：歯科医師会館

発表形式：□演発表
(英語、PowerPointによるプレゼンテーション)

お問い合わせ先 ●各大学 教務課／学生課
●公益社団法人 日本歯科医師会 事業部学術課
TEL : 03-3262-9212 Email : scrp@jda.or.jp

編集後記

▶ 2024 年の元旦。北陸地方は震度 7 の能登半島地震に襲われ、今なお、大きな傷跡を残しています。お亡くなりになられた方々へのお悔やみと被災されました方々へのお見舞いを申し上げるとともに、1 日も早い能登の復興を願うばかりです。

▶ 翌 2 日には、羽田空港 C 滑走路で能登半島地震に対する救援物資を搬送予定の海上保安庁の航空機と JAL 516 便の衝突事故も起こりました。幾重にも安全対策が施されていたにもかかわらず、事故は起こってしまいました。一方、炎上した旅客機の乗客乗員 379 名全員の無事も伝わりました。奇跡ともいえるこの脱出には、乗員の日頃からの徹底した安全意識と訓練があったからに違いありません。これは、医療事故と医療安全にも通ずることです。危機管理や医療安全対策の重要性をあらためて認識しました。

▶ さて、お気づきになられたでしょうか？ 今号から表紙のデザインコンセプトが変わりました。43 巻の表紙は、大谷選手が移籍したドジャースを意識したわけではありませんが、濃いブルーを基調とし、未来からのまばゆい光が差し込むクールでシャープなイメージにしました。いかがでしょうか。また、右下には第 25 回学術大会のかわいいシンボルマークがあります。

▶ 6 期目となられた住友雅人会長は、巻頭言で本学会への帰属意識と存在意義を示されました。本学会の専門分科会、あるいは認定分科会であることの誇りと帰属性を再認識いただけます。そして、35 巻からの特別企画 座談会を振り返っていただきました。国民へ歯科の重要性を発信し続けている本学会の存在意義も伝わったのではないのでしょうか。

▶ その特別企画 座談会ですが、今号では来年の 9 月にパシフィコ横浜で開催される第 25 回日本歯科医学会学術大会のテーマ『歯科イノベーションによる新時代の創生』について語っていただきました。2019 年の 39 巻で発信された歯科イノベーションロードマップは、健康寿命を延伸させていくために、2040 年までに歯科が目指すものを 3 期に分けて示しています。2025 年はその一区切りの年になります。今回の座談会では、第 25 回学術大会の川口陽子会頭から大会の趣旨と概要、かわいいシンボルマークの説明などの熱いメッセージが伝わります。さらに、日本歯科医師会の高橋英登会長が「歯科のオリンピックともいえるこの学術大会に出ましょう」と力強くアピールされています。是非、ご一読ください。

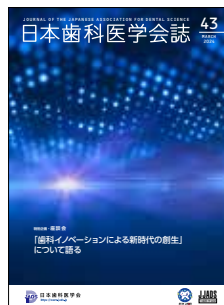
▶ 今号の学術研究では、令和 3 年度に採択された 4 つのプロジェクト研究成果が報告されています。「第 39 回歯科医学を中心とした総合的な研究を推進する集い」で発表された 7 つの事後抄録のほか、各分科会報告も併せてご確認ください。

▶ 1989 年に発刊された本誌は、年 1 回の発行ですので今号が 43 巻となります。私は 31 巻（2012 年）から編集委員となりましたので、実に 12 年間この委員会に携わってきたことになります。つまり、一回りも年を取ってしまったわけです。編集後記の担当もこれが 4 回目です。そこで、10 年前からの本誌座談会での私の顔写真を振り返りましたところ、しっかりと顔に年輪が刻まれていることに気付かされました。これも一つの道しるべではあるのですが…。

▶ 本編集委員長として 6 年目となりました。毎号、本当にたくさんの方々のご協力、ご尽力をいただいておりますが、おかげさまで 43 巻も無事に発行することができました。ここに厚く御礼申し上げます。

(松野 智宣)

● 表紙イラストコンセプト ●



新時代の創生を感じさせる輝かしい光がこの先にあることを表しています。

深い紺色ベースのビジュアルに文字を白抜きで乗せ、シャープで未来志向な雰囲気を意図しました。これまでのデザインとより一層違った印象になっています。組織名を最下部の細い白帯に入れて見せることにより、清涼な印象を心がけました。

編集委員会委員 (Editorial Board)

委員長 (Chief)：松野智宣 (Tomonori MATSUNO)

副委員長 (Sub-Chief)：大久保力廣 (Chikahiro OHKUBO)

委員 (Editor)：浅野正岳 (Masatake ASANO)、石川結子 (Yuiko ISHIKAWA)、坪田有史 (Yuji TSUBOTA)、服部雅之 (Masayuki HATTORI)

担当理事 (Director)：横瀬敏志 (Satoshi YOKOSE)

複写される方へ

本誌に掲載された著作物を複写したい方は、公益社団法人日本複写権センターと包括複写許諾契約を締結されている企業の従業員以外は、図書館や著作権者から複写権等の行使の委託を受けている次の団体から許諾を受けてください。著作物の転載・翻訳のような複写以外の許諾は、直接本会へご連絡ください。

〒107-0052 東京都港区赤坂 9-6-41 乃木坂ビル一般社団法人学術著作権協会
TEL : 03-3475-5618 FAX : 03-3475-5619 E-mail:naka-atsu@mu.jbiglobe.ne.jp

アメリカ合衆国における複写については、次に連絡してください。

Copyright Clearance Center, Inc.
222 Rosewood Drive, Danvers, MA 01923 USA
Phone : (978) 750-8400 FAX : (978) 750-4744

Notice about photocopying

In order to photocopy any work from this publication, you or your organization must obtain permission from the following organization which has been delegated for copyright for clearance by the copyright owner of this publication.

Except in the USA

Japan Academic Association for Copyright Clearance (JAACC)
6-41 Akasaka 9-chome, Minato-ku, Tokyo 107-0052, Japan
TEL : 81-3-3475-5618 FAX : 81-3-3475-5619 E-mail:naka-atsu@mju.biglobe.ne.jp

In the USA

Copyright Clearance Center, Inc.
222 Rosewood Drive, Danvers, MA 01923 USA
Phone: (978) 750-8400 FAX: (978) 750-4744

本誌は「日本歯科医学会研究等の利益相反に関する指針」に従って、
著者に利益相反（Conflict of Interest：COI）状態の申告を求めています。

日本歯科医学会誌（Vol. 43・2024年）

令和6年3月10日印刷
令和6年3月31日発行（年1回発行）（非売品）

編集発行 〒102-0073
東京都千代田区九段北4-1-20
日本歯科医師会内
日本歯科医学会
TEL 03(3262) 9214
<https://www.jads.jp/>
印刷所 〒161-8558
東京都新宿区下落合2-6-22
一世印刷株式会社

SURGICEL® ABSORBABLE HEMOSTAT™ MD

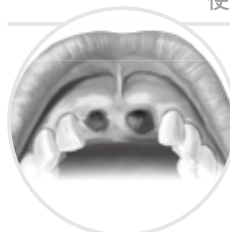
酸化再生セルロース・吸収性局所止血材
サージセル®・アブソーバブル・ヘモスタットMD 綿型

止血部分にあわせて
自由に形状・厚みの調整ができる
綿型止血材

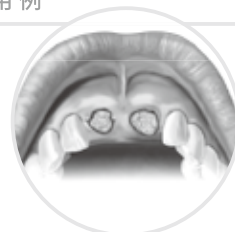
多くの場合サージセル®は体内に吸収されます*

*適用量、血液の浸潤量、適用部位等により異なります。

使用例



抜歯直後



サージセル®適用後

※止血の達成後、余剰分は可能な限り
取り除いてください。

抜歯後の止血、縫合に

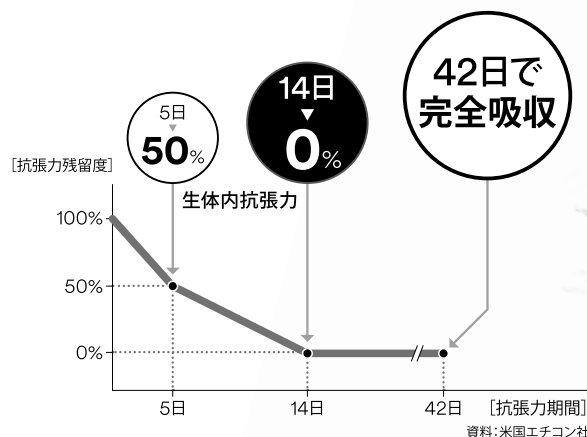
施術後の抜糸が不要で、歯科医師の負担減に貢献します

COATED VICRYL RAPIDE®

合成吸収性ブレイド縫合糸

短期間の組織サポートに適した合成吸収糸

生体内抗張力は約5日で半減し、約14日後には失われます



※ご使用前に添付文書を必ずお読みください。

高度管理医療機器
高度管理医療機器

販売名: サージセル・アブソーバブル・ヘモスタットMD
販売名: バイクリル ラピッド

承認番号: 30400BZX00112000
承認番号: 20700BZY00543000

ETHICON
Johnson & Johnson SURGICAL TECHNOLOGIES

※製品改良のため予告なく仕様を変更する場合がありますので、あらかじめご了承ください。

製造販売元: ジョンソン・エンド・ジョンソン株式会社 メディカル カンパニー
本社 〒101-0065 東京都千代田区西神田 3 丁目 5 番 2 号

歯が溶ける
pH(臨界pH)は、5.3
とは限らない?!

歯磨き回数と
口漱ぎの方法による
う蝕予防効果の違いは?

なぜ初期う蝕は、
エナメル質の内部から
脱灰されるの?

pHが高いと、
なぜ歯石が
できやすいの?

歯周炎患者は
唾液の性状が
違うの?

お米はパンより
歯石が
できやすい?!

エナメル質と根面で、
脱灰のされ方は
どう違うの?

白斑であっても
脱灰しているとは
限らない?

う蝕・酸蝕・歯周疾患に関する
こうした疑問に、

自信をもって説明できますか??

わかりやすく
説明してくれるのは
この本!

ちょっと深掘り!

予防の科学

う蝕・酸蝕・歯石と歯周疾患

中嶋省志 著

🦷 A5判/240頁/2色刷り

🦷 定価 5,280円 (本体 4,800円+税10%)

🦷 ISBN978-4-263-44696-6

🦷 注文コード 446960

詳細は2次元コードの
リンク先から!



本書は...

- ✓ う蝕・酸蝕・歯周疾患について、その発症のメカニズムと、予防のためのエビデンスを解説した書籍。
- ✓ 92のトピックをとおして“予防のプロ”になるための知識とスキルを養います。口腔保健への興味と実践への原動力を引き出す患者説明・コミュニケーションのヒントやデータも満載。
- ✓ あなたが知らない“予防の科学”がここにあります。

“予防”を、あなたの強みに!

全国の歯科医院で推奨されて15年
続々導入中!

さあ、もっと「水のきれいな歯医者さん」へ

飛沫感染対策 & 口腔ケアシリーズ [エピオス 3C Clean]

患者様にもスタッフにも安心・安全な治療環境の整備は、
これからの歯科医院を選ぶ大きな基準になります。

1 First Clean EPIOS ECO SYSTEM エピオス エコシステム

歯科医院の衛生環境を守る
全自動残留塩素濃度補正システム

高性能電解槽上質除菌水を連続・全自動で歯科ユニットに供給します。“世界初”連続除菌治療が、細菌を除去し続ける歯科治療で、患者様にも医院スタッフにも「安心」「安全」な治療環境を実現します。

※厚生労働省指定機関による検査が行われ、「細菌ゼロ」の基準をクリアした
歯医者さんをPOIC研究会では「歯科治療水安全施設」に認定しています。

- ・外形寸法: W400 × L300 × H1450mm
- ・残留塩素濃度: 1~40ppm (pH6.3~6.8)

全国800以上の
施設で導入!



2 Second Clean PLASMA POIC® WATER プラズマポイック ウォーター

口腔ケア・空間除菌・器具の除菌、
幅広く使える電解機能水生成器

薬品は一切使用せず、水と塩のみを電気分解した機能水を生成します。たんばく汚れ、バイオフィルムを分解・洗浄し、除菌まで瞬時にを行い治療からホームケアまで様々な用途で活用出来ます。

- ・外形寸法: H403mm × W247mm × D276mm
- ・生成量: 電解水 約4L/回

全国3000以上の
施設で導入!

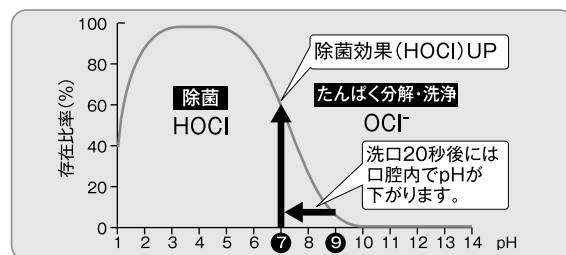


● エピオスエコシステムを導入した歯科ユニット水質データ

Water Quality Examination on Dental Offices in Japan

Before EPIOS				After EPIOS Installed			
pH	Bacterial Count (CFU/ml)	meet Water Quality Standard?	RCC (ppm)	Bacterial Count at AWS ^{※2} (CFU/ml)	pH	Bacterial Count (CFU/ml)	meet Water Quality Standard?
7.1	>1,000	No	<0.1	7,024	6.8	0	Yes
6.9	>1,000	No	<0.1	10,560	6.4	0	Yes
7.4	>1,000	No	<0.1	2,344	7	0	Yes
6.8	0	Yes	<0.1	4,570	5.8	0	Yes
7.1	0	Yes	<0.1	12,800	6.7	0	Yes
7.4	>1,000	No	<0.1	6,171	6.4	0	Yes
6.9	>1,000	No	<0.1	2,904	6.3	0	Yes
6.6	>1,000	No	<0.1	6,920	6.3	0	Yes

※1: 残留塩素濃度 ※2: エアウォーターシリンジ

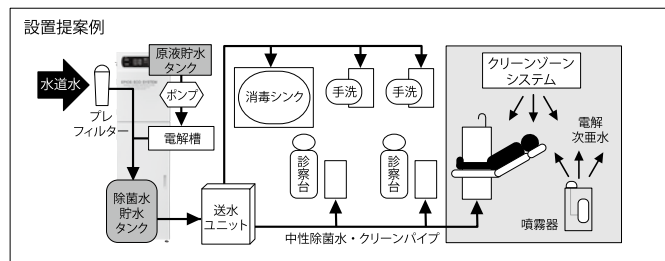


3 Third Clean ORALOO 4+ オーラループ フォープラス

優れたコーティング作用で、
歯を強くするジェル歯磨き

三リン酸5Naにより歯の表面に付着したステイン汚れを取り、クリーニング効果を発揮。発泡剤や研磨剤を使用し
ておらず、静菌作用により口臭の軽減に効果的です。

- ・成分: 三リン酸5Na、オリゴ糖カルシウム、塩化マグネシウム 他
- ・内容量: 60g、20g



製品説明・口腔ケア実践セミナーも、定期開催しております。

ご相談・
お問い合わせ先

製造販売元 株式会社 エピオス 〒135-0047 東京都江東区富岡1-26-15 飯田ビル3F

フリーダイヤル
(全国通話料無料)



0120-656-166





手軽に、歯、よろこぶ。

むし歯の始まり*を抑制する
CPP-ACP配合のガム

RecALDENT
リカルデント



CPP-ACP (成分) が持つ**3つの効果**

- 1 脱灰抑制
- 2 再石灰化
- 3 耐酸性増強

※むし歯の始まりとは脱灰のこと。

■許可表示: むし歯の始まりである脱灰を抑制し、再石灰化及びその部位の耐酸性を増強するCPP-ACPを配合しているため、歯を丈夫で健康にするのに役立ちます。食生活は、主食、主菜、副菜を基本に、食事のバランスを。■発売中のリカルデントには特定保健用食品ではない製品もあります。

リカルデント



モンデリーズ・ジャパン株式会社





NEO DENTAL CHEMICAL
PRODUCTS CO., LTD.



カタログ PDF



添付文書 PDF



素材の品質も 性能の一部です。

1本で覆髄から裏層まで！

DirectCapping+BaseLiner CAVIOS with MTA

覆髄+裏層 2in1

- 1本で直接覆髄から裏層まで
- デンティンブリッジ形成促進
- ALP活性に最適なpH
- HAPによるマイクロシール効果
- ネオホワイトピュア® 配合

ALP：アルカリフォスファターゼ
HAP：ハイドロキシアパタイト



高い操作性を有するキャビオスがMTA系製材として生まれかわりました。スムーズで切れが良く、歯質へのなじみが高いペーストに、MTA系成分「ネオホワイトピュア®」を配合。MTAの効果発現を促す新処方により光重合裏層材としての理工学的性質に加え、直接覆髄材としての性能を獲得しました。1本で覆髄にも裏層にも使える 2 in 1 製材です。

MTA系覆髄+裏層材

D-Cavios® MTA

ネオホワイトピュア® 配合

1.5g入シリンジ 1本
先端チップ 15本
標準価格 6,500円

D-キャビオス® MTA

医療機器認証番号 304ADBZX00054000
歯科用覆髄材料（歯科裏層用高分子系材料）
管理医療機器

製造販売業者



ネオ製薬工業株式会社

〒150-0012 東京都渋谷区広尾3丁目1番3号
Tel. 03-3400-3768 (代) Fax. 03-3499-0613

「ネオホワイトピュア」は太平洋セメント株式会社の登録商標第 6125963 号です。

KONAMI

摂食・嚥下訓練器具のみこむトレーニング

ラビリントレーナー®

「いつまでもおいしく口から食べる幸せ」

食事中にむせる、食物を飲み込みにくい、食べこぼす、ということはありませんか？そのような方は嚥下（えんげ）機能が衰えはじめています。いつまでもおいしく食事ができるようにラビリン体操で口腔トレーニングを行いましょう。



つるし穴
フックなどにつるして保管する時にご使用ください。

グリップ部
指でにぎります。

ホルダー部
親指を差し込んで、支えるために使います。

リング部
(舌のトレーニングに使用します)舌を鍛えるための部分。舌の上に、ふせるように使います。

ラビアル部
(唇のトレーニングに使用します)唇を鍛えるための部分。歯と唇の間にはさむように使います。



置いたときでも口に入れる部分が接地しないので衛生的

ラビリントレーナー

¥3,500

規格：材質：シリコンゴム／重量：約36g
耐熱温度：200℃（オートクレーブ滅菌可）
サイズ：長さ149mm×幅54mm×厚さ32mm
カラー：口腔色

ご家庭で使いやすいスタンド付！



大きい植毛部分は義歯床や人工歯全体を磨くのに適しています。小さい植毛部分は毛が固くクラスプ部分や義歯の細かい溝などを磨くのに適しています。

ドルフィン義歯ブラシ(スタンド付)

¥4,800
患者価格 ¥1,000

規格：柄…ポリプロピレン製
毛…ナイロン
硬さ…かため
耐熱温度…80℃
スタンド…3色（イエロー、レッド、ブルー）
材質…シリコンゴム
包装：6本入（ASS・単色）

ドルフィン義歯ブラシ

¥2,400
患者価格 ¥500



規格：柄…ポリプロピレン製
毛…ナイロン
硬さ…かため
耐熱温度…80℃
包装：6本入

医院内でのご使用に最適!!

コンパクトヘッドタイプ
プラーク除去に優れたテーパー加工。

ドルフィン歯ブラシ

100本：¥10,000 25本：¥2,500
患者価格 ¥100



規格：ソフト（S）
ミディアム（M）
カラー：ソフト（S）
パステルブルー
パステルイエロー
パステルグリーン
パステルピンク
ミディアム（M）
ブルー・イエロー
グリーン・ピンク

包装：100本入（ASS）
25本入（単色）

オリジナル歯ブラシとして名入れする事が可能です。

極細毛とラウンド毛の二段植毛で、歯肉の奥まで優しくケアできます。

ドルフィン歯ブラシ DUO

¥1,440
患者価格 ¥120



カラー：ブルー イエロー グリーン ピンク
包装：12本入 ASS・単色

総合歯科医療商社

株式会社 **コサカ**

東京都練馬区豊玉中2-18-14

TEL:03-3557-4111 FAX:03-3557-4116

https://www.kosaka.co.jp E-mail:dental@kosaka.co.jp

Thinking ahead. Focused on life.



Spaceline EX

スペースライン EXが iFデザイン賞の金賞を受賞

ドイツのiFデザイン賞は、50年以上の歴史を有し、各国から選ばれた審査員によって厳正に選考される世界的に権威のあるデザイン賞です。世界中から6,400以上のエントリーがあった中、最優秀デザインとして75件に授与される金賞（iF GOLD AWARD）をスペースライン EXが受賞しました。人間工学に基づき緻密に計算されたデザインは、患者さんだけでなく術者にも理想的で洗練されたデザインであると評価されました。



発売

株式会社 モリタ

大阪本社 大阪府吹田市垂水町3-33-18
〒564-8650 T 06. 6380 2525
東京本社 東京都台東区上野2-11-15
〒110-8513 T 03. 3834 6161
お問合せ お客様相談センター 歯科医療従事者様専用
T 0800. 222 8020（フリーコール）

製造販売・製造

株式会社 モリタ製作所

本社工場 京都府京都市伏見区東浜南町680
〒612-8533 TEL 075-611-2141
久御山工場 京都府久世郡久御山町市田新珠城190
〒613-0022 TEL 0774-43-7594

販売名：スペースライン
一般的名称：歯科用ユニット
機器の分類：管理医療機器（クラスⅡ）
特定保守管理医療機器
医療機器認証番号：228ACBZX00018000

www.dental-plaza.com

C O N T E N T S

特 別 企 画

座談会 『『歯科イノベーションによる新時代の創生』について語る』

..... 川口陽子, 大川周治, 西郷 巖, 高橋英登, 住友雅人, 松野智宣, 大久保力廣

学 術 研 究

■ 令和3年度採択プロジェクト研究

A. 歯科界のニューノーマル (各種感染症対策, 高齢者の歯科治療体制の確立)

微量唾液を検体とした SARS-CoV-2 迅速スクリーニング検査法の確立と
mobile型qPCR装置 (PCR1100) の有用性の検討

..... 里村一人

B. これからの歯科医療の DX (AI・デジタルテクノロジーの応用)

デジタルフェノタイピングデータと生体データの組み合わせを活用した
歯科治療恐怖症の新しい診断法の開発

..... 鮎瀬卓郎

Extended Reality技術を応用し sustainable な歯科教育を確立する

..... 片倉 朗

C. New for Old, 疾病構造の変化を見据えた歯科ストックの確保を目指して

高齢者の医療・地域連携に貢献する高齢者対応型病院歯科の普及に向けた調査・研究

..... 大野友久

オンラインフルカラー版

<https://www.jads.jp/>

読者アンケートはこちらから



日本歯科医学会